佐久市埋蔵文化財調査報告書　第44集

三千東遺跡郡

TERA SOE

寺添遺跡

長野県佐久市三塚寺添遺跡発掘調査報告書

1996. 3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第44集

三千束遺跡群

TERA ZOE

寺 添 遺 跡

長野県佐久市三塚寺添遺跡発掘調査報告書

1996. 3

長野県土地開発公社
佐久市教育委員会

寺添遺跡の調査について

寺添遺跡は佐久市大字三塚に所在します。遺跡の周辺は大規模な圃場整備が終了し広大な水田地帯となっています。

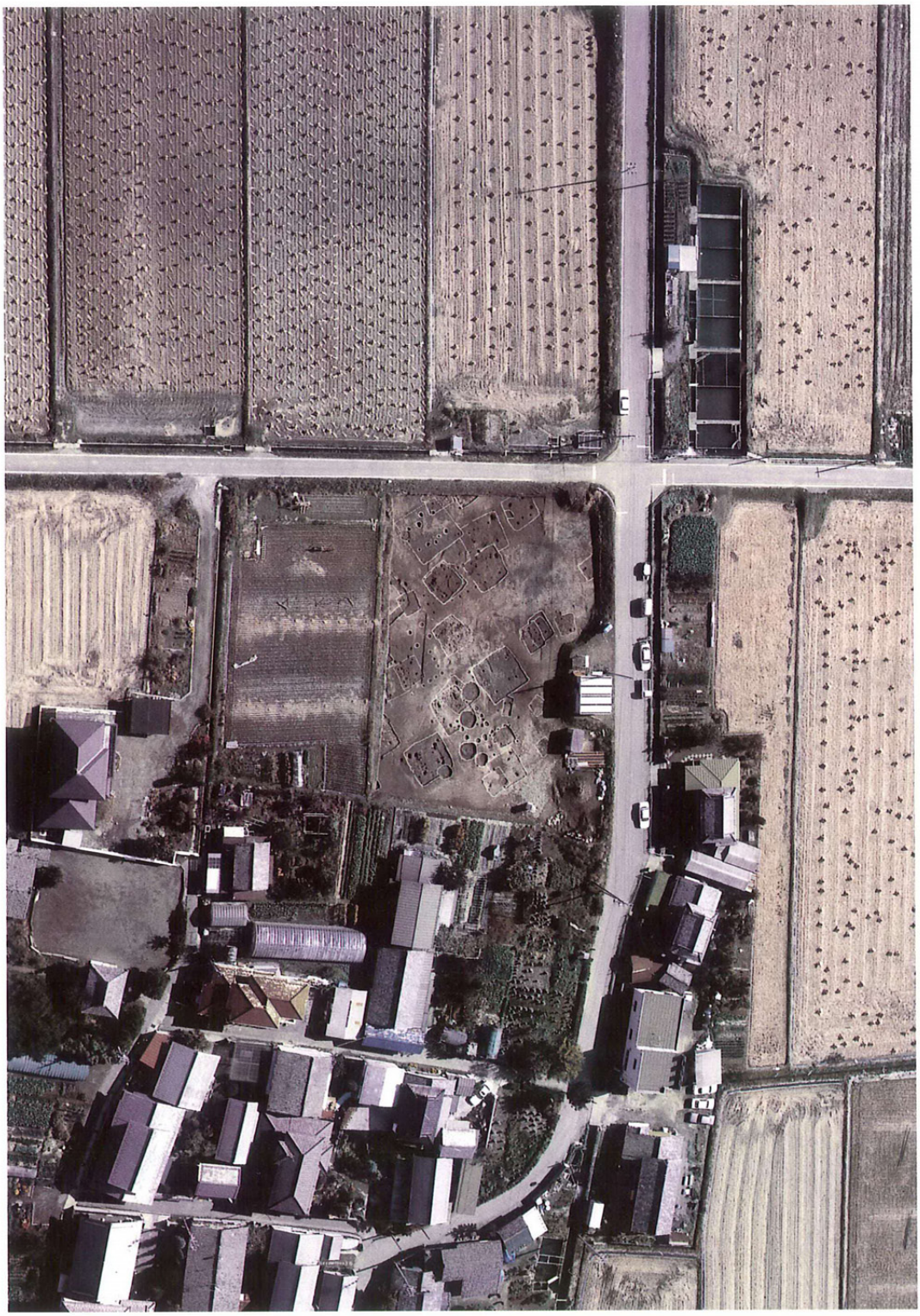
今回の調査は1500㎡という狭い範囲の発掘でしたが、家の跡である竪穴住居址29軒や当時の人々が使っていた食器類が発見され、古墳時代の中頃から(約1600年前)この寺添遺跡に人々が暮らしはじめていたことが解りました。その後約300年間この地には生活の跡が刻まれました。

長く一ヶ所に定住できたのは千曲川や片貝川が肥沃な土を上流から運び、稲作や畑作に適していたのかもしれません。しかし、なぜか今から約1300年ぐらい前から人々はここに家を立てなくなってしまいます。その理由は天災や疫病の流行或いは集落の移動など考えられますが、今回の調査で確かな事は解りませんでした。

このように今回の調査では色々な発見がありましたが、一番重要なことは、野沢平の水田下に今でも大切な遺跡が眠っている事が判明したことです。

寺添遺跡航空写真(株式会社こうそく撮影)

巻頭図版二



寺添遺跡航空写真近影(株式会社こうそく撮影)

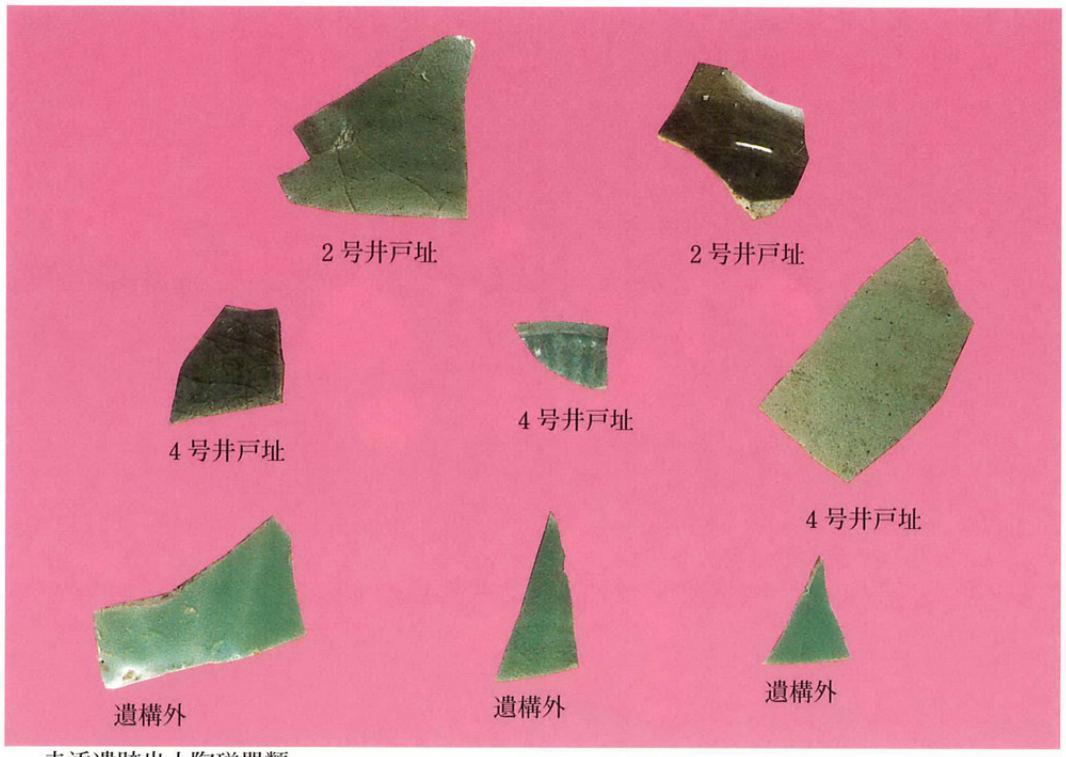
H5号住居址全景

H17号住居址出土遺物

発掘調査風景

H5号住居址カマド全景

寺添遺跡出土土器(H6・17・28・30号住居跡)



寺添遺跡出土陶磁器類

例　　言

1．本書は、長野県土地開発公社が行う佐久地区職員宿舎建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。なお保護協議の結果、開発対象面積の内、児童公園と道路に接する緑地帯は、発掘対象区から除外し職員宿舎と駐車場について本調査をおこなった。

2．調査委託者　　長野県土地開発公社

3．調査受託者　　佐久市教育委員会

4．遺跡名及び　　三千束遺跡群　寺添遺跡　（MMT）

発掘調査所在地籍　　佐久市大字三塚字寺添73－9

5．調査期間・面積　　発掘調査　　平成6年7月18日～11月2日

整理期間　　平成6年12月6日～平成8年3月29日

開発面積　　2128m²

調査面積　　1587m²

6．調査にあたっては、発掘調査を佐々木が、整理作業を冨沢がそれぞれ担当した。

7．本書の編集は遺構整理に関してを佐々木が、その他については冨沢が行った。

報告書作成分担　　遺物復元　金森治代　橋詰けさよ　堀籠　因　碓氷　健

遺物実測　堺　益子　橋詰勝子　橋詰信子

トレース　堺　益子　橋詰信子

8．臼玉等の石材鑑定は羽毛田が行った。

9．遺跡出土遺物の鑑定及び保存処理は以下に依頼した。

獣骨鑑定　　群馬県立大間々高校　宮崎重雄氏

炭化種子・樹種同定　　パリノ・サーヴェイ株式会社

木製品保存処理　　東都文化財研究所

10．本書及び寺添遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

発掘調査に当たっては、地元の方々に数々のご協力・ご援助を頂き記して感謝の意を表します。

凡　　例

1．遺構の略記号は、住居址（H）・掘立柱建物址（F）・土坑（D）である。

2．挿図の縮尺は次のとおりである。

　　竪穴住居址・掘立柱建物址１／80　　土坑・井戸址・カマド１／60

　　土器・石器１／４　　木製品１／８　　臼玉１／２　　鉄製品１／３

　　上記以外の物については挿図中にスケールを示す。

2．遺構の海抜標高は各遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」として示した。

3．土層・遺物胎土の色調は、1988年版『新版　標準土色調』に基づいた。

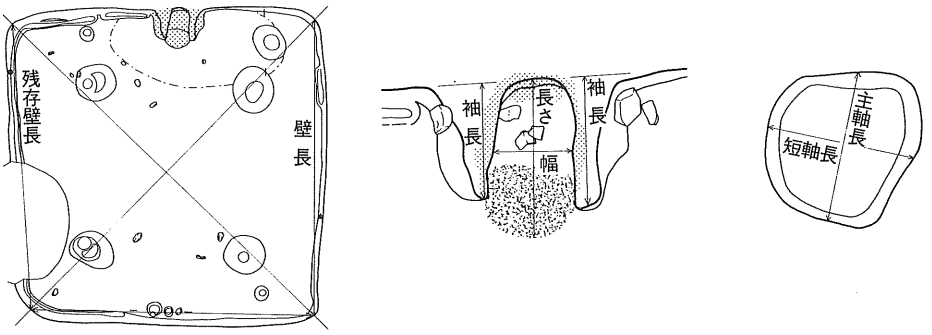
4．遺物挿図番号と遺物写真番号及び遺物観察表番号は一致する。

5．挿図中の方位は真北を示す。

6．調査区グリットは公共座標に従い、間隔は４×４ｍに設定した。

7．住居址の面積は床面積（住居址下端範囲）を測定し、カマド部分は測定値より除外してある。

8．遺構規模の数値は以下の例によって測定した。



9．挿図中におけるスクリーントーンは以下のことを示す。

〈遺　構〉

地山断面　　カマド範囲　　貼り床

焼けた地山　　焼土範囲

〈遺　物〉

黒色処理　　赤彩　　石器の研磨痕・使用面

目　　次

巻頭カラー

例言・凡例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯と経過…… 1

第２節　調査の体制…… 2

第３節　調査日誌…… 2

第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　自然的環境…… 4

第２節　歴史的環境…… 5

第Ⅲ章　遺跡の基本層序と概要

第１節　基本層序…… 8

第２節　検出遺構・遺物の概要…… 8

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

(1)Ｈ１号住居址……11　(2)Ｈ２号住居址……11　(3)Ｈ３号住居址……14

(4)Ｈ４号住居址……14　(5)Ｈ５号住居址……15　(6)Ｈ６号住居址……19

(7)Ｈ７号住居址……21　(8)Ｈ８号住居址……21　(9)Ｈ９号住居址……25

(10)Ｈ11号住居址……27　(11)Ｈ12号住居址……33　(12)Ｈ13号住居址……34

(13)Ｈ14号住居址……35　(14)Ｈ16号住居址……37　(15)Ｈ17号住居址……39

(16)Ｈ18号住居址……39　(17)Ｈ19号住居址……42　(18)Ｈ20号住居址……45

(19)Ｈ21号住居址……46　(20)Ｈ22号住居址……49　(21)Ｈ23号住居址……50

(22)Ｈ24号住居址……52　(23)Ｈ25号住居址……53　(24)Ｈ26号住居址……54

(25)Ｈ27号住居址……56　(26)Ｈ28号住居址……59　(27)Ｈ29号住居址……61

(28)Ｈ30号住居址……63　(29)Ｈ31号住居址……65

第２節　掘立柱建物址
(1)Ｆ１号掘立柱建物址 ……67　(2)Ｆ２号掘立柱建物址 ……68
(3)Ｆ３号掘立柱建物址 ……68　(4)Ｆ４号掘立柱建物址 ……69
(5)Ｆ５号掘立柱建物址 ……69　(6)Ｆ６号掘立柱建物址 ……70

第３節　井戸址
(1)１号井戸址 ……71　(2)２号井戸址 ……71
(3)３号井戸址 ……72　(4)４号井戸址 ……73

第４節　溝状遺構
(1)Ｍ１号溝状遺構……75

第５節　土坑
(1)Ｄ１号土坑 ……76　(2)Ｄ２号土坑 ……78　(3)Ｄ３号土坑 ……79

第６節　遺構外出土遺物……80
竪穴住居址規模一覧表……81
掘立柱建物址規模一覧表……82
出土遺物観察表……83

第Ⅴ章　考　察
第１節　調査の総括……95
(1)遺　構……95
(2)遺　物……98
第２節　寺添遺跡から出土した木材及び種実の同定 ……103
第３節　佐久市寺添遺跡出土の獣骨について ……107

挿　図　目　次

第１図　寺添遺跡位置図(1：50,000)　……1
第２図　寺添遺跡・三塚遺跡位置関係図(1：800)　…3
第３図　寺添遺跡周辺地形図(1：5,000)　……4
第４図　周辺遺跡位置図(1)　……6
第５図　周辺遺跡位置図(2)　……7
第６図　基本層序模式図　……8
第７図　寺添遺跡全体図　……9
第８図　Ｈ１号住居址実測図……11
第９図　Ｈ２号住居址実測図……12
第10図　Ｈ２号住居址カマド実測図……13
第11図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図……13
第12図　Ｈ３号住居址実測図……14
第13図　Ｈ３号住居址出土遺物実測図……14
第14図　Ｈ４号住居址実測図……15
第15図　Ｈ５号住居址実測図……16
第16図　Ｈ５号住居址カマド実測図……17
第17図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図……18
第18図　Ｈ６号住居址実測図……19
第19図　Ｈ６号住居址出土遺物実測図……20
第20図　Ｈ７号住居址実測図……21
第21図　Ｈ７号住居址出土遺物実測図……21
第22図　Ｈ８号住居址実測図……22
第23図　Ｈ８号住居址カマド実測図……23
第24図　Ｈ８号住居址出土遺物実測図……24
第25図　Ｈ９号住居址実測図……25
第26図　Ｈ９号住居址カマド実測図……26
第27図　Ｈ９号住居址出土遺物実測図……26
第28図　H11号住居址実測図……28
第29図　H11号住居址掘り方実測図……29
第30図　H11号住居址カマド実測図……30
第31図　H11号住居址出土遺物実測図(1)……31
第32図　H11号住居址出土遺物実測図(2)……32
第33図　H12号住居址実測図……33
第34図　H12号住居址カマド実測図……33
第35図　H12号住居址出土遺物実測図……34
第36図　H13号住居址実測図……34
第37図　H13号住居址出土遺物実測図……34
第38図　H14号住居址実測図……35
第39図　H14号住居址カマド実測図……36
第40図　H14・H16号住居址出土遺物実測図　……37
第41図　H16号住居址実測図……37
第42図　H17号住居址実測図……38
第43図　H17号住居址出土遺物実測図……38
第44図　H18号住居址実測図……40
第45図　H18号住居址出土遺物実測図……40
第46図　H18号住居址カマド実測図……41
第47図　H19号住居址実測図……42
第48図　H19号住居址カマド実測図……43
第49図　H19号住居址出土遺物実測図……43
第50図　H20号住居址実測図……44
第51図　H20号住居址カマド実測図……45
第52図　H20号住居址出土遺物実測図……46
第53図　H21号住居址実測図……47
第54図　H21号住居址カマド実測図……48
第55図　H21号住居址出土遺物実測図……48
第56図　H22号住居址実測図……49
第57図　H22号住居址出土遺物実測図……49
第58図　H23号住居址実測図……50
第59図　H23号住居址出土遺物実測図……50
第60図　H23号住居址カマド実測図……51
第61図　H24号住居址実測図……52
第62図　H24・H25号住居址出土遺物実測図　……53
第63図　H25号住居址実測図……53
第64図　H25号住居址カマド実測図……54

第65図　H26号住居址実測図……55
第66図　H26号住居址カマド実測図……56
第67図　H26号住居址出土遺物実測図……56
第68図　H27号住居址実測図……57
第69図　H27号住居址掘り方実測図……58
第70図　H27号住居址出土遺物実測図……58
第71図　H28号住居址実測図……60
第72図　H28号住居址出土遺物実測図……61
第73図　H29号住居址実測図……62
第74図　H29号住居址出土遺物実測図……62
第75図　H30号住居址実測図……63
第76図　H30号住居址カマド実測図……64
第77図　H30号住居址出土遺物実測図……64
第78図　H31号住居址実測図……66
第79図　H31号住居址出土遺物実測図……66
第80図　Ｆ１号掘立柱建物址実測図……67
第81図　Ｆ２号掘立柱建物址実測図……68
第82図　Ｆ３号掘立柱建物址実測図……68
第83図　Ｆ４号掘立柱建物址実測図……69
第84図　Ｆ５号掘立柱建物址実測図……69
第85図　Ｆ６号掘立柱建物址実測図……70
第86図　１号井戸址実測図……70
第87図　２号井戸址実測図……71
第88図　３号井戸址実測図……72
第89図　３号井戸址出土遺物実測図……73
第90図　４号井戸址実測図……74
第91図　４号井戸址・Ｍ１号溝状遺構出土遺物実測図…74
第92図　Ｍ１号溝状遺構実測図……75
第93図　Ｄ１号土坑実測図……76
第94図　Ｄ１号土坑出土遺物実測図(1) ……77
第95図　Ｄ１号土坑出土遺物実測図(2)……78
第96図　Ｄ２号土坑実測図……78
第97図　Ｄ３号土坑実測図……79
第98図　Ｄ３号土坑出土遺物実測図……79
第99図　土坑状遺構実測図……79
第100図　遺構外出土遺物実測図 ……80
第101図　寺添遺跡集落変遷図 ……96
第102図　寺添遺跡出土土器時期別分類図(1) ……99
第103図　寺添遺跡出土土器時期別分類図(2)……101

付　表　目　次

周辺遺跡一覧表 ……6
寺添遺跡住居址一覧表(1) ……81
寺添遺跡住居址一覧表(2) ……82
寺添遺跡掘立柱建物址一覧表……82
寺添遺跡出土土器観察表（Ｈ２～H6号住居址)……83
寺添遺跡出土土器観察表（H6･H8号住居址)……84
寺添遺跡出土土器観察表（Ｈ８～H11号住居址）…85
寺添遺跡出土土器観察表（H11～H17号住居址）…86
寺添遺跡出土土器観察表（H17～H21号住居址）…87
寺添遺跡出土土器観察表（H22～H26号住居址）…88
寺添遺跡出土土器観察表（H27～H29号住居址）…89
寺添遺跡出土土器観察表（H29～H31号住居址）…90
寺添遺跡出土土器観察表（４号井戸址･M1･D1･D3）…91
寺添遺跡出土土器観察表（Ｄ３・遺構外）……92
玉類観察表(1)……93
玉類観察表(2)……94
樹種同定結果 ……104
１号馬（MMT-H6)臼歯計測値……109
２号馬（MMT-H6)臼歯計測値……110
イヌ（MMT-H6)踵骨計測値……110

写真図版目次

図版　一　①遺跡周辺及び寺添遺跡全景
　　（株式会社こうそく撮影）
図版　二　①Ｈ１号住居址全景
　　②Ｈ２号住居址全景
図版　三　①Ｈ３号住居址全景
　　②Ｈ４号住居址全景
図版　四　①Ｈ５号住居址全景
　　②Ｈ５号住居址カマド全景
図版　五　①Ｈ５号住居址カマド全景
　　②Ｈ５号住居址内土壙
　　③Ｈ５号住居址カマド掘り方
　　④Ｈ５号住居址出土遺物
　　⑤Ｈ５号住居址掘り方全景
図版　六　①Ｈ６号住居址全景
　　②Ｈ６号住居址出土獣骨
図版　七　①Ｈ７号住居址全景
　　②Ｈ７号住居址炉全景
　　③Ｈ５・Ｈ６号住居址調査風景
図版　八　①Ｈ８号住居址全景
　　②Ｈ８号住居址カマド全景
　　③Ｈ８号住居址出土遺物
図版　九　①Ｈ９号住居址全景
　　②Ｈ９号住居址カマド全景
　　③Ｈ９号住居址カマド掘り方
図版　十　①Ｈ11号住居址全景
　　②Ｈ11号住居址掘り方全景
図版　十一①Ｈ11号住居址カマド全景
　　②Ｈ11号住居址カマド掘り方
図版　十二①Ｈ12号住居址全景
　　②Ｈ13号住居址全景
図版　十三　①Ｈ14号住居址全景
　　②Ｈ14号住居址カマド全景
図版　十四　①Ｈ16号住居址全景
　　②Ｈ17号住居址全景及びＨ14号住居址掘り方
図版　十五　①Ｈ16号住居址出土遺物
　　②Ｈ11・Ｈ17号住居址調査風景
　　③Ｈ17号住居祉出土遺物
図版　十六　①Ｈ18号住居址全景
　　②Ｈ18号住居址掘り方全景
　　③Ｈ18号住居址カマド全景
図版　十七　①Ｈ19号住居址全景
　　②Ｈ19号住居址掘り方全景
　　③Ｈ19号住居址カマド全景
図版　十八　①Ｈ20号住居址全景
　　②Ｈ21号住居址全景
図版　十九　①Ｈ21号住居址カマド全景
　　②Ｈ21号住居址カマド掘り方
　　③Ｈ21号住居址炭化材出土状況
図版　二十　①Ｈ22号住居址全景
　　②Ｈ22号住居址掘り方全景
図版　二一　①Ｈ22号住居址出土遺物
　　②Ｈ23号住居址カマド掘り方
　　③Ｈ23号住居址全景
図版　二二　①Ｈ24号住居址全景
　　②Ｈ25号住居址全景
図版　二三　①Ｈ24号住居址焼土範囲
　　②Ｈ25号住居址カマド全景
　　③Ｈ25号住居址カマド掘り方
図版　二四　①Ｈ26号住居址全景
　　②Ｈ27号住居址掘り方全景

図版　二五　①H28号住居址全景
②H29号住居址全景
図版　二六　①H28号住居址炉全景
②H30号住居址カマド全景
③H30号住居址全景
図版　二七　①Ｆ１号掘立柱建物址全景
②Ｆ２号掘立柱建物址全景
図版　二八　①Ｆ３号掘立柱建物址全景
②Ｆ４号掘立柱建物址全景
図版　二九　①Ｆ５号掘立柱建物址全景
②Ｆ６号掘立柱建物址全景
図版　三十　①１号井戸址全景
②３号井戸址全景
図版　三一　①３号井戸址木製品出土状況
②３号井戸址調査風景
③４号井戸址木製品出土状況
図版　三二　①４号井戸址全景
②Ｍ１号溝状遺構全景
図版　三三　①Ｄ１号土坑検出状況
②Ｄ１号土坑掘り方
③Ｄ３号土坑全景
図版　三四　①調査区近景（東より）
②調査区近景（南より）
図版　三五　Ｈ２～Ｈ６号住居址出土遺物
図版　三六　Ｈ６～Ｈ８号住居址出土遺物
図版　三七　Ｈ８～H11号住居址出土遺物
図版　三八　H11～H16号住居址出土遺物
図版　三九　H17～H21号住居址出土遺物
図版　四十　H22～H27号住居址出土遺物
図版　四一　H27～H30号住居址出土遺物
図版　四二　H30・H31・Ｍ１・Ｄ１出土遺物
図版　四三　Ｄ１・Ｄ３・遺構外出土遺物
図版　四四　寺添遺跡出土石器・鉄製品
図版　四五　①寺添遺跡出土玉類
②３号井戸出土木製品
図版　四六　木材の樹種及び種実の同定

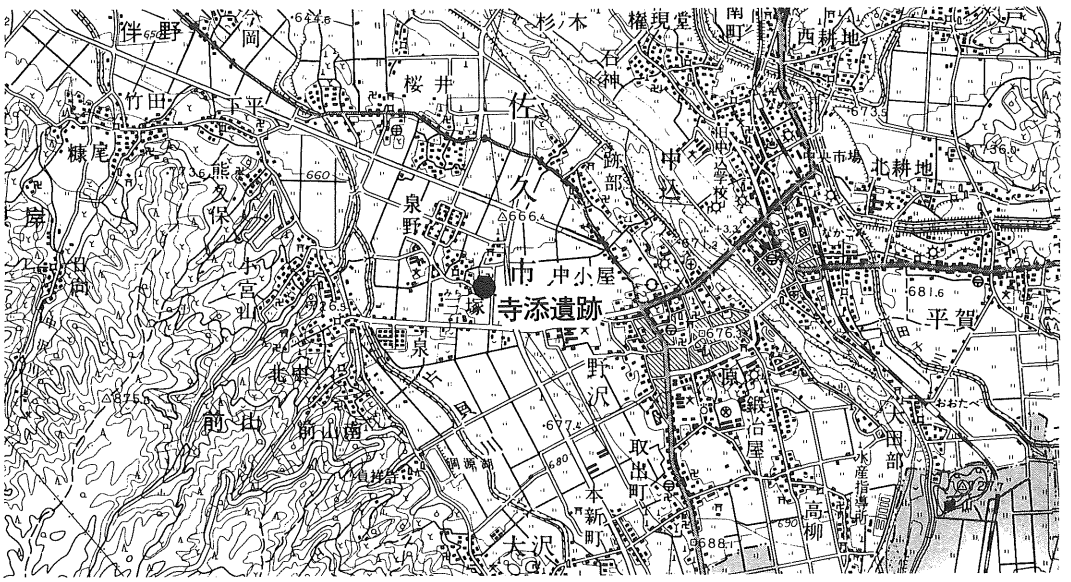
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査の経緯と経過

寺添遺跡が存在する三千束遺跡群は、佐久市大字三塚地籍に所在し、千曲川と片貝川に挟まれた標高670m内外を測る沖積微高地に位置する。遺跡周辺は、圃場整備が終了した水田が広がり、佐久平において有数の穀倉地帯を形成している。

今回、長野県の佐久地区職員宿舎建設に伴い長野県土地開発公社が建設用地の造成を計画した。そのため、長野県土地開発公社より佐久市教育委員会に当地籍においての遺跡有無の照会があった。佐久市教育委員会では三千束遺跡群が所在するため、まず試掘調査を行う事とした。

その結果、今回の開発地籍全体におよんで竪穴住居址・ピット及び土師器・須恵器片が多数検出された。よって、長野県土地開発公社と佐久市教育委員会において協議をおこなった結果、設計変更は難しく遺跡の破壊が余儀なくなり、佐久市教育委員会埋蔵文化財課において記録保存を目的とする本調査が実施されるはこびとなった。



第１図　寺添遺跡位置図（1：50,000）

なお当遺跡調査中、昭和49年度に緊急発掘調査をおこなった三塚遺跡（佐久市詳細遺跡分布調査No.419）が当遺跡と重複していることが判明した（第２図参照）。しかし、当時の調査範囲よりも今回の開発対象としている面積が広く残存する遺構もあることから、混乱を防ぐため別遺跡名を付し調査をする事となった。

第２節　調査体制

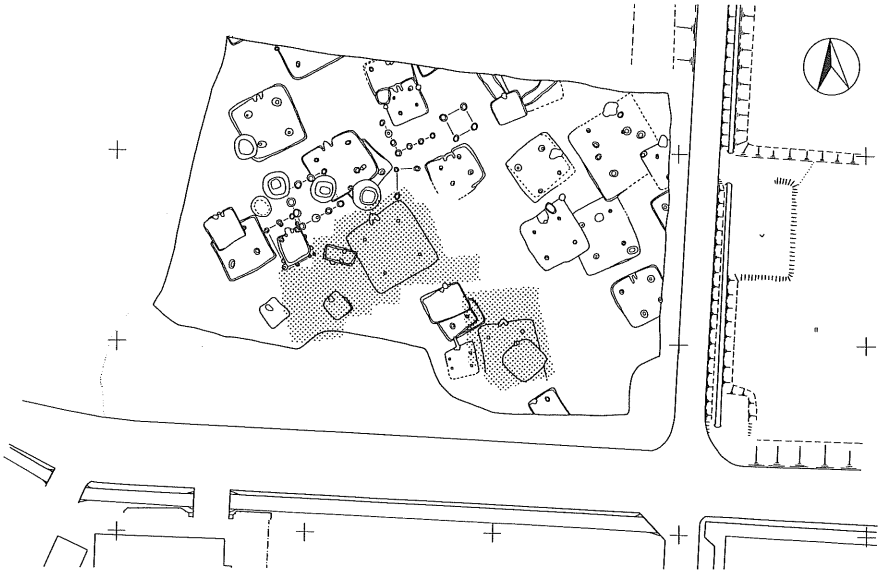
佐久市教育委員会埋蔵文化財課

教育長	大井　季夫（平成７年６月退任）				
	依田　英夫（平成７年７月就任）				
教育次長	奥原　秀雄（平成６年度）				
	市川　源				
埋蔵文化財課長	戸塚　満				
管理係長	谷津　恭子				
管理係	田村　和広				
埋蔵文化財係長	草間　芳行（平成６年度）				
	大塚　達夫				
埋蔵文化財係	林　幸彦	三石　宗一	須藤　隆司	小林　眞寿	
	羽毛田卓也	冨沢　一明	上原　学		
調査主任	佐々木宗昭				
調査副主任	堺　益子				
調査員	遠藤しずか	並木ことみ	金森　治代	橋詰　勝子	橋詰けさよ
	橋詰　信子	堀籠　因	依田　みち	市川チイ子	岩下　吉代
	岩下とも子	岩下　文子	工藤しず子	武田　千里	武田まつ子
	堀込　成子	碓氷　健			

第３節　調査日誌

平成６年度

1994年７月12日	試掘調査
７月18日	重機による表土はぎを開始。



第２図　寺添遺跡・三塚遺跡位置関係図（1：800）

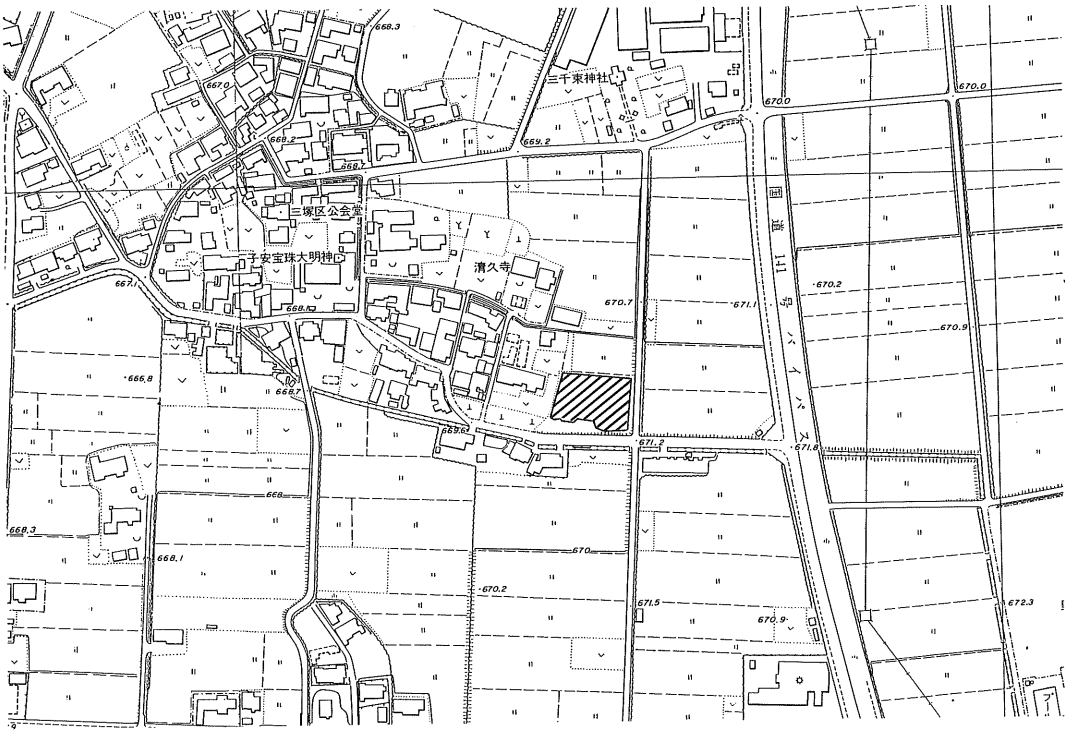
７月19日～22日	遺構確認を行い、調査区全体に竪穴住居址の広がりを確認する。
	三塚遺跡との重複部分を確認する。
７月25日～	調査区西側より遺構掘り下げを開始する。
	Ｈ６号住居址より獣骨出土。
	H11号住居址より管玉・臼玉出土。
	井戸址の調査を開始するが、多量の勇水のため困難な調査となる。
	調査区東側の遺構掘り下げを行う。
	航空測量を行う。
11月２日	現場での作業を終了し、機材を撤収する。
12月６日	室内にて整理作業開始　出土遺物洗浄を行う。
1995年１月９日～	注記・遺物復元・遺構図面整理を行う。
３月31日	本年度分の作業を終了する。
平成７年度	
1995年10月20日～	出土遺物実測を開始する。
	遺跡出土炭化種子同定・樹種同定を依頼する。
	遺跡出土獣骨の鑑定を依頼する。
	木製品の保存処理を依頼する。
	遺構・遺物の挿図作成を行う。遺物写真撮影を行う。
1996年３月28日	原稿を執筆し、報告書を刊行する。

第II章　遺跡の環境

第１節　自然的環境

寺添遺跡が所在する佐久市三塚地籍は佐久平の南西よりに位置し、西方700mに片貝川が、東方1300mに千曲川がそれぞれ北流し、周辺は水田地帯となっている。この片貝川は、八ヶ岳山塊の一つである双子山（2223m）より源を発する大曲川・居川・倉沢川などの中小河川を集め、臼田町の勝間地籍より流れを北に変え、山裾を沿うように北流し、佐久市下県地籍で千曲川に合流する河川である。当遺跡周辺に広がるほとんどの水田は、現在この片貝川より取り入れた水によって稲作を行っている。

遺跡地形は、千曲川と片貝川によって形成された自然堤防上あるいは沖積微高地の上にあり周辺の水田面より約１m程の標高差を測る。この微高地は南北200m・東西300mほどの広さで、現在は三塚集落が集合している。寺添遺跡は集落の東端にあり、微高地と水田面の接点に位置する。



第３図　　寺添遺跡周辺地形図（１：5,000）

第２節　歴史的環境

本遺跡が所在する三塚地籍及びその周辺の野沢・前山・小宮山・桜井地区には、東に傾斜する山地や山裾、また沖積低地に数多くの遺跡が散在する。これらの遺跡を時代別に概観したい。

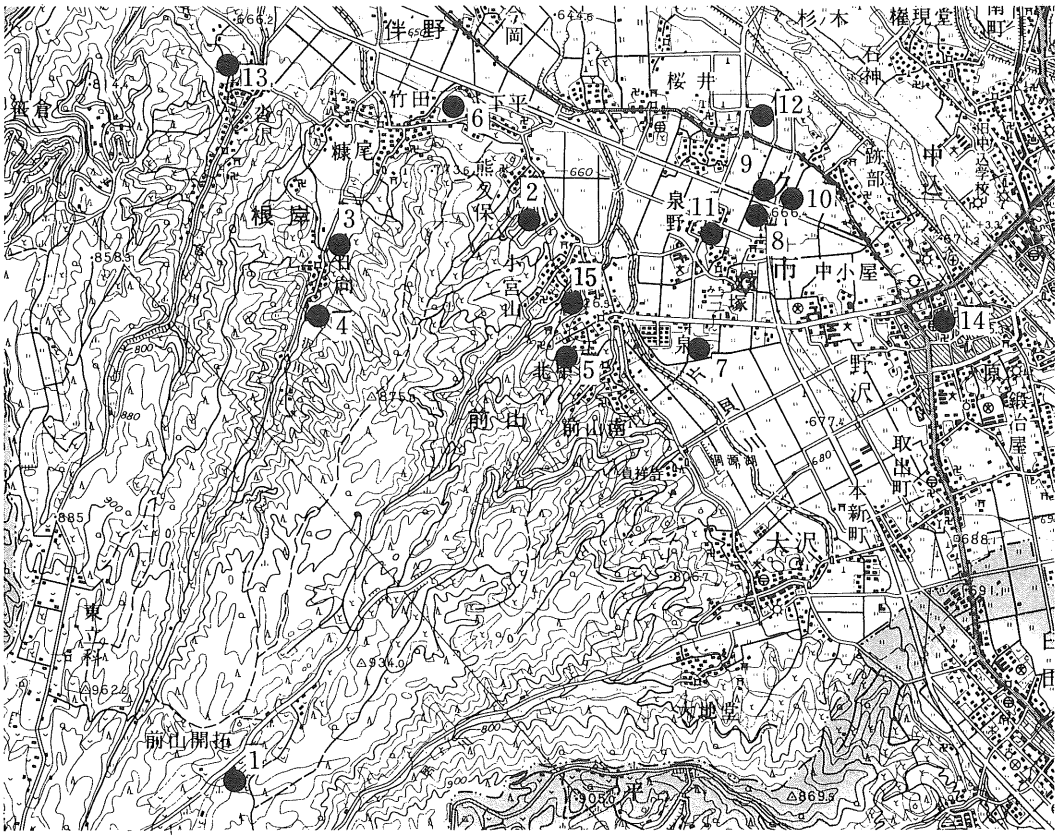
まず、先土器時代の遺跡としては、当遺跡南西方向６㎞の八ヶ岳北東山麓中に立科Ｆ遺跡①がある。本遺跡からは211点からなる石器群が検出され、検出層位より31200年±900年前の年代が与えられている。続く縄文時代の遺跡としては、前期前半の住居址６軒が調査された後沢遺跡②、中期後半の住居址16軒が調査された中村遺跡③、筒村Ｂ・山法師Ｂ遺跡④などがある。また、前山地籍の瀧の下遺跡⑤からは、後期の敷石住居址２軒が検出され、そのうち１号住居址の敷石は炉の周辺に菱形に敷かれていた。周辺地域の縄文時代の遺跡は、その多くが山地沿いの谷間か、水田面に接する山裾周辺に広がっており、沖積低地での集落址は未だ発見されていない。

次に弥生時代の遺跡としては、水田面を見下ろす丘陵上に位置する後沢遺跡で中期栗林期３軒、後期箱清水期32軒の住居址、方形周溝墓３基が調査されている。また、同じ様な地形にある西裏・竹田峯遺跡⑥からは中期栗林期９軒、後期箱清水期５軒の住居址とともに、後期に比定される壺棺が検出され、壺内より胎児骨一体と管玉・ガラス小玉が発見された。また、当遺跡からは、円形周溝墓と考えられる遺構も確認されており、後沢遺跡も含め小地域内での墓制の多様性を考える上で貴重な資料となっている。

古墳時代になると遺跡は沖積低地まで広がり始める。圃場整備などで調査された遺跡も多く、中道遺跡⑦、市道遺跡⑧、三塚町田遺跡⑨、跡部町田遺跡⑩、三塚鶴田遺跡⑪、上桜井北遺跡⑫などが上げられる。これらの遺跡はいずれも自然堤防上や微高地上に立地しており、中期後半から後期におよぶ集落址である。古墳址は調査されたものは少なく、根岸地籍の榛名平・坪の内遺跡⑬で後期から終末期に属する横穴式石室の古墳址が１基と坪の内古墳が調査されたにとどまっている。なお、佐久平においては、千曲川西岸の低地や山地には古墳址が少なく、千曲川東岸の山裾には群集墳が集中して存在する極めて対照的な様相を示している。

次に、奈良・平安時代は前代と同様な様相を示し、低地と山裾に小規模な集落址が確認されている。しかし、調査された遺跡範囲がいずれも小規模である為、今後、岩村田地籍の聖原遺跡のような大規模な集落址が発見される可能性はある。また、中道遺跡からは奈良三彩の蓋が、榛名平遺跡からは奈良二彩の蓋がそれぞれ出土しており注目される。

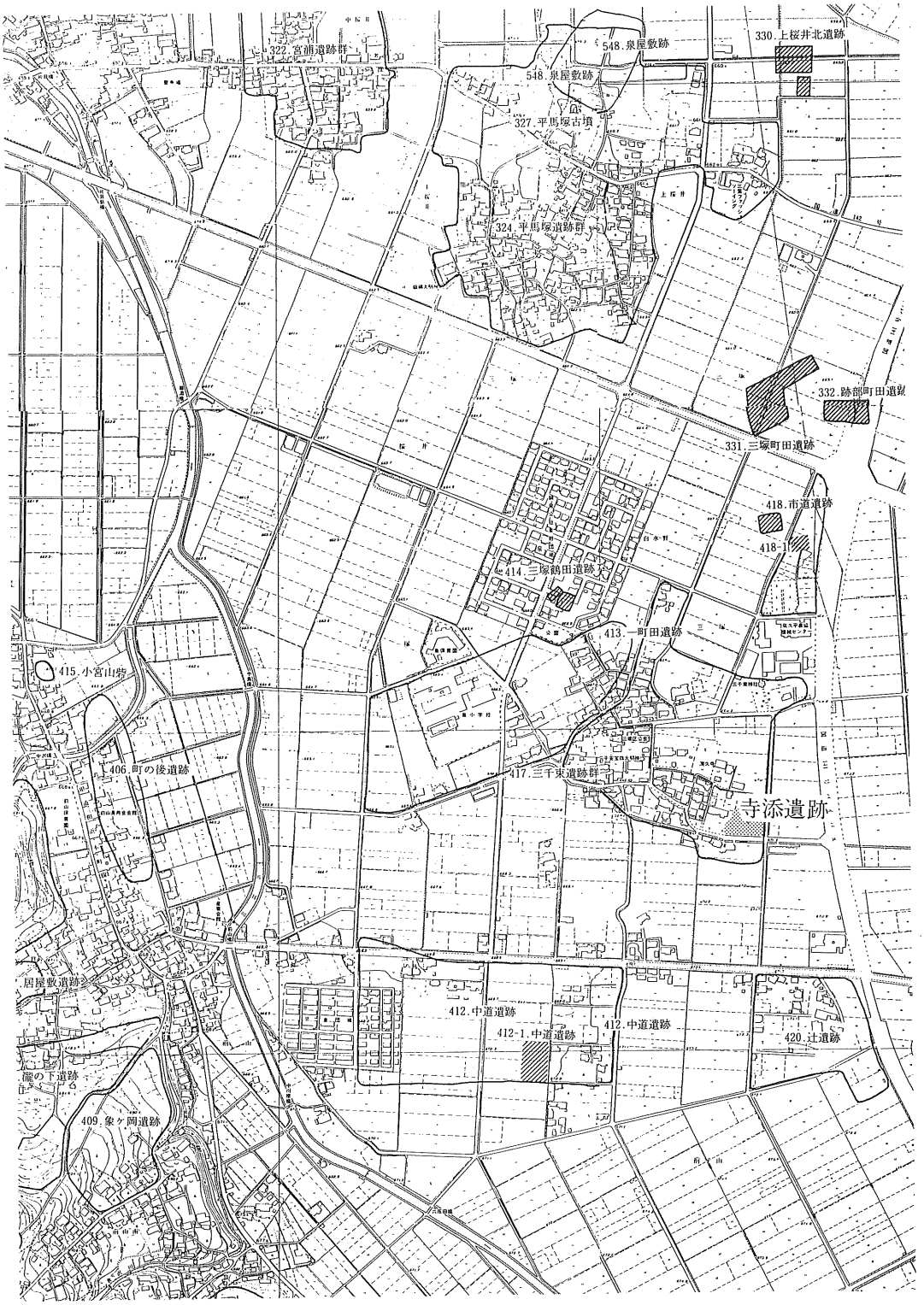
鎌倉時代以降になると当地域では伴野氏の活躍が始まる。方形の区画を持つ野沢館跡⑭や山城として良好な保存状態を保つ前山城跡⑮は伴野氏によって築かれたものとされ、「一遍上人絵伝」にも当時の伴野氏館の活況な様子が描かれている。また、榛名平遺跡からは中世後期と考えられる土壙墓・火葬墓といった墳墓群が検出されている。



第４図　周辺遺跡位置図(1)（1：50,000）

周辺遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	所　在　地	立　地	縄	弥	古	歴	中	備　　考
1	立科Ｆ遺跡	前山字立科	山地						平成２年調査
2	後沢遺跡	小宮山字後沢	丘陵	○	○	○	○		昭和51・52年調査
3	中村遺跡	根岸字日向	山地	○					昭和57年調査
4	筒村Ｂ・山法師Ｂ遺跡	根岸字日向	山地	○				○	平成３・４年調査
5	瀧の下遺跡	前山字滝の下	丘陵	○					平成２年調査
6	西裏・竹田峯遺跡	根岸字西裏・竹田峯	丘陵先端		○	○	○		昭和60年調査
7	中道遺跡	前山字中道	沖積、微高地				○		昭和46年調査
8	市道遺跡	三塚字市道	〃			○	○		昭和49年調査
9	三塚町田遺跡	三塚字町田	〃			○			昭和50年調査
10	跡部町田遺跡	跡部字町田	〃			○			昭和46年調査
11	三塚鶴田遺跡	三塚字鶴田	〃				○		昭和50年調査
12	上桜井北遺跡	桜井字橋詰	〃			○	○		昭和52年調査
13	榛名平・坪ノ内遺跡	根岸字榛名平・坪ノ内	丘陵	○	○	○	○	○	平成５・６年調査
14	野沢館跡	野沢字居屋敷・北田	沖積、微高地				○	○	
15	前山城跡	小宮山字城山	山地				○	○	

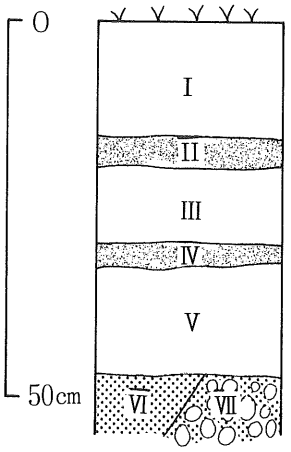


第５図　周辺遺跡位置図(2)　（１：10,000）

第Ⅲ章　基本層序と概要

第１節　基本層序

本遺跡における基本層序は７層に分かれている。Ⅰ～Ⅳ層までは水田の耕作土であり、圃場整備以前の水田面も確認された。Ⅵ・Ⅶ上面が遺構確認面であるが、沖積低地特有である地山変化の激しさに遺構確認は困難を極めた。



Ⅰ層	10ＹＲ6/1	近代水田耕作土
Ⅱ層	2.5ＹＲ4/6	水田床土
Ⅲ層	10ＹＲ6/1	圃場整備前の水田耕作土
Ⅳ層	10ＹＲ5/8	水田床土
Ⅴ層	10ＹＲ3/1	黒色土の堆積で砂・小石を少量ふくむ
Ⅵ層	10ＹＲ4/6	黒褐色土を含む。シルト化したローム土
Ⅶ層		礫層、人頭大の河原石や砂を主体とした層

第６図　　基本層序模式図

第２節　検出遺構・遺物の概要

検出遺構

竪穴住居址　29軒

古墳時代中期	（５世紀中葉～末）	３軒
古墳時代後期	（６世紀代）	８軒
後期	（７世紀代）	４軒
奈良時代	（８世紀代）	３軒
時代不明		11軒

掘立柱建物址　６棟

井戸址　４基

溝状遺構　１本

土坑　３基

出土遺物

土師器・須恵器・石器・青磁片・木製品・鉄製品

第７図　寺添遺跡全体図（１：300）

寺添遺跡航空写真全景　（株式会社こうそく撮影）

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　　竪穴住居址

（１）Ｈ１号住居址（第８図，写真図版二）

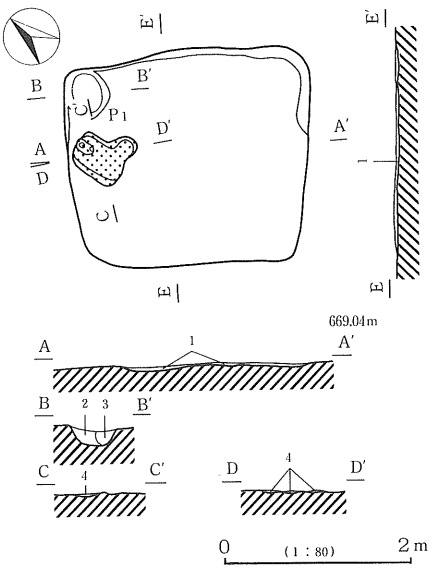
本住居址はキ・クー10Grに位置する。規模は南壁・西壁ともに2.05mを測り、ほぼ方形を呈する。住居址の床面積は5.1m²を測り、主軸方位はＮ－41°－Ｗを示す。覆土は１層で焼土・炭化物が微量混入するのが特徴である。壁は東コーナーで４cmを測るが、立ち上がりが確認された部分は東壁のみである。柱穴は確認されていない。

床面は西壁よりにある炉周辺が硬質であった。

炉は西壁よりにあり長軸60cm・短軸40cmを測る。形態はややいびつな方形を呈する。床よりの深さは２cmと非常に浅いが、炉北部分はよく焼けており地山Ⅵ層が焼土化しブロック状に固まっていた。

北コーナーにはP1が検出されている。長軸は54cm床面よりの深さ９cmを測る。覆土は２層に分層され、炭化物が少量検出されている。

遺物は少量の土師器甕片が出土しているが、図示可能なものはない。

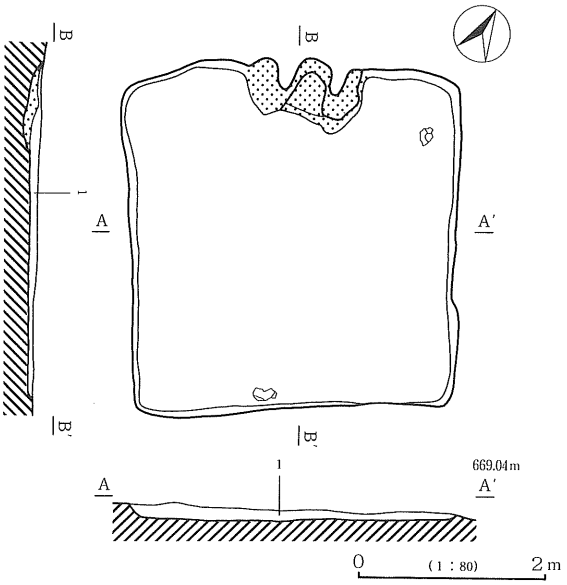


1　暗褐色土（10Ｙ Ｒ3/3）
　焼土粒子を少量、鉄分を含む。小石・少量の炭化物混入。
2　黒褐色土（10Ｙ Ｒ2/3）
　炭化物・ロームブロック少量混入。
3　暗褐色土（10Ｙ Ｒ3/3）
　ローム粒子を多量含む。ロームブロック多量混入。
4　暗褐色土（7.5Ｙ Ｒ3/4）
　焼土粒子を多量含む。炭化物・焼土ブロック混入。

第８図　Ｈ１号住居址実測図

（２）Ｈ２号住居址（第９・10・11図，写真図版二）

本住居址はオ・カー13Grに位置し、Ｈ６号住居址と重複関係にあるが本址の方が新しい。残存状態は調査された他の住居址に比べて良好であった。規模は南壁・東壁ともに3.3mを測り、平面形態はほぼ方形を呈する。住居址の床面積は10.9m²を測り、主軸方位はＮ－31°－Ｗを示す。覆土は１層である。壁は北東コーナーで11cmを測り、緩やかに立ち上がる。柱穴は確認されてい



1　黒褐色土（10YR3/2）　白色粒子を含み細かい砂層。しまり粘性弱い。

第９図　Ｈ２号住居址実測図

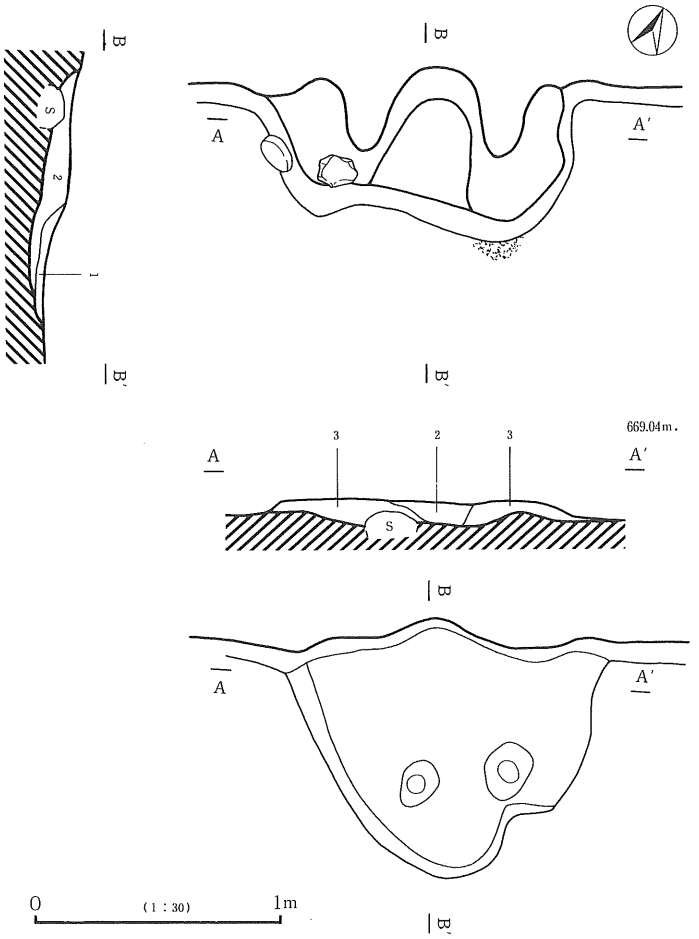
ない。床面はやや軟弱でカマド周辺部のみ硬化面が観察された。また貼床は確認されず地山Ⅵ・Ⅶ層を踏み固めたような状態であった。

カマドは北壁中央部に検出された。カマド煙道部の主軸方位はＮ－17°－Ｗを測り、住居址主軸に比べ14°ほど北にずれている。規模は煙道部が長軸1.04m、火床部径33cm、右袖長軸1.26m・床面よりの高さ５cm、左袖長軸98cm高さ５cmを測る。形態は煙道部が住居址壁外にあまり飛び出さない状態で緩やかに立ち上がる。両袖は上部が削平されていた為、基部のみしか検出できなかったが、あまり粘性のない構築土を使用しており、石などの芯材は確認されなかった。火床面は床面より７cmほど高い所にある。このような火床面の位置は当遺跡の他の住居址にも多く観察でき、寺添遺跡における竪穴住居址カマド構築の一つの特徴といえる。

カマド掘り方の規模は、東西の長軸が1.41m・南北の短軸が１ｍで、床面よりの掘り込みが深さ４cmを測る。焚口部付近にピットが２ヶ所確認された。P1は径23cm・深さ５cm、P2は径15cm・深さ４cmを測る。これらピットは、検出された位置から袖芯材に使われた石等を立てたものと考えられる。また掘り方の検出時に右袖下より焼土がまとまって検出された。これら焼土はカマド作り換えなどの時に袖内に入ったものとも考えられる。

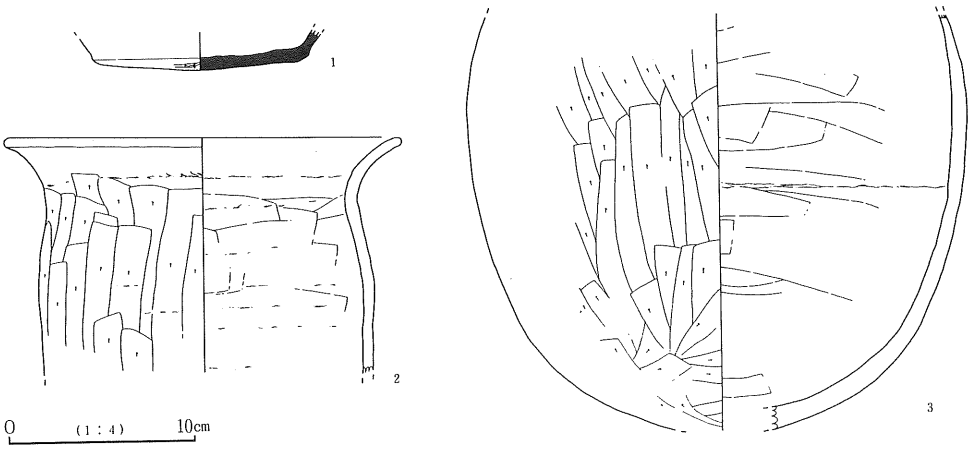
本址の出土遺物は図示した物の他に、土師器甕片・坏片、須恵器甕片・坏片などがあるが、遺物の総量は少なかった。

１は須恵器坏の底部であり住居址北西コーナーより出土した。底部はヘラケズリである。２は土師器長胴甕で、住居址の北コーナーより出土した。残存部は口縁部から胴部上半部がほぼ完形にちかい。胴部は胴部下半方向からの縦のヘラケズリが施され、内部と口縁部はナデが施されている。３は土師器胴張甕で、住居址南壁より中央部から出土した。残存状況は胴部のみの出土であった。調整は、胴部下方向からの縦ヘラケズリと斜めのヘラケズリで、内部はヘラナデが施されている。２，３の甕は何れも良好な焼成で大きさに比して器厚も薄いが、胎土に小石などの不純物が多く観察できた。



1　暗褐色土（10Y R3/4）
　焼土・炭化物・小石を少量含む。堅くしまり粘性弱。
2　暗褐色土（10Y R3/3）
　焼土を多量、炭化物小石を少量含む。粘性弱。
3　褐色土　（10Y R4/4）
　焼土・小石を少量含む粘性なし。

第10図　H２号住居址カマド実測図



第11図　H２号住居址出土遺物実測図

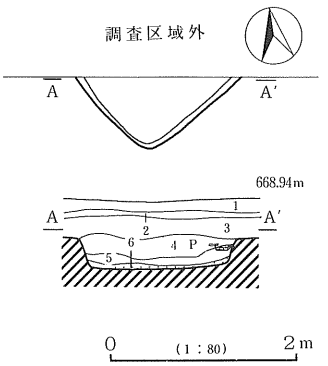
（3）Ｈ３号住居址　（第12・13図，写真図版三）

本住居址は調査区北西コーナー隅のア－12・13Grに位置するが、北側が調査区外となる為に住居址の大部分が検出されなかった。

検出された部分の規模は南壁1.2m・西壁1.04mで、確認面からの深さは24cmを測る。主軸方位は（西壁をもとにすると）N－28°－Wを示す。住居址の床面積は0.6m²を測る。覆土は２層に分れ、焼土・炭化物が混入していた。床はやや軟質であったが、貼床が厚さ４cmほど施され焼土が混入していた。壁溝・柱穴は確認されなかった。

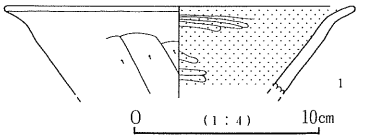
本址の出土遺物は、図示した物の他土師器甕片があるが少量であった。

１は土師器鉢か甑の一部と考えられる。口縁部から胴部までの一部が復元できた。胴部は縦方向のヘラケズリが施され、口縁部はヨコナデ、胴部内面は粗いヘラミガキが施され黒色処理されている。胎土はやや粗く、焼成は良好である。



1　褐灰色土（10Ｙ R5/1）　水田の耕作土
2　赤褐色土（５Ｙ R4/8）　水田の床土
3　褐灰色土（10Ｙ R4/1）　耕作土
4　黒褐色土（10Ｙ R2/3）
　小石・炭化物を少量含む。砂質。
5　黒褐色土（10Ｙ R2/3）
　焼土、炭化物を多量含む。砂質
6　黒色土　（10Ｙ R2/1）
　焼土粒子を少量含む。

第12図　Ｈ３号住居址実測図



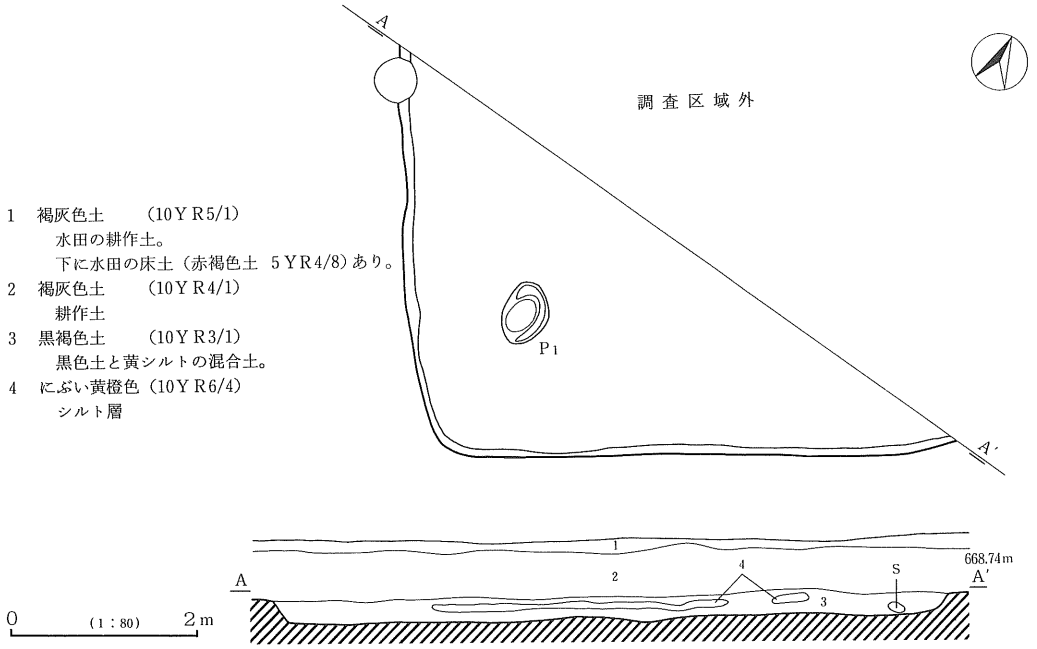
第13図　H3号住居址出土遺物実測図

（4）Ｈ４号住居址　（第14図，写真図版三）

本住居址は調査区北西コーナー隅のア－10・11Grに位置するが、Ｈ３号住居址と同じく北側が調査区外となる為に住居址の大部分が検出されなかった。

検出された部分の規模は南壁5.3m・西壁４mで、確認面からの深さは21cmを測る。主軸方位は（西壁をもとにすると）N－27°－Wを示す。住居址の検出床面積は10.8m²を測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。覆土は２層に分れる。堆積土中にはシルト化した黄色土がレンズ状に混入しており、本址埋没時に流水の影響を受けていると考えられる。床は硬質であったが、貼床は施されておらず地山Ⅵ層を踏み固めた状態であった。壁溝・柱穴は確認されなかった。

本址の出土遺物は、覆土中より土師器甕片・坏片など極少量出土したが、図示可能なものはなかった。



第14図　H４号住居址実測図

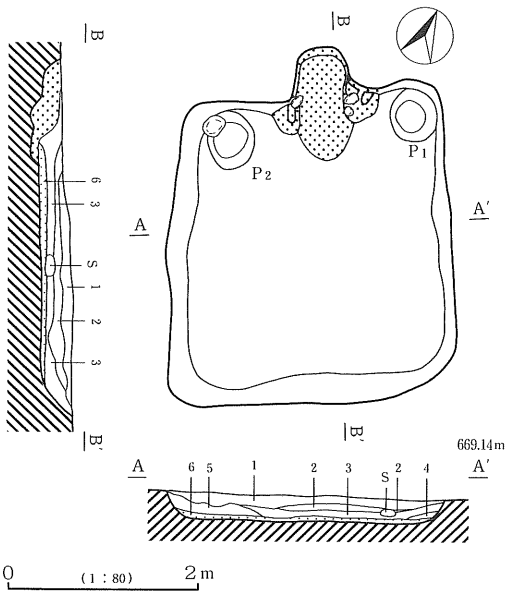
（５）Ｈ５号住居址　（第15・16・17図，写真図版四・五）

本住居址は、調査区西よりカ－11Grに位置する。Ｆ１号掘立柱建物址及びＦ２号掘立柱建物址と重複関係にあり、古い方よりＦ２号掘立柱建物址→Ｈ５号住居址→Ｆ１号掘立柱建物址となることが確認された。

本址は調査された他の住居址に比べ非常に残存状態がよく、形態はややゆがんだ方形を呈する。規模は北壁2.54m・東壁３m・南壁2.84m・西壁3.04mで、壁高は22cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位Ｎ－25°－Ｗを示す。住居址の床面積は6.9m²を測る。覆土は５層に分れ焼土と炭化物が混入する。床は硬質で、特に住居址中央部からカマド前にかけてが顕著に硬質化していた。貼床は６cm程の厚さで施されており黒色土と黄色土の混合土で構築されていた。壁溝・柱穴は確認されなかった。

住居址の北東・北西コーナーそれぞれにピットが検出された。P1は径60cm・床面からの深さ17cmを測り、ピット内より多くの土師器・須恵器片が出土した（写真図版五②参照)。出土遺物は流れ込みあるいは廃棄の様な状況で検出され、復元作業を経てもいずれも形になるものはなかった。P2は径55cm・床面からの深さ12.5cmを測る。P2からは遺物は検出されず、微量の焼土と灰が検出された。

掘り方はほぼ平坦であり、地山Ⅵ層中で掘り終わっていた。なお、本址掘り方レベル下数cmで湧水層となった。



1　褐灰色土（10Y R4/1）　白色の砂粒子を含む。粘性弱。
2　黒褐色土（10Y R3/1）　黒色土と黄色シルトの混合土。焼土粒子を微量含む。粘性弱。
3　黒褐色土（10Y R2/2）　黒色土・黄色土のシルト層。炭化物を微量含む。粘性強。
4　褐色土　（10Y R4/4）　黄色土のシルト層。
5　黒褐色土（10Y R2/3）　黄色粒子と黒色土のブロックを含む。粘性強。
6　褐色土　（10Y R4/6）　茶色のシルト・黒色土のシルトをブロック状に含む。粘性強。

第15図　H５号住居址実測図

カマドは北壁中央に検出された。規模は煙道部から火床面までの長さ1.7m・幅50cmで、右袖が長さ67cm・床からの高さ13cm、左袖が長さ60cm・床からの高さ14cmをそれぞれ測る。

形態は煙道部が住居址壁ラインよりも外に飛び出す形で、煙道は緩やかに立ち上がる。袖は両袖ともに芯材として河原石を使用しており右袖の石が長軸27cm・左袖の石が長軸29cmであり、両石の高さはほぼ水平であった。

これら芯材は袖の構築土をいったん盛り上げた後に掘り込んで立てた事がセクションより観察された。

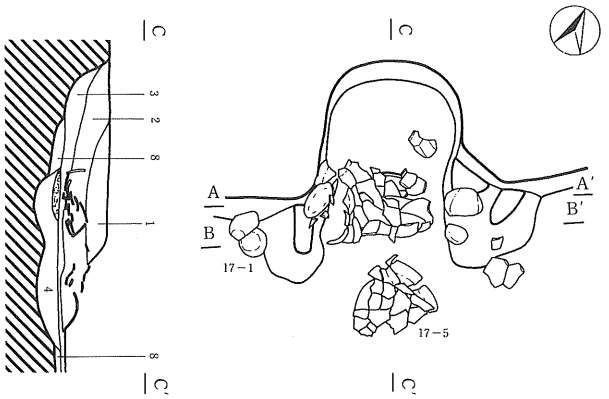
また、カマド火床面と焚口部にはほぼ完形の土師器甕が３個体検出された（写真図版四・五）。うち火床面上に検出された甕２個体は口縁部を西に向け二つが組合わされた状態で出土した。中に差し込んだ状態の西側の土師器甕（第17図４）は底部が欠損しており、東側の差し込まれている土師器甕（第17図６）は底部が残存することから、カマド構築材としての使用も否定できないが、組み合わせ転用によるカマド備え付けの甑の可能性がある。

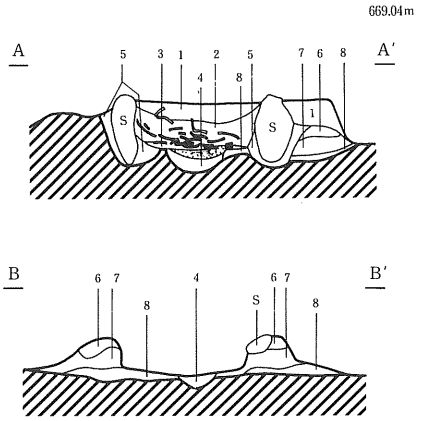
カマド掘り方は、煙道部に二段の段が検出され、火床面下から長軸42cm・短軸25cm、深さ５cmの落ち込みであるP5が検出された。また、右袖にはP1･2が、左袖からはP3･4がそれぞれ対応する形で確認された。このうちP2の規模は径20cm・深さ７cm、P4は径28cm・深さ６cmを測る。P1･3は検出時に確認された袖構築材である石の掘り込み跡である。

これらピットの配列より、当カマドには、袖構築材としての石が２個づつ両袖にあったとも考えられるが、煙道部の段や火床面の掘り込みの位置（P5･6）などから、今回の事例はカマドの作り替えの方が可能性が高いと考えられる。

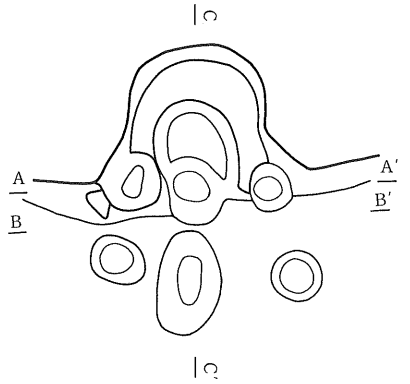
本址の出土遺物は、図示したものの他に覆土中より土師器甕片・坏片、須恵器甕片・坏片などが出土した。また、先にも述べたが住居址平面図P1から出土した遺物は小片が多く実測不能なものがほとんどであった。

１は須恵器高台坏であり、カマド左袖脇より正位置で検出された。口縁部の一部を欠損する他は



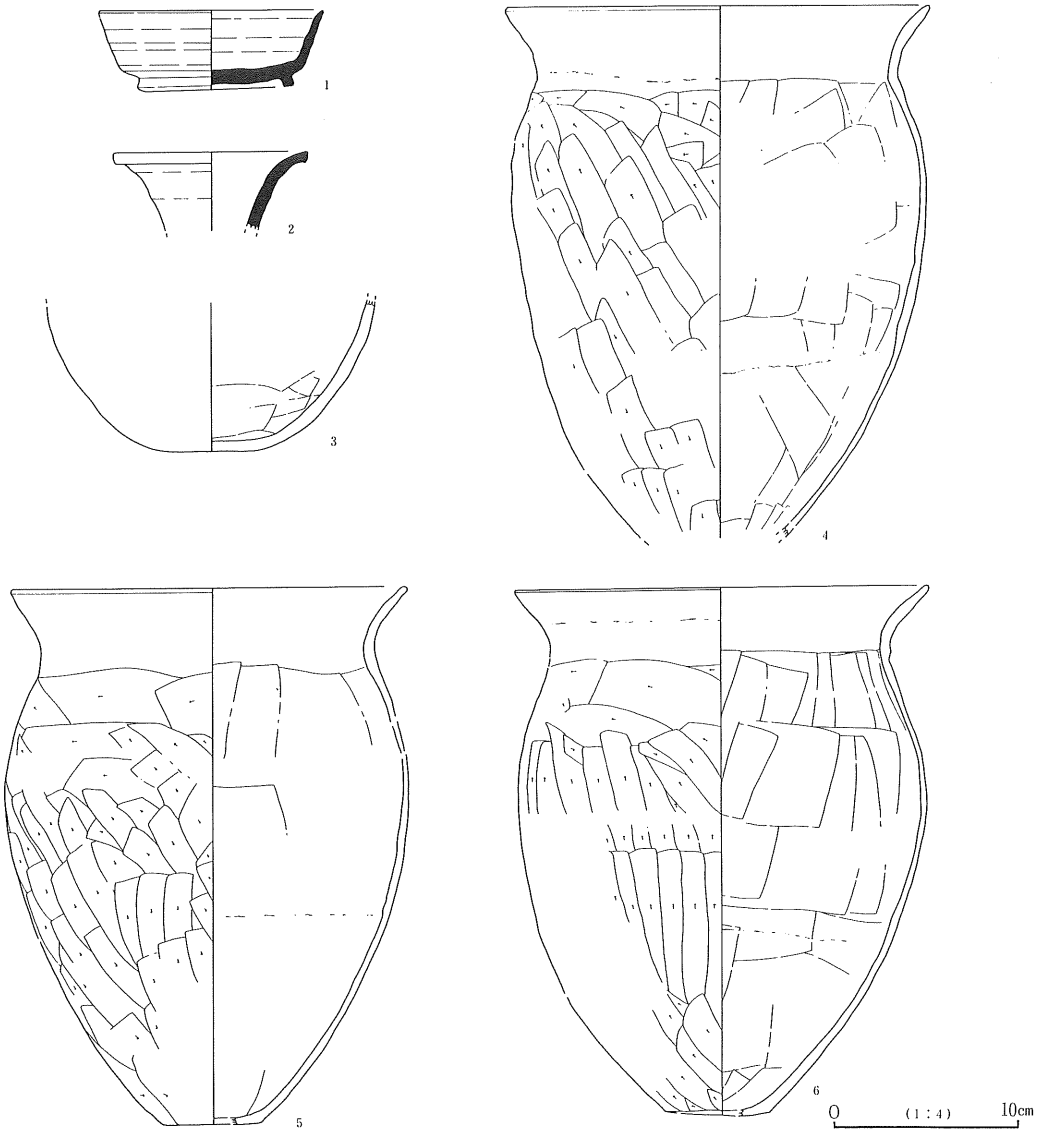


1　黒褐色土　(10YR3/2)
　焼土・炭化物・ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土　(10YR2/3)
　焼土粒子・炭化物を含む。粒子細かい。粘性あり。
3　極暗褐色土 (7.5YR2/3)
　焼土粒子・炭化物・焼土ブロックを多量含む。
4　黒褐色土　(10YR2/3)
　焼土粒子・炭化物を含む。粒子細かい。
5　黒褐色土　(10YR3/2)
　炭化物を少量含む。ローム粒子を含む。
6　暗黒色土　(10YR3/4)
　ロームを含む。粘性強。
7　黒褐色土　(10YR3/2)
　炭化物・焼土を少量含む。
8　暗褐色土　(10YR3/3)
　ロームブロックを多量含む。



0　(1：30)　1m

第16図　H５号住居址カマド実測図



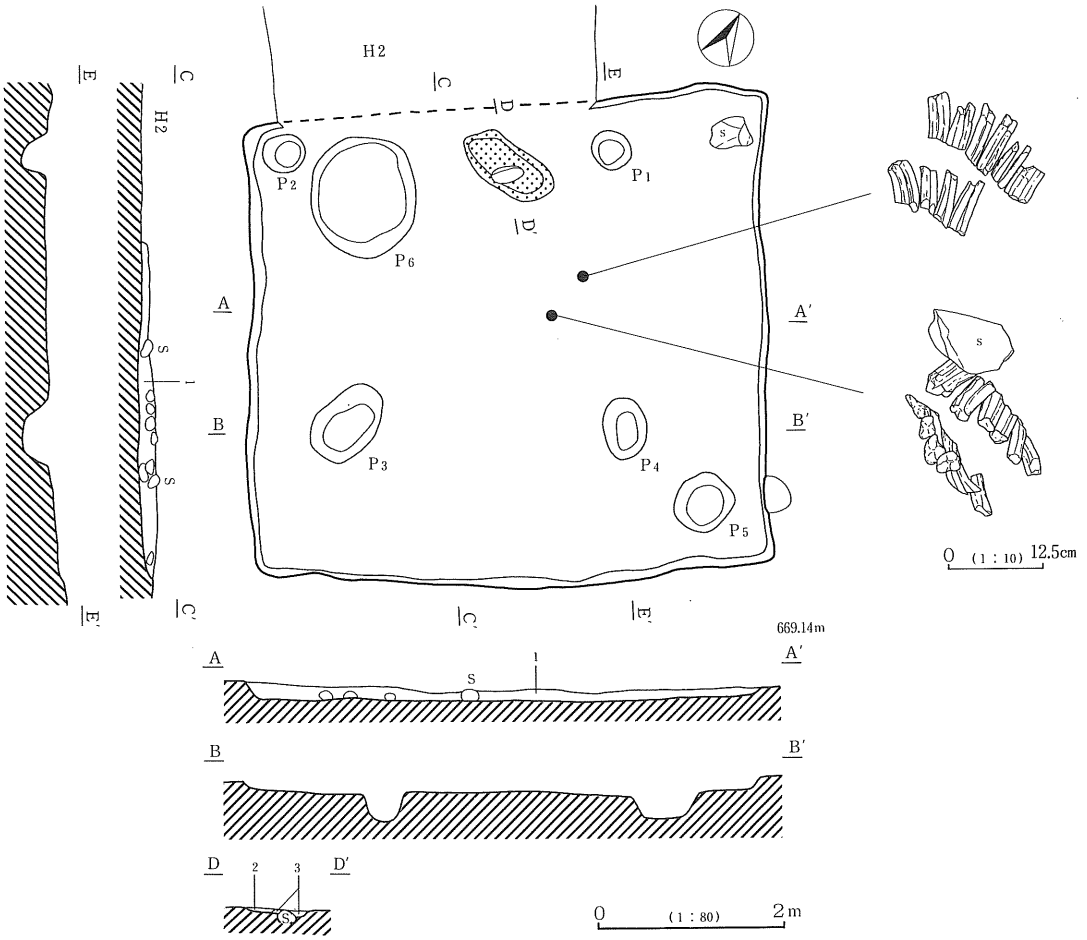
第17図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図

完形である。調整はロクロヨコナデで、底部は回転ヘラケズリの後高台貼付である。２は須恵器壺の口縁部であり、平面図 P1内より出土した。外面に自然釉の付着が見られる。３は土師器甕の底部であり覆土中より出土した。外面はナデであり、底部に木葉痕が観察できる。４～６は土師器甕であり、４は底部を欠損し５・６はほぼ完形である。４・６はカマド内より出土し前述したように組み合わされて検出された。３点とも調整は外面やや斜め方向のヘラケズリで口縁部ヨコナデ、内面はヘラナデを施す。焼成は良好で、何れも非常に器厚が薄く成形されているのが特徴である。

（6）Ｈ６号住居址　（第18・19図，写真図版六）

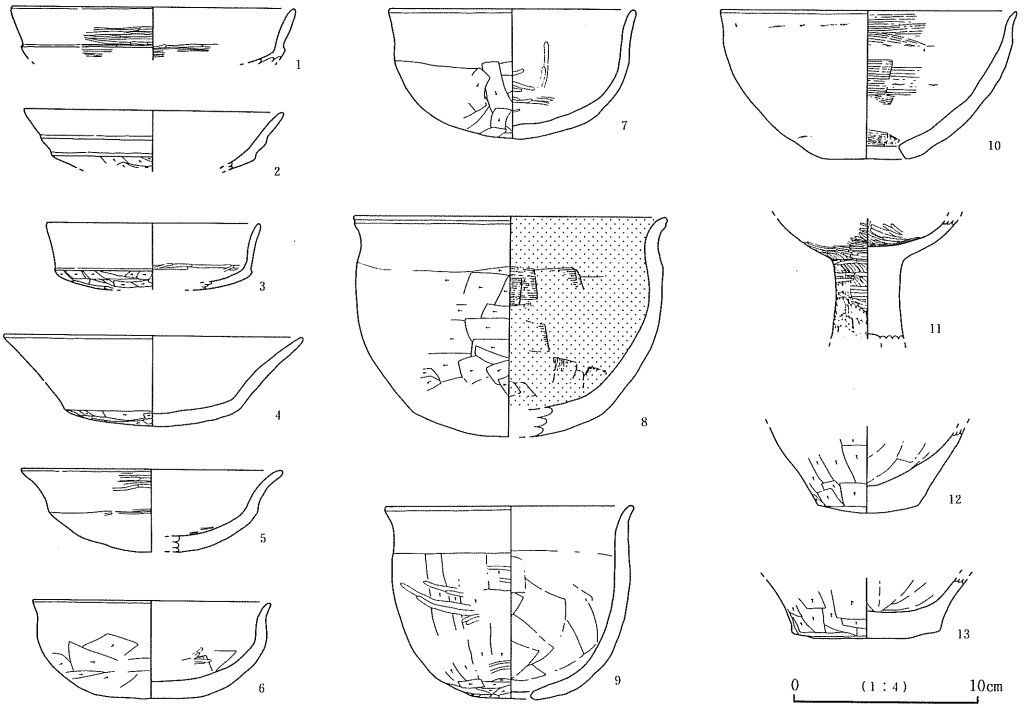
本址はカ・キ－12Grに位置する。Ｈ２号住居址と重複し、新旧関係は本址の方が古い。形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁5.52m・東壁4.88m・南壁5.2m・西壁4.6mで、壁高は11cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位はＮ－30°－Ｗを示す。住居址の床面積は25.4m²を測る。床は軟質であり、覆土は１層で、住居址全体にわたって拳大の河原石が混入していた。

壁溝は確認されなかったが、ピットが６カ所検出された。規模はP1が径40cm・深さ20cm、P2が径40cm・深さ11cm、P3が長軸90cm・短軸30cm・深さ26cm、P4が長軸64cm・短軸45cm・深さ28cmを測る。P1～P4は住居址の柱穴と考えられるが、検出位置が住居址平面からすると西側によっており他の機能も視野に入れる必要があろう。



1　褐灰色土（10YR4/1）　白色粒子を多く含む。粘性弱。
2　暗褐色土（10YR3/4）　焼土・炭化物・φ5㎜の小石を少量含む。
3　暗褐色土（10YR3/2）　焼土・φ5㎜の小石を少量含む。

第18図　Ｈ６号住居址実測図



第19図　Ｈ６号住居址出土遺物実測図

本址北壁中央寄りに炉が検出された。規模は長軸１ｍ・短軸50cmで、床面からの深さは３cmであり、形態は楕円形を呈する。主軸方位はＮ－85°－Ｗを示す。炉中央部西寄りには焼土塊が検出され、中央には枕石と考えられる長軸35cmの河原石が炉長軸に直行する形で検出された。

本住居址からの出土遺物は、図示したものの他に土師器甕片等があり、出土位置としては南西コーナーと北東コーナー付近で多く検出された。

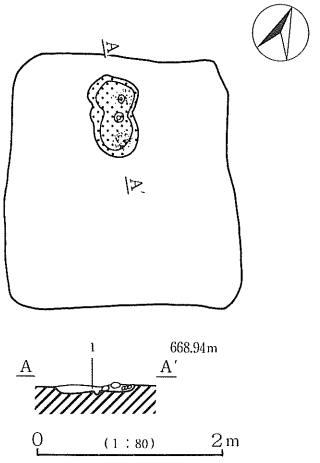
１～６は須恵器坏蓋模倣の土師器坏である。１～３は口縁部のみの小片であり回転実測によるものである。１は焼成はやや軟質であるが、胎土が非常に精錬されており、外面に不明瞭ではあるが赤彩？が残る。２・３は焼成は良好であるが、胎土の不純物が多い。４・５は口縁部が大きく外反するタイプで底部はヘラケズリ、体部から口縁部はヨコナデを施す。６は口縁部が小さく外反するタイプの坏で、他の坏に比べやや器厚が厚い。７は土師器碗でありほぼ1／4の残存である。８は土師器小型甕であり底部は丸底状を呈する。口縁部外面に浅い沈線が巡り、内面黒色処理されている。９・10は土師器甑であり、ともに焼成前の穿孔と考えられる。11は高坏の脚部から坏部の部分であり、内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。12・13は土師器甕の底部であり、調整は底部から胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施されている。

本址のほぼ中央から獣骨（馬歯）が出土している。出土層位はほぼ床面上であり、それぞれ歯を上に向けた状態で出土した（写真図版六②、詳細については第Ⅴ章第３節参照）。

（7）Ｈ７号住居址　（第20・21図，写真図版七）

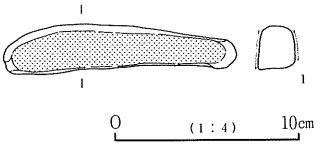
本址はク－11・12Grに位置する。残存状態が不良であった為壁などは確認できなかったが、床面の残存と考えられる黄色土の広がりより住居址の形態・規模等を推定した。形態はややゆがんだ方形を呈する。規模は北壁２ｍ・東壁2.5ｍ・南壁2.2ｍ・西壁2.52ｍを測る。主軸方位Ｎ－23°－Ｗを示す。住居址の床面積は6.0㎡を測る。床は軟質であり、住居址北よりの炉周辺部のみやや硬質化が観察された。壁溝・柱穴は確認されなかった。

本址の炉は住居址北壁寄りに検出された。規模は長軸90㎝・短軸52㎝・深さ６㎝を測る。形態は中央部がややくびれる楕円形を呈し、小さなピットが底面に２カ所確認された。覆土には全体に焼土がひろがり、火床面のように顕著に焼けた部分は検出されなかった。



第20図　Ｈ７号住居址実測図

本址からの出土遺物は、図示した磨石の他土師器甕片が少量あるが、土器で図示可能なものはなかった。



第21図　Ｈ７号住居址出土遺物実測図

本址は規模・形態ともＨ１号住居址によく似ており、遺構の性格も同じものを示すと考えられる。この両住居址は当遺跡の竪穴住居址の中では特に規模が小さく、また貧弱な炉址しか持たないことなどから竪穴住居址とは違った機能・用途を考察すべきと考える。

（8）Ｈ８号住居址　（第22・23・24図，写真図版八）

本址はウ－９・10、エ－９・10Grに位置する。３号井戸址、４号井戸址、Ｆ１号掘立柱建物址、Ｆ５号掘立柱建物址、Ｈ９号住居址と重複し、新旧関係は古い方よりＨ９号住居址→本址→Ｆ１号掘立柱建物址・Ｆ５号掘立柱建物址→３号井戸址・４号井戸址である。残存状態は南壁を４号井戸址に、西壁を３号井戸址に壊されている他は良好である。

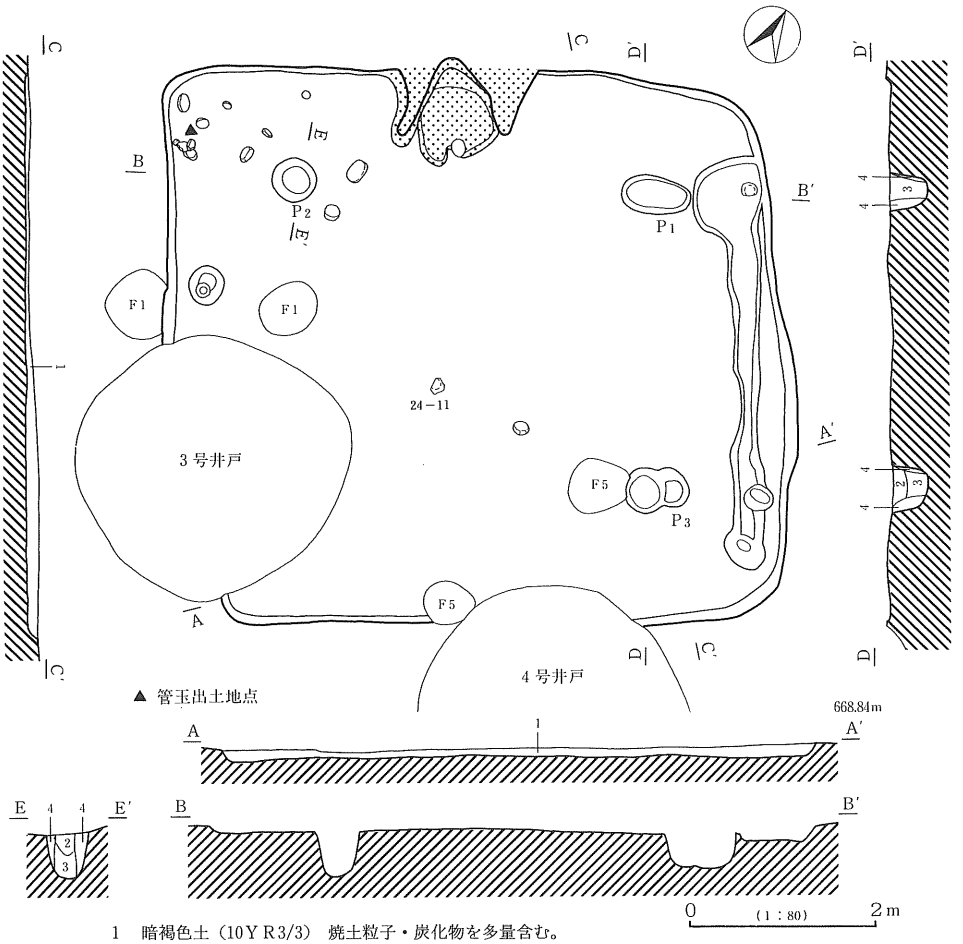
形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁６ｍ・東壁5.16ｍ・南壁5.65ｍ・西壁5.6ｍで、壁高は北東コーナーで５㎝・東壁で11㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。主軸方位Ｎ－32°－Ｗを示す。住居址の床面積は29.6㎡を測る。床はやや軟質であり、覆土は１層で焼土・炭化物が混入する。

ピットは４カ所で検出された。P1～P3は主柱穴と考えられ、規模はP1が長軸72㎝・床からの深さ36㎝、P2が径48㎝・深さ50㎝、P3が径48㎝・深さ35㎝を測る。ピット中には、柱跡を示すセクションも観察された。壁溝は東壁のみに沿うように検出され幅35㎝・深さ７㎝を測る。

カマドは住居址北壁中央に検出された。残存状況はカマド上部を削平されていた為、右袖の残存が良好ではなかった。規模は煙道部から火床面までの長さ１m・幅80cmで、右袖が長さ69cm、左袖が長さ84cm・床からの高さ６cmをそれぞれ測る。形態は煙道部が住居址壁ラインよりもわずかに外に飛び出す形で、煙道は緩やかに立ち上がる。両袖ともに芯材として河原石などの使用は不明であり、構築土として使用された暗赤褐色土には焼土・炭化物・灰が含まれていた。

カマド掘り方は、東西長軸2.84cm・南北短軸１m・深さ５cmを測り、焚口部付近には径30cm・深さ14cmのピットが検出されている。また、右・左の袖ともに長軸20cm程の地山を掘り残した部分があり、袖の芯として利用している。

本址よりの出土遺物は、図示したものの他に土師器甕片・須恵器甕片などがあり、出土量は多

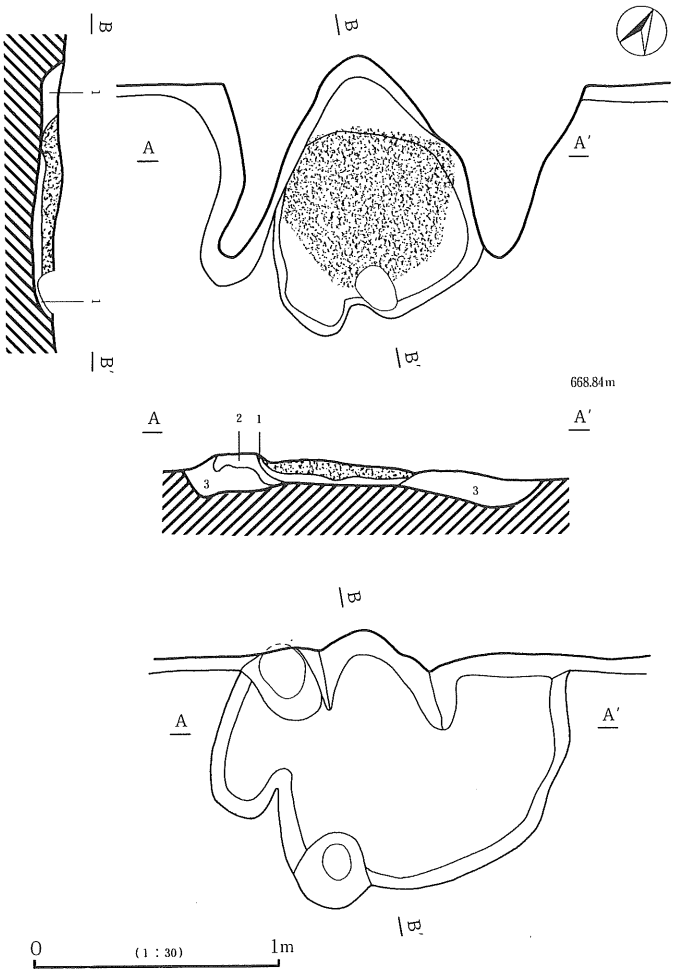


1　暗褐色土（10ＹＲ3/3）　焼土粒子・炭化物を多量含む。
2　黒褐色土（10ＹＲ3/1）　焼土粒子・炭化物を少量含む。
3　黒褐色土（10ＹＲ2/3）　小石・ロームブロックを含む。
4　暗褐色土（10ＹＲ3/2）　小石・ローム粒子を多量含む。

第22図　Ｈ８号住居址実測図

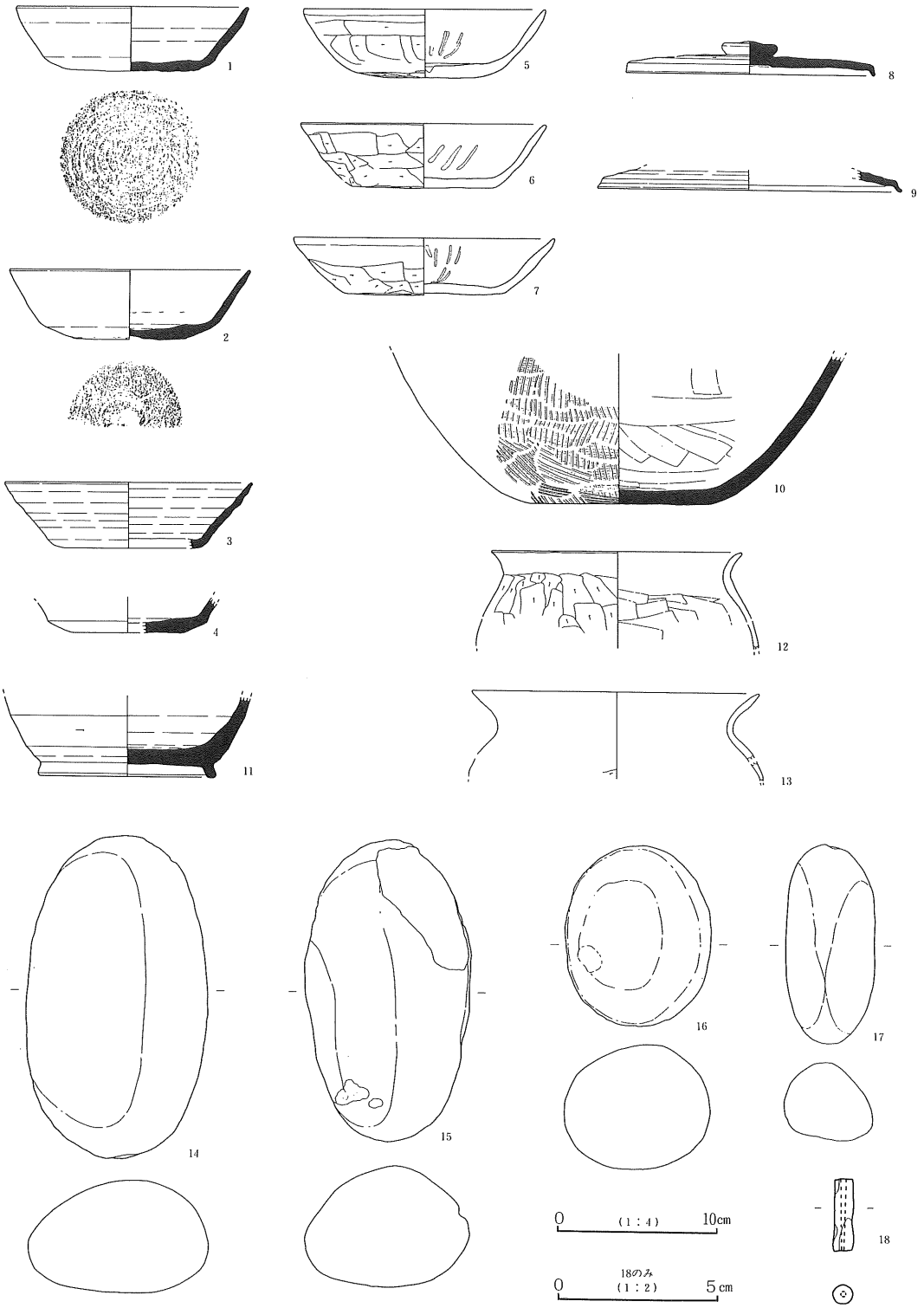
い。

1～4は須恵器坏であり、1は東壁北よりの壁溝の中より出土した。3／4程が残存し、底部回転ヘラ切りで体部・口縁部ロクロヨコナデが施されている。2は住居址の東コーナーより出土した。1･3に比べやや焼成があまく、軟質で白色にちかい色調である。2／3が残存する。3は住居址西コーナーより出土し、口縁部から体部のみ残存する。色調はやや赤褐色ぎみで、細かいロクロ目が残る。4も西コーナー部分から出土し、底部のみ残存する。底部は、回転ヘラケズリで1～3の坏とは調整が異なる。5～7は土師器坏である。7は西コーナーより、6・7は東コーナーより出土している。いずれも調整は底部から体部へラケズリ、口縁部及び内部はナデが施されている。胎土は精錬されているが、焼成はややあまく、持つと土器粉が手に付着する。8・9は須恵器蓋で、8は2／3残存し、9は蓋かえりのみの残存である。8は背の低い宝珠つまみが貼付され、蓋の天井部には自然釉の付着が見られる。10は須恵器甕であり、カマド左袖脇より出土した。底部から胴部下半のみで、調整は外面が工具による平行タタキメが、内部はヘラナデが施されている。14は須恵器壺の底部から胴部下半部で住居址中央部より出土した。内面見込み部には自然釉が付着する。12・13は土師器甕であり12はP1脇より出土した。胴部外面やや斜め方向のヘラケズリを施す。



1　灰褐色土　（5ＹＲ4/2）　焼土を微量、灰を多量に含む。
2　暗赤褐色土（5ＹＲ3/3）　炭化物・灰を微量、焼土粒子を多量含む
3　暗赤褐色土（5ＹＲ3/2）　炭化物・灰・焼土粒子を少量含む。

第23図　Ｈ８号住居址カマド実測図

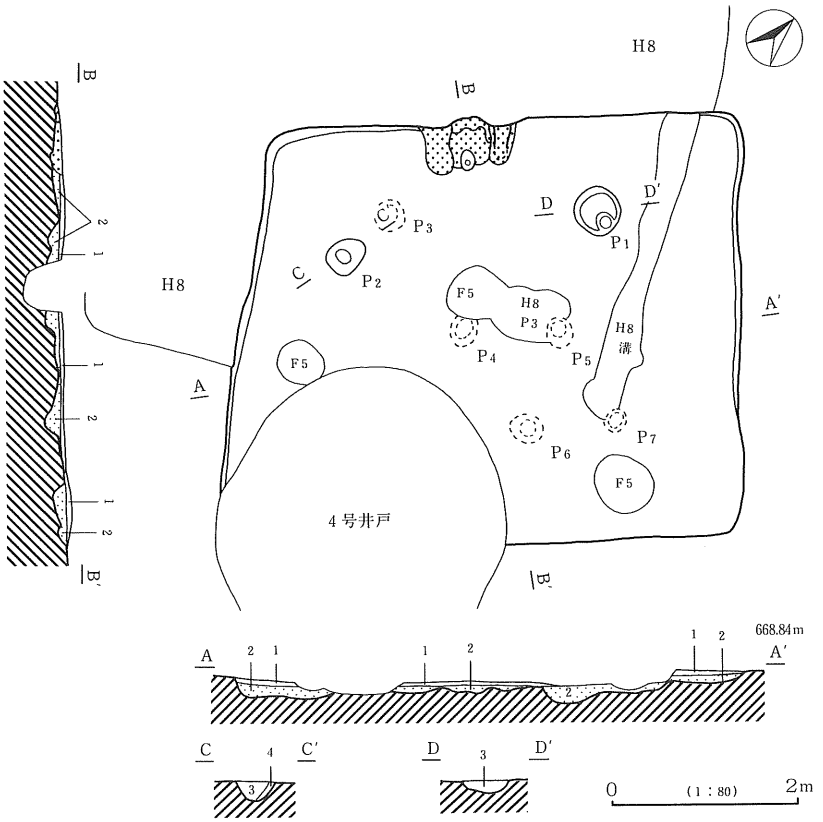


第24図　Ｈ８号住居址出土遺物実測図

（9）Ｈ９号住居址　（第25・26・27図，写真図版九）

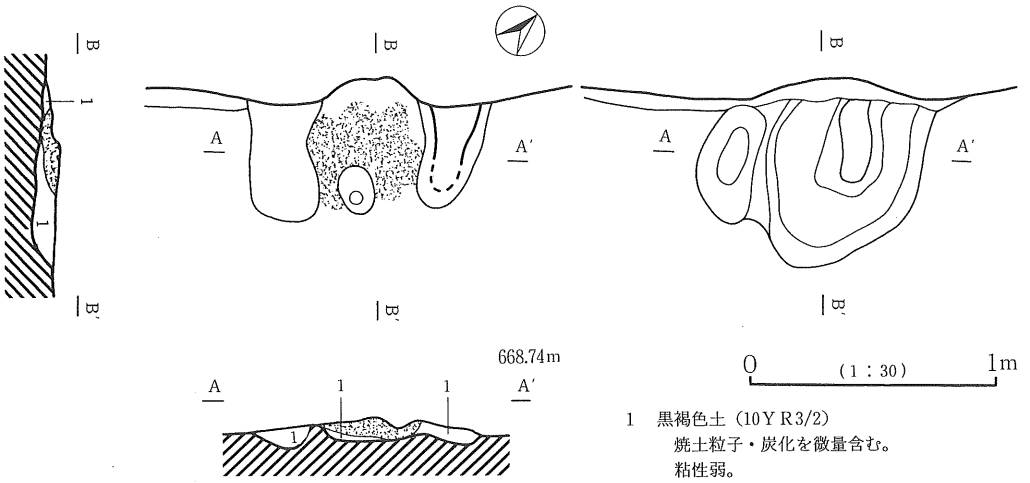
本址はエ－８・９Grに位置する。４号井戸址、Ｆ５号掘立柱建物址・Ｈ８号住居址と重複し、新旧関係は古い方より本址→Ｈ８号住居址→Ｆ５号掘立柱建物址→４号井戸址である。残存状態は南壁西側半分を４号井戸址に壊されており、南壁の立ち上がりも確認面が浅く削平されている。また本址上面に重複するＨ８号住居址の壁溝が東側の床を掘り込んでいる為全体に不良である。

形態はややいびつな方形を呈し、規模は北壁５ｍ・東壁4.40ｍ・南壁2.42ｍ（残存値）・西壁3.8ｍ（残存値）で、壁高は東壁中央で７cmを測る。壁は南壁が殆ど削平されており不明であるが、他の三辺は緩やかに立ち上がる。主軸方位Ｎ－48°－Ｗを示す。住居址の床面積は21.6㎡を測る。床はやや軟質であり、貼床は深い部分で18cmを測る。覆土は１層で焼土・炭化物が混入する。ピットは床面で２ヶ所、掘り方検出時に５ヶ所が検出された。P1の規模は径50cm・深さ17cm、P2が径44cm・深さ19cmを測る。



1　黒褐色土（10ＹＲ2/3）　焼土粒子・炭化物・ローム粒子を少量含む。
2　黒色土　（10ＹＲ2/1）　炭化物・ロームブロックを多量含む
3　黒褐色土（10ＹＲ3/2）　ロームブロック・ローム粒子を少量・炭化物を・焼土粒子を微量含む。
4　暗褐色土（10ＹＲ3/4）　ローム粒子を多量含む。

第25図　Ｈ９号住居址実測図

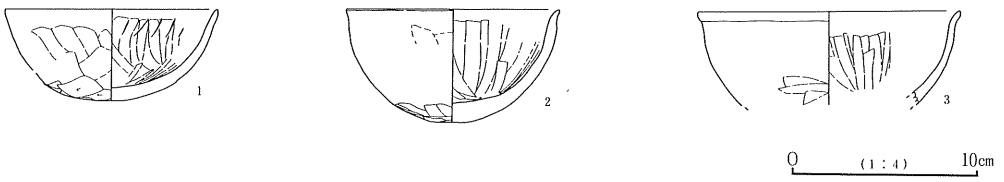


第26図　Ｈ９号住居址カマド実測図

カマドは住居址北壁中央に検出された。残存状況はカマド上部を削平されていた為、左袖の残存が良好ではなかった。規模は煙道部から火床面までの長さ47cm・幅51cmで、右袖が長さ41cm・床からの高さ３cm、左袖の長さ46cmを測る。カマド長軸方位はＮ－47°－Ｗを示す。形態は煙道部が住居址壁ラインよりもわずかに外に飛び出す形で、煙道は緩やかに立ち上がる。両袖ともに芯材として河原石などの使用は不明であり、構築土として使用された暗褐色土には焼土・炭化物が含まれていた。

カマド掘り方は、南北の長軸77cm・東西の短軸63cm・深さ７cmを測り、左袖下からは南北47cm・深さ７cmのピットが検出された。また、火床面下には南北の長軸38cm・高さ２cmのテーブル状の地山掘り残しがある。

本址の出土遺物は図示した他に土師器甕・坏片など少量ある。１～３は土師器坏である。１は住居址東コーナーよりの床面上から２は掘り方検出時のＰ３内より、３は南壁ぎわよりそれぞれ出土した。いずれも調整は、体部外面はヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面見込み部と体部が丁寧なヘラナデが施されている。３点とも器形は同じであるが、口縁部の作りが異なる。１はそのまま立ち上がり、２は口縁端部のみ面取りが施される。３は緩やかに外反する。



第27図　Ｈ９号住居址出土遺物実測図

(10) H11号住居址　(第28～32図，写真図版十・十一)

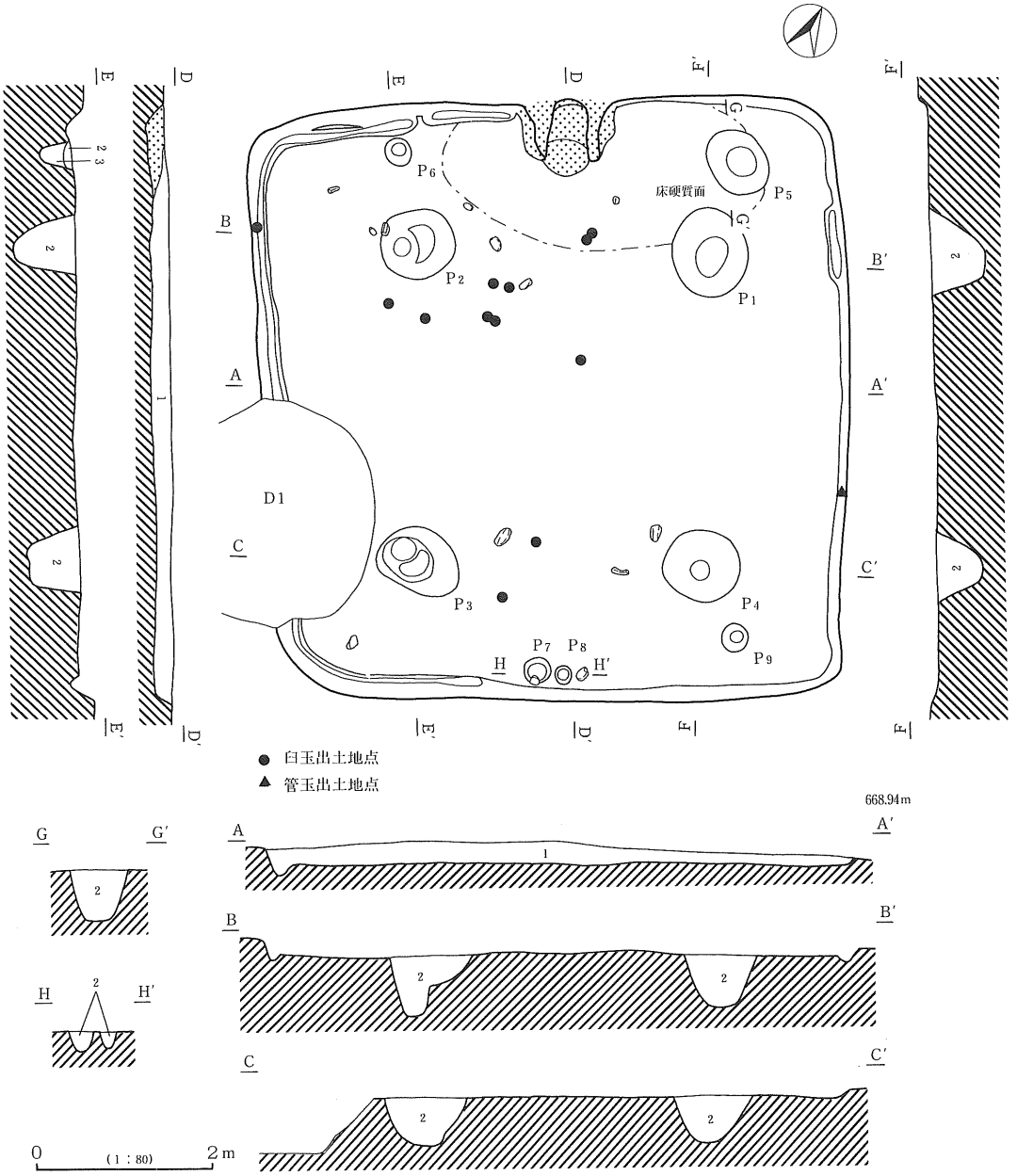
本址はイ－11・12、ウ－11・12Grに位置する。D１号土坑と重複関係にあり、新旧関係は本址の方が古い。残存状況は西壁一部をD１号土坑によって壊されている他は良好である。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁6.42m・東壁6.3m・南壁６m・西壁5.92mで、壁高は西壁中央で18cmを測る。主軸方位はN－29°－Wを示す。住居址の床面積は36.6m²を測る。床は全体的によく踏み締まっており、特にカマド周辺が硬質化していた。貼床は平均10cm内外で施されている。覆土は１層で炭化物を含む。壁溝は北壁西半分・西壁・南壁西半分・東壁一部に巡り、西壁中央で幅28cm・深さ10cmを測る。ピットは床面上でP1～P9の９ヶ所、掘り方検出時にP10～P27までの17ヶ所が検出された。P1～P4は主柱穴で、形態は何れもすり鉢状を呈する。規模はP1が径98cm・深さ59cm、P2が径84cm・深さ69cm、P3が径93cm・深さ56cm、P4が径86cm・深さ49cmを測る。またP7･8は入り口施設の柱跡と考えられ、規模はP7が径30cm・深さ24cm、P8が19cm・深さ18cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。残存状況はほぼ良好であり、規模は煙道部から焚口部までの長さ1.65m・幅84cmで、右袖長さ67cm・床面よりの高さ９cm、左袖長さ60cm・床面よりの高さ11cmを測る。カマドの長軸方位はN－21°－Wを示し、住居址主軸より７°ほど北に傾いている。形態は煙道部がほぼ住居址壁ラインに収まるタイプで、壁は緩やかに立ち上る。袖の芯材は確認されなかったが、両袖とも住居址壁の接する部分に長さ17cmほどの扁平な石が袖に立てかけた状態で検出されている。袖の構築土は４層で何れもローム粒子を多量に含んでいる。カマド掘り方は、南北の長軸1.73m・東西の短軸1.09m・深さ２cmを測る。また両袖の焚口付近からはピットが２ヶ所検出され、右側が径42cm・深さ９cm、左側が径43cm・深さ６cmを測る。形態は楕円形の掘り込みで、袖部分は長さ20cmほど地山を掘り残している。

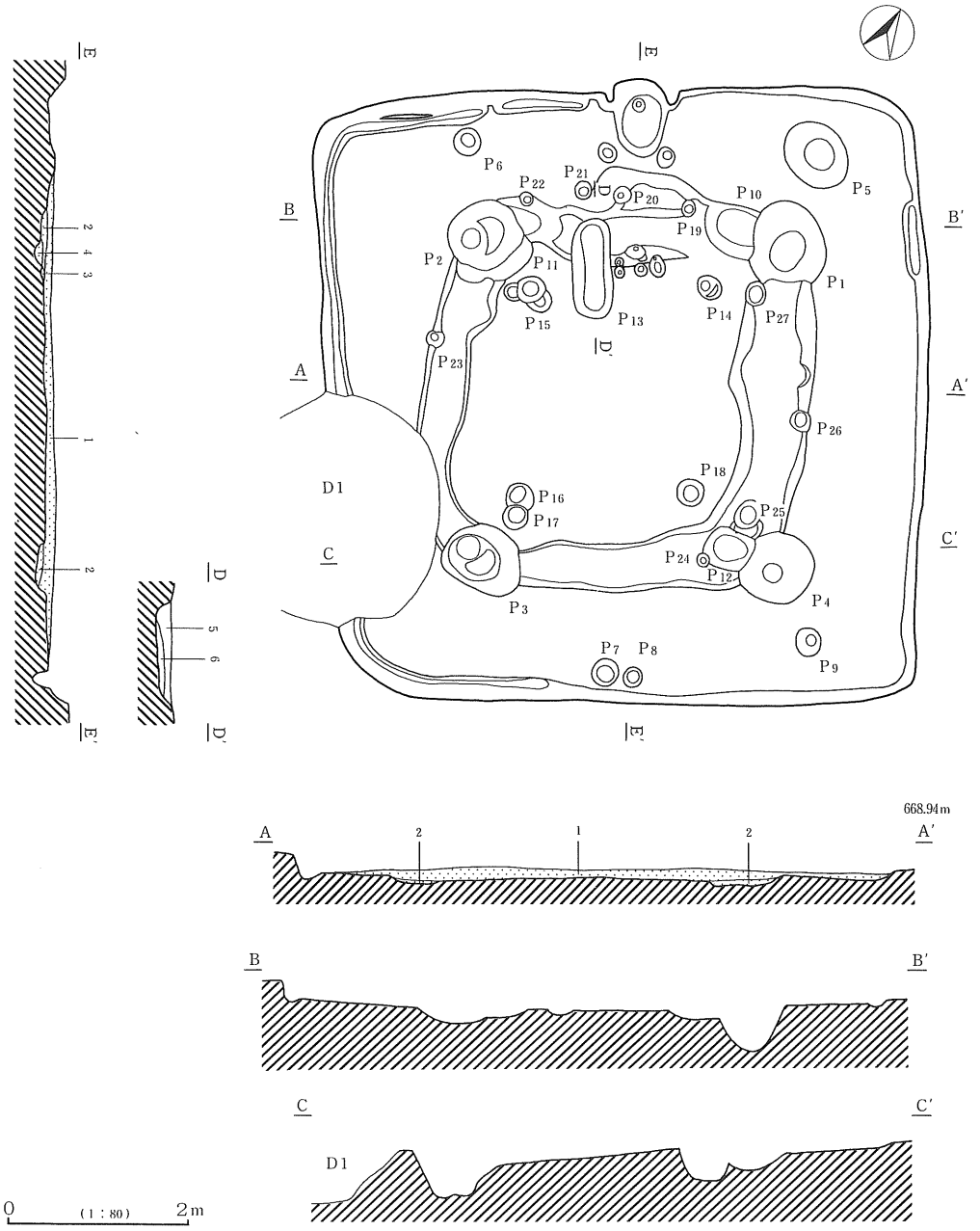
本址は、掘り方検出時に床面下より新たな小型の住居址と考えられる掘り込みが確認された。形態は隅丸方形を呈する。規模は北壁3.3m・東壁3.82m・南壁3.38m・西壁3.8mで、壁高は東壁中央で４cmを測る。主軸方位はほぼ上面の住居址と同じで、住居址の床面積は17.7m²を測る。床は全体的によく踏み締まっている。貼床は確認されず地山Ⅵ層が露出していた。ピットはP10～P27までの17ヶ所が検出された。P14～P18は主柱穴で、規模はP14が径28cm・深さ35cm、P15が径29cm・深さ23cm、P16が径32cm・深さ25cm、P17が径25cm・深さ30cm、P18が径30cm・深さ16cmを測る。

カマドは検出されなかったが、P13の覆土には焼土・炭化物が含まれており、またP13脇の小ピット群周辺からは焼土が検出されたことから、北壁の中央部分に存在したものと考えられる。掘り方は上面住居址の主柱穴P1～P4をめぐるように壁周辺のみ幅73cm・深さ６cmほどの掘り込みを持つ。



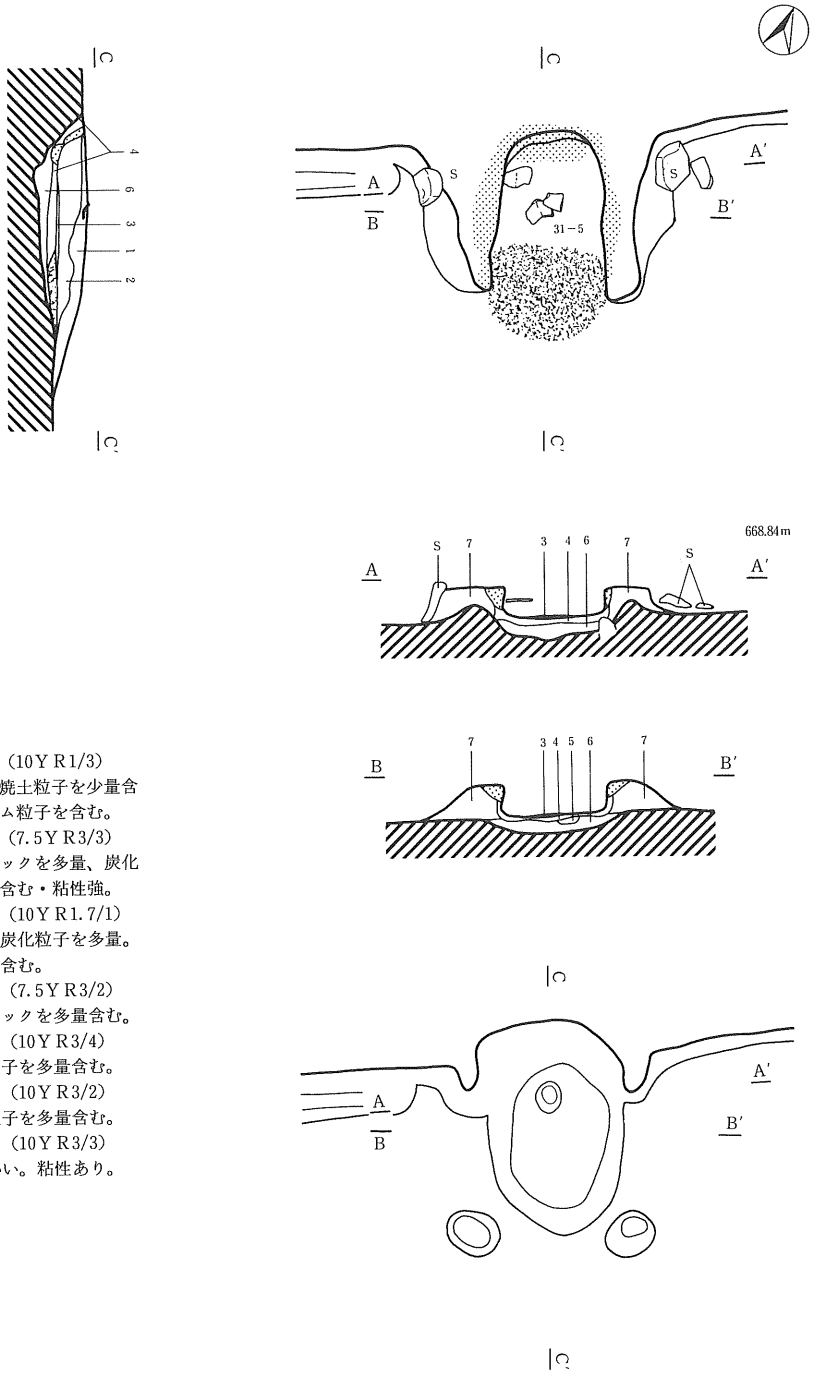
1　黒褐色土（10Y R2/3）
　ローム粒子を少量・ロームブロック・炭化物を含む。粒子細かい。
2　黒褐色土（10Y R2/3）
　炭化物・焼土を微量・ローム粒子を少量・ロームブロックを含む。粒子細かい。
3　暗褐色土（10Y R3/3）
　焼土ブロック・炭化物を多量含む。焼土粒子を含む。

第28図　H11号住居址実測図



1　黒褐色土　(10YR2/3)
　炭化物・焼土・ロームブロックを含む。
2　暗褐色土　(10YR3/3)
　粒子細かい。
3　暗赤褐色土（5YR3/6)
　焼土。
4　黒褐色土（10YR2/3)
　焼土ブロック・炭化物を少量含む。
5　黒褐色土（10YR3/2)
　焼土・炭化物を含む。粒子粗い。
6　黒褐色土（10YR2/2)
　焼土・炭化物を少量含む。粒子細かく粘性強。

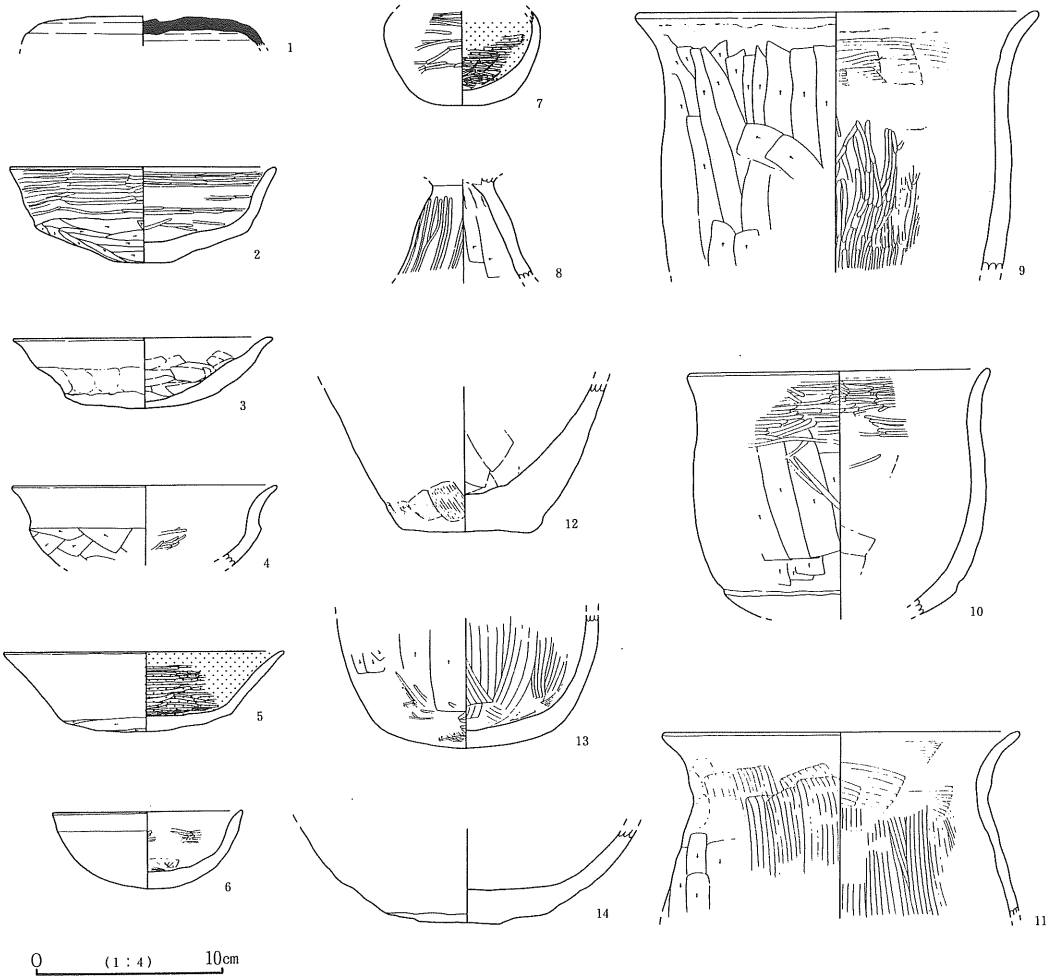
第29図　H11号住居址掘り方実測図



1　黒褐色土　（10Y R1/3）
　炭化物・焼土粒子を少量含む。ローム粒子を含む。
2　暗褐色土　（7.5Y R3/3）
　焼土ブロックを多量、炭化物を少量含む・粘性強。
3　黒色土　（10Y R1.7/1）
　炭化物・炭化粒子を多量。灰を少量含む。
4　黒褐色土　（7.5Y R3/2）
　焼土ブロックを多量含む。
5　暗褐色土　（10Y R3/4）
　ローム粒子を多量含む。
6　黒褐色土　（10Y R3/2）
　ローム粒子を多量含む。
7　暗褐色土　（10Y R3/3）
　きめ細かい。粘性あり。

0　（1：30）　1m

第30図　H11号住居址カマド実測図

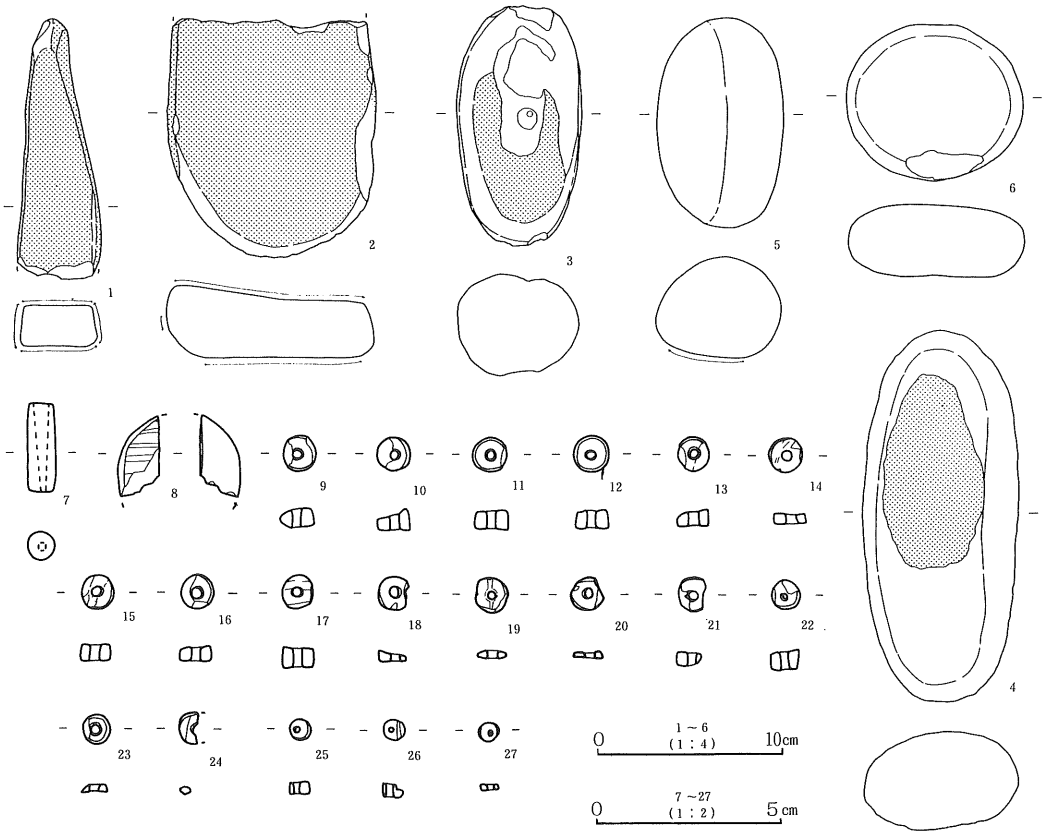


第31図　H11号住居址遺物実測図(1)

小型住居址からの出土遺物は土師器甕片・坏片があるが図示可能なものはなかった。

この小型住居址と上面の大型住居址は、大型住居址と主軸方位を同じくし、対角線上にそれぞれの柱穴が配置されていることから、小型の住居址を拡張したものが大型の住居址と考えられる。

本址からの出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・坏片などがある。1は須恵器蓋で西壁中央部よりから出土した。残存は天井部のみで、調整はロクロヨコナデである。2～6は土師器坏である。2はP3わきより正位置で出土し、口縁部の一部を欠損する他はほぼ完形である。調整は底部から体部にかけてヘラケズリで、口縁部ヨコナデ、内面はやや粗いミガキを施す。3はP5内より出土した。底部から体部にかけて指頭圧痕が残り、口縁部はヨコナデを施す。また底部には木葉痕がある。2と3の土師器坏は器厚が厚く、胎土にも不純物が多く混ざっており、他の坏とは成形が異なる。4はP6内より出土し、口縁部から体部のみ残存する。5はカマド内火



第32図　H11号住居址出土遺物実測図(2)

床面上から出土した。3／4ほど残存しており、二次焼成のため器面は荒れている。6はP6内より出土した。口縁部端部に面を持つ。器面が荒れているため調整は不明。7は小形丸底壺の胴部と考えられる。P5内より出土し底部から胴部はほぼ完形である。外面はヘラミガキ、内面もヘラミガキが施されている。8は高坏の脚部でP5より出土した。色調は赤褐色で、外面は間隔の広い丁寧なヘラミガキが施されている。9～14は土師器甕及び小型甕である。9はP4わきより出土し、胴部外面は強いヘラケズリが、内面はヘラミガキが施されている。この調整方法から9は甑の可能性もある。10は小形甕で、1／3が残存する。北東コーナー寄りから出土した。11は口縁部と胴部上半のみで、カマド右袖脇の破片と西壁中央寄りの小片が接合関係にある。胴部外面はハケメの粗い工具によるナデで、内面はやや細かいハケメの工具によるナデが施されている。12はカマド前面より出土した。13は北壁の北東コーナー寄りから出土した。底部は丸底状を呈し、胴部外面はヘラケズリ、内面はハケメによるナデが施されている。14はP2東脇より出土した。底部はやや丸底状を呈する。

石器類は第32図に示した6点と玉類21点がある。1は叩き石、2は石皿、3～6は磨石である。玉類は19点の臼玉と滑石製紡錘車片1点、管玉1点が出土している。

(11) H12号住居址(第33～35図, 写真図版十二)

本址はイ－5Grに位置する。H13号住居址・M1号溝と重複関係にあり、新旧関係は本址が一番新しい。残存状況はほぼ良好である。

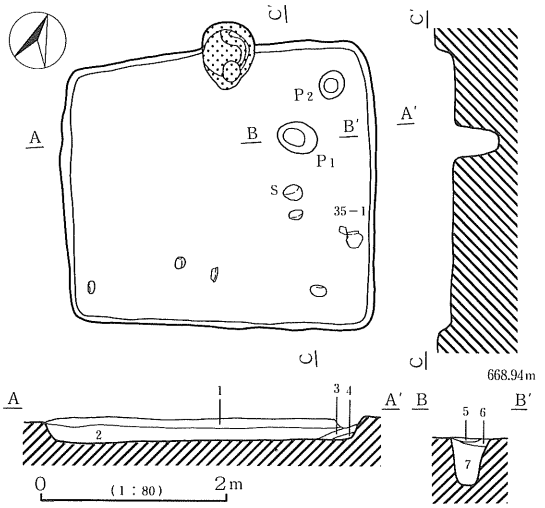
形態はほぼ方形を呈し、規模は北壁3.04m・東壁2.92m・南壁3.1m・西壁2.54mで、壁高は北西コーナーで10cmを測る。主軸方位はN－22°－Wを示す。住居址の床面積は7.9m²を測る。床はやや軟質である。貼床は確認されなかった。覆土は4層で炭化物を含む。

壁溝は確認されなかった。ピットは2ヶ所検出され、規模は、P1が径43cm・深さ52cm、P2が径32cm・深さ18cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。調査時に袖等の確認に困難し平面図は作成できなかった。掘り方の規模は煙道部から焚口部まで長さ1.45m・幅1.1mで、深さ12cmを測る。カマドの長軸方位はN－23°－Wを示す。両袖とも土による構築と考えられるが、詳細は不明である。

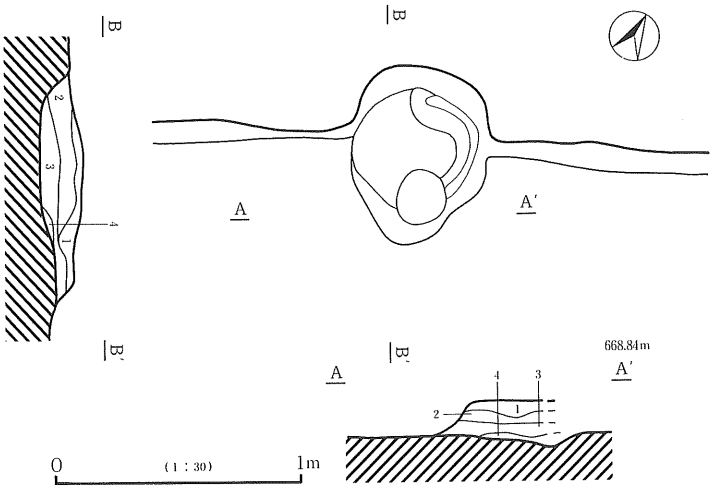
本址からの出土遺物は少なく図示したものの他に土師器甕片があるだけである。

1は土師器甕で東壁南寄りから出土した。外面に火熱による煤が付着している。内・外面ヘラナデを施す。2は土師器甑で中央東寄りから出土している。外面ヘラケズリ、内面ミガキを施し、胎土はよく精錬されている。



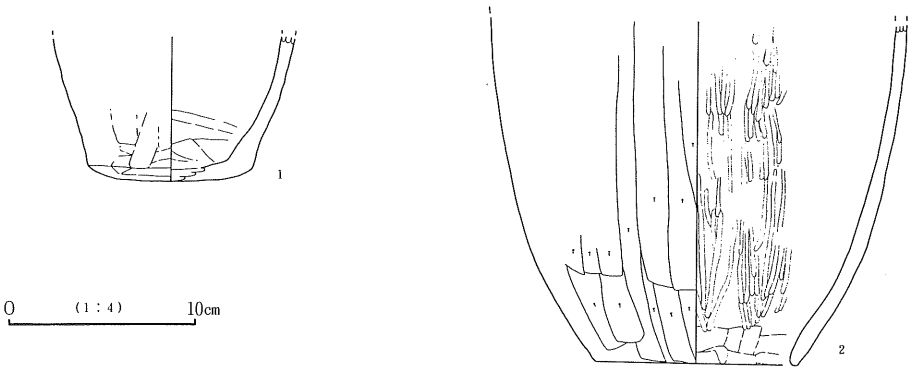
1 暗褐色土（10YR3/3）
ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子を微量含む。
2 黒褐色土（10YR3/2）
ローム粒子・炭化物・焼土粒子を微量含む。
3 黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子、5mm大の小石を少量含む。
4 褐色土　（10YR4/6）ロームブロックを多く含む。
5 黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子微量含む。粘性弱。
6 暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子多量、炭化物少量含む。
7 黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・炭化物少量含む。粘性弱。

第33図　H12号住居址実測図



1 暗褐色土（7.5YR3/4）
焼土・炭化物を多量含む。粘性弱。
2 暗褐色土（10YR3/3）
焼土・炭化物・ローム粒子・砂を少量含む。粘弱性。
3 黒褐色土（10YR2/3）
焼土・炭化物・ローム粒子を少量含む。粘性弱。
4 暗褐色土（10YR3/4）
ローム粒子多量・炭化物微量含む。粘性弱。

第34図　H12号住居址カマド実測図

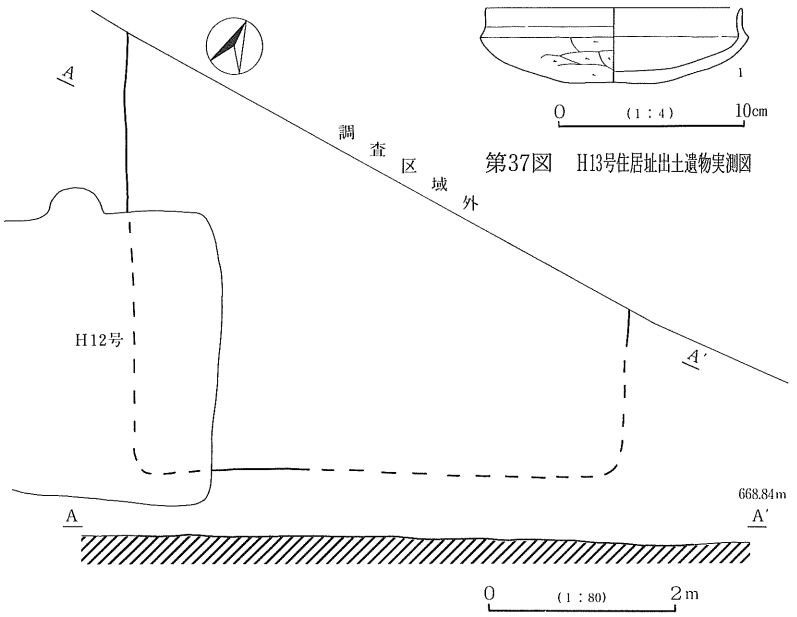


第35図　H12号住居址出土遺物実測図

(12) H13号住居址（第36・37図，写真図版十二）

本址はイ－４・５Grに位置する。H12号住居址・M１号溝と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりM１号溝状遺構→本址→H12号住居址である。残存状況は北側が調査範囲外で、本址の床面が水田耕作土直下に検出された為に壁等は検出されず、床の硬質範囲によって住居址範囲を推定した。その範囲によると、形態はほぼ方形を呈し、規模は南壁５m（推定）・西壁2.55mを測る。主軸方位はN－26°－Wを示す。住居址の床面積は検出部で16.1m²を測る。

本址の出土遺物は図示した土師器坏１点のみであった。



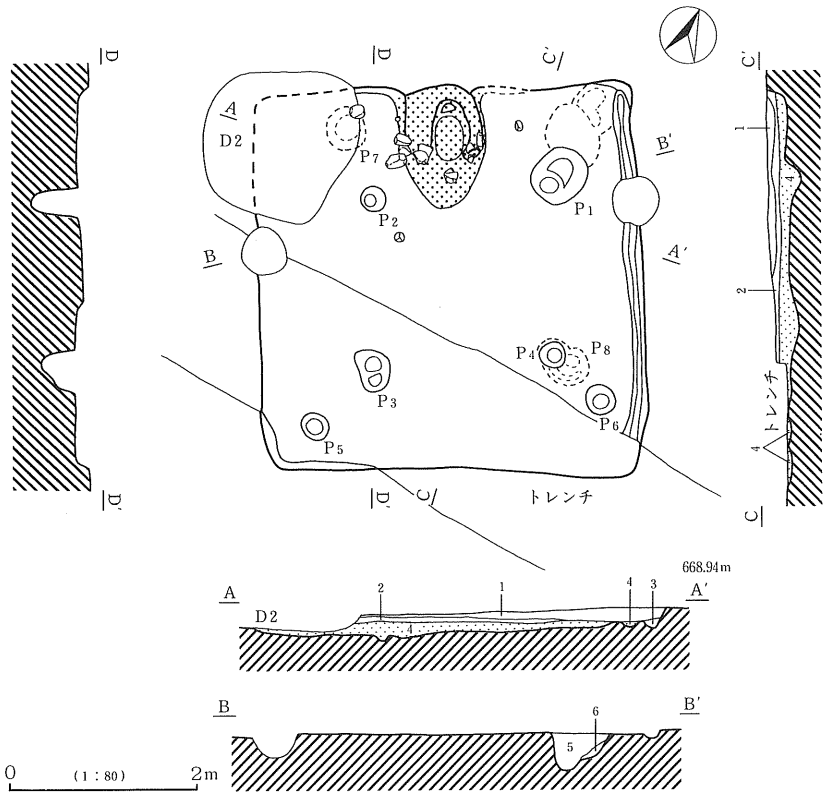
第37図　H13号住居址出土遺物実測図

第36図　H13号住居址実測図

(13) H14号住居址　(第38・39・40図，写真図版十三)

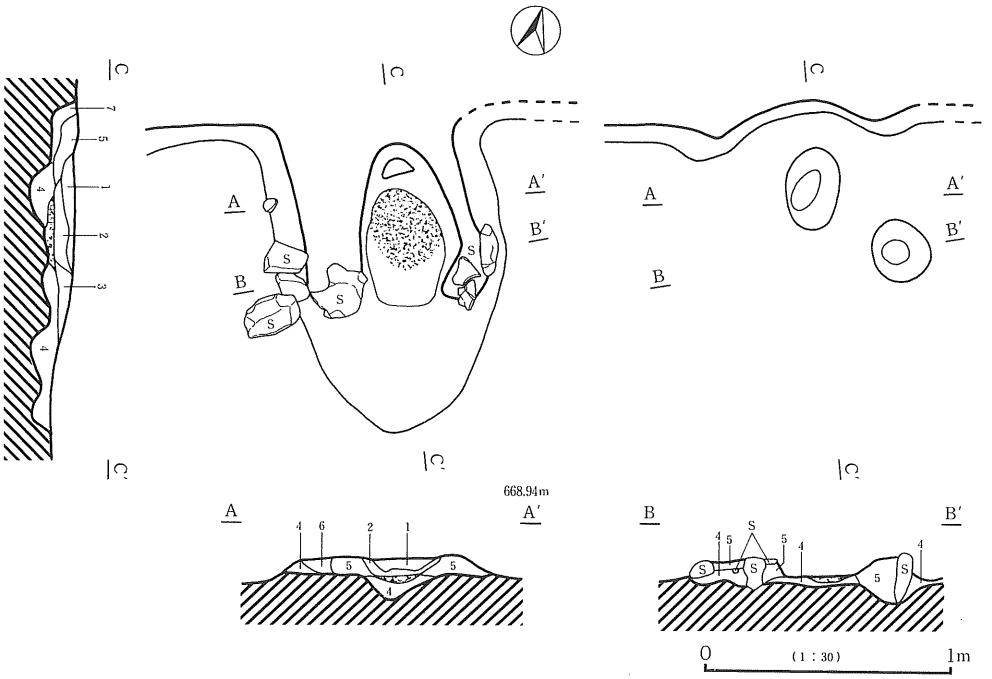
本址はイ－8Grに位置する。D2号土坑・H17号住居址と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりH17号住居址→本址→D2号土坑である。残存状況は住居址南側が試掘トレンチによって、また北西コーナーがD2号土坑によって壊されている他は比較的良好である。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁3.84m（推定）・東壁4.04m・南壁3.95m・西壁3.82m（推定）で、壁高は南西コーナーで6cmを測る。主軸方位はN－22°－Wを示す。住居址の床面積は13.6m²を測る。床は全体的によく踏み締まっており、特にカマド周辺が硬質化していた。貼床は平均15cm内外で施されている。覆土は2層で下層に炭化物を含む。壁溝は東壁に巡っており、幅19cm・深さ4cmを測る。ピットは床面上でP1～P6の計6ヶ所、掘り方を検出時にP7・P8の



1　暗褐色土（10YR3/3）　砂・黄色シルトを含む。
2　黒褐色土（10YR3/2）　炭化物・焼土粒子を含む。
3　黒褐色土（10YR3/1）　砂層を含む
4　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒子・ロームブロックを含む・炭化物を微量含む。粘性強（貼床）
5　黒褐色土（10YR3/1）　炭化物を少量含む。粘性弱。
6　褐色土　（10YR4/6）　黄色のパミス主体。粘性強。

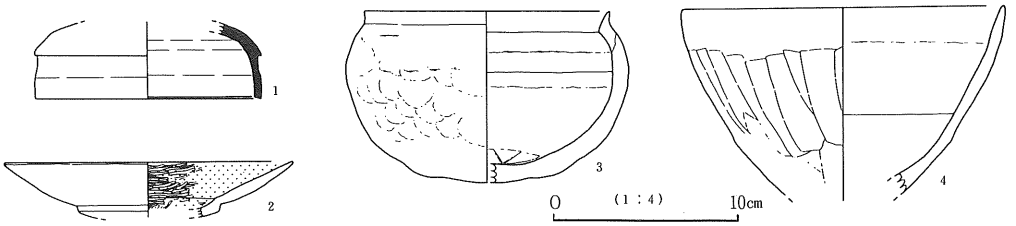
第38図　H14号住居址実測図



1	暗褐色土	(7.5YR3/3)	焼土・炭化物を少量含む。きめ細く、粘性弱。
2	極暗赤褐色土	(5YR2/3)	焼土ブロック・焼土を多量、炭化物を少量含む。粘性弱。
3	暗赤褐色土	(5YR3/3)	焼土ブロック・焼土を多量、炭化物を少量含む。粘性弱。
4	黒褐色土	(7.5YR3/2)	焼土・炭化物を少量含む。きめ細く、粘性弱。
5	極暗赤褐色土	(5YR2/3)	焼土・焼土ブロックを多量含む。粘性弱。
6	極暗褐色土	(7.5YR2/3)	焼土・炭化物を少量含む。粘性弱。
7	暗褐色土	(7.5YR3/3)	砂質ロームを多量、焼土を少量含む。

第39図　H14号住居址カマド実測図

2ヶ所が検出された。P1～P4は主柱穴で、規模はP1が径58cm・深さ41cm、P2が径22cm・深さ48cm、P3が径40cm・深さ36cm、P4が29cm・深さ27cmを測る。またP5・6は柱穴の補助穴と考えられる。本址掘り方は住居址の南側半分が一段低く掘り込まれており、段の高低差は5cmを測る。カマドは北壁中央に検出された。残存状況はほぼ良好である。規模は煙道部から焚口部まで長さ1.3m・幅40cmで、右袖長さ80cm・床面よりの高さ7cm、左袖長さ80cm・床面よりの高さ6cmを測る。カマドの長軸方位はN－23°－Wを示し、住居址主軸とほぼ等しい。形態は煙道部がほぼ住居址壁ライン内側で緩やかに立ち上るタイプで、火床面は床面よりも2cm高い位置にある。袖の芯材は柔らかい砂岩を用い、焚口付近に崩れた形で多く検出された。カマド掘り方は、住居址北壁を袖部分のみわずかに掘り残す形態で、火床面下からはピットが2ヶ所確認された。



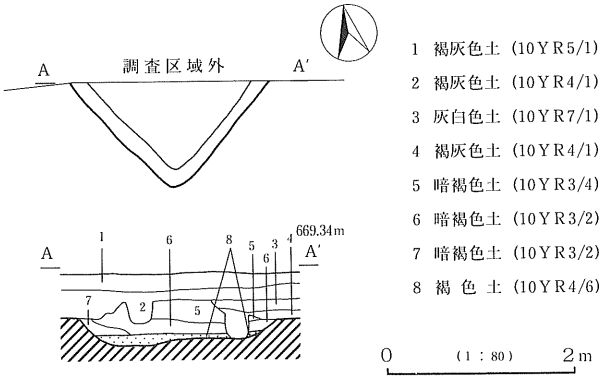
第40図　H14・H16号住居址出土遺物実測図（1～3はH14・4はH16）

本址の出土遺物は少量で、図示したものの他に土師器甕片・坏片等がある。1は須恵器坏蓋でP4付近の貼床内より出土した。天井部と受け口部のみの破片で、調整は天井部がヘラケズリを施し、受け口端部には明瞭な面取りが施されている。また、天井部には自然釉が付着している。2は土師器坏であり、覆土中より出土している。内外面に丁寧なヘラミガキが施されており、内面は黒色処理されている。3は土師器碗であり、カマド焚口部より伏せた様な状態で出土した。調整は器面が荒れているため不鮮明であるが、外面に指頭圧痕が残り、口縁部ヨコナデを施す。また口縁端部内面に面取りを施してる。

(15) H16号住居址　(第40・41図，写真図版十四)

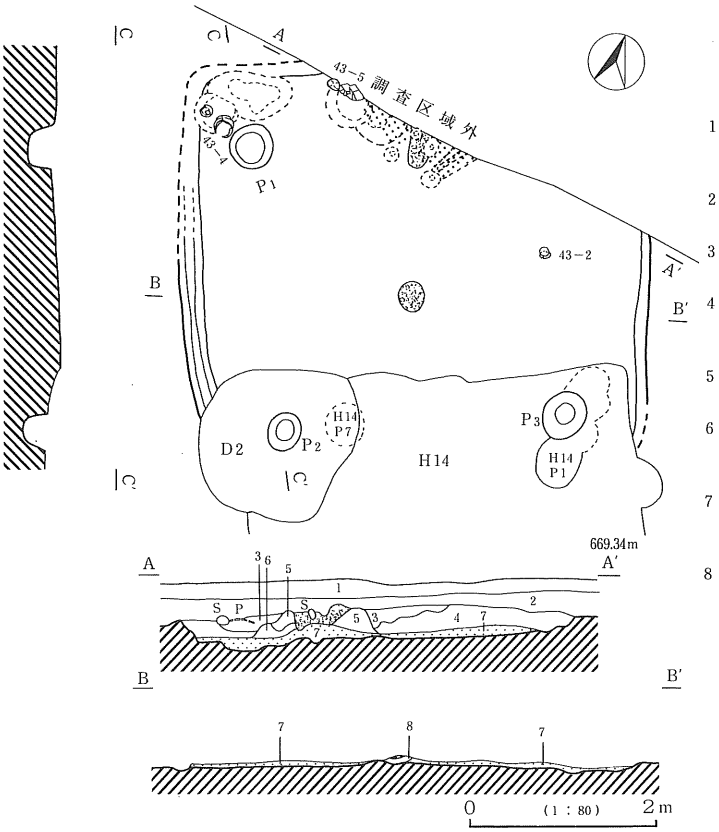
本址はア－7Grに位置する。残存状況は住居址北側が調査区外となるため、住居址の南コーナーのみの検出にとどまった。形態はほぼ方形を呈すると考えられ、規模は検出部分で南壁1.45m・西壁1.53mで、壁の高さは南西コーナーで20cmを測る。主軸方位はN－35°－Wを示す。住居址の床面積は0.8m²（検出部分）を測る。床は全体的によく踏み締まっていた。

本址の出土遺物は図示した1点のみで、4は土師器甑と考えられ、南コーナー部で床から12cm程浮いた状態で出土した。



1 褐灰色土（10YR5/1）水田耕作土。下に水田の床土(赤褐色土)あり。
2 褐灰色土（10YR4/1）耕作土。
3 灰白色土（10YR7/1）水田耕作土。
4 褐灰色土（10YR4/1）水田の床土。
5 暗褐色土（10YR3/4）白色粒子を含む。粘性弱。
6 暗褐色土（10YR3/2）赤色粒子・黄色シルトを少量含む。砂質。
7 暗褐色土（10YR3/2）黄色シルトを微量含む。粘性弱。
8 褐色土（10YR4/6）黄色シルトを含む。粘性あり。

第41図　H16号住居址実測図



1 褐灰色土（10YR5/1）
田の耕作土。下に田の床土（赤褐色土）あり。

2 褐灰色土（10YR4/1）
耕作土。

3 褐灰色土（10YR4/1）
白色の粒子を含む。炭化物を微量含む。

4 黒褐色土（10YR2/2）
3層をブロック状に含む。炭化物を微量含む。

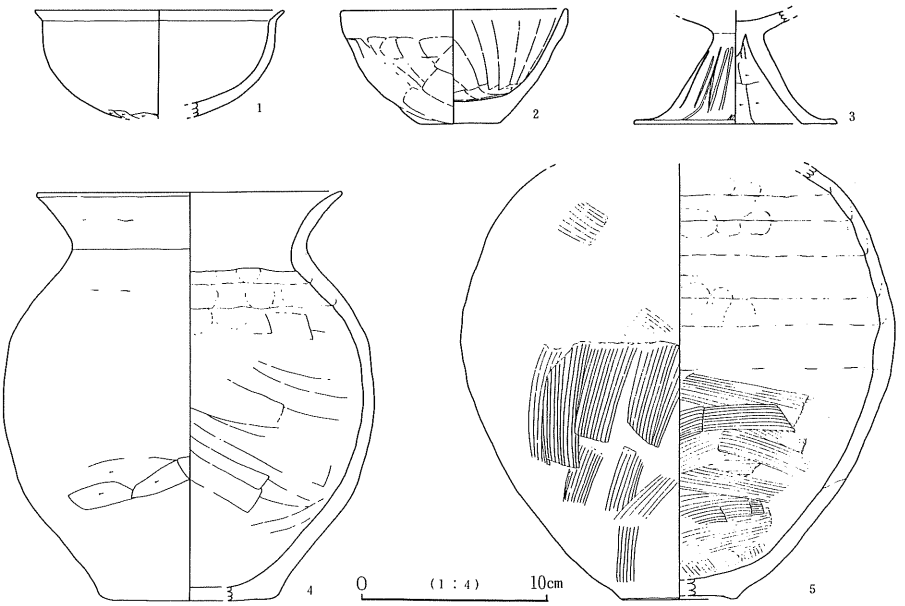
5 黒褐色土（10YR3/1）
黄色シルト、ブロック状に入る。粘性強。

6 黒褐色土（10YR2/2）
4層をブロック状に含む。4層に似ていて非常にしまりあり。

7 黒褐色土（10YR2/3）
砂質ロームに黒色土（10YR2/1）ロームブロックを多量含む。

8 黒褐色土（7.5YR3/2）
焼土を多量含む。

第42図　H17号住居址実測図



第43図　H17号住居址出土遺物実測図

(16) H17号住居址　(第42・43図，写真図版十四・十五)

本址はア・イ－８Ｇｒに位置する。Ｄ２号土坑・H14号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址が一番古い。残存状況は住居址北側が調査区外、南側がH14号住居址・Ｄ２号土坑により削平されている為やや不良である。

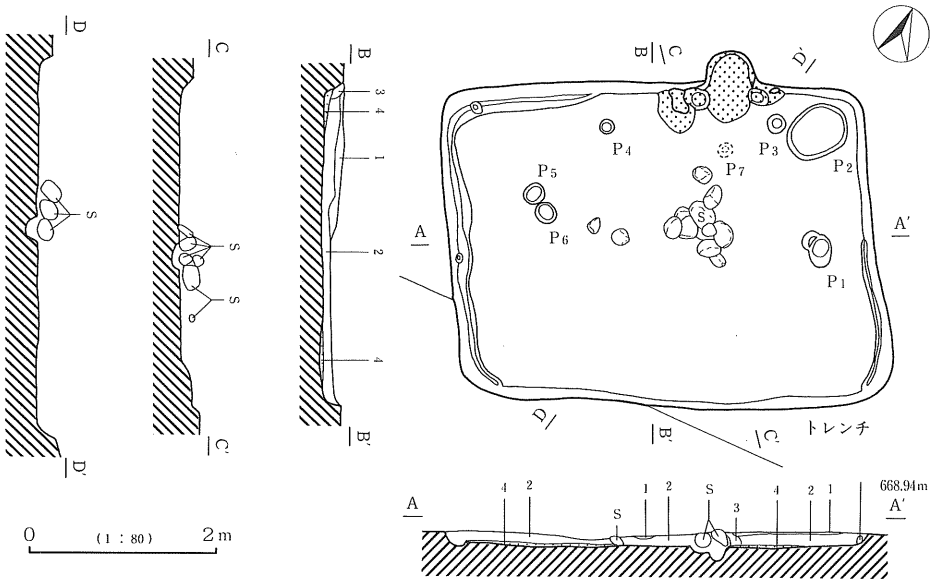
検出部分より推定した形態はほぼ方形を呈すると考えられ、規模は検出部分で東壁2.25m・西壁3.9mで、壁の高さは東壁中央で３cmを測る。主軸方位はN－20°－Wを示す。住居の床面積は11.5m²（検出部分）・推定床面積18.1m²を測る。床は全体的によく踏み締まっており、北壁セクションより、貼床が13cmほど施されているのが確認された。ピットは床面で３ヶ所、掘り方検出時に４ヶ所が確認された。規模はP1が径45cm・深さ25cm、P2が径40cm・深さ38cm（推定)、P3が径48cm・深さ21cmを測る。掘り方検出時のピットは住居址の北西コーナーに密集した状態で確認され、規模は何れも径25～30cm・深さ８～11cmを測る。壁溝は西壁部分で一部確認された。幅23cm・床面よりの深さ４cmを測る。

北壁中央寄りに焼土と袖構築土のようなしまりの非常にある黒褐色土が検出された。しかし、大部分が調査区外となり全容の把握は難しくカマドと認定するにはいたらなかった。もし、カマドとすると北壁には接しず住居内に置かれた形態を示し、今回の調査された竪穴住居址の中では特異な事例となる。また、住居址中央には炉址と考えられる焼土が検出された。規模は径30cm・深さ２cm内外を測り、非常に薄い焼土堆積であったが、よく焼けており硬質化していた。

本址の出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・坏片などがあるが少量である。１は土師器坏で覆土中より出土した。口縁部から体部のみの破片で、調整は底部へラケズリ・内面ナデを施す。２は土師器鉢で住居址中央のやや東寄りの床面上から出土した。口縁部の一部を欠損する。３は土師器高坏の脚部で、住居址北西コーナー寄り４の小形甕と並ぶ様に出土した。調整は外面にやや粗へラミガキを施し、土器表面は赤褐色となっている。４は土師器小形甕で前述した３と共に出土した。残存状況は胴部下半を1／2程欠損する。調整は外面が胴部へラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面へラナデを施す。また胴部外面には煤やタール状の炭化物が付着していた。４は土師器壺で、住居址北壁寄りの覆土上層より出土した。口縁部と胴部の1／2を欠損する。調整は外面にはハケメの後ナデ、胴部下半へラケズリを、内面には胴部下半にハケメによるナデを施す。胴部上半には輪積み痕と指頭圧痕が明瞭に残る。

(17) H18号住居址　(第44・45・46図，写真図版十六)

本址はキ・ク－７Grに位置する。H29号住居址・H31号住居址と重複関係にあり、新旧関係は本址が一番新しい。残存状況は住居址南側が試掘トレンチによって削平されている他は良好である。



1 黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子を含む。砂質。

2 黒褐色土（10YR2/2）焼土粒子・炭化物を少量含む。粒子細かい。

3 黒褐色土（10YR2/2）ロームブロックを含む。堅くしまっている。

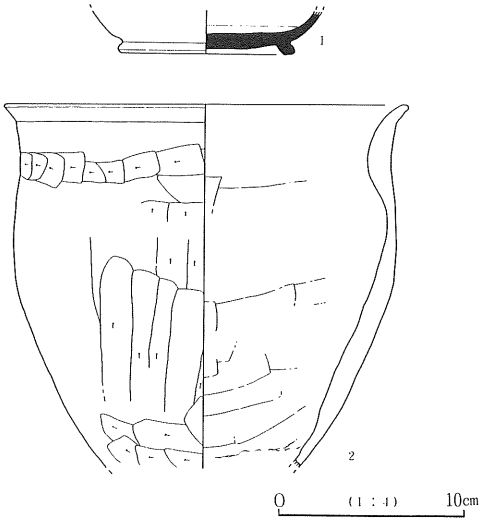
4 黒褐色土（10YR2/3）ローム粒子・炭化物・焼土を含む。

第44図　H18号住居址実測図

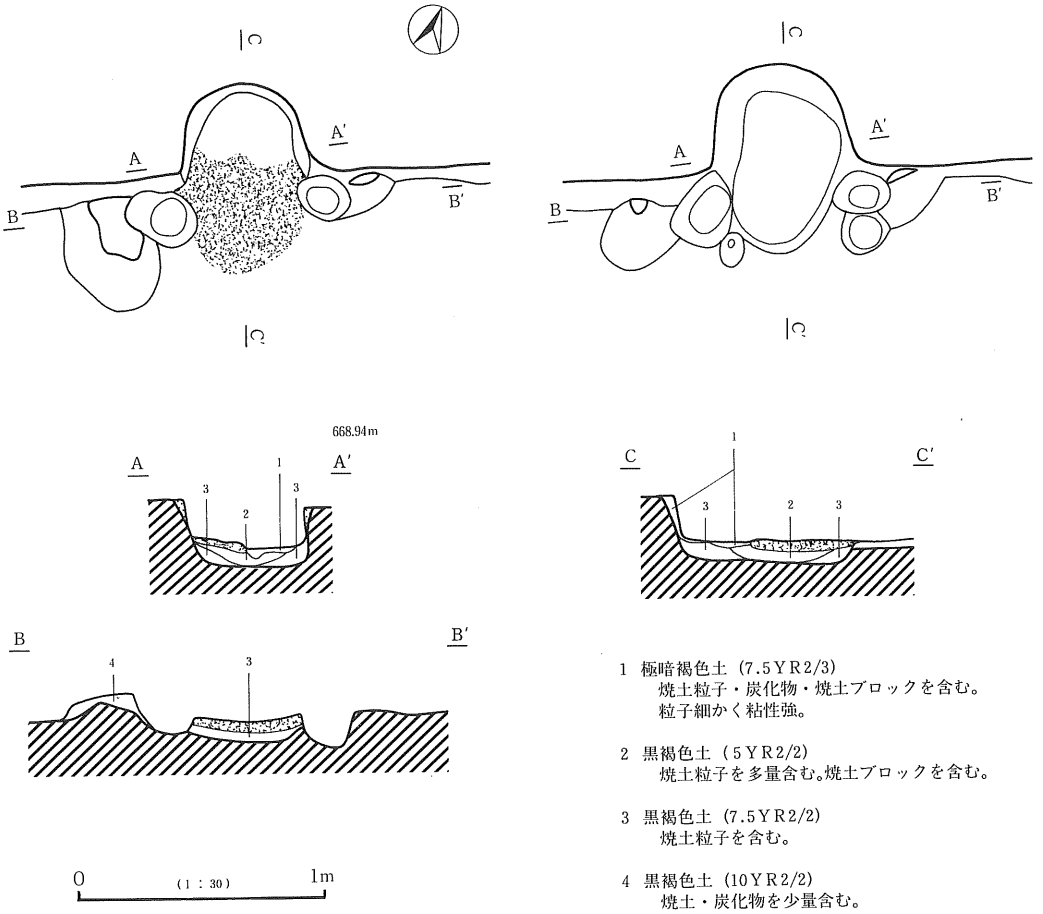
形態はほぼ方形を呈すると考えられ、規模は北壁4.3m・東壁3.1m・南壁4.3m・西壁3.9mで、壁の高さは南西コーナーで23cmを測る。主軸方位はN－24°－Wを示す。住居の床面積は12.1m²を測る。床は全体的によく踏み締まっており、貼床が3cmほど施されているのが確認された。ピットは床面で6ヶ所確認された。規模はP1が径35cm・深さ24cm、P2が径68cm・深さ12cm、P3～P6が径20～25cm・深さ19cm内外を測る。壁溝は西壁・北壁西寄りの一部と東壁南寄りの一部で確認された。規模は幅55cm・床面寄りの深さ4cmを測る。住居址の掘り方はほぼ平坦であった。

カマドは北壁東寄りに検出された。主軸方位はN－21°－Wを示す。残存状況は良好で、形態は煙道部が住居址壁ラインより外に飛び出すタイプでり、煙道部壁は急激に立ち上がる。火床面は貼床とほぼ同レベルである。規模は煙道部から焚口部の長さが75cm・幅48cmで、袖は右袖が長さ15cm、左袖が長さ45cm・床面よりの高さ12cmを測る。

カマド掘り方の形態は両袖を掘り残すタイプで、



第45図　H18号住居址出土遺物実測図



第46図　H18号住居址カマド実測図

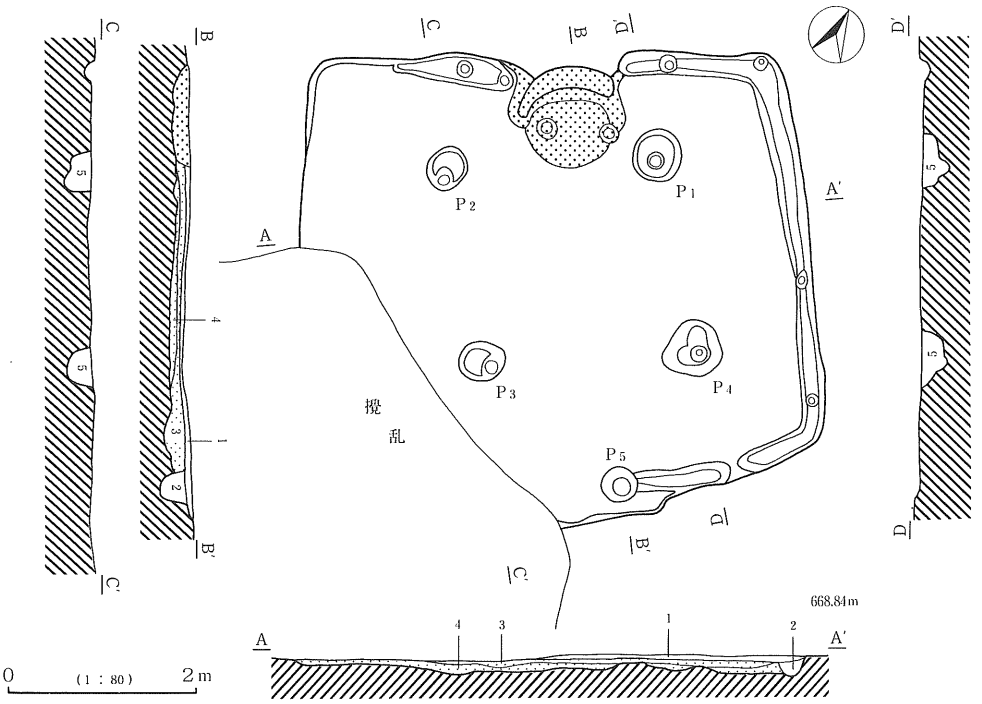
規模は煙道部から火床面掘り込みの長さ76cm・床面からの深さが4cmで壁側が25cmを測る。袖は地山が高さ7～10cm程掘り残されている。また袖と火床面の間に4ヶ所のピットが検出された。規模は径14～26cm・深さ7～9cmを測る。何れも袖構築材として使用された石等の掘り込み穴と考えられる。

本址の出土遺物は図示したものの他には、土師器甕片・須恵器甕片などがあるが少量である。1は須恵器高台坏で、覆土中より出土した。高台及び体部のみで、口縁部は欠損する。調整は底部が回転ヘラケズリでその後高台貼付している。体部内外面にはロクロヨコナデを施す。2は土師器甕でカマド内とP2内より出土した破片が接合関係にある。底部を欠損し口縁部と胴部は2／3が残存する。調整は胴部中位外面に縦方向の大きな単位のヘラケズリ、胴部上半と下半に横方向の細かい単位のヘラケズリを、内面にはナデを施す。

(17) H19号住居址　(第47・48・49図，写真図版十七)

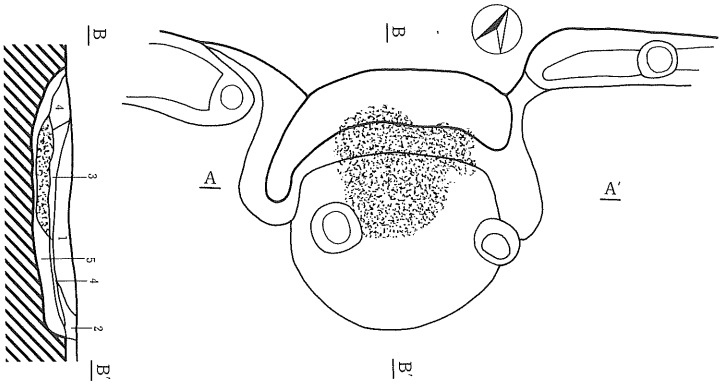
本址はエ－６・７Grに位置する。残存状況は住居址南西側が攪乱によって削平されている。

形態はややゆがんだ方形を呈すると考えられ、規模は北壁4.79m・東壁4.1m・南壁2.9m（検出部分）・西壁1.94m（検出部分）で、壁の高さは南西コーナーで７cmを測る。主軸方位はN－30°－Wを示す。住居址の床面積は16.8m²、推定で21.4cmを測る。床は全体的によく踏み締まっており、貼床が14cmほど施されているのが確認された。ピットは床面で５ヶ所確認された。P1～P4は主柱穴で、規模はP1が径55cm・深さ28cm、P2が径45cm・深さ27cm、P3が径45cm・深さ41cm、P4が径59cm・深さ28cmを測る。P５は入り口施設の機能を持つと考えられ、径35cm・深さ22cmを測る。壁溝は北壁の一部・東壁と南壁の東寄りの一部で確認された。規模は東壁中央で幅28cm・床面よりの深さ13cmを測る。また、壁溝内より壁柱穴と考えられるピットが５ヶ所確認された。規模は径18cm・深さ10cmを測る。住居址の掘り方はほぼ平坦であったが、カマド前面のみ長軸2.5m・短軸１m・高さ４cm程の掘り残された地山のテラスが検出された。



1　黒褐色土（10YR2/3）炭化物を微量含む。
2　黒褐色土（10YR3/2）ローム粒子・ロームブロックを少量含む。
3　黒褐色土（10YR2/3）焼土粒子・炭化物を少量含む。
4　黒褐色土（10YR3/2）炭化物を少量、ローム粒子を多量含む。
5　黒褐色土（10YR2/2）炭化物を少量、ローム粒子・ロームブロックを含む。

第47図　H19号住居址実測図



1 黒 色 土（10YR2/1）
　焼土粒子・炭化物を多量含む。

2 黒褐色土（10YR3/1）
　焼土粒子・炭化物・灰を少量含む。

3 暗褐色土（5YR3/3）
　焼土粒子・焼土ブロックを多量、
　炭を少量含む。

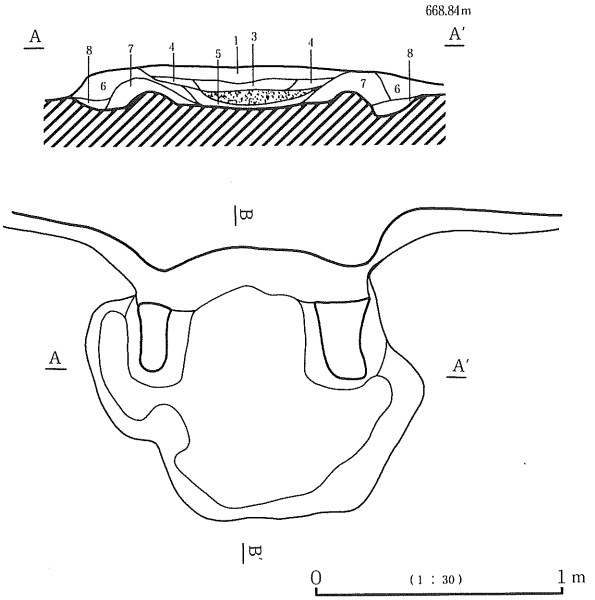
4 黒褐色土（5YR3/1）
　焼土粒子・焼土ブロックを少量、
　炭を微量含む。

5 黒褐色土（5YR2/2）
　ローム粒子・炭化物を微量含む。

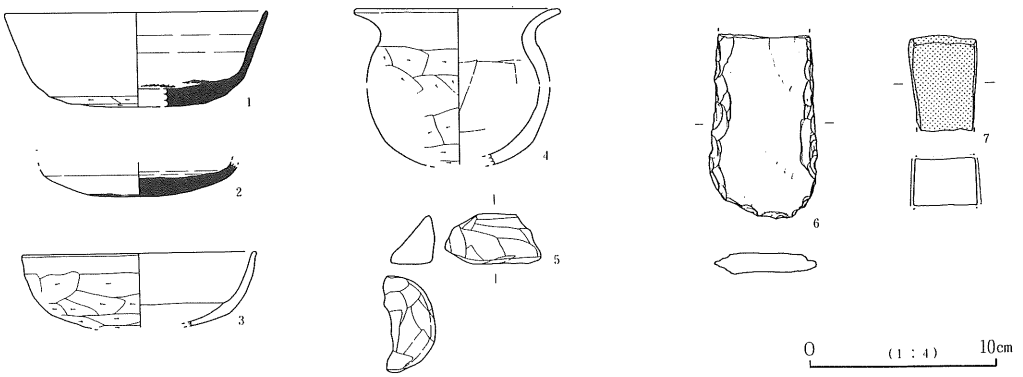
6 黒褐色土（5YR3/1）
　焼土粒子・炭化物を多量含む。

7 灰褐色土（5YR4/2）
　ローム粒子・炭化物を少量含む。

8 黒褐色土（5YR2/1）
　黒色土・ローム土を多量に含む。



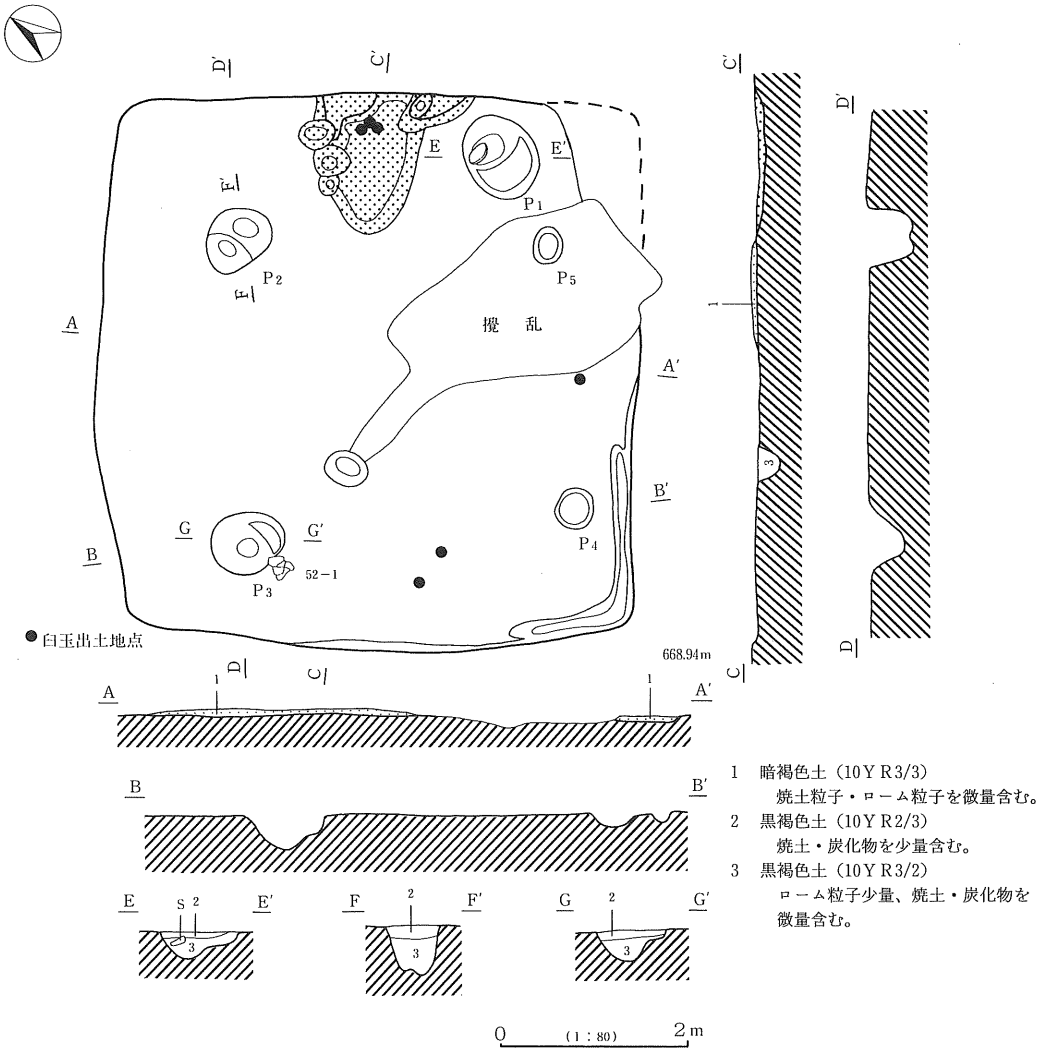
第48図　H19住居址カマド実測図



第49図　H19号住居址遺物実測図

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN－30°－Wを示す。残存状況は良好で、形態は煙道部が住居址壁ラインより内側に入るタイプで、煙道部壁は緩やかに立ち上がる。火床面は貼床より低くなっている。規模は煙道部から焚口部の長さが2.1m・幅1.57mで、袖は右袖が長さ58cm、左袖が長さ53cm・床面よりの高さ2cmを測る。掘り方は両袖を掘り残すタイプで、規模は東西の長軸が2.3m・深さが8cm、袖の掘り残し部分は右袖が長さ35cm・深さ3cm、左袖が長さ32cm・深さ6cmを測る。

本址よりの出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・須恵器甕片などがある。1・2は須恵器坏であり、どちらも覆土中より出土した。3は土師器坏であり北東コーナー付近の貼床内より出土した。4は土師器小型甕で覆土中より、5は土製品と考えられるが用途は不明である。



1　暗褐色土（10YR3/3）
　焼土粒子・ローム粒子を微量含む。
2　黒褐色土（10YR2/3）
　焼土・炭化物を少量含む。
3　黒褐色土（10YR3/2）
　ローム粒子少量、焼土・炭化物を微量含む。

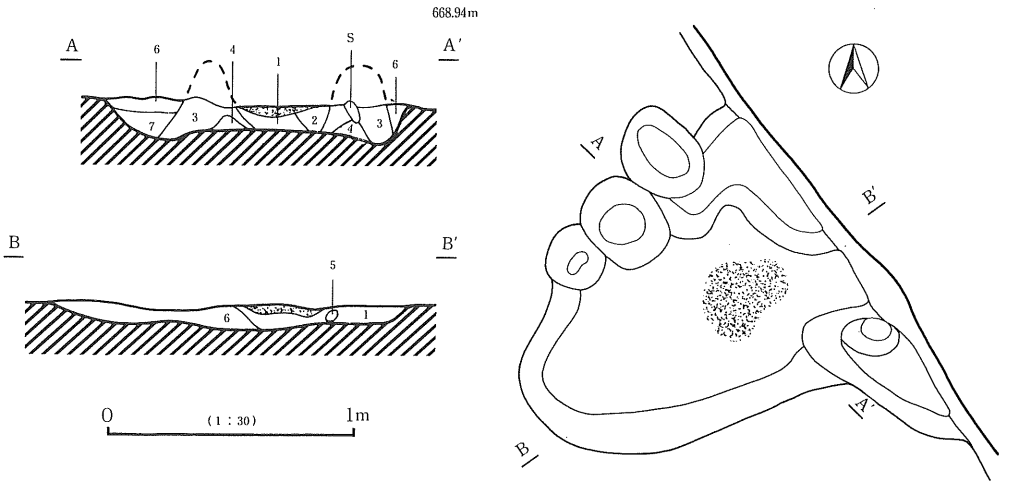
第50図　H20号住居址実測図

(18) H20号住所址　(第50・51・52図，写真図版十八)

本址はエ－４・５Grに位置する。H26号住居址と重複関係にあるが本址の方が新しい。残存状況は南東側が攪乱によって削平され北壁と西壁は床面の広がりによって住居址範囲を確定した。

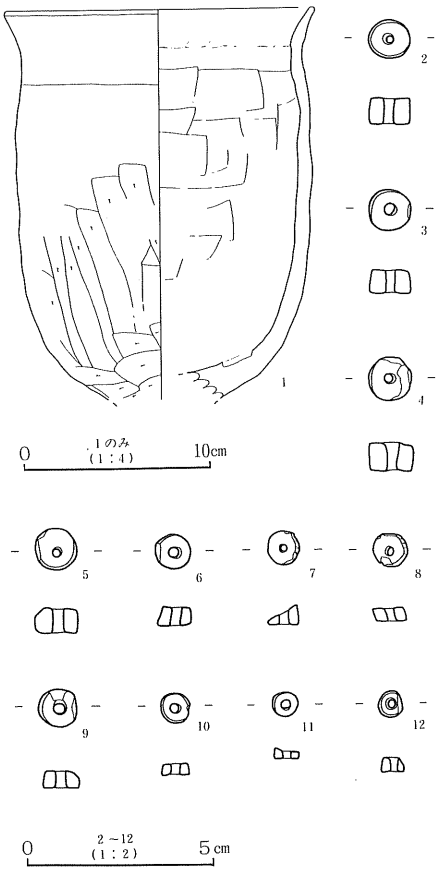
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁5.32m・東壁4.52m（残存部）・南壁3.08m（残存部）・西壁5.23mで、壁の高さは南壁中央西よりで５cmを測る。主軸方位はN－52°－Eを示す。住居の床面積は27.1m²を測る。床は全体的に硬質であった。貼床は14cmほど施されているのが確認された。ピットは６ヶ所確認された。P2・3・5・6が主柱穴と考えられるが、P5・6は規模がやや貧弱である。規模はP2が径74cm・深さ45cm、P3が径77cm・深さ39cm、P5が径43cm・深さ10cm、P6が径37cm・深さ14cmを測る。壁溝は南壁コーナーの一部で確認された。規模は幅17cm・床面よりの深さ８cmを測る。

カマドは東壁中央に検出された。主軸方位はN－53°－Eを示す。残存状況は不良で、形態は煙道部が住居址壁ラインより内側に入るタイプで、煙道部壁は緩やかに立ち上がる。火床面は貼床より高くなっている。規模は煙道部から焚口部の長さが1.43m・幅38cmで、袖は両袖とも掘り方底面より暗褐色土によって積み上げ構築したことが観察された。カマド掘り方は深さ６cmで、左袖下にピットが３ヶ所確認された。規模は径50～77cm・深さ９～10cmを測る。また、両袖と住居址壁の接点には高さ３～４cmの地山テラスが掘り残してあった。



1	黒褐色土	(5YR2/1)	炭化物・焼土ブロックを少量含む。
2	にぶい赤褐色土	(5YR4/3)	炭化物微量混入。
3	暗褐色土	(10YR3/3)	ロームブロック・焼土粒子・炭化物が少量混入。
4	暗褐色土	(10YR3/4)	ローム土。
5	にぶい赤褐色土	(10YR5/4)	ローム粒子多量に混入。
6	黒褐色土	(10YR2/3)	焼土粒子・ローム粒子が少量混入。
7	黒褐色土	(10YR2/2)	ローム粒子少量混。
8	黒褐色土	(10YR3/2)	炭化物微量含み、ローム粒子微量混入。

第51図　H20号住居址カマド実測図



第52図　H20号住居址出土遺物実測図

本址よりの出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・坏片などがあるが少量である。1は土師器甕で、P3脇の床面上から出土した。1／4ほど残存しており、調整は胴部外面がヘラケズリ、内面と口縁部はナデが施されている。また口縁部内面には輪積み痕が残る。2～12は滑石製臼玉で2～6はカマド覆土内より出土した。

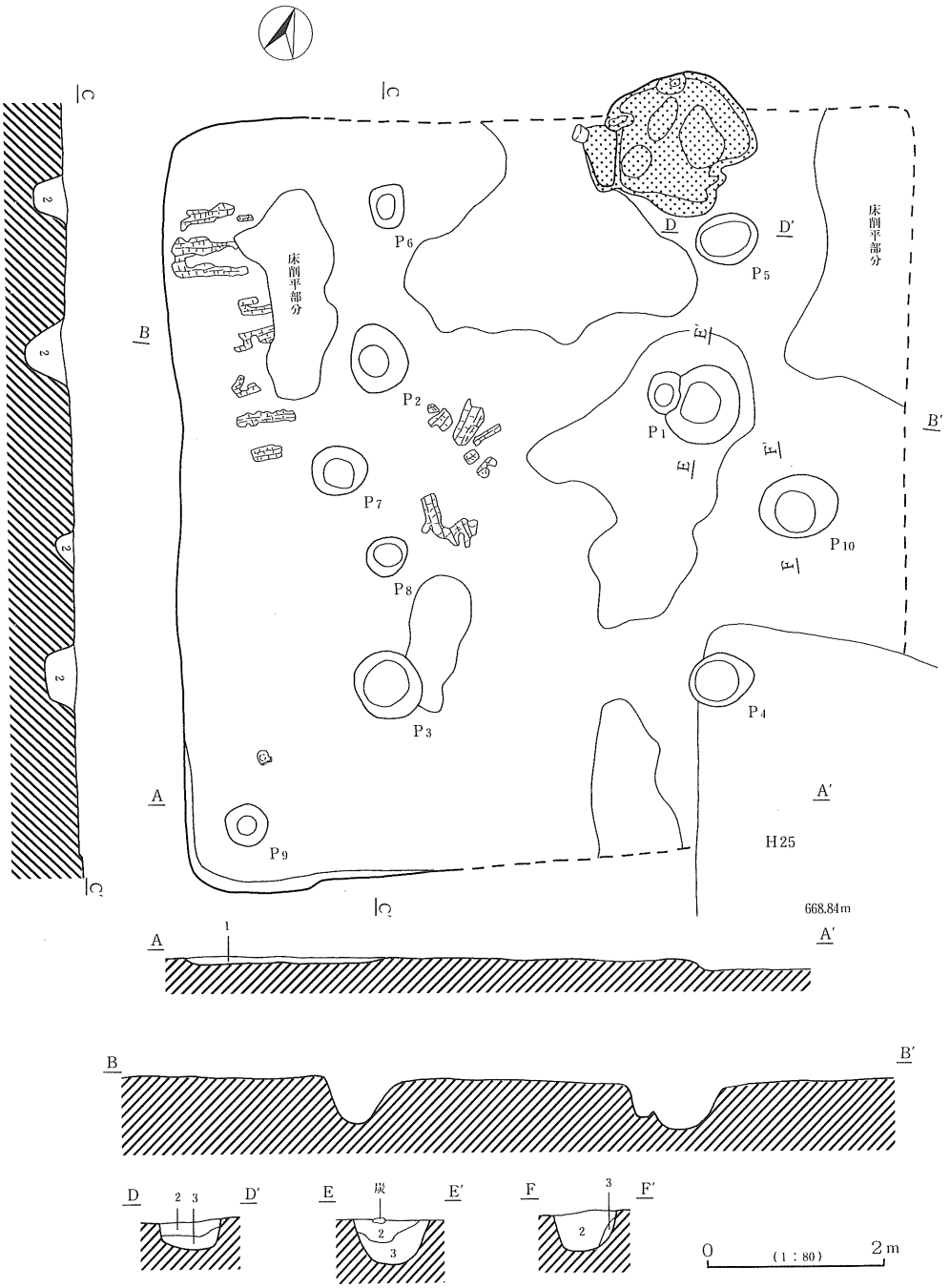
(19) H21号住所址（第53～55図，写真図版十八・十九）

本址はウ－2・3、エ－2・3Grに位置する。H25・28号住居址と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりH28号住居址→本址→H25号住居址である。残存状況は住居址東半分が攪乱によって削平されており、ピットの検出位置によって住居址範囲を推定した。

形態はほぼ方形と考えられ、規模は北壁1.48m・南壁2.95m（残存部）・西壁8.18mで、壁の高さは南壁コーナーで6cmを測る。主軸方位はN－25.5°－Wを示す。住居床面積は46.5m²（推定）を測る。床は全体的にやや軟弱であった。ピットは9ヶ所確認された。P1～P4が主柱穴と考えられ、規模はP1が径85cm・深さ24cm、P2が径76cm・深さ44cm、P3が径75cm・深さ25cm、P4が径60cm・深さ33cmを測る。P5～8・10は不規則な配置であるが柱補助穴と考えられる。壁溝は確認されなかった。

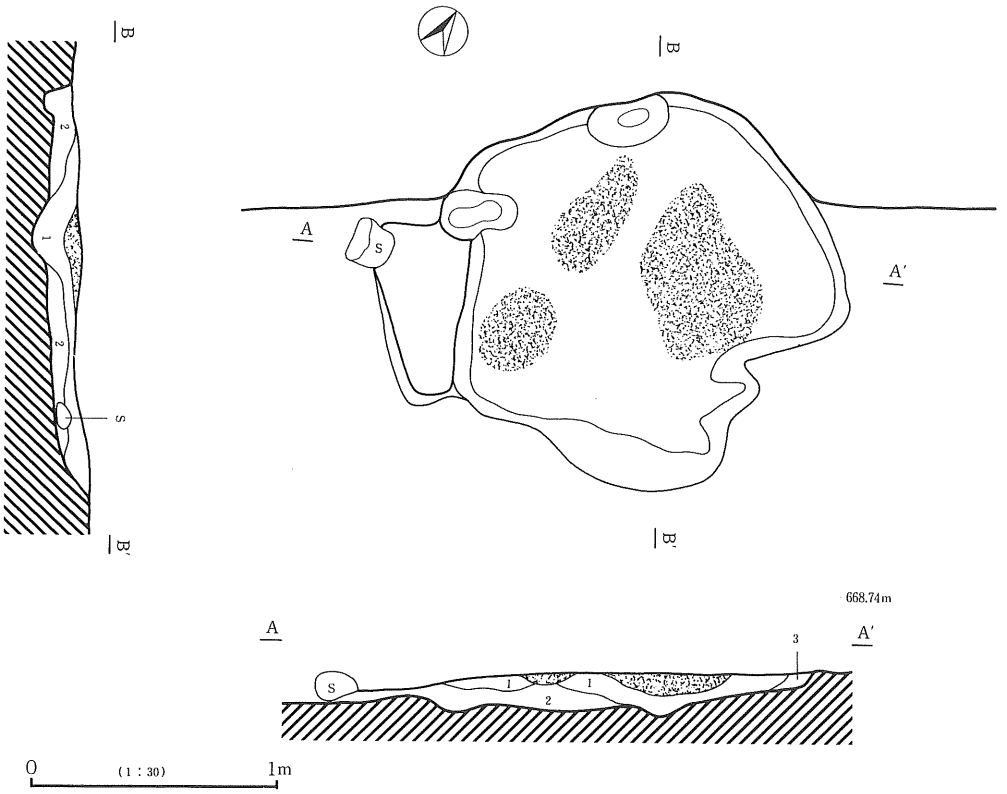
カマドは北壁ほぼ中央に検出された。主軸方位はN－34.5°－Eを示す。残存状況は上面が削平されていた為不良で、袖の検出はできなかった。カマド掘り方からの推定で、形態は煙道部が住居址壁ラインより外側に出るタイプで、煙道部壁はやや急激に立ち上がる。火床面は掘り方底面よりも高くなっている。規模は煙道部から焚口部長さが1.58m・幅1.52m・深さ8cmである。左袖は、長さ71cm・幅36cmの地山がテラス状に掘り残されていた。

本址の出土遺物は図示した他に土師器甕片・坏片がある。1と2は土師器坏で、1が体部と口辺部のみ残存する。調整は胴部外面にヘラケズリ、口辺部内外面に丁寧なミガキが施されている。2は口縁部から体部のみの残存で、調整は体部内外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデが施される。3・4は土師器甕の底部である。調整はともに外面ヘラケズリで、4のみ底部外周に粗いミガキが施される。また、本址は平面図に示したように家屋材と考えられる炭化材が検出されている。



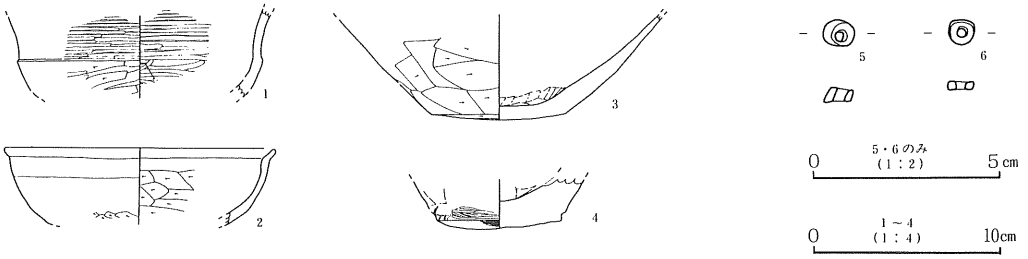
1　黒褐色土（10YR3/1）　炭化物・炭化粒子を含み、粘性強。
2　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子、炭化物少量含み、小石混入。
3　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒子がブロック状に混入。

第53図　H21号住居址実測図



1　黒褐色土（10YR2/1）　炭化物・炭化粒子を多量に含み、焼土粒子が少量混入。
2　黒褐色土（7.5YR3/2）　ローム粒子を多く含む。
3　褐色土　（7.5YR4/3）　ロームブロックを多量に含み、炭化物が少量混入。

第54図　H21号住居址カマド実測図



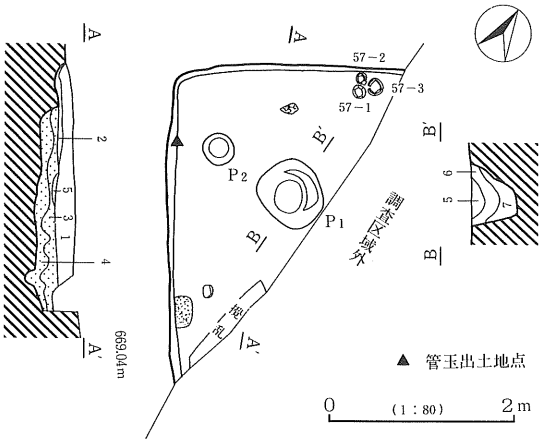
第55図　H21号住居址出土遺物実測図

(20) H22号住所址　（第56・57図，写真図版二十）

本址はオ－１Grに位置する。残存状況は住居址東側が調査区外となる為、住居址北西コーナー部分のみの検出となった。

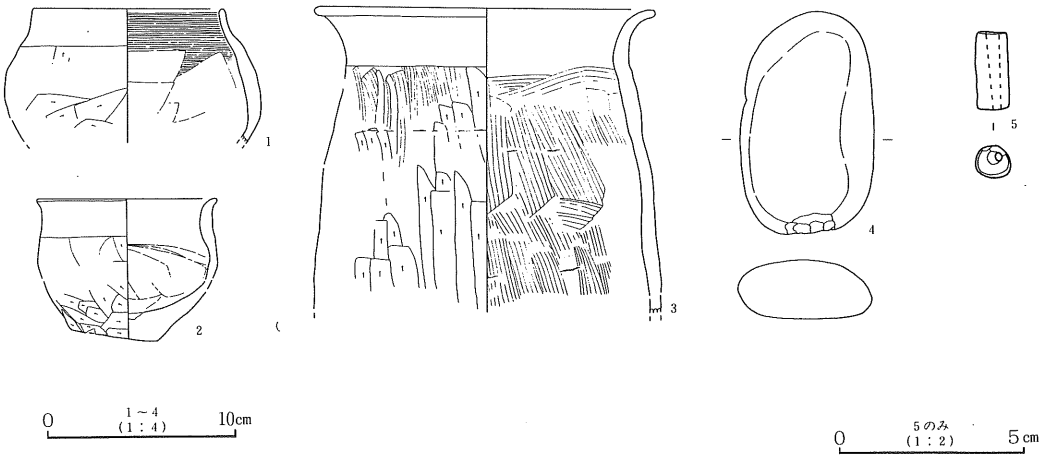
検出部分から推定される形態はほぼ方形と考えられ、規模は北壁2.38m（検出部）・西壁3.24m（検出部）で壁の高さは西壁で12cmを測る。主軸方位はN－34°－Wを示す。住居床面積は4.2m²（検出部）を測る。床は全体的にほぼ硬質であった。ピットは床面で２ヶ所、掘り方検出時に２ヶ所確認された。P1は主柱穴の一部と考えられ、規模は径72cm・深さ51cmを測る。P2は径34cm・深さ９cmを測る。住居址の掘り方は西壁わきと北壁側が一段深く掘り込まれ、P1周辺が高さ６cmほどのテラス状に高くなる形態を示す。壁溝・カマドは確認されなかったが、西壁脇に焼土の塊りが検出された。

本址の出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・坏片がある。１～３は何れも北壁



1　黒褐色土（10YR2/3）
　炭化物・焼土を含む。ローム粒子を少量含む。
2　黒褐色土（10YR3/2）
　炭化物を少量、ローム粒子を多量含む。やや砂質。
3　黒褐色土（10YR2/3）
　炭化物・ローム粒子を少量含む。
4　暗褐色土（10YR3/3）
　ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
5　黒褐色土（10YR2/2）
　炭化物を少量含む。
6　黒褐色土（10YR3/1）
　ロームブロックを少量含む。
7　黒褐色土（10YR3/2）
　ローム粒子・ロームブロックを多量含む。

第56図　H22号住居址実測図



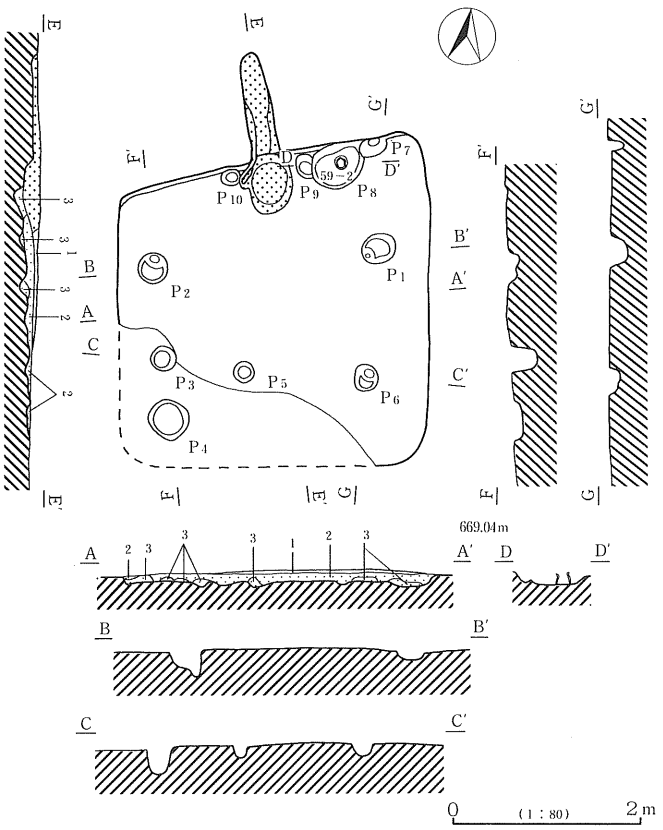
第57図　H22号住居址出土遺物実測図

西寄りからかたまって逆位で検出された。1は土師器碗であり、口縁部から体部のみ残存する。調整は体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ、口縁部内外面に強いヨコナデを施す。2は土師器小型甕で胴部の一部を欠損する他は、ほぼ完形である。調整は胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデを施す。3は土師器甕で口縁部から胴部上半まで残存する。形態は長胴甕であるがやや胴部中位が張る傾向にある。調整は胴部外面がハケメの後ヘラケズリ、内面がハケメ、口縁部がヨコナデである。5は碧玉製管玉で西壁際貼床内より出土した。完形で片面よりの穿孔である。4は磨石である。

(21) H23号住所址　(第58・59・60図，写真図版二一)

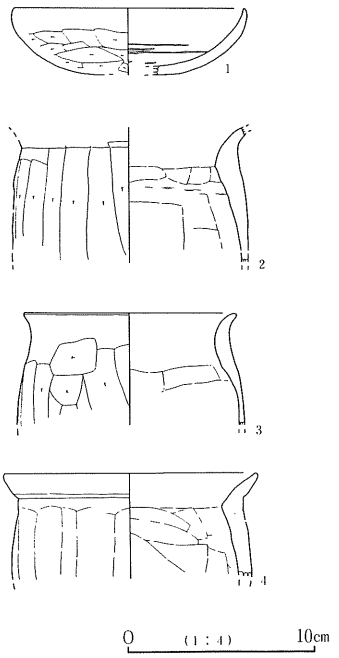
本址はケ－6・7Grに位置する。H29号住居址・H31号住居址と重複関係にあるがいずれよりも本址の方が新しい。残存状況は南側が削平され、北壁のみ遺構立ち上がりが検出された。西壁・東壁・南壁は床面の広がりと掘り方によって住居址範囲を確定した。

形態は歪んだ方形を呈する。規模は北壁3.1m・東壁3.35m・南壁38cm(残存部)・西壁1.32mで、壁の高さは北壁カマド脇で5cmを測る。主軸方位はN－13°－Eを示す。

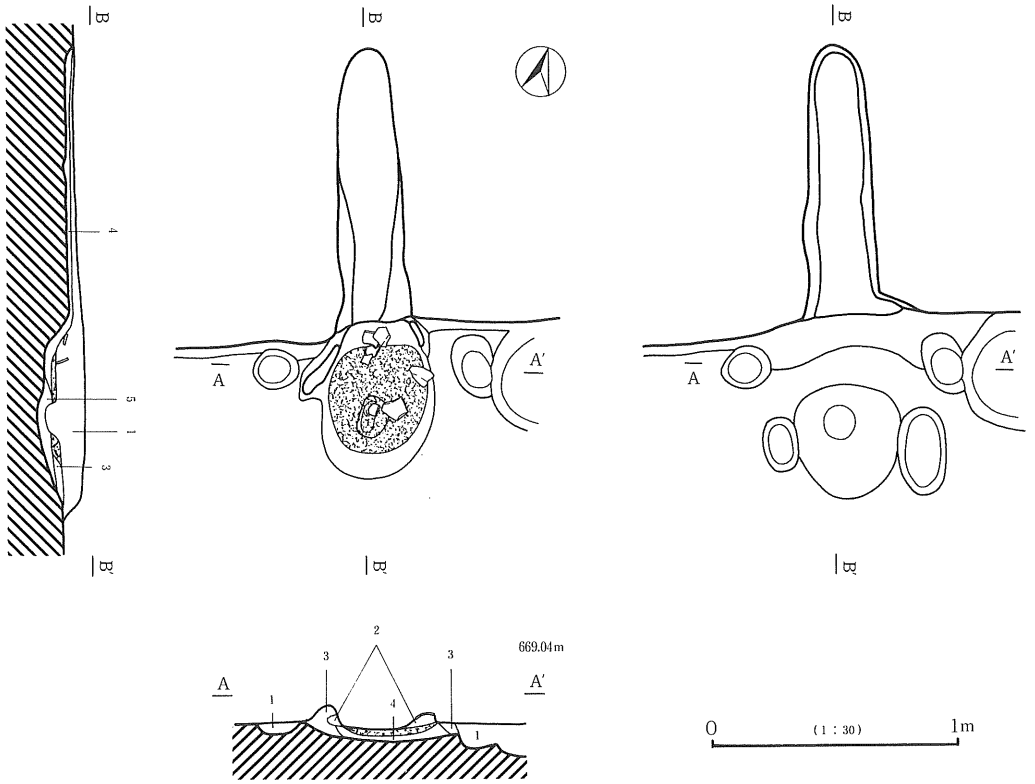


1　黒褐色土（10YR2/3）　炭化物・ローム粒子を少量含む。粒子細かい。
2　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・ロームブロックを含む。
3　暗褐色土（10YR3/4）　ローム主体。黒色土（粘性強）を含む。

第58図　H23号住居址実測図



第59図　H23号住居址出土遺物実測図



1　黒褐色土　(10YR2/3)
　焼土・炭・ローム粒子を含む。
2　極暗褐色土（5YR2/3)
　焼土ブロックを多量含む。
3　褐色土　(10YR4/4)
　粒子細かい。粘性強。
4　暗褐色度（7.5YR3/3)
　焼土ブロックを多量・炭化物を少量含む。ロームを含む。
5　黒褐色土（5YR2/2)
　焼土少量・骨片少量・ローム粒子を含む。

第60図　H23号住居址カマド実測図

住居床面積は9.6m²を測る。床は全体的に硬質で、貼床は9cmほど施されているのが確認された。ピットは10ヶ所確認された。P1･2･3･6が主柱穴と考えられる。規模はP1が径36cm・深さ26cm、P2が径32cm・深さ11cm、P3が径27cm・深さ25cm、P6が径28cm・深さ11cmを測る。壁溝は確認されなかった。住居址掘り方は北西コーナーと住居址中央部がテラス状に高く掘り残されており、規模は住居址中央部で東西長軸1.8m・南北短軸90cm・高さ5cmを測る。

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN－19°－Eを示す。残存状況は良好で、形態は煙道部が住居址壁ラインより大きく外側に出るタイプである。煙道部壁は緩やかに立ち上がり火床面は貼床とほぼ同じレベルである。規模は煙道部長軸が1.19m・幅52cm・確認面よりの深さ3

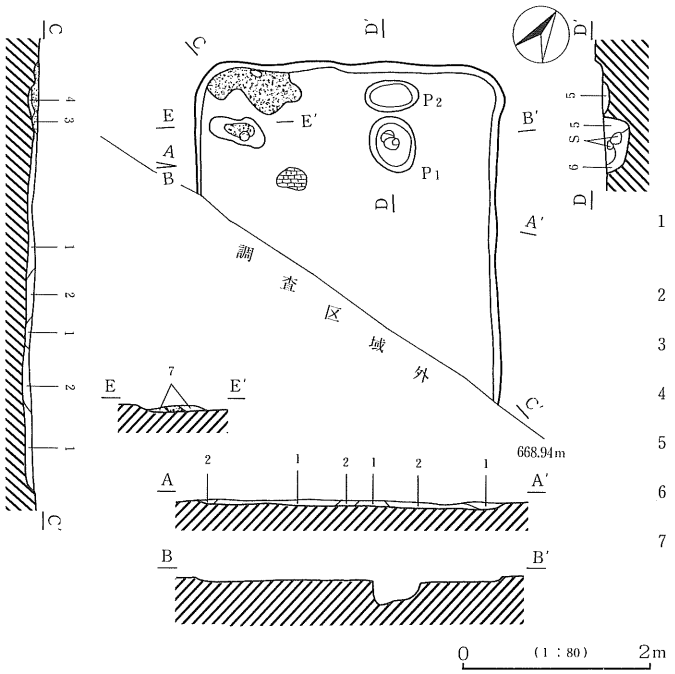
cm、火床面の長軸90cmを測る。検出された袖は両袖とも小型で、左袖長さ30cm・高さ７cmを測る。カマド掘り方は火床面が径91cm・深さ７cmを測り、火床面脇下から検出されたピットは４ヶ所あり、規模は径18～35cm・深さ２～９cmを測る。

本址よりの出土遺物は図示した物の他土師器甕片があるが少量である。１は土師器坏でP9内より出土した。底部の一部を欠損する。調整は体部外面に横方向のヘラケズリ、内面にヘラナデ、口縁部内外面にヨコナデを施す。２～４は土師器甕で、２はＰ８内より正位置で出土するが胴部下半から底部を欠損する。調整は胴部外面に縦方向のヘラケズリ、内面にヨコナデを施す。形態は頸部の器厚が厚く胴部にかけて非常に薄くなる。３はカマド内より出土し、調整は胴部外面に縦と横方向のヘラケズリ、内面に横方向のナデを施す。４はP8内より出土し、調整は２とよく似るが内面は縦方向のナデである。

(22) H24号住所址　(第61・62図，写真図版二二)

本址はコ－４Grに位置する。残存状況は住居址南半分が調査区外である為、ほぼ半分ほどの検出にとどまった。

形態はほぼ方形と考えられ、規模は北壁3.08m・東壁3.42m（検出部）・西壁1.28m（検出部）で、壁の高さは北東コーナーで４cmを測る。主軸方位はN－33°－Wを示す。住居床面積は6.9m²（検出部分）を測る。床は全体的にやや軟弱であった。ピットは２ヶ所で確認された。規



1　褐色土　(10YR4/4)
　ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
2　黒褐色土（10YR3/1)
　炭化物を微量含む。
3　褐灰色土（10YR4/1)
　炭化粒子・焼土粒子を微量含む。
4　黒色土　(10YR2/1)
　ローム粒子を微量含む。
5　にぶい黄褐色土（10YR4/3)
　ローム粒子を多量含む。
6　黒褐色土（10YR3/2)
　炭化物を少量含む。
7　黒褐色土（10YR2/2)
　焼土粒子を含む。粘性弱。

第61図　H24号住居址実測図

模は、P1が径60cm・深さ16cm、P2が径57cm・深さ５cmを測る。壁溝は確認されなかった。また、北西コーナーには流れ込みか投げ込みの様な焼土塊が検出されている。住居址の掘り方は確認されず地山Ⅵ層が床面となっていた。

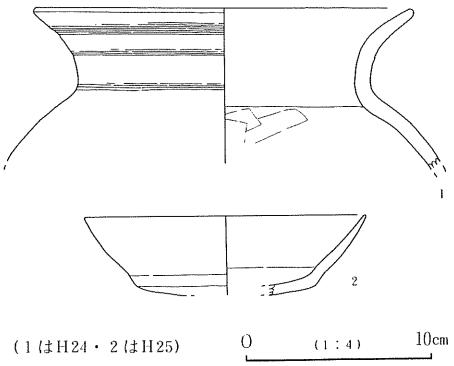
炉は西壁コーナー北寄りに検出された。形態は楕円形で中央部に石が検出された。東西の長軸の長さは60cmを測り、掘り込みは確認されなかった。

本址の出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・坏片があるが、非常に少量である。１は土師器甕の口縁部から頸部で、炉南側の炭化物脇より出土した。口縁部外面には強いヨコナデによる沈線状の線が２本残る。

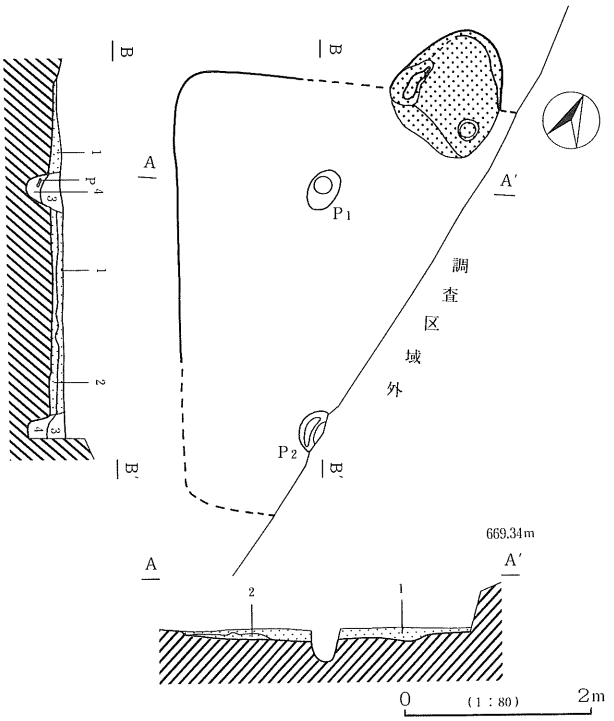
(23) H25号住所址　(第62・63・64図，写真図版二二・二三)

本址はウ・エ－１Grに位置する。H21号住居址と重複関係にあるが本址の方が新しい。残存状況は東側が調査区外の為であり、南西コーナーは確認面が低かった為削平されており残存状況は不良であった。

形態はほぼ方形を呈すると考えられる。規模は北壁1.15m（検出部）・西壁３m（検出部）を測る。主軸方位はN－26°－Wを示す。住居床面積は9.7m²・推定面積で23.6m²を測る。床は全体的にやや軟弱であった。貼床は12cmほど施されているのが確認された。ピットは２ヶ所確認された。P1･2は主柱穴と考えられ、規模はP1が径45cm・深さ36cm、P2が径43cm・深さ34cmを測る。壁溝は確認されな

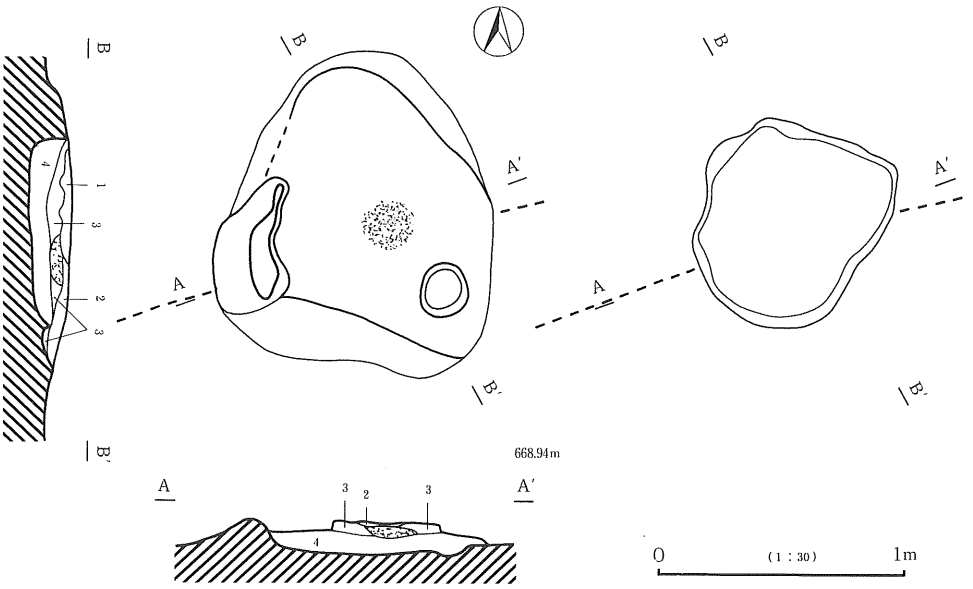


第62図　H24･H25号住居址出土遺物実測図



1　黒褐色土（10YR3/2）　ロームブロックを少量含む。
2　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
3　黒色土　（10YR2/1）　炭化物・ローム粒子を微量含む。
4　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子を少量含む。

第63図　H25号住居址実測図



1　極暗赤褐色土（5ＹＲ2/3）　炭化物・焼土粒子を多量含む。
2　極暗赤褐色土（5ＹＲ2/3）　炭化物を少量含む。
3　暗赤褐色土　（5ＹＲ3/3）　炭化物・焼土粒子を多量含む。
4　黒褐色土　　（5ＹＲ2/2）　炭化物・焼土微量、ローム粒子を含む。

第64図　H25号住居址カマド実測図

かった。掘り方は住居址中央部が一段低く掘り込まれた形態を示し、深さは5㎝を測る。

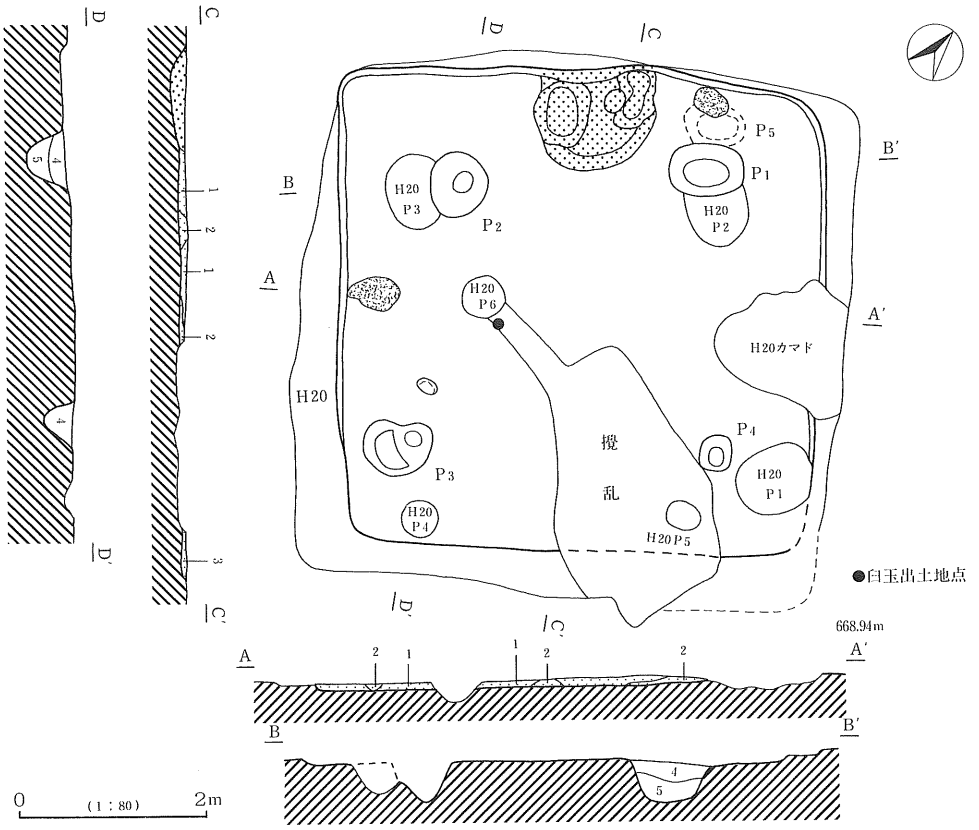
カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN－20°－Wを示す。残存状況は不良で、火床面と左袖が検出されたにとどまった。形態は煙道部が住居址壁ラインより外側に出るタイプで、煙道部壁は急激に立ち上がる。火床面は貼床より高くなっている。規模は煙道部から焚口部の長さが1.3m・幅90㎝で、左袖は南北長54㎝・高さ6㎝を測る。カマド掘り方の規模は南北長1.67㎝・東西長1.78㎝・深さ6㎝を測る。

本址の出土遺物は図示したものの他に土師器甕片があるが少量である。1は土師器坏であり住居址掘り方より出土した。口縁部から体部のみ残存している。

(24) H26号住所址　（第65・66・67図，写真図版二四）

本址はエ－4・5Grに位置する。H20号住居址と重複関係にあるが本址の方が古い。残存状況は南壁が攪乱によって、東壁がH20号住居址によって削平されている他はほぼ良好である。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁4.89m・東壁4.66m・南壁4.68m・西壁4.8mで、壁の高さは西壁中央部で5㎝を測る。主軸方位はN－43°－Eを示す。住居床面積は23.1㎡を測る。



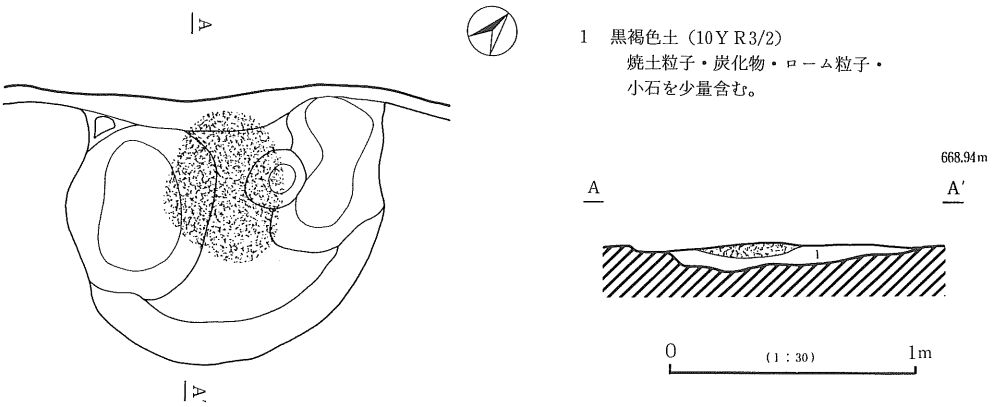
1　黒褐色土（10YR3/2）　焼土粒子・炭化物を多量含む。
2　褐色土　（10YR4/4）　ローム粒子多量含む。
3　暗褐色土（10YR3/3）　焼土粒子・ローム粒子を微量含む。
4　暗褐色土（10YR3/4）　ロームブロック・小石を少量含む。
5　黒褐色土（10YR2/3）　炭化粒子・小石を少量含む。

第65図　H26号住居址実測図

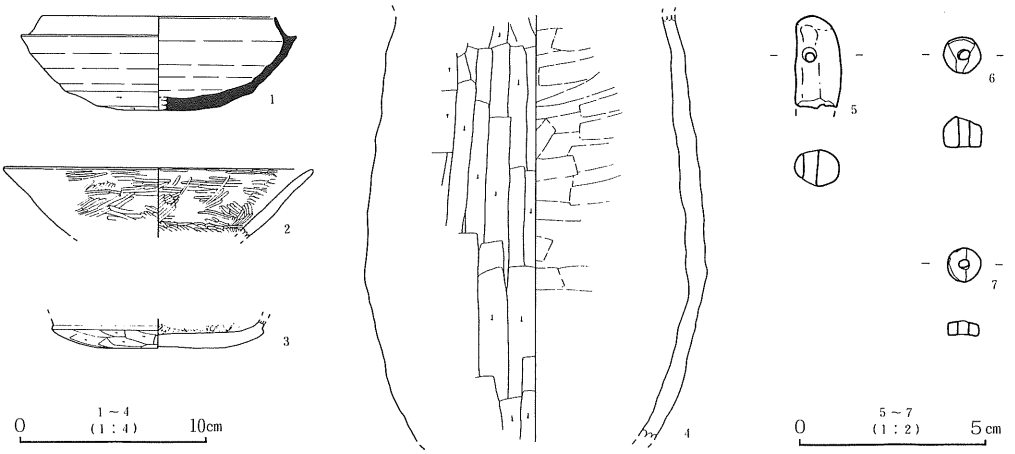
床は全体的に硬質であった。ピットは床面で４ヶ所、掘り方時に１ヶ所確認された。P1～P4は主柱穴で、規模はP1が径42cm・深さ42cm、P2が径67cm・深さ40cm、P3が径72cm・深さ29cm、P4が径35cm・深さ22cmを測る。壁溝は確認されなかったが、西壁中央部脇に焼土の広がりと人頭大の砂岩が散らばった状態で検出された。また、カマド東脇からも焼土が確認された。

カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN－49°－Wを示す。残存状況は良好で、形態は煙道部が住居址壁ラインより内側に入るタイプで、煙道部壁は急激に立ち上がる。火床面は貼床とほぼ同レベルである。規模は煙道部から焚口部長さが1.12m・幅50cmで、袖は右袖が長さ1.22m・床面よりの高さ５cm、左袖が1.35m・床面よりの高さ７cmを測る。

本址の出土遺物は図示したものの他土師器甕片・坏片がある。１は須恵器坏身で1／6のみ残存している。２は土師器坏で口縁部から体部のみの残存で北壁西寄りから出土した。調整は内外面



第66図　H26号住居址カマド実測図



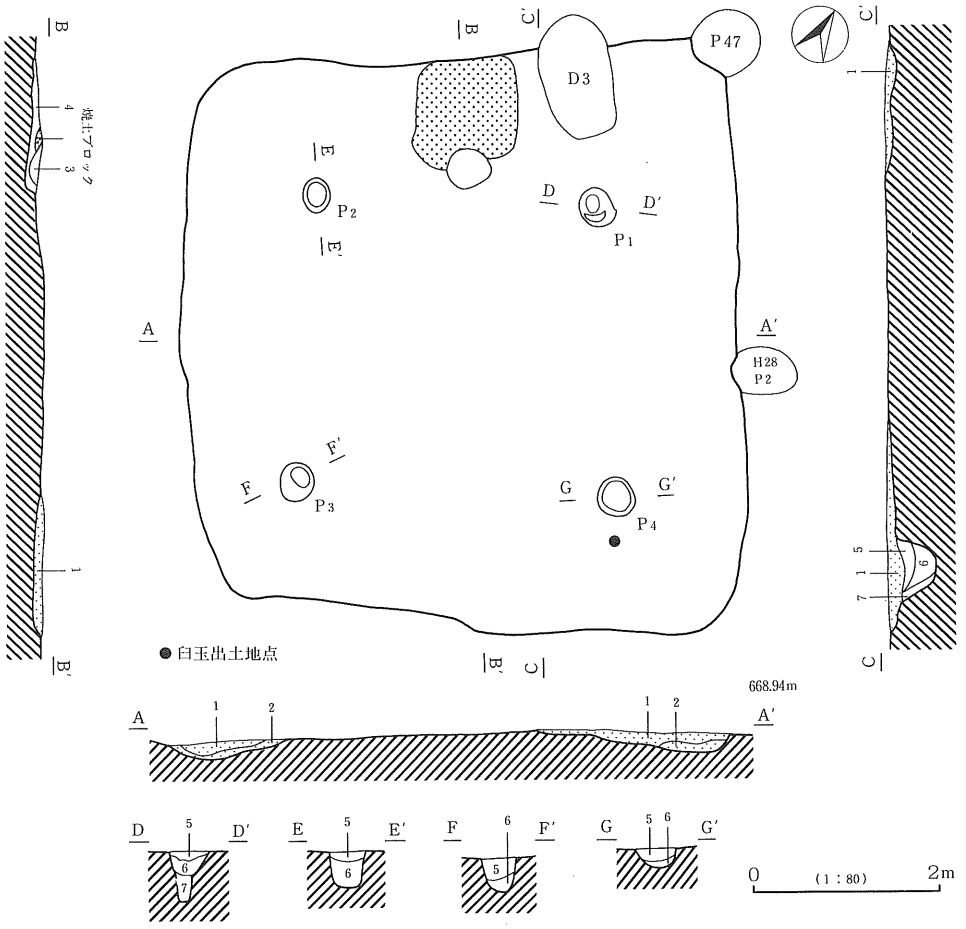
第67図　H26号住居址出土遺物実測図

とも丁寧なヘラミガキが施されている。3は土師器坏であり底部のみの残存である。調整は底部外面にヘラケズリ、見込み部に丁寧なヘラミガキが施されている。4は土師器甕で南壁中央より出土し胴部のみ残存する。調整は胴部外面に縦方向のヘラケズリ、内面にヘラナデが施されている。5は土製品でP1内より出土した。一部欠損している為全容は不明であるが中央部に穿孔があり勾玉のような形態を示す。6・7は滑石製臼玉であり内1点がカマド内より出土した。

(25) H27号住居址　(第68・69・70図，写真図版二四)

本址はオ・カ－4Grに位置する。H28号住居址・D3号土坑と重複関係にある。新旧関係は新しい方よりD3号土坑→本址→H28号住居址である。残存状況は確認面ですでにほとんどの床が削平されており掘り方によって範囲を確認した。

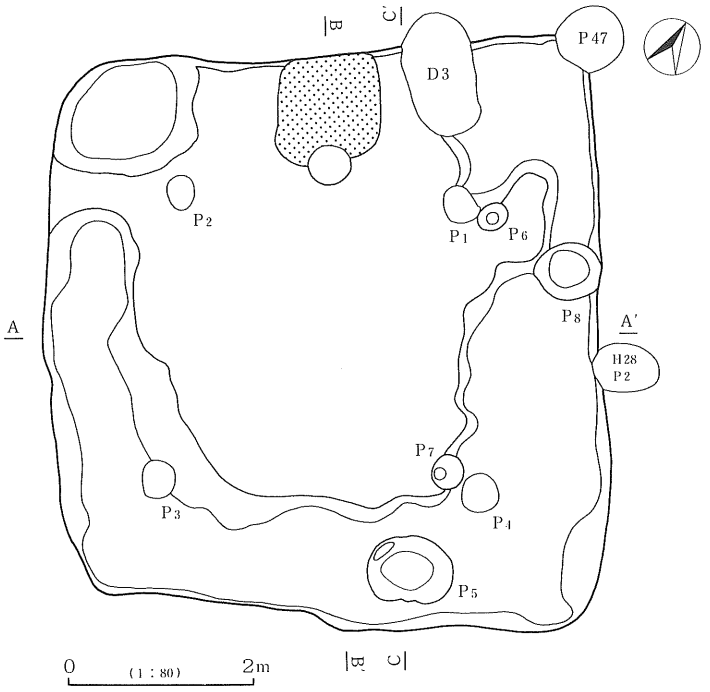
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁5.45m・東壁5.97m・南壁5.23m・西壁5.26mを測る。主軸方位はN－33°－Wを示す。住居床面積は32m²を測る。ピットは床面で5ヶ所確認された。



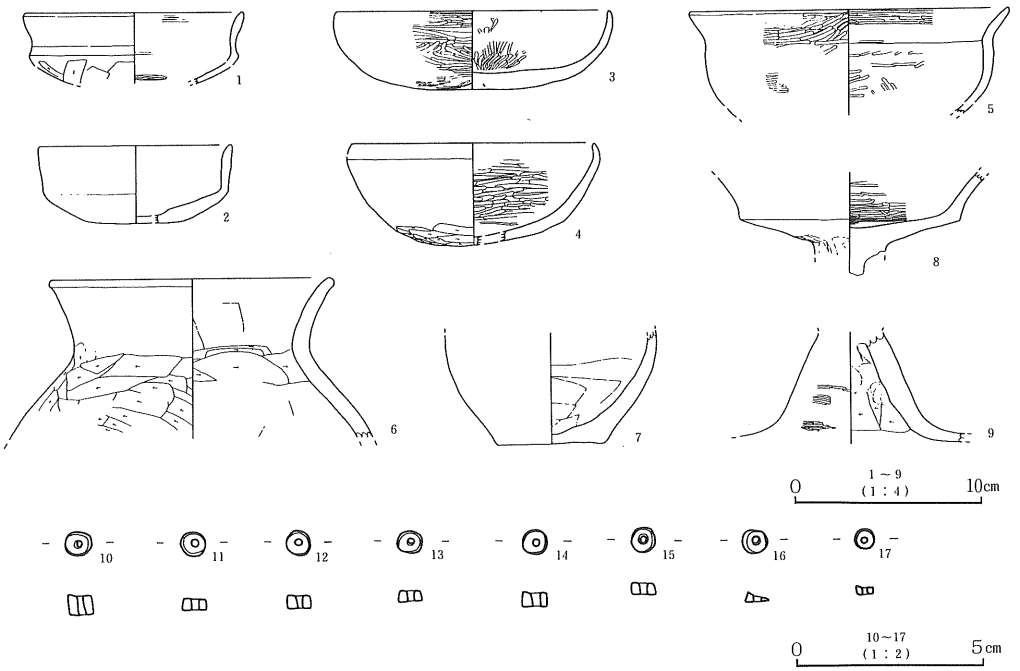
1　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物・ローム粒子を少量、小石を含む。
2　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒子・ロームブロックを多量、小石を少量含む。
3　黒褐色土（10YR3/2）　炭化物・焼土粒子を多量、ローム粒子を含む。
4　褐色土　（10YR4/4）　ローム粒子を多量含む。
5　黒褐色土（10YR3/1）　炭化物・ローム粒子を少量含む。
6　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物を微量含む。
7　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロックを多量含む。

第68図　H27号住居址実測図

P1～P4は主柱穴で、規模はP1が径40cm・深さ52cm、P2が径36cm・深さ37cm、P3が径38cm・深さ24cm、P4が径38cm・深さ18cmを測る。いずれのピットも柱痕は確認されなかった。P5は床下から確認され、規模は径90cm・深さ50cmを測る。住居址の掘り方は北西コーナー部と東壁・南壁・西壁南側部が壁に沿うように一段深く掘り込まれており、規模は北西コーナーが長軸1.43m・確認面までの高さ14cm、壁面に沿う「U」字型の掘り込みが最大幅1.44m・高さ15cmを測る。



第69図　H27号住居址掘り方実測図



第70図　H27号住居址出土遺物実測図

カマドは掘り方のみ検出され、規模は南北軸1.13m・東西軸1.1mを測る。

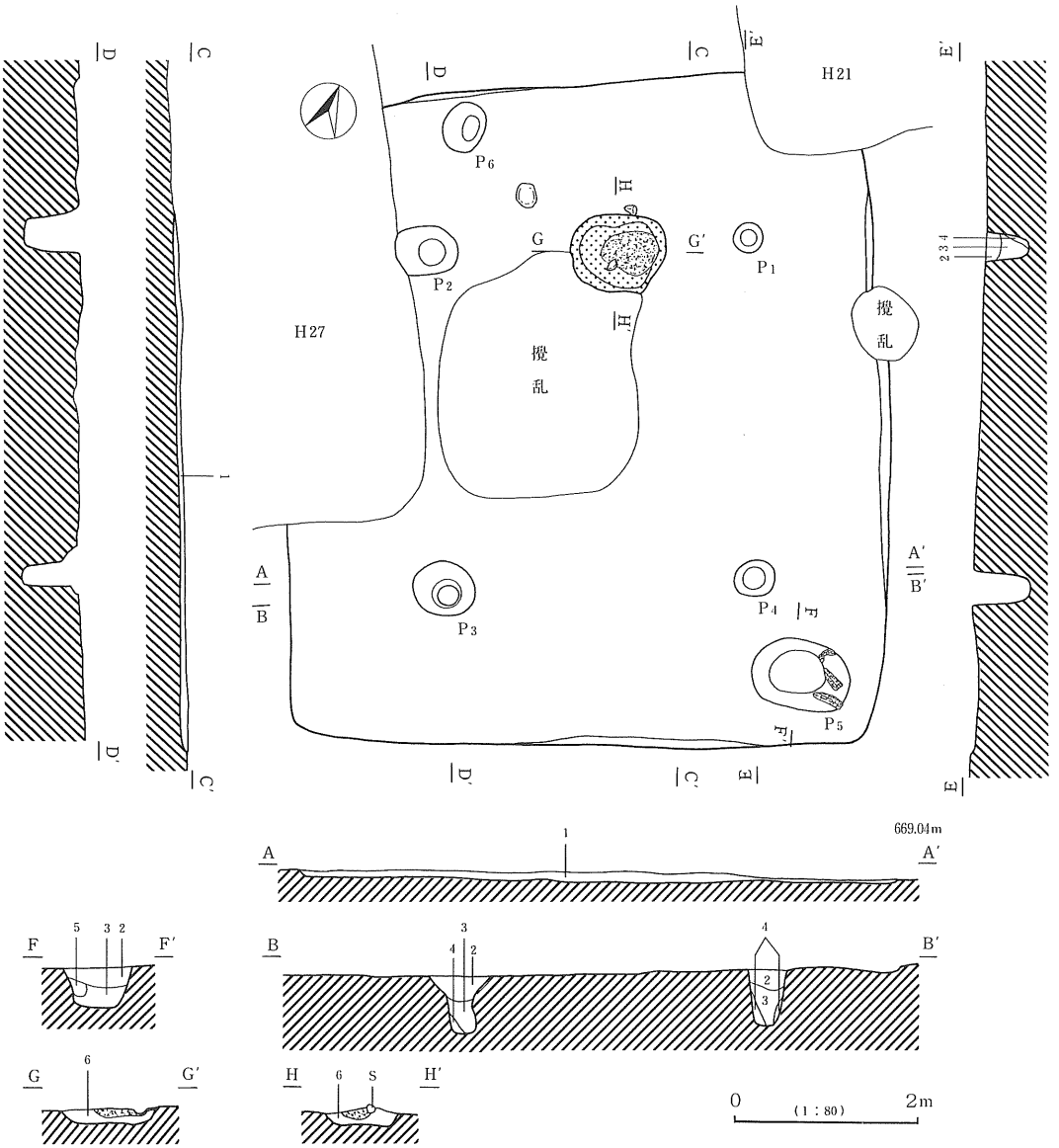
本址の出土遺物は図示したものの他土師器甕片・坏片がある。1～5は土師器坏である。1は口縁部から底部の破片であり、器厚が非常に薄い。調整は底部にヘラケズリ、口縁内面にミガキを施すが器面が荒れている為不鮮明である。2はカマド構築土内より出土した。底部を一部欠損する。調整は器面が荒れていて不鮮明である。3は住居址南東コーナーから出土の破片とP4より出土の破片が接合関係にある。調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。4は口縁部の一部を欠くがほぼ完形で、調整は底部外面にヘラケズリ、内面に丁寧なヘラミガキを施す。5は口縁部と体部のみの残存で、調整は内外面に丁寧なヘラミガキを施している。なお、3と5の胎土は他の坏に比べよく精錬されているが、焼成があまく軟質の感がある。6は土師器甕で住居址南東コーナーの貼床内から出土し、口縁部と胴部上半が残存する。調整は胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデである。7は土師器小型甕であり、器面が粗れており、調整は不鮮明であるが内面にナデを施す。8は高坏の坏部であり、脚部との接合部より下が欠損している。調整は内面が丁寧なミガキを施す。9は高坏の脚部であり脚端部を欠損する。調整は外面にやや粗いミガキ、内面が単位の細かなヘラケズリが施されている。10～17は滑石製臼玉で住居址床面上のP4・P5間で8点がまとまって検出された。形態にはばらつきがあるが、他の住居址出土のものより何れも小形である。

(26) H28号住居址　(第71・72図，写真図版二五)

本址はオ・カ－2・3Grに位置する。H27号住居址・H21号住居址と重複関係にある。新旧関係は本址が何れよりも古い。残存状況は住居址中央部を攪乱によって、北東コーナーをH21号住居址にまた西壁北半分をH27号住居址によつて削平されている。

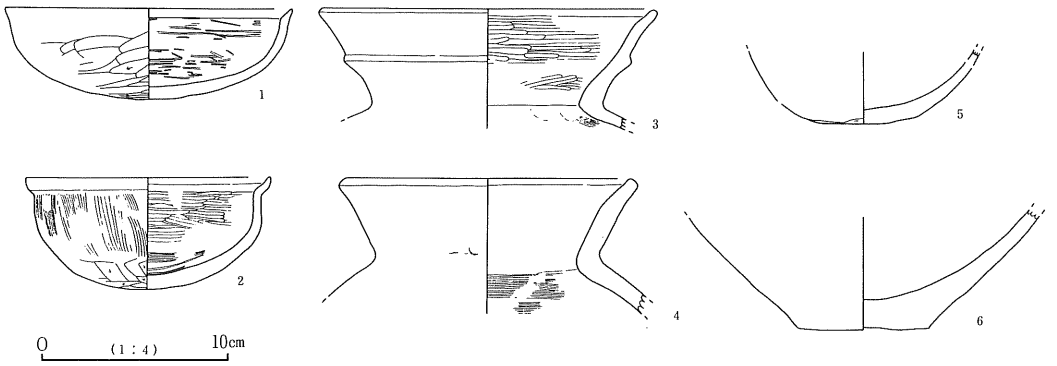
形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁3.95m（残存部）・東壁6.23m（残存部）・南壁6.05m・西壁2.16m（残存部）を測る。主軸方位はN－25°－Wを示す。住居床面積は33.7m²（推定）を測る。ピットは床面で6ヶ所確認された。1～4は主柱穴で、規模はP1が径32cm・深さ55cm、P2が径50cm・深さ57cm、P3が径58cm・深さ58cm、P4が径38cm・深さ59cmを測る。いずれのピットも柱痕は確認されなかった。P5は規模が長軸1.07m・深さ37cmを測り、ピット内からは炭化物が検出されている。検出位置などから貯蔵穴的な機能をもつと考えられる。貼床は検出されず地山Ⅵ層を踏み固めた状態であった。壁溝は確認されなかった。

炉は住居址中央部やや北よりでP1･P2間の真ん中に検出された。規模は東西長軸1m・南北短軸82cm・床面よりの掘り込み14cmを測る。中央部にはよく焼けた火床面があり、手のひらほどの大きさの石が置かれていた。



1　黒褐色土　(10YR2/3)　炭化物・焼土粒子を多量含む。
2　黒褐色土　(10YR2/2)　炭化物を少量、焼土粒子を微量含む。
3　黒色土　(10YR2/1)　炭化物を微量、小石を少量含む。
4　灰黄褐色土 (10YR4/2)　ローム粒子を多量含む。
5　黒褐色土　(10YR2/2)　炭化物・焼土粒子を多量含む。
6　黒褐色土　(5YR2/2)　焼土・炭化物を少量・ローム粒子を微量含む。

第71図　H28号住居址実測図



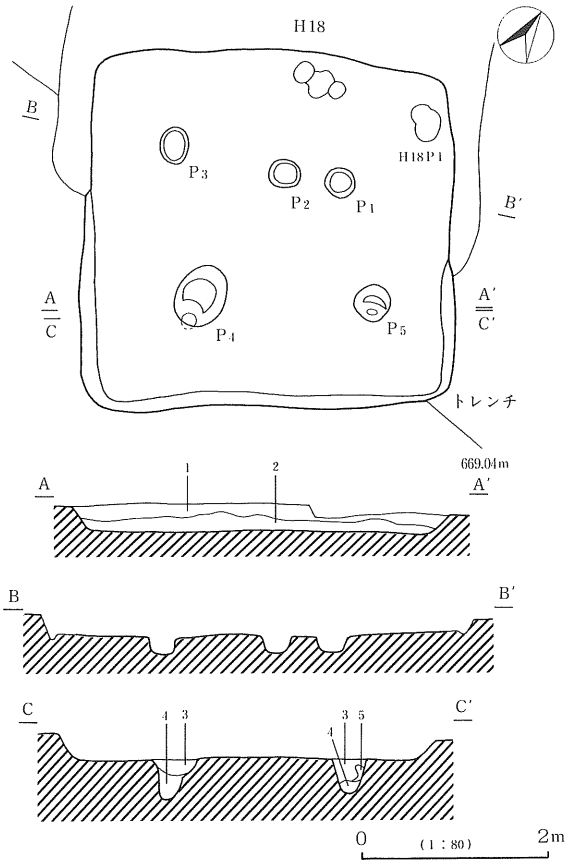
第72図　H28号住居址出土遺物実測図

本址の出土遺物は図示したものの他土師器甕片・坏片がある。1・2は土師器坏である。1は1／3ほど残存する。調整は体部外面に単位の細かなヘラケズリ、内面にやや粗いヘラミガキを口縁端部に面取りが施されている。2はほぼ完形で、調整は体部外面に細かなハケメを残すナデで底部はヘラケズリ、内面は丁寧なヘラミガキで口縁端部には弱い段を持つ面取りが施されている。3は土師器壺の口縁部から頸部であり、南壁中央寄りから出土した。口縁部1／2ほどが残存している。調整は口縁部内外面ナデが施されており口縁部中央には明瞭な段を有する。頸部内面には指頭圧痕が残る。4は土師器甕であり口縁部から頸部のみ残存する。調整は内外面ナデが施され、内面ハケメが残る。口縁部外面には強いナデによる沈線が残る。5・6は土師器甕である。5は丸底状を呈し、調整は内外面ナデを施す。6は東壁中央寄りから出土した。調整は内外面ナデが施されている。

(27) H29号住居址　(第73・74図，写真図版二五)

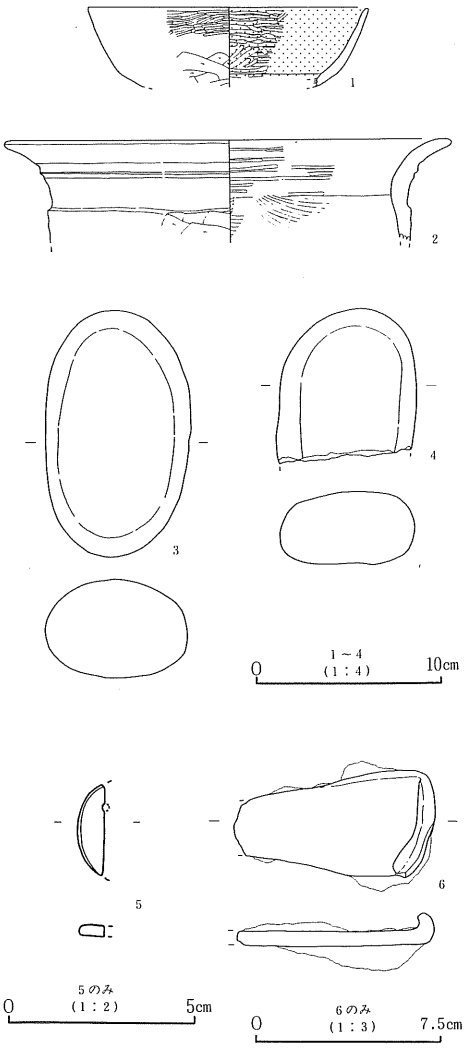
本址はク－6・7Grに位置する。H18号住居址・H23号住居址・H31号住居址と重複関係にある。新旧関係は古い方よりH31号住居址→本址→H18号住居址・H23号住居址となる。残存状況は住居址北半分をH18号住居址に削平されている為不良であり、北側は掘り方の範囲で住居址プランを確定した。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁3.63m・東壁3.27m・南壁3.68m・西壁3.5m、壁高は南西コーナー部で20cmを測る。主軸方位は東西壁を基にするとN－34°－Wを示す。住居床面積は12.9m²（推定）を測る。ピットは5ヶ所確認された。P1・P3～P5はややいびつであるが主柱穴と考えられ、規模はP1が径30cm・深さ15cm、P3が径37cm・深さ19cm、P4が径66cm・深さ41cm、P5が径40cm・深さ36cmを測る。いずれのピットも柱痕は確認されなかった。貼床は検出されず地山Ⅵ層を踏み固めた状態であった。壁溝は確認されなかった。



1　黒褐色土（10Y R3/1）　ローム粒子を少量含む。
2　暗褐色土（10Y R3/3）　ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
3　黒褐色土（10Y R2/2）　炭化物を微量、ロームブロックを少量含む。
4　黒色土　（10Y R2/1）　ローム粒子・ロームブロックを多量含む。
5　暗褐色　（10Y R3/4）　ロームブロックを多量含む。

第73図　H29号住居址実測図



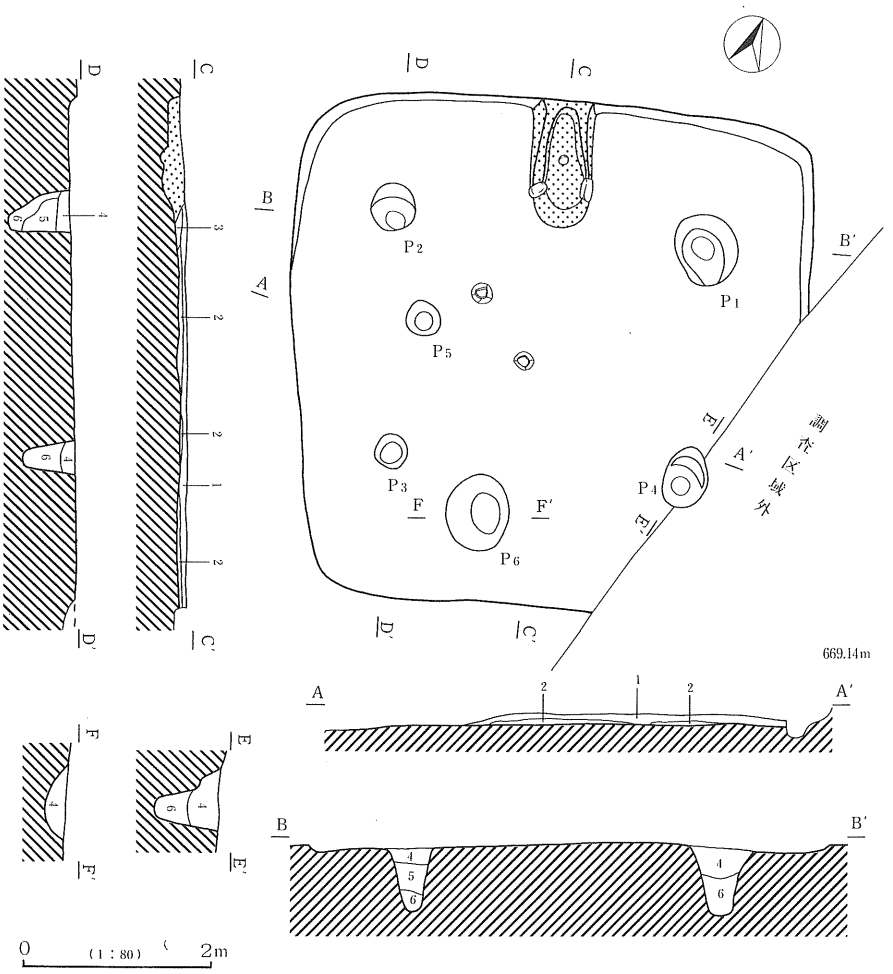
第74図　H29号住居址出土遺物実測図

本址よりの出土遺物は図示したものの他、土師器甕片・坏片などがあるが少量である。1は土師器坏であり口縁部のみ残存する。調整は外面に丁寧なヘラミガキ、底部付近にヘラケズリが施されている。内面は黒色処理されている。2は土師器甕であり口縁部のみ残存する。口縁部外面は強いナデによる沈線が2条巡り、内面は粗いミガキが、頸部にはハケメの残るナデが施されている。3と4は磨石である。5は滑石製模造品の有孔円盤と考えられるが1／3ほどしか残存していないため全容は不明である。形態は両面よく磨いてあり一ヶ所に穿孔された小穴がある。6は鉄製品であり、残存の形態より鎌と考えられる。

(28) H30号住居址　（第75・76・77図，写真図版二六）

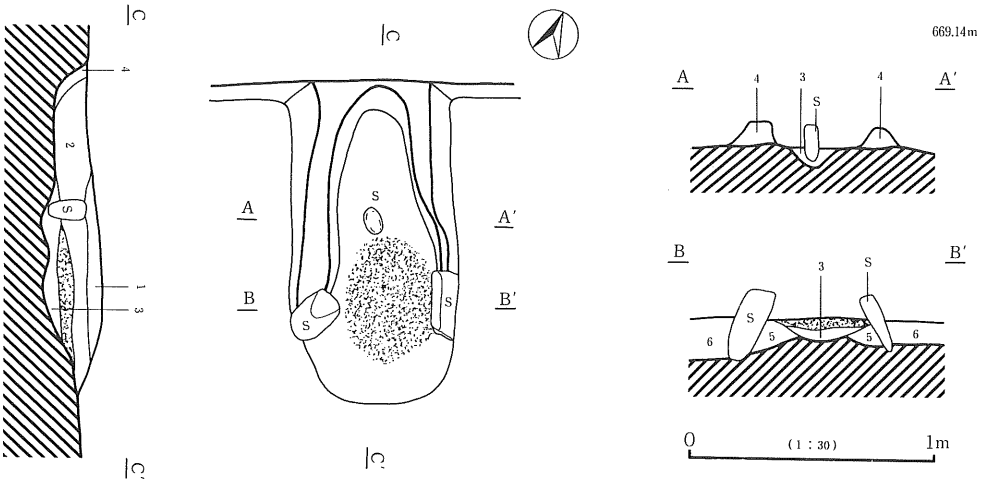
本址はキ－１・２、ク－１・２Grに位置する。残存状況は住居址東コーナーが調査区外となり、また南半分は確認面が低く住居址の壁は確認できなかった。

形態はほぼ方形を呈する。規模は北壁5.15m・東壁1.75m（検出部）・南壁2.86m（検出部）・西壁4.86m、壁高は北西コーナー部で５cmを測る。主軸方位はN－20°－Wを示す。住居址床面積は22.5m²（検出部分）、推定で25m²を測る。ピットは６ヶ所確認された。P1～P4は主柱穴であ



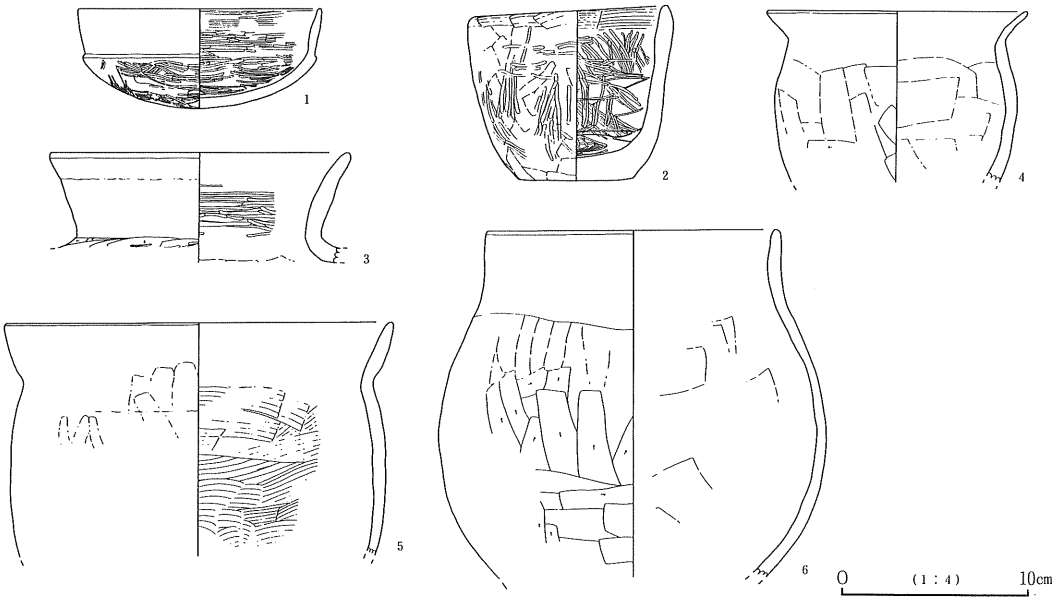
1　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・炭化物を微量含む。
2　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物を少量含む。
3　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒子・炭化物・焼土粒子を少量含む。
4　黒褐色土（10YR3/1）　炭化物・ローム粒子を微量含む。
5　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒子を多量に含み、小石が混入。
6　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒子・ロームブロックを少量含む。

第75図　H30号住居址実測図



1　黒褐色土　（5ＹＲ3/1）　焼土ブロック・炭化物を多量含む。
2　黒褐色土　（10ＹＲ2/3）　ローム粒子を多量に含み、焼土粒子が少量混入。
3　暗赤褐色土（5ＹＲ3/2）　焼土粒子・炭化物を少量含む。
4　暗褐色土　（10ＹＲ3/3）　焼土粒子・ローム粒子を少量含む。
5　暗褐色土　（10ＹＲ3/3）　焼土粒子・ローム粒子を多量含む。
6　黒褐色土　（10ＹＲ2/2）　白色シルトを多量に含む。

第76図　H30号住居址カマド実測図



第77図　H30号住居址出土遺物実測図

る。規模はP1が径76cm・深さ71cm、P2が径50cm・深さ61cm、P3が径35cm・深さ57cm、P4が径65cm・深さ72cmを測る。いずれのピットも柱痕は確認されなかった。貼床は検出されず地山Ⅵ層を踏み固めた状態であった。壁溝は確認されなかった。

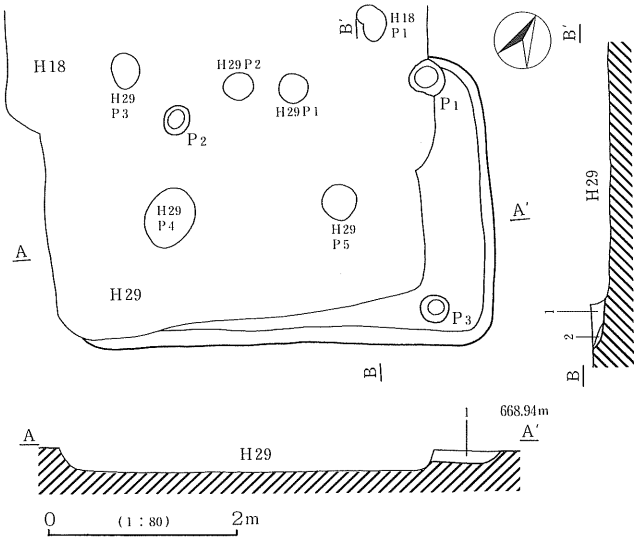
カマドは北壁中央に検出された。主軸方位はN－22°－Wを示す。残存状況は良好で、形態は煙道部が住居址壁ラインより内側に入るタイプで、煙道部壁はやや急激に立ち上がる。火床面は貼床とほぼ同レベルである。規模は煙道部から焚口部の長さが2.53m・幅40cm・確認面よりの高さ9cmで、袖は右袖が長さ76cm・床面よりの高さ14cm、左袖が長さ84cm・床面よりの高さ15cmを測る。袖の構築方法は火床面脇にそれぞれ長軸30cmと24cmの扁平な石を立て、煙道部は暗褐色土によって構築されていた。また本カマドは火床面奥に長さ14cmの支脚石が立った状態で検出されている。

本址よりの出土遺物は図示したものの他に土師器甕片・坏片等があり、カマドからの遺物出土量が多い。1は土師器坏でカマド内から出土した。残存状況は全体の1／2ほどである。調整は底部から体部外面にはヘラケズリの後丁寧なヘラミガキを、内面にも丁寧なヘラミガキを施す。この坏は口縁部と体部の境である稜がはっきり残り、須恵器坏蓋の形態を明瞭に示している。2は土師器鉢であり南壁脇から出土した。底部を一部欠損する他はほぼ完形である。調整は胴部外面にナデの後粗いヘラミガキ、内面粗いヘラミガキ、口縁部内外面にハケメの残るナデが施されている。3は土師器壺で口縁部のみ完形で出土した。調整は口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、頸部外面ヘラケズリの後粗いヘラミガキを施す。また口縁部外面には粘土帯折り返しのような線がある。4～6は土師器甕である（5は甑の可能性もあり）。何れもカマド内より出土した。調整は4・6はほぼ同じであるが、5のみ内面がハケメの残るナデを施している。

(29) H31号住居址　（第78・79図）

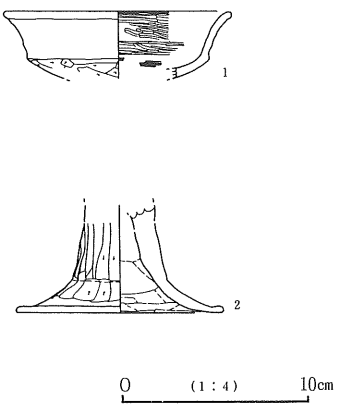
本址はキ・ク－6Grに位置する。H18号住居址・H23号住居址・H31号住居址と重複関係にある。新旧関係は古い方より本址→H29号住居址→H18号住居址・H23号住居址となる。残存状況は住居址東側を除きほとんどがH29号住居址によって削平されている為不良であり、東壁と南壁を検出できたに止まった。

形態はほぼ長方形を呈すると考えられる。規模は北壁0.46m（残存部）・東壁2.82m（残存部）・南壁4.12m、壁高は東壁中央部で13cmを測る。主軸方位は東西壁を基にするとN－30°－Wを示す。住居床面積は1.8m²（残存部）を測る。ピットは3ヶ所確認された。規模はP1が径35cm・深さ23cm、P2が径30cm・深さ13cm、P3が径28cm・深さ8cmを測る。いずれのピットも柱痕は確認されなかった。貼床は検出されず地山Ⅵ層を踏み固めた状態であった。壁溝は確認されな



1　黒褐色土（10YR3/1）　焼土を少量、炭化物を多量含む。
2　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒子を少量含む。

第78図　H31号住居址実測図



第79図　H31号住居出土遺物実測図

かった。

本址よりの出土遺物は図示したものの他土師器甕片が数点ある。1は土師器坏であり口縁部から体部1／4が残存する。調整は体部外面にヘラケズリ、口縁部外面にヨコナデ、内面に丁寧なヘラミガキが施されている。2は土師器高坏で脚部のみ残存する。調整は脚部外面に縦方向のヘラケズリ、脚端部にヨコナデ、内面にヘラナデを施す。

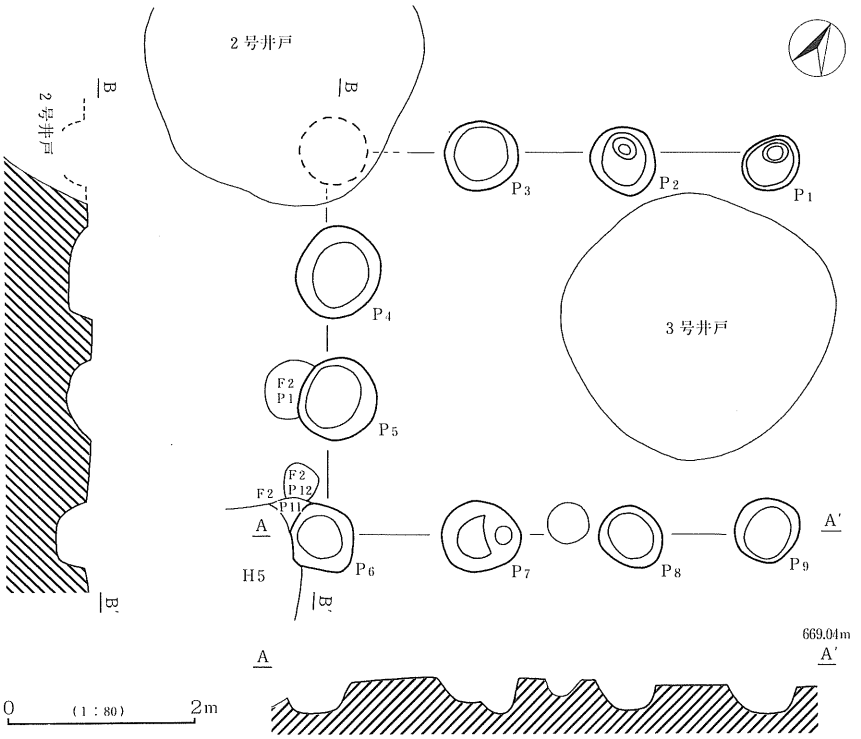
第２節　掘立柱建物址

（１）Ｆ１号掘立柱建物址　（第80図，写真図版二七）

本址はエ－10・11、オ－10・11Grに位置する。Ｈ５号住居址・Ｈ８号住居址・Ｆ２号掘立柱建物址・２号井戸址・３号井戸址と重複関係にあり、新旧関係は古い方よりＦ２号掘立柱建物址→Ｈ５号住居址・Ｈ８号住居址→本址→２号井戸址・３号井戸址となる。残存状況は北西角のピットが２号井戸址に、東側の柱列が３号井戸址に削平されている。

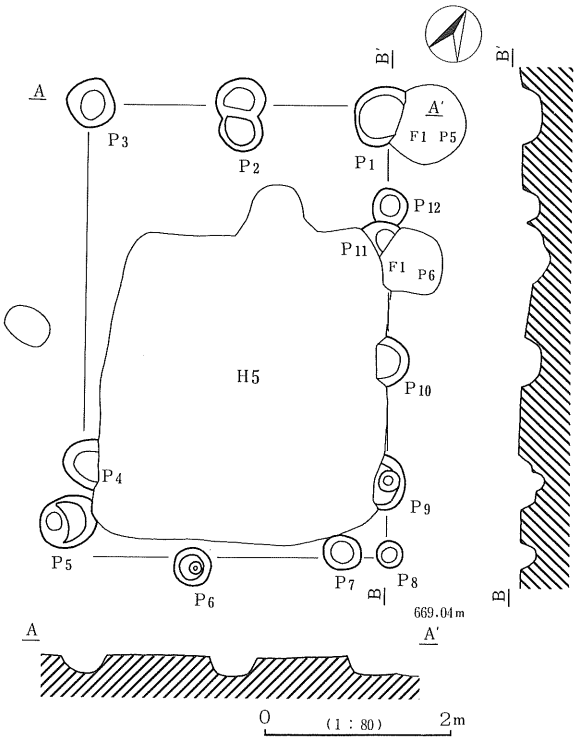
形態は東西方向に長い３間×３間の側柱式建物址で、長軸方位はＮ－61°－Ｅを示す。規模は東西4.8m・南北４mで、柱間の寸法は梁行きが1.34～1.4m・桁行きが1.34～1.86mを測る。桁行きは中央の柱間が両脇に比べて若干短い。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、掘り方はP1・P2・P7が底面が一段下がる二段掘りになっており、他の柱穴は素掘りの穴である。規模は最大径がP4の94cm・最小径がP1の62cmを測る。深さは径に比べて何れも浅く、平均35cm前後を測る。覆土は砂質の黒色土で、柱痕は確認されなかった。

本址よりの出土遺物で図示できるものはない。



第80図　Ｈ１号堀立柱建物址実測図

（2） F 2号掘立柱建物址　（第81図，写真図版二七）

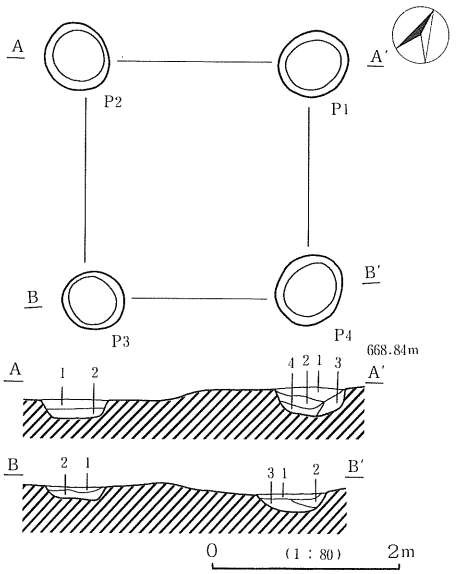


第81図　F 2号堀立柱建物址実測図

本址はオ・カ－11Grに位置する。H 5号住居址・F 1号掘立柱建物址と重複関係にあり、新旧関係は本址が一番古い。残存状況は東側柱列がH 5号住居址によって西側半分が削平されている。

形態は南北方向に長い2間×4間の側柱式建物址であるが、西側柱列が2ヶ所検出できずまた南側柱列は厳密には3間を呈し変則的な建物址である。長軸方位はN－29°－Wを示す。規模は東西3.2m・南北4.8mで、柱間寸法は梁行きが1.6m・桁行きが1.66～0.88mを測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、規模は最大径がP2の78cm・最小径がP 8の27cmを測る。覆土は砂質の黒色土で柱痕は確認されなかった。本址よりの遺物で図示できるものはない。

（3） F 3号掘立柱建物址　（第82図，写真図版二八）



本址はイ・ウ－6・7Grに位置する。残存状況は良好であるが、本址は住居主柱穴の残存とも考えられる。

形態はほぼ方形の1間×1間の側柱式建物址である。南北主軸方位はN－30°－Wを示す。規模は一辺2.4mである。柱穴の形態はほぼ円形を呈し規模は径72cm前後、深さ17～31cmを測る。

本址よりの出土遺物で図示できるものはない。

1　黒褐色土（10YR3/1）
　さらさらした砂を多量に含む。粘性弱。

2　暗褐色土（10YR3/4）
　黄色シルトと黒色土の混合土。1層よりしまっている。

3　褐色土（10YR4/6）
　ローム粒子を少量含む。粘性強い。

4　黒褐色土（10YR2/2）
　黒色土と黄色シルトの混合土。

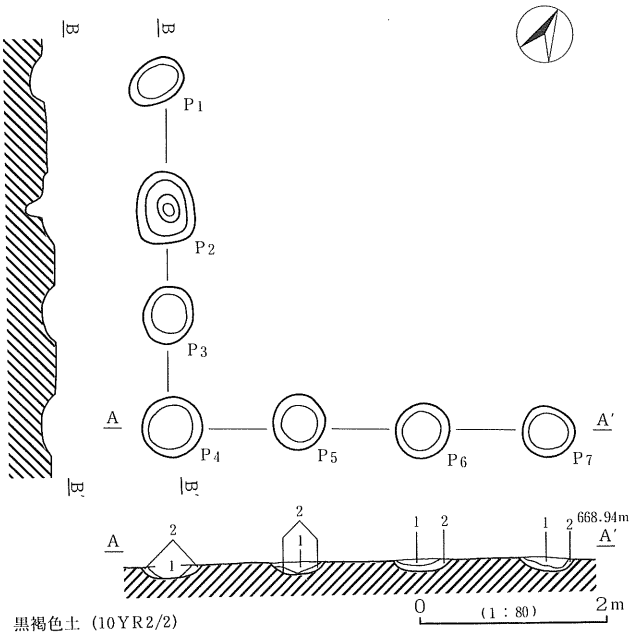
第82図　H 3号堀立柱建物址実測図

（4）Ｆ４号掘立柱建物址　（第83図，写真図版二八）

本址はウ－7･8Grに位置する。残存状況は北・東側柱列が検出されなかった。よって、柵列あるいは礎石建物の庇とも考えられる。

形態は東西方向に長い３間×３間の側柱式建物址である。長軸方位はＮ－61°－Ｅを示す。規模は東西４ｍ・南北3.8ｍで、柱間寸法は梁行きが1.09～1.42ｍ・桁行きが1.31～1.39ｍを測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、規模は最大径がP2の73cm・最小径がＰ７の52cmを測る。深さは13～27cmを測り、いずれも径に比べて浅い。柱痕は確認されなかった。

本址よりの出土遺物で図示できるものはない。



1　黒褐色土（10YR2/2）
土器粒子・炭化物を微量含む・粘性強。

2　褐　色　土（10YR4/6）
シルト層。１層ブロックを少量含む。

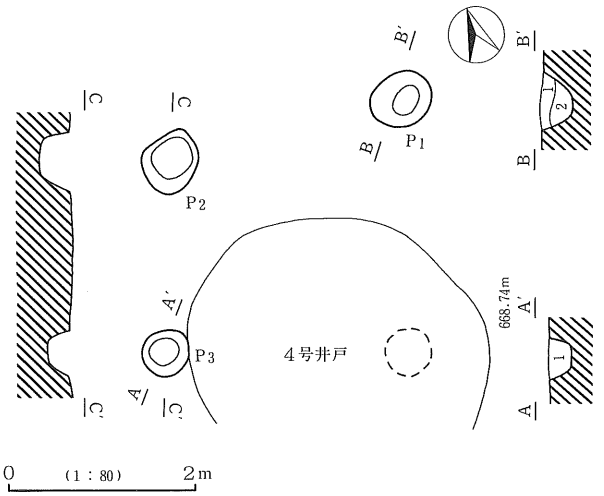
第83図　Ｆ４号堀立柱建物址実測図

（5）Ｆ５号掘立柱建物址　（第84図，写真図版二九）

本址はエ－９Grに位置する。４号井戸址と重複関係にあり、本址の方が古い。残存状況は南東角が４号井戸址に削平されている。

形態はいびつな方形の１間×１間の側柱式建物址である。南北主軸方位はＮ－22°－Ｅを示す。規模は一辺2.02～2.6ｍである。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、規模は径52～70cmで、深さ22～53cmを測る。本址もＦ３号掘立柱建物址と同じく、住居址柱穴の残存とも考えられる。

本址よりの出土遺物で図示できるものはない。

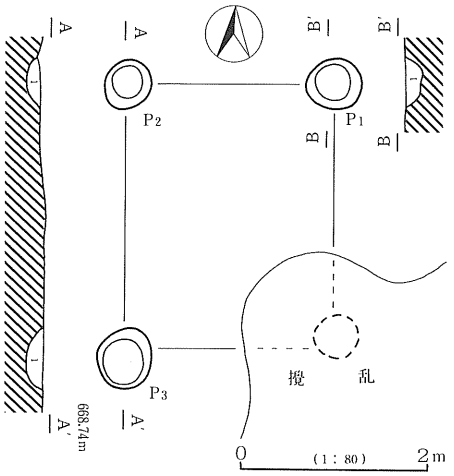


1　黒　色　土（10YR2/1）炭化物を微量含む。

2　暗褐色土（10YR3/4）ローム粒子多量含む。

第84図　Ｆ５号堀立柱建物址実測図

（6）Ｆ６号掘立柱建物址　（第85図，写真図版二九）



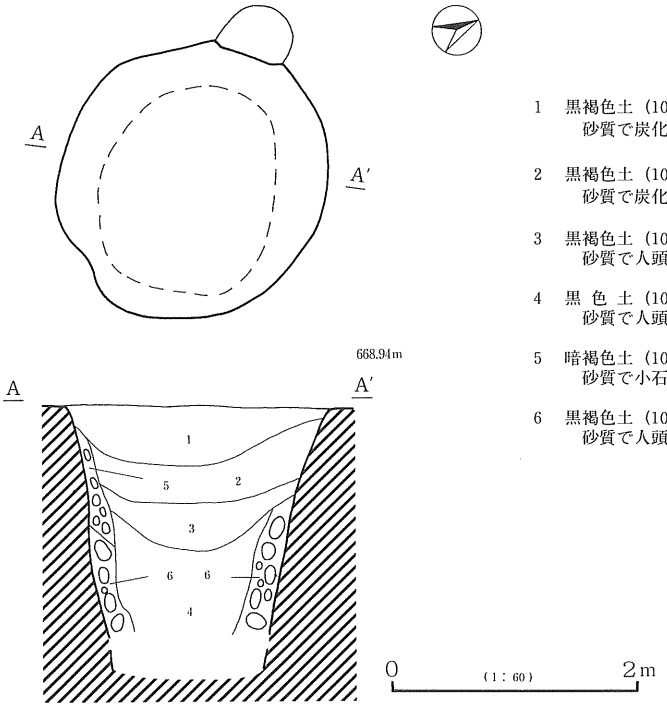
1　暗褐色土（10YR3/3）
　砂質の層にローム粒子を少量含む。

第85図　Ｆ６号掘立柱建物実測図

本址はエ・オ－８Grに位置する。残存状況は攪乱によって南東角が削平されている。

形態はいびつな方形の１間×１間の側柱式建物址である。南北主軸方位はN－12°－Wを示す。規模はP1～P2が2.2m、P2～P3が３mを測る。柱穴の形態はほぼ円形を呈し、規模はP1が径52で深さ17cm、P2が径54cm・深さ15cm、P3が径65cm・深さ17cmを測る。本址も残存状況や形態よりＦ３・４号掘立柱建物址と同じく、住居址柱穴の残存とも考えられる。本址よりの出土遺物で図示できるものはない。

第３節　井　戸　址



1　黒褐色土（10YR3/1）
　砂質で炭化物・炭化米が少量混入。

2　黒褐色土（10YR3/2）
　砂質で炭化物・炭化米・小石が少量混入。

3　黒褐色土（10YR2/2）
　砂質で人頭大の石が少量混入。

4　黒　色　土（10YR2/1）
　砂質で人頭大の石が混入。

5　暗褐色土（10YR3/4）
　砂質で小石が多量混入。

6　黒褐色土（10YR2/3）
　砂質で人頭大の石が多量混入。

第86図　１号井戸址実測図

（1） 1号井戸址（第86図，写真図版三十）

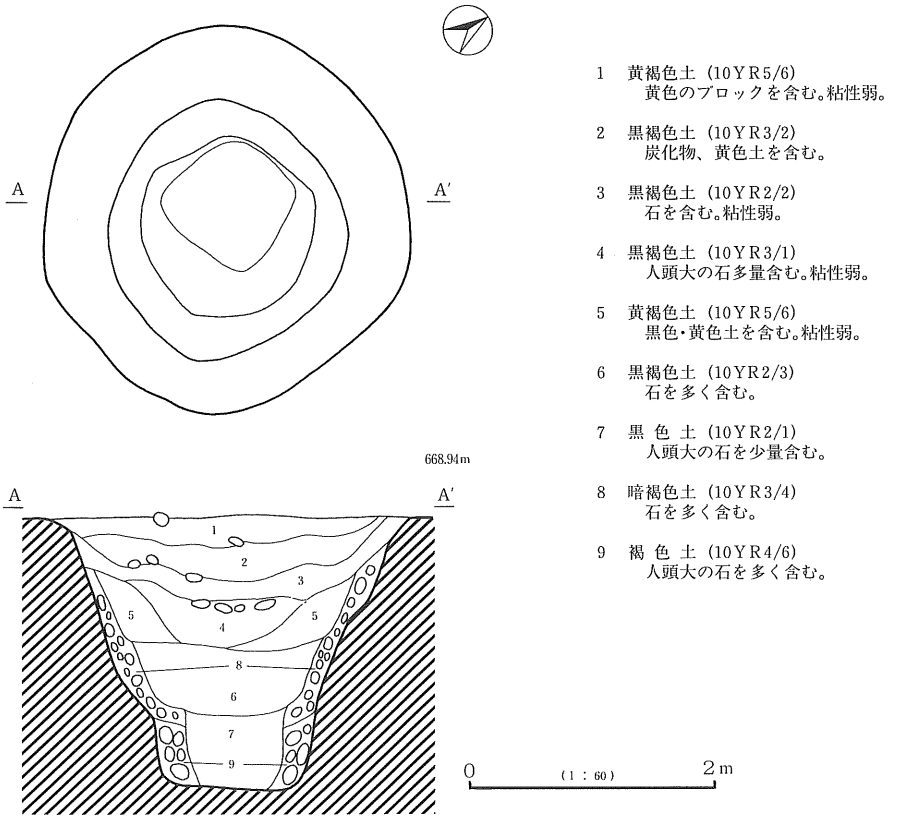
本址はオ－12Grに位置する。残存状況は北西側がピットにより削平されている他は良好である。形態はいびつな円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。長軸方位はN－39°－Wを示す。規模は南北長軸が2.38m、東西短軸が2.08mを測る。深さは1.85mまで掘り進んだ時点で、井戸址壁より多量の湧水があり、壁の一部が崩落し調査続行は危険と判断して掘り下げを中断した。覆土は自然堆積で炭化物や人頭大の河原石が混入していた。

本址よりの出土遺物で図示できるものはない。

（2） 2号井戸址　（第87図）

本址はエ－11・12、オ－11・12Grに位置する。F1号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址の方が新しい。残存状況は良好である。

形態は上端がほぼ円形、下端がいびつな方形を呈する。壁はなだらかに立ち上がり、底面付近でほぼ垂直に落ちこむ。南北軸方位はN－18°－Wを示す。規模は南北・東西軸とも2.9mを測る。



1　黄褐色土（10YR5/6）
　黄色のブロックを含む。粘性弱。

2　黒褐色土（10YR3/2）
　炭化物、黄色土を含む。

3　黒褐色土（10YR2/2）
　石を含む。粘性弱。

4　黒褐色土（10YR3/1）
　人頭大の石多量含む。粘性弱。

5　黄褐色土（10YR5/6）
　黒色・黄色土を含む。粘性弱。

6　黒褐色土（10YR2/3）
　石を多く含む。

7　黒色土（10YR2/1）
　人頭大の石を少量含む。

8　暗褐色土（10YR3/4）
　石を多く含む。

9　褐色土（10YR4/6）
　人頭大の石を多く含む。

第87図　2号井戸址実測図

下端は90cm×70cmの広さで、深さは確認面より2.17mを測る。覆土は自然堆積を示すが、炭化物・人頭大の河原石を含む。

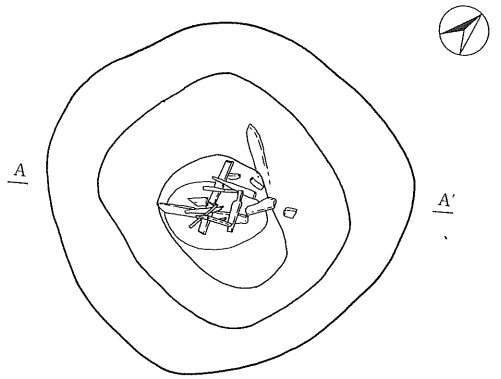
本址よりの出土遺物には覆土中より陶磁器片２点（巻頭カラー参照）が出土している。

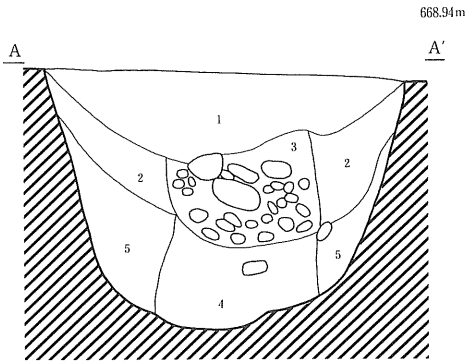
（３）３号井戸址　（第88・89図，写真図版三十・三一）

本址はエ・オ－10Grに位置する。Ｈ８号住居址・Ｆ１号掘立柱建物址と重複関係にあるが、新旧関係は本址が何れの遺構より新しい。残存状況は良好である。

形態はいびつな方形を呈し、壁はすり鉢状に立ち上がる。南北軸方位はＮ－３°－Ｅを示す。規模は南北軸が2.71m、東西軸が2.75mを、深さは確認面より2.05mを測る。覆土堆積は第１層が自然堆積の状況を示すが、第３・４層は二次的な掘り込み時の堆積か、あるいは第２・５層が井戸枠材などで押さえられた埋め土の可能性がある。

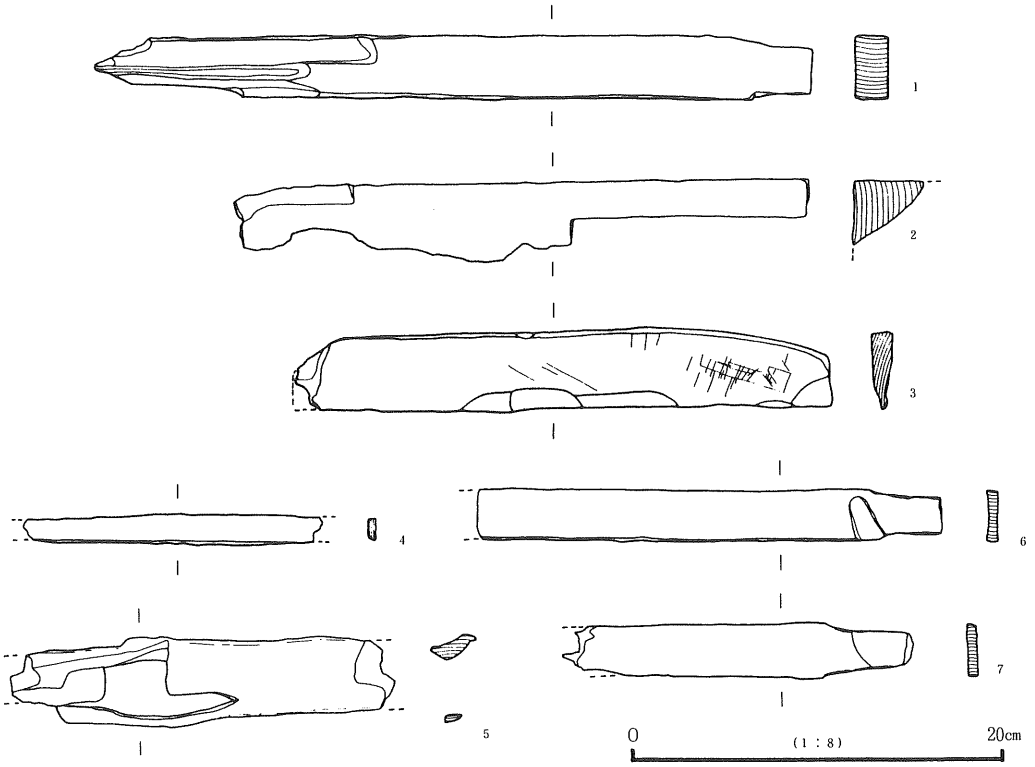
本址よりの出土遺物は、覆土第４層中から出土した木製品がある。





1　黒褐色土（10ＹＲ3/1）小石を少量含む。
2　黒褐色土（10ＹＲ2/3）ローム粒子多量混入。
3　黒褐色土（10ＹＲ3/2）小石・人頭大の石多量混入。
4　黒褐色土（10ＹＲ2/2）小石多量混入。
5　黒褐色土（10ＹＲ2/3）小石・ローム粒子が多量混入。

第88図　３号井戸址実測図



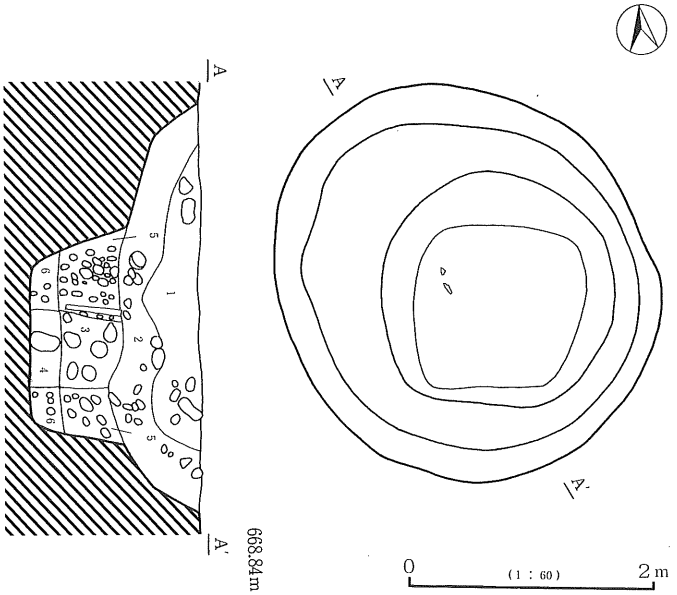
第89図　3号井戸址出土遺物実測図

図示した7点は何れも加工痕が観察される物であるが、欠損しているためほぼ全容を把握できるものは1と3のみである。1は先端を削り出した角材で、杭とも考えられるが面取りした部分には木槌などで叩いた痕跡は確認されなかった。3は両面を削った板材であり、左右の端は丸く半弧を描くように削りだされている。また表面には無数の刻み痕が残る。(樹種等は本文第Ⅴ章、第2節を参照。)

(4) 4号井戸址　(第90・91図，写真図版三二)

本址はエ・オ－9Grに位置する。H8号住居址・H9号住居址・F5号掘立柱建物址と重複関係にあるが、新旧関係は本址が何れの遺構よりも新しい。残存状況は良好である。

形態は上端がいびつな円形、下端がほぼ方形を呈し、壁は上半がすり鉢状に、下半が急激に立ち上がる。南北軸方位はN－3°－Eを示す。規模は南北軸が3.02m、東西軸が3.10mを、深さは確認面より1.34mを測る。下端の規模は長軸1.39m、短軸1.28mを測る。覆土堆積は第1・2層が自然堆積の状況を示すが、第3・4層は二次的な掘り込み時の堆積か、あるいは第5・6層が井戸枠材などで押さえられた埋め土の可能性がある。



1　黒褐色土（10YR2/3）
　砂質で人頭大の石を含む。炭化物・炭化種子が多量混入する。

2　黒褐色土（10YR3/2）
　砂質で人頭大の石を多量に含む。炭化物・炭化種子が少量混入する。

3　黒褐色土（10YR3/1）
　砂質で人頭大の石を多量に含む。炭化物が少量混入する。

4　黒褐色土（10YR2/2）
　黒色土を含む。砂質で人頭大の石が少量混入する。

5　暗褐色土（10YR3/3）
　砂質でにぎりこぶし大の石を多量に含む。

6　暗褐色土（10YR3/3）
　砂質でにぎりこぶし大の石を少量含む。

第90図　4号井戸址実測図

本址よりの出土遺物は、覆土中より陶磁器片3点（巻頭カラー参照）と図示した須恵器蓋及び炭化種子がある。（炭化種子については本文第Ⅴ章、第2節を参照。）

（1は4号井戸・2はM1号）

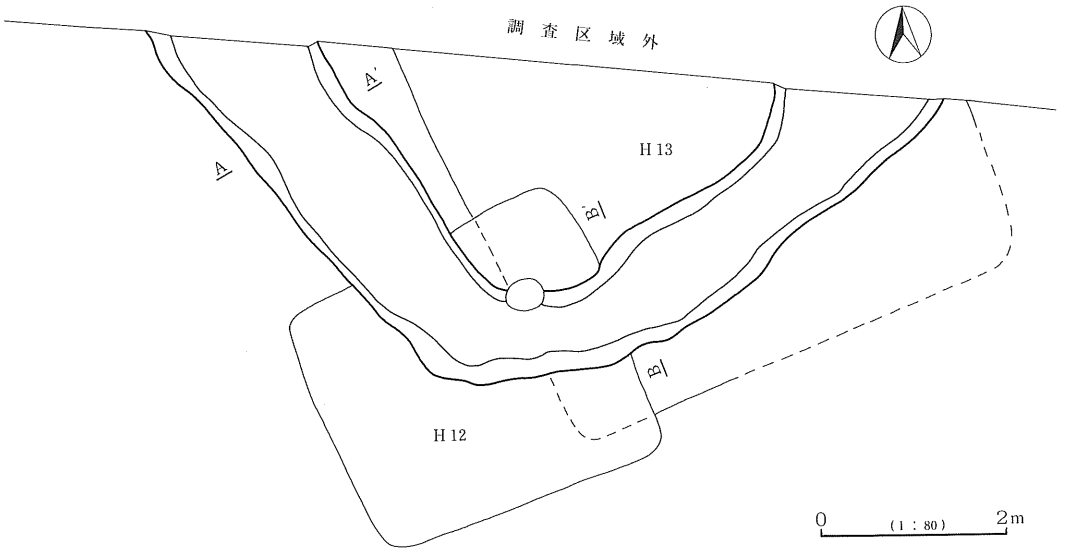
第91図　4号井戸址・M1号溝状遺構出土遺物実測図

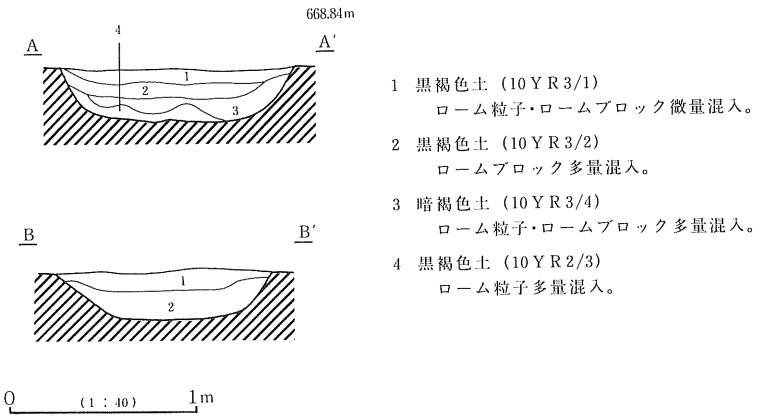
第４節　溝状遺構

（１）Ｍ１号溝状遺構　（第91・92図，写真図版三二）

本址はイ－4･5･6Grに位置する。H12号住居址･H13号住居址と重複関係にあるが、新旧関係は本址が何れの遺構よりも古い。残存状況は北側が調査区外となるため全容の把握はできなかった。

形態は「L」字状に曲がる溝であるが、検出位置東側溝がわずかに北方向に曲がっており、或いは方形周溝墓的な形態をとるとも考えられる。南北軸方位はN－36°－Eを示す。規模は南北





1　黒褐色土（10ＹＲ3/1）
　　ローム粒子･ロームブロック微量混入。

2　黒褐色土（10ＹＲ3/2）
　　ロームブロック多量混入。

3　暗褐色土（10ＹＲ3/4）
　　ローム粒子･ロームブロック多量混入。

4　黒褐色土（10ＹＲ2/3）
　　ローム粒子多量混入。

第92図　Ｍ１号溝状遺構実測図

軸外側が５ｍ（検出部分）・内側が3.2ｍ（検出部分）、東西外側が5.9ｍ（検出部分）・内側が3.65ｍ（検出部分）、深さは確認面より11～20cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

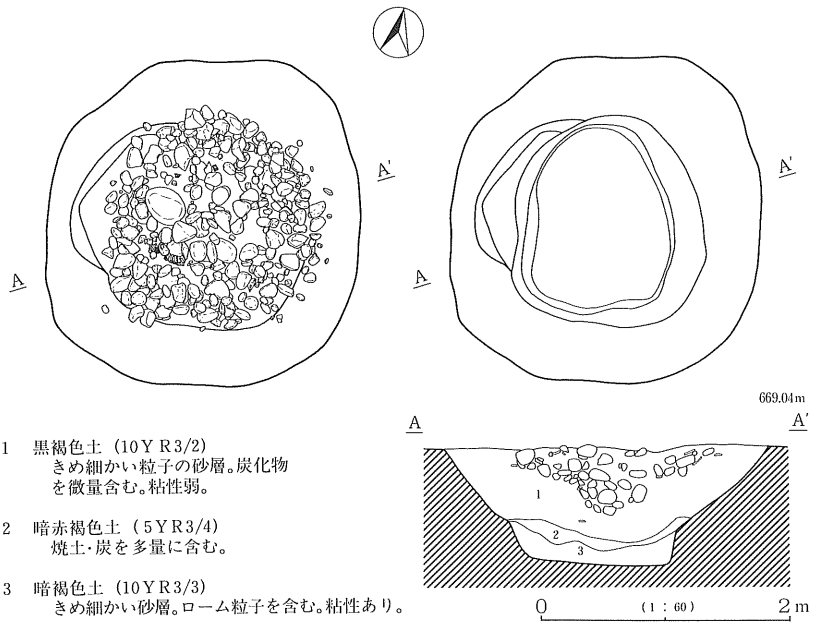
本址よりの出土遺物は図示したものの他に土師器甕片などが少量ある。１は土師器甕底部であり、覆土中より出土した。

第５節　土　坑

（１）Ｄ１号土壙（第93・94・95図，写真図版三三）

本址はウ・エ－12Grに位置する。H11号住居址と重複関係にあるが、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は良好である。

形態はいびつな円形を呈し、壁は上半がすり鉢状に、下半が急激に立ち上がる。南北軸方位はＮ－19°－Ｗを示す。規模は南北軸が2.58ｍ、東西軸が2.5ｍ、深さは確認面より90cmを測る。下端の規模は長軸1.41ｍ、短軸1.04ｍを測る。覆土堆積は３層で第１層と第２層の間には焼土と炭化物の混入した部分が観察された。また、本址は第１層中に人頭大の河原石が径1.7ｍ・深さ53cmの範囲に検出された。石は破損したものは少なく火熱を受けている物もなかった。石の間には須恵器破片などの遺物が混入し、獣骨などが散乱していた。

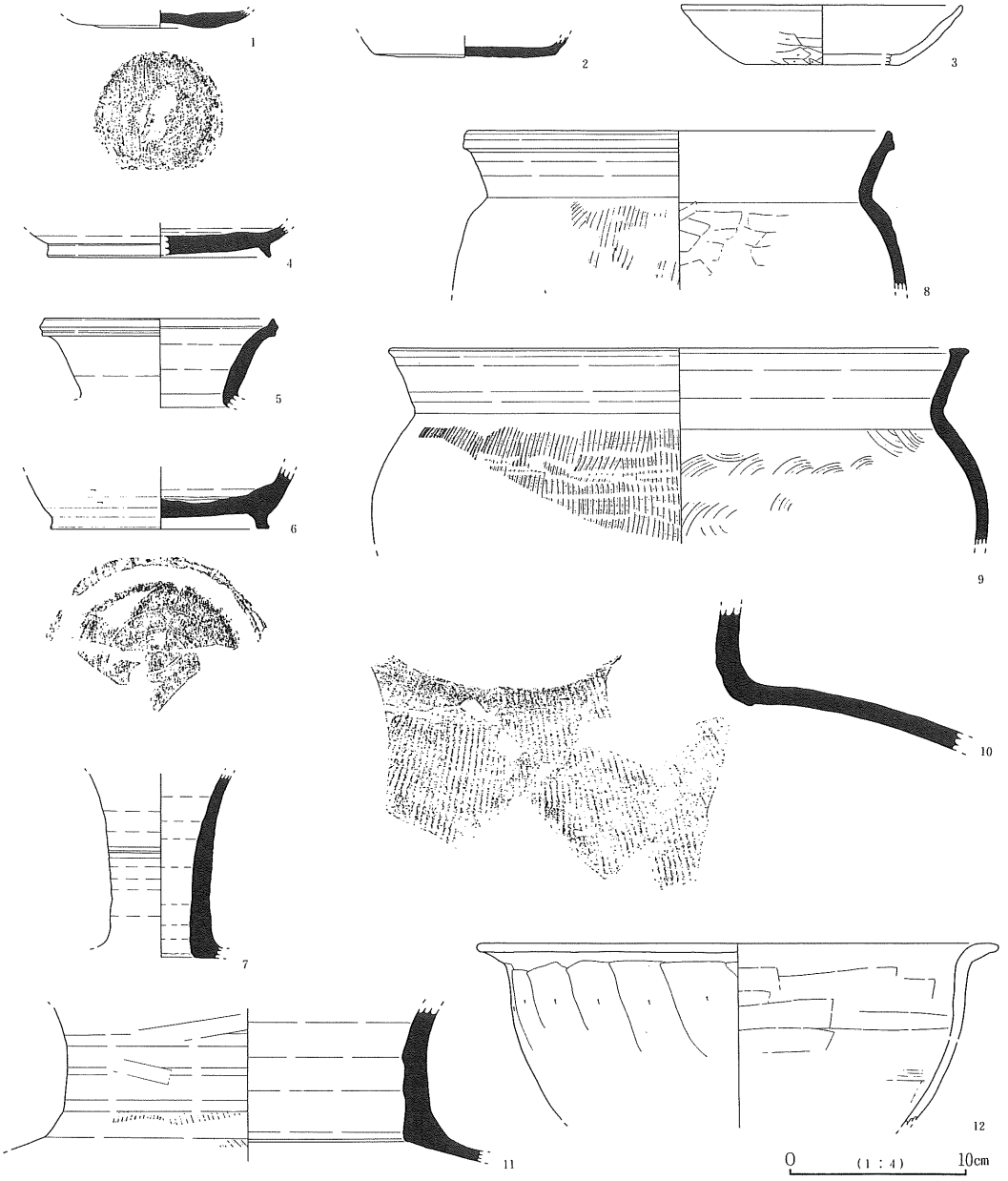


1　黒褐色土（10ＹＲ3/2）
　　きめ細かい粒子の砂層。炭化物を微量含む。粘性弱。

2　暗赤褐色土（5ＹＲ3/4）
　　焼土・炭を多量に含む。

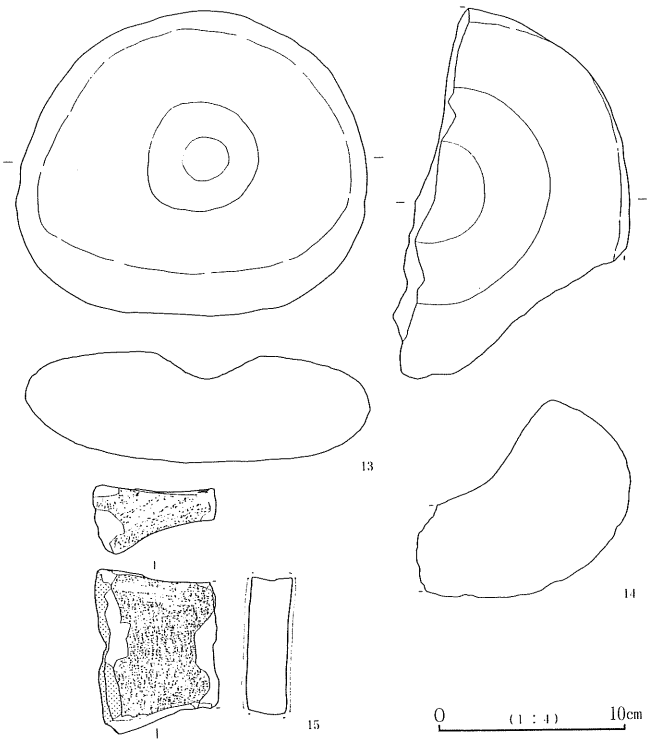
3　暗褐色土（10ＹＲ3/3）
　　きめ細かい砂層。ローム粒子を含む。粘性あり。

第93図　Ｄ１号土坑実測図



第94図　Ｄ１号坑出土遺物実測図(1)

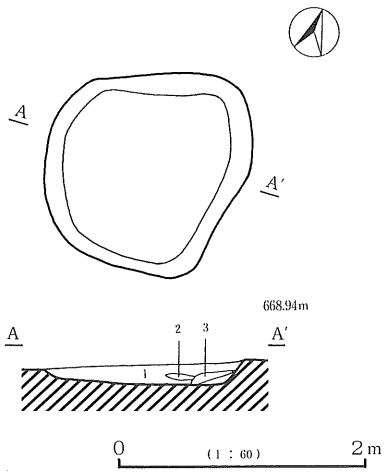
本址からの出土遺物は図示した物の他に土師器甕などがある。１と２は須恵器坏で底部のみの破片である。１は底部がヘラオコシで、２は回転ヘラケズリである。３は土師器坏で口縁部から底部の一部までで1／8ほど残存する。調整は底部から体部外面ヘラケズリで口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデを施す。４は須恵器高台付の坏であり底部のみ残存する。調整は底部に回転ヘラケズリを施す。５は須恵器短頸壺で口縁から頸部の破片である。外面には自然釉が付着している。６



第95図　Ｄ１号土壙出土遺物実測図(2)

は須恵器壺底部で、調整は内外面ロクロヨコナデで底部に「ノ」字のヘラ記号がある。７は須恵器長頸壺の口縁部で、調整は内外面ロクロヨコナデを施す。外面には自然釉が付着する。８～11は須恵器甕である。８は還元不足の須恵器で色調が黄橙色、調整は胴部外面平行タタキメ、内面がヘラナデ、口縁部には外面平行タタキメの後ヨコナデを施す。９の調整は胴部外面に平行タタキメの後ヨコナデ、内面にヨコナデを施すが同心円文が残る。10・11の調整は胴部外面平行タタキメの後ヨコナデ、頸部にヨコナデを施す。12は土師器鉢で底部を欠損する。調整は外面に単位の大きなヘラケズリ、内面にヘラナデを施す。12は凹み石で片面のみ凹んだ使用跡がある。13は石臼で1／2ほど残存する。14は砥石で両端部を欠損する。

（２）Ｄ２号土坑　（第96図）

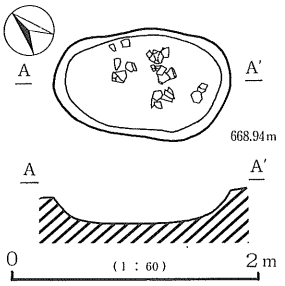


本址はイ－８・９Grに位置する。H14・17号住居址と重複関係にあるが、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は良好である。

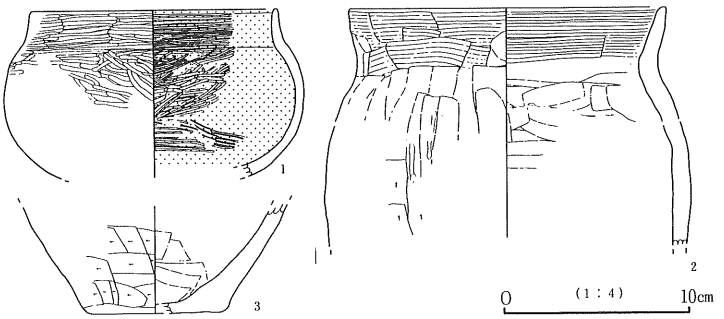
形態はいびつな円形を呈し、長軸方位はN－６°－Wを示す。規模は南北軸が1.6m、東西軸が1.58m、深さは４cmを測る。

1　黒 色 土（10YR3/1）炭化物を微量含む。粘性ややあり。
2　褐 色 土（10YR4/6）砂層。
3　黒褐色土（10YR3/2）砂層を含む。粘性あり。

第96図　Ｄ２号土坑実測図



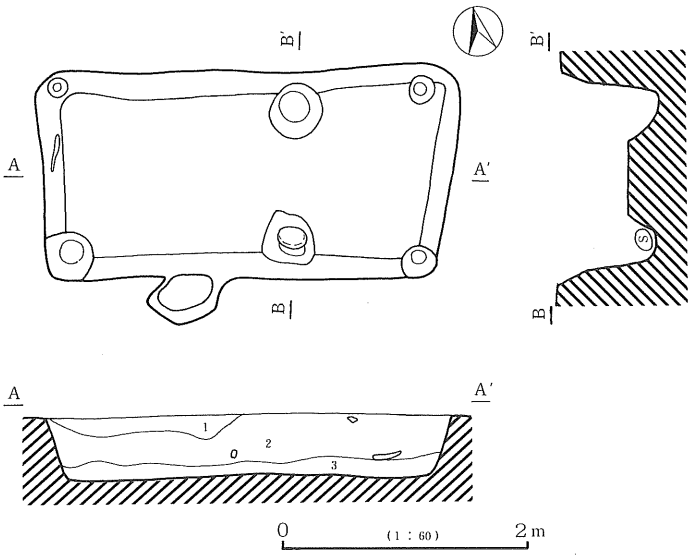
第97図　D３号土坑実測図



第98図　D３号土坑出土遺物実測図

（３）D３号土坑　（第97・98図，写真図版三三）

本址はオ－４Grに位置する。H27号住居址と重複関係にあるが、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は良好である。形態はいびつな楕円形を呈する。長軸方位はN－44°－Wを示す。規模は南北軸が85cm、東西軸が1.41m、深さは確認面より４cmを測る。本址よりの出土遺物は覆土中より出土し、１は土師器碗で底部を欠損する。調整は内外面丁寧なヘラミガキを施し、内面は黒色処理されている。２・３は土師器甕で、調整は何れも外面ヘラケズリ、内面ナデを施す。３は底部から胴部外面に煤が付着している。



1　黒褐色土　焼土粒子・炭化物を多量含む。
2　黄褐色土　焼土粒子・炭化物を多量含む。砂質。
3　明黄褐色土　焼土粒子・炭化物を少量含む。砂質。

第99図　土坑状遺構実測図

（4）　土坑状遺構　　（第99図）

本址は三塚遺跡報文の中で記載されているが、今回確認中に土坑底面より新たにピットが検出された為改めて報告する。

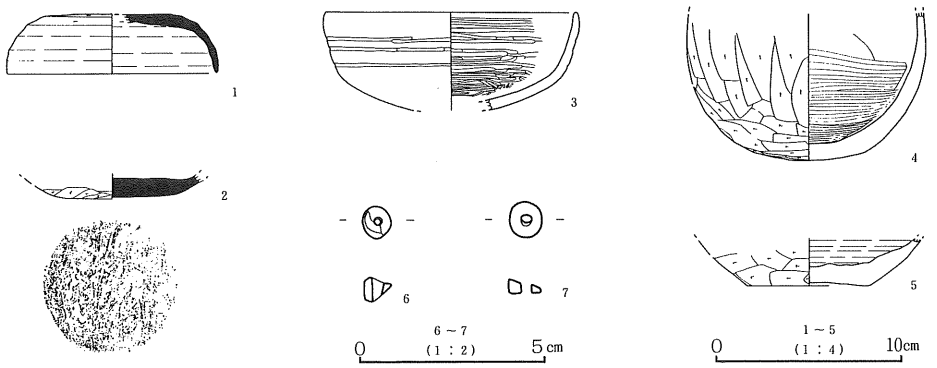
本址はカ－９・10Grに位置する。三塚遺跡Ｈ１号住居址と重複関係にあるが、新旧関係は本址の方が新しい。残存状況は良好である。

形態はほぼ長方形を呈する。長軸方位はＮ－78°－Ｗを示す。規模は北壁長が3.26m・東壁長が1.56m・南壁長が3.04m・西壁長1.58m、深さは確認面より26cmを測る。ピットは土坑四隅と長辺の中央部にそれぞれ検出され、規模は径が15～36cm、深さが８～26cmを測る。

第６節　遺構外遺物　（第100図）

１は須恵器蓋でありア－12・カ－12Grから出土した破片が接合し1／2残存になった。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、内外面がロクロヨコナデを施す。２は須恵器坏で底部のみの破片である。調整は底部外面が手持ちヘラケズリ、内面ナデが施されているが、内外面とも平行タタキメによる締め痕がわずかに残る。３は土師器坏で1／6ほど残存しオ－６Grより出土した。調整は外面が荒れていて不明であるが、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。また口縁部外面には不鮮明であるが２ヶ所の段を有する。４は土師器甕の底部から胴部でタ－６Grより出土した。調整は胴部外面ヘラケズリ、内面ナデを施す。５は土師器甕の底部である。調整は底部が静止糸切り離し、胴部外面ヘラケズリ、内面ロクロヨコナデが施されている。６・７は滑石製臼玉である。

この他に青磁片３点がある。(巻頭カラー参照)



第100図　遺構外出土遺物実測図

寺添遺跡住居址一覧表(1)

No.	形態	規模（m²・m）						主軸方位	カマド	柱穴	床の状態	備考
		面積	北壁	東壁	南壁	西壁	深さ					
H 1	方形	5.1	1.86	2.50	2.05	2.05	0.03	N-41°-W	炉	なし	炉周辺のみ硬質	北コーナーに60×40cmのPitあり。
H 2	方形	10.9	3.5	3.34	3.3	3.3	0.11	N-31°-W	北	なし	カマド周辺のみ硬質	
H 3	(方形)	(0.6)	—	—	(1.2)	(1.04)	0.24	N-28°-W	—		貼床が厚み14cm程施される。	
H 4	(方形)	(10.8)	—	—	(5.3)	(4.0)	0.21	N-27°-W	—			
H 5	方形	6.9	2.25	3.0	2.84	3.04	0.22	N-25°-W	北	なし	住居址中央部、カマド前面が特に硬質 貼床は6cmの厚み	北東、北西コーナーにそれぞれPitあり。北西コーナーPitからは遺物が多量に出土
H 6	方形	25.4	5.52	4.88	5.2	4.6	0.11	N-30°-W	炉	主柱4	全体に軟質	床面より獣骨出土
H 7	方形	6.0	2.0	2.5	2.2	2.52	—	N-23°-W	炉	なし	炉周辺のみ硬質	
H 8	方形	29.6	6.0	5.16	5.65	5.6	0.11	N-32°-W	北	主柱(4)	やや軟質	西壁に壁溝が巡る。
H 9	方形	(21.6)	5.0	4.4	(2.42)	(3.8)	0.07	N-48°-W	北	主柱2 掘り方時5	やや軟質 貼床は18cmの厚み	
H11	方形	36.6	6.42	6.3	6.0	5.92	0.18	N-29°-W	北	主柱4 入口2	カマド周辺が特に硬質 貼床は平均10cmの厚み	住居址下小型住居址あり。主柱4本、カマド北壁？西壁に壁溝が巡る。
H12	方形	7.9	3.04	2.92	3.1	2.54	0.10	N-22°-W	北	Pit 2	やや軟質	
H13	(方形)	(16.1)	—	—	(5.0)	(2.55)	—	N-26°-W	—		やや軟質の床面のみ検出	
H14	方形	13.6	(3.84)	4.04	3.95	3.82	0.06	N-22°-W	北	主柱4	全体に硬質 貼床は平均15cmの厚み	東壁に壁溝が巡る。
H16	(方形)	(0.8)	—	—	(1.45)	(1.53)	—	N-35°-W	—		全体に硬質 貼床は平均10cmの厚み	
H17	(方形)	(11.5)	—	(2.25)	—	(3.9)	0.03	N-20°-W	(炉)	主柱(4)	全体に硬質 貼床は13cmの厚み	西壁に壁溝が巡る。 北西コーナーPitより高坏・甕出土。
H18	方形	12.1	4.3	3.1	4.3	3.9	0.23	N-24°-W	北	Pit 6	全体に硬質 貼床は3cmの厚み	西壁・北壁西よりに壁溝が巡る。 床面に河原石が散乱。
H19	方形	(16.8)	4.79	4.1	(2.9)	(1.94)	0.07	N-30°-W	北	主柱4 入口1 壁柱穴5	全体に硬質 貼床は14cmの厚み	北壁一部・東壁・南壁一部に壁溝が巡る。
H20	方形	27.1	27.1	5.32	(4.52)	(3.08)	5.23	N-52°-E	東	主柱4	全体にやや軟質 貼床は14cmの厚み	南西コーナーに壁溝が巡る。 カマド内より臼玉出土。 拡張の可能性あり。

寺添遺跡住居址一覧表(2)

No.	形態	規模（m²・m）						主軸方位	カマド	柱穴	床の状態	備考
		面積	北壁	東壁	南壁	西壁	深さ					
H21	方形	(46.5)	(1.48)	−	(2.95)	8.18	0.06	N-26°-W	北	主柱 4 (6)?	全体にやや軟質	住居址東側が削平 炭火財が出土
H22	(方形)	(4.2)	(2.38)	−	−	(3.24)	0.12	N-34°-W	−	主柱(1)	全体的に硬質 貼床は20cmの厚み	西壁わきの掘り方が一段深くなる。
H23	方形	9.6	3.1	3.35	(0.38)	(1.32)	0.05	N-13°-E	北	主柱 4	全体に硬質 貼床は 9 cmの厚み	掘り方は住居址中央部が一段高く掘り残される。
H24	(方形)	(6.9)	3.08	(3.42)	−	(1.28)	0.04	N-33°-W	炉	Pit 2	全体にやや軟質	
H25	(方形)	(9.7)	(1.15)	−	−	(3.0)	−	N-26°-W	北	主柱(4)	全体にやや軟質 貼床は12cmの厚み	掘り方は、住居址中央部が一段深く掘り込まれる。
H26	方形	23.1	4.89	4.66	4.68	4.8	0.05	N-43°-E	北	主柱(4)	全体にやや軟質	拡張の可能性あり。
H27	方形	32.0	5.45	5.97	5.23	5.26	−	N-33°-W	北	主柱 4	住居址中央部のみ床面確認	掘り方は住居址中央部のみ一段高く掘り残される。
H28	方形	(33.7)	(3.95)	(6.23)	6.05	(2.16)	0.09	N-25°-W	炉	主柱 4	全体にやや軟質	南東コーナーに貯蔵穴？
H29	方形	12.9	3.63	3.27	3.68	3.5	0.2	N-34°-W	−	主柱 4	地山を踏み固めた状態	
H30	(方形)	(22.5)	5.15	(1.75)	(2.86)	4.86	0.05	N-20°-W	北	主柱 4	地山を踏み固めた状態	カマドの残存状況良好
H31	(方形)	1.8	(0.46)	(2.82)	4.12	−	0.13	N-30°-W		Pit 2	地山をふみ固めた状態	

寺添遺跡掘立柱建物址一覧表

No.	様式	間数	桁行き×梁行き(m)	ピット規模(cm)		ピット形態	主軸方位	検出本数	備考
				径	深さ				
F 1	側柱式	3 × 3	1.34～1.86 ×1.34～1.4	62～94	21～33	円形	N-61°-E	9	東側柱列が 3 号井戸址によって削平。 覆土は砂質の黒色土。
F 2	側柱式	2 × 4	1.6 ×0.88～1.66	27～78	27～78	円形	N-29°-W	12	西側柱列が検出されなかった。 庇の可能性あり。
F 3	側柱式	1 × 1	2.43 ×2.41	63～78	17～31	円形	N-30°-W	4	住居址柱穴の残存部の可能性あり。
F 4	側柱式	3 × 3	1.31～1.39 ×1.09～1.42	52～73	13～27	円形	N-61°-E	7	北側と西側の柱列が検出されなかった。 庇の可能性あり。
F 5	側柱式	1 × 1	2.6 ×2.02	52～70	22～53	円形	N-22°-E	3	住居址柱穴の残存部の可能性あり。
F 6	側柱式	1 × 1	3.0 ×2.2	52～65	15～17	円形	N-12°-W	3	住居址柱穴の残存部の可能性あり。

寺添遺跡出土土器観察表

H 2 号住居址

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
11-1	須恵器 坏	—	10.4	—	7.5YR7/2 明褐灰色	φ2～4㎜の白色粒子を含む。黒色粒子を含む。	外面＞体部ロクロヨコナデ・底部手持ちヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	内部青灰色
11-2	土師器 甕	21.0	—	—	7.5YR8/4 浅黄橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を含む。長石を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	2次焼成？
11-3	土師器 甕	—	—	—	7.5YR8/4 浅黄橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を含む。長石・砂粒を含む。	外面＞胴部ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	

H 3 住居址

13-1	土師器 鉢	18.6	—	—	7.5YR8/4 浅黄橙色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞横方向のヘラミガキ	内面　黒色処理

H 5 号住居址

17-1	須恵器 高台坏	11.9	8.3	4.3	N6/0 灰色	φ1～2㎜の黒色粒子砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナ・底部回転ヘラケズリ後高台貼付 内面＞ロクロヨコナデ	内面に火だすきあり。
17-2	須恵器 長頸壺	10.2	—	—	N3/0 暗灰色	φ1～2㎜の白色粒子を含む。	外面＞ヨコナデ 内面＞ヨコナデ	内面に自然釉付着
17-3	土師器 甕	—	4.0	—	7.5YR6/4 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子・砂粒を多く含む。	外面＞ナデ 内面＞ヘラナデ	底部に木葉痕あり。
17-4	土師器 甕	22.6	—	—	5YR6/6 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	
17-5	土師器 甕	21.0	5.2	28.5	5YR6/6 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	
17-6	土師器 甕	22.1	5.5	28.1	5YR7/8 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。 砂粒を多く含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	

H 6 住居址

19-1	土師器 坏	15.2	—	—	7.5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。	外面＞ヘラミガキ 内面＞ヘラミガキ	内外面一部赤色塗彩？ 胎土よく精練されている。
19-2	土師器 坏	13.8	—	—	5YR6/6 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・底部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ	
19-3	土師器 坏	11.2	—	4.0	5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。 長石・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・底部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・見込み部ナデ後ヘラミガキ	
19-4	土師器 坏	16.0	9.2	4.8	2.5YR6/6 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。 砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・底部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・見込み部ナデ	焼成良好

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
19-5	土師器坏	14.0	丸底	4.4	7.5YR7/4 にぶい橙色	φ1～2mmの赤色粒子を多く含む。長石・白色粒子を含む。	外面＞体部ナデ・口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 内面＞ヘラミガキ	内面の磨耗著しい。
19-6	土師器坏	12.4	丸底	5.2	5YR6/6 橙色	φ1～2mmの赤色粒子を微量・白色粒子を多量含む。	外面＞体部ヘラケズリ後ナデ・口縁部ナデ 内面＞ヘラナデ後ヘラミガキ	
19-7	土師器坏	12.5	丸底	6.8	5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2mmの赤色粒子を微量含む。長石・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ 内面＞ヘラミガキ	
19-8	土師器小型甕	16.4	－	－	5YR7/4 にぶい橙色	φ3～4mmの赤色粒子・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部～底部ヘラケズリ 内面＞ハケメ	内面黒色処理
19-9	土師器甑	13.3	－	10.3	2.5YR4/8 赤褐色	φ2～3mmの赤色粒子・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	単孔（焼成前）
19-10	土師器甑	15.6	7.9	4.6	2.5YR5/8 明赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子を微量含む。	外面＞ナデ 内面＞ハケメ	貼土よく精練されている。
19-11	土師器高坏	－	－	－	2.5YR4/8 赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子を多量・長石を含む。	外面＞ヘラミガキ 内面＞ヘラミガキ	
19-12	土師器甕	－	7.8	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	φ3～4mmの赤色粒子を多量・砂粒を含む。	外面＞ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	
19-13	土師器甕	－	5.5	－	5YR6/6 橙色	φ1～2mmの赤色粒子を微量含む。長石・砂粒を含む。	外面＞ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	

H８号住居址

24-1	須恵器坏	14.1	8.3	4.0	5PB7/1 明青灰色	長石・φ1～2mmの赤色粒子・砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラ切り 内面＞ロクロヨコナデ	やや軟質の焼き
24-2	須恵器坏	14.6	7.0	4.3	5B3/1 暗青灰色	石英・長石を含む。φ2～3mmの砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラ切り後ナデ 内面＞ロクロヨコナデ	断面赤化
24-3	須恵器坏	15.2	9.2	4.0	5YR3/4 暗赤褐色	石英・長石を含む。φ2～3mmの砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナデ 内面＞ロクロヨコナデ	
24-4	須恵器坏	－	6.9	－	N5/0 灰色	石英・長石を含む。φ2～3mmの黒色粒子を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面＞ロクロヨコナデ	焼成良好
24-5	土師器坏	14.9	9.0	4.2	5YR6/4 にぶい橙色	石英・長石を含む。φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ 内面＞ヨコナデ後ヘラミガキ	
24-6	土師器坏	15.2	8.8	4.0	5YR6/4 にぶい橙色	石英・長石・大粒の砂粒を含む。φ2～3mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・見込み部ナデ後ヘラミガキ	
24-7	土師器坏	16.0	10.0	3.5	5YR6/4 にぶい橙色	石英・長石を含む。φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・見込み部ナデ後ヘラミガキ	
24-8	須恵器蓋	15.5	つまみ径 3.4	2.1	N4/0 灰色	長石を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・つまみ部貼付 内面＞ロクロヨコナデ	天井部自然釉付着
24-9	須恵器蓋	18.9	－	－	2.5YG4/1 暗オリーブ灰色	長石を含む。	外面＞ロクロヨコナデ 内面＞ロクロヨコナデ	天井部自然釉付着

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
24-10	須恵器 甕	－	11.0	－	5YG5/1 オリーブ灰色	長石・φ3～4mmの砂粒を含む。	外面＞平行タタキ後部分的にナデ 内面＞ナデ（工具使用）	
24-11	須恵器 壺	－	11.0	－	N4/0 灰色	石英・長石を含む。	外面＞ロクロヨコナデ後胴下半～底部回転ヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	底部内面に自然釉付着
24-12	土師器 甕	15.4	－	－	5YR5/8 明赤褐色	石英・長石を含む。 φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	口縁内面に煤付着
24-13	土師器 甕	17.8	－	－	2.5YR6/8 橙色	石英・長石を含む。	外面＞口縁部～頸部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞ヨコナデ	

H９号住居址

27-1	土師器 坏	11.8	丸底	4.9	10R4/8 赤色	長石・砂粒を含む。 φ1～2mmの赤色粒子・白色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラナデ後底部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラナデ	
27-2	土師器 坏	11.4	丸底	6.0	10R4/8 赤色	φ1～2mmの赤色粒子・白色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラナデ	
27-3	土師器 坏	14.0	丸底	－	10R4/8 赤色	φ1～2mmの赤色粒子・白色粒子を含む	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ナデ（一部工具使用） 内面＞口縁部ヨコナデ後ナデ（一部工具使用）	

H11号住居址

31-1	須恵器 蓋	－	－	－	5PB2/1 青黒色	φ1～2mmの白色粒子を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・天井部ヘラおこし 内面＞ロクロヨコナデ	
31-2	土師器 坏	14.0	11.3	5.0	7.5YR4/4 褐色	長石・黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面＞口縁部ヨコナデ・見込み部ナデ後ヘラミガキ	
31-3	土師器 坏	13.8	8.0	3.7	7.5YR4/6 褐色	長石・黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞体部～底部に指頭圧痕残る。口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後ナデ	底部に木葉痕あり。
31-4	土師器 坏	14.0	－	－	7.5YR6/6 橙色	長石・黒雲母・φ2～3mmの赤色粒子を含む。	外面＞体部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ 内面＞ナデ後ヘラミガキ	内面に黒斑あり。
31-5	土師器 坏	14.8	8.8	4.2	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石・砂粒・φ1～2mmの赤色粒子を多量含む。	外面＞底部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞ナデ後ヘラミガキ	内面黒色処理
31-6	土師器 坏	12.0	6.0	4.1	7.5YR6/8 橙色	長石・黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・体部摩耗著しく判別できない。 内面＞口縁部ヨコナデ・体部ヘラナデ後ヘラミガキ	内面黒斑あり。
31-7	土師器 小形丸底壺	－	2.5	－	7.5YR5/3 にぶい褐色	長石・黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞ナデ後ヘラミガキ 内面＞ヘラオサエ後ヘラミガキ	内面黒色処理
31-8	土師器 高坏	－	－	－	10R5/8 赤色	黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞ナデ後丁寧なヘラミガキ 内面＞ヘラケズリ。坏部接合部にしぼり目あり。	
31-9	土師器 甑？	21.5	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	石英・黒雲母・φ3～4mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ハケメ後ヘラミガキ	
31-10	土師器 鉢	16.0	12.2	－	5YR6/6 橙色	黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子・砂粒を多量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ 外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ後ヘラミガキ	

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
31-11	土師器甕	19.0	—	—	7.5YR6/6 橙色	黒雲母・φ2～3mmの赤色粒子・φ2～5mmの砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ後ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ	
31-12	土師器甕	—	7.5	—	5YR6/8 橙色	黒雲母・φ2～3mmの赤色粒子・φ2～5mmの砂粒を多量含む。	外面＞胴部ナデ・底部外周ヘラナデ 内面＞ヘラナデ	
31-13	土師器甕	—	9.0	—	2.5YR5/8 明赤褐色	黒雲母・φ1～2mmの赤色粒子・φ1～2mmの砂粒を多量含む。	外面＞ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面＞ハケメ後ナデ	
31-14	土師器甕	—	8.0	—	7.5YR6/6 橙色	φ2～3mmの赤色粒子・φ1～2mmの砂粒を多量含む。	外面＞ナデ 内面＞ナデ	内面に黒斑あり。

H12号住居址

35-1	土師器甕	—	8.8	—	5YR7/3 にぶい橙色	φ2～3mmの赤色粒子を多量含む。白色の粒子を少量含む。	外面＞ナデ 内面＞ナデ	
35-2	土師器甑	—	18.1	—	5YR6/3 にぶい橙色	φ2～3mmの赤色粒子を多量含む。砂粒を含む。	外面＞ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ後ヘラミガキ	

H13号住居址

37-1	土師器坏	13.6	4.8	4.0	5YR6/4 にぶい橙色	長石・砂粒を含む。φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞体部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ 内面＞見込み部ナデ・口縁部ヨコナデ	

H 14 号住居址

40-1	須恵器蓋	12.0	—	—	5B2/1 青黒色	白色粒子を含む。	外面＞天井部ヘラケズリ・口縁部ロクロヨコナデ 内面＞ロクロヨコナデ	
40-2	土師器坏	15.3	—	—	5YR6/6 橙色	φ1～2mmの赤色粒子・長石・黒雲母を含む。	外面＞磨耗著しく不明 内面＞ヘラミガキ	内面黒色処理
40-3	土師器碗	13.0	8.0	9.0	7.5YR5/3 にぶい褐色	φ1～2mmの赤色粒子・長石・石英・黒雲母を含む。	外面＞体部指おさえ後ナデ・口縁部ヨコナデ 内面＞体部ナデ・口縁部ヨコナデ	

H16号住居址

40-4	土師器甑 or 鉢	17.0	—	—	5YR4/6 赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ナデ 内面＞胴部ナデ後口縁部ヨコナデ	

H17住居址

43-1	土師器坏	13.0	丸底	—	2.5YR5/8 明赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子を微量・長石を少量含む。	外面＞体部ナデ・底部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞体部ナデ・口縁部ヨコナデ	
43-2	土師器小型甕	12.0	4.2	6.1	7.5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。砂粒を多く含む。	外面＞胴部ナデ（指頭圧痕残る）・口縁部ヨコナデ 内面＞ナデ後ヘラナデ	
43-3	土師器高坏	—	10.8	—	10R5/8 赤色	φ1～2mmの赤色粒子を多く含む。白色粒子を含む。	外面＞脚部ナデ後ヘラミガキ 内面＞脚部ヘラケズリ	

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
43-4	土師器甕	16.0	9.0	21.8	7.5YR5/3 にぶい褐色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石・砂粒を含む。	外面＞胴部ナデ・胴部下半ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞胴部ヘラナデ・口縁部ヨコナデ	
43-5	土師器甕	－	6.0	－	5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石・砂粒を含む。	外面＞胴部ハケメ後胴上半ナデ 内面＞胴下半部ハケメ	

H18号住居址

45-1	須恵器高台坏	－	9.4	－	10YG7/1 明緑灰色	φ1～2㎜の黒色粒子を含む。長石を含む。	外面＞体部ロクロヨコナデ・底部回転ヘラケズリ後高台貼付 内面＞ロクロヨコナデ	
45-2	土師器甕	21.4	－	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	

H19号住居址

49-1	須恵器坏	14.0	9.4	5.0	N4/0 灰色	φ2～3㎜の黒色粒子・砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	見込み部にハケメ？
49-2	須恵器坏	－	10.0	－	N7/0 灰白色	φ2～3㎜の黒色粒子・砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部ナデ 内面＞ロクロヨコナデ	外面底部に成形時のハケメ？
49-3	土師器坏	12.5	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐色	長石・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ 内面＞ナデ後口縁部ヨコナデ	胎土よく精練されている。
49-4	土師器小型甕	11.0	－	－	5YR3/6 暗赤褐色	φ1～2㎜の赤色粒子を含む。長石・黒雲母を含む。	外面＞口縁部胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	
49-5	土製品	－	－	－	10YR4/1 褐灰色	φ1～2㎜の赤色粒子を含む。長石・砂粒を含む。	外面＞ナデ	用途不明 土製紡水車？

H20住居址

52-1	土師器甕	16.4	－	－	7.5YR7/2 明褐灰色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。φ5㎜ぐらいの砂粒を含む。	外面＞胴部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ 内面＞胴部ヘラナデ後口縁部ヨコナデ	

H21号住居址

55-1	土師器坏	－	－	－	5YR5/4 にぶい赤褐色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石・黒雲母を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面＞口縁部ヨコナデ・体部ヘラナデ後ヘラミガキ	
55-2	土師器坏	14.2	－	－	2.5YR5/8 明赤褐色	φ1～2㎜の赤色粒子・長石・黒雲母を含む。	外面＞体部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ	
55-3	土師器甕	－	7.2	－	5YR6/6 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。長石・砂粒を多量含む。	外面＞胴部・底部ヘラケズリ 内面＞胴部ナデ・底部ヘラナデ	底部焼けむら 焼成良好
55-4	土師器甕	－	6.6	－	5YR4/6 赤褐色	φ1～2㎜の赤色粒子・砂粒を多量含む。	外面＞底部ヘラケズリ・胴部ナデ後ヘラミガキ 内面＞ヘラナデ	

H22号住居址

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
57-1	土師器 碗	10.3	—	—	5YR4/6 赤褐色	φ1～2㎜の赤色粒子を含む。白色粒子を含む。	外面＞体部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ 内面＞ハケメ後体部ヘラナデ	
57-2	土師器 小型甕	9.5	4.5	7.5	2.5YR5/6 明赤褐色	φ2～3㎜の赤色粒子を多量含む。長石を含む。	外面＞胴部～底部ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部～底部ヘラナデ	
57-3	土師器 甕	18.2	—	—	5YR5/6 橙色	φ2～3㎜の赤色粒子・長石を含む。	外面＞胴部ハケメ後ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ハケメ	

H23号住居址

59-1	土師器 坏	12.5	丸底	—	5YR6/8 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・見込部ナデ後ヘラミガキ	胎土よく精練されている。
59-2	土師器 小型甕	—	—	—	7.5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	
59-3	土師器 小型甕	11.4	—	—	7.5YR7/4 にぶい橙色	砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	
59-4	土師器 小型甕	13.6	—	—	10R4/8 赤色	砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	焼成良好

H24号住居址

62-1	土師器 甕	20.2	—	—	7.5YR7/4 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を含む。砂粒を含む。	外面＞口縁部強いヨコナデ・胴部ナデ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	

H25号住居址

62-2	土師器 坏	15.0	—	—	5YR5/6 明赤褐色	φ1～2㎜の赤色粒子を微量含む。長石・砂粒含む。	外面＞底部ヘラケズリ後ナデ・口縁部ヨコナデ 内面＞ヨコナデ	

H26号住居址

67-1	須恵器 坏	12.4	6.6	5.0	N5/0 灰色	長石を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部～底部外周回転ヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	
67-2	土師器 坏	16.4	—	—	5YR6/8 橙色	黒雲母・白色粒子を含む。	外面＞丁寧なヘラミガキ 内面＞丁寧なヘラミガキ	
67-3	土師器 坏	—	11.2	—	5YR7/4 にぶい橙色	白色粒子・砂粒を多量含む。	外面＞底部ヘラケズリ 内面＞丁寧なヘラミガキ	
67-4	土師器 甕	—	—	—	5YR4/4 にぶい赤褐色	φ3～4㎜の赤色粒子を含む。長石・砂粒を含む。	外面＞ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	

H27号住居址

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
70-1	土師器坏	11.6	—	—	5YR6/6橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・体部ヘラケズリ 内面＞ヘラミガキ	胎土よく精練されている。
70-2	土師器坏	10.2	9.6	5.1	2.5YR2/8明赤褐色	φ2～3mmの赤色粒子を微量含む。大粒の砂粒を含む。	外面＞摩耗著しく不明 内面＞摩耗著しく不明	
70-3	土師器坏	14.4	丸底	4.2	2.5YR5/8明赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子を微量・砂粒を少量含む。	外面＞ヘラミガキ 内面＞ヘラミガキ	胎土よく精練されている。
70-4	土師器坏	12.9	丸底	5.4	5YR6/8橙色	φ2～3mmの赤色粒子を微量・砂粒を多量含む。	外面＞ナデ後底部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞ヘラミガキ	
70-5	土師器坏	17.5	丸底	—	5YR6/8橙色	φ1～2mmの赤色粒子を多量・黒色粒子を多量含む。	外面＞ヘラミガキ 内面＞ヘラミガキ	
70-6	土師器甕	15.0	—	—	5YR7/8橙色	φ1～2mmの赤色粒子を微量含む。大粒の砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部～胴部ヘラナデ後口縁部ヨコナデ後頸部ヘラケズリ	
70-7	土師器小形甕	—	5.6	—	5YR7/4にぶい橙色	砂粒を含む。	外面＞胴部ナデ・底部ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	
70-8	土師器高坏	—	—	—	5YR6/8橙色	φ1～2mmの赤色粒子を多量含む。砂粒を含む。	外面＞坏部ヨコナデ・脚部ヘラナデ 内面＞ヘラミガキ	
70-9	土師器高坏	—	—	—	2.5YR5/8明赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子・白色粒子を多量含む。	外面＞ナデ後ヘラミガキ 内面＞ヘラケズリ	

H28号住居址

72-1	土師器坏	15.2	丸底	4.8	2.5YR5/8明赤褐色	φ2～3mmの赤色粒子を多量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ 内面＞体部ヘラミガキ・口縁部ヨコナデ	胎土よく精練されている。
72-2	土師器坏	13.0	丸底	6.0	2.5YR5/8明赤褐色	φ1～2mmの赤色粒子を微量含む。長石・砂粒含む。	外面＞体部ハケメ後底部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞体部ヘラミガキ・口縁部ヨコナデ	
72-3	土師器壺	18.0	—	—	5YR7/8にぶい橙色	赤色粒子を微量含む。長石・砂粒含む。	外面＞口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ・頸部指頭圧痕とハケメが残る。	
72-4	土師器壺	15.8	—	—	5YR7/8にぶい橙色	長石・砂粒含む。	外面＞口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ	
72-5	土師器甕	—	—	—	5YR6/8橙色	白色粒子・砂粒を多量含む。	外面＞胴部ナデ・底部ヘラケズリ 内面＞ナデ	
72-6	土師器壺	—	7.0	—	5YR7/6橙色	長石・砂粒を多量含む。	外面＞ナデ 内面＞ナデ	

H29号住居址

74-1	土師器坏	15.0	—	—	5YR6/6橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞体部ナデ後体部下半ヘラケズリ・口縁部ヘラミガキ 内面＞ヘラミガキ	内面黒色処理

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
74-2	土師器甕	24.0	—	—	7.5YR8/4浅黄橙色	φ3～4mmの赤色粒子・黒色粒子を含む。	外面＞胴部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデ 内面＞胴部ハケメ後ナデ・口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ	口縁部に沈線状の段がある。

H30号住居址

77-1	土師器坏	13.0	丸底	5.3	5YR6/8橙色	φ3～4mmの赤色粒子を微量含む。白色粒子・砂粒を含む。	外面＞体部ヘラケズリ後ヘラミガキ・口縁部ヨコナデ 内面＞見込み部ナデ・口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ	
77-2	土師器鉢	10.8	6.0	9.3	5YR7/3にぶい橙色	φ2～3mmの赤色粒子を含む。白色粒子・砂粒を含む。	外面＞口縁部ハケメ・胴部ナデ後ヘラミガキ 内面＞口縁部ハケメ・胴部～底部ヘラミガキ	
77-3	土師器壺	16.0	—	—	5YR6/6橙色	φ2～3mmの赤色粒子を多量含む。白色粒子・長石を多量含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面＞口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ・胴部ヘラナデ	
77-4	土師器小形甕	13.8	—	—	5YR6/8橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。白色粒子・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ後ナデ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	
77-5	土師器甕	20.6	—	—	5YR6/4にぶい橙色	φ2～3mmの赤色粒子を含む。白色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ナデ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ	
77-6	土師器甕	15.6	—	—	5YR6/6橙色	φ2～3mmの赤色粒子・白色粒子を多量含む。	外面＞胴部ヘラケズリ後上半のみナデ後口縁部ヨコナデ 内面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ	

H31号住居址

79-1	土師器坏	12.2	—	—	7.5YR6/2灰褐色	φ2～3mmの赤色粒子を多量含む。白色粒子を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面＞丁寧なヘラミガキ	
79-2	土師器高坏	—	11.2	—	5YR7/8橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。白色粒子・砂粒を含む。	外面＞脚端部ヨコナデ後脚柱部ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	

4号井戸址

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
91-1	須恵器 蓋	—	—	—	N3/0 暗灰色	白色粒子を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・天井部回転ヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	外面に自然釉付着

M1号溝状遺講

91-2	土師器 甕	—	7.0	—	7.5YR8/2 灰白色	長石を含む。	外面＞胴部ヘラナデ後ヘラケズリ・底部ヘラケズリ 内面＞ヘラナデ	

D1号土坑

94-1	須恵器 坏	—	6.4	—	7.5Y6/1 灰色	白色粒子を含む。	外面＞底部ヘラおこし後ナデ 内面＞ロクロヨコナデ	
94-2	須恵器 坏	—	10.0	—	N7/0 灰白色	長石・石英を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラケズリ後ナデ 内面＞ロクロヨコナデ	胎土よく精練されている。 内面見込み部磨かれている。
94-3	土師器 坏	15.8	8.8	3.4	5YR7/4 にぶい橙色	φ1～2㎜の赤色粒子を多量含む。石英・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後体部ヘラケズリ・底部ヘラケズリ 内面＞ヨコナデ	
94-4	須恵器 高台坏	—	12.4	—	10R3/2 暗赤褐色	長石・砂粒含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラケズリ後高台貼付 内面＞ロクロヨコナデ	還元焔不足で赤化
94-5	須恵器 短頸壺	12.6	—	—	N3/0 暗灰色	白色粒子を含む。	外面＞ロクロヨコナデ 内面＞ロクロヨコナデ	内外面に自然釉付着
94-6	須恵器 壺	—	12.0	—	N3/0 暗灰色	白色粒子を含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部回転ヘラケズリ後高台貼付 内面＞ロクロヨコナデ	底部に「ノ」のヘラ記号
94-7	須恵器 長頸壺	—	—	—	N3/0 暗灰色	白色粒子を含む。	外面＞ロクロヨコナデ 内面＞ロクロヨコナデ	外面に自然釉付着
94-8	須恵器 甕	23.6	—	—	10YR8/3 浅黄橙色	φ2～3㎜の赤色粒子・長石を含む。	外面＞胴部平行タタキメ・口縁部平行タタキメ後ヨコナデ 内面＞胴部ヘラナデ・口縁部ヨコナデ	
94-9	須恵器 甕	32.6	—	—	N3/0 暗灰色	白色粒子を含む。	外面＞胴部平行タタキメ後ヨコナデ・口縁部ヨコナデ 内面＞胴部同心円タタキメ後ヨコナデ・口縁部ヨコナデ	
94-10	須恵器 甕	—	—	—	2.5YG5/1 オリーブ灰色	白色粒子を含む。	外面＞胴部平行タタキメ後ヨコナデ・頸部ヨコナデ 内面＞胴部ナデ・頸部ヨコナデ	
94-11	須恵器 甕	—	—	—	2.5YG5/1 オリーブ灰色	白色粒子を含む。	外面＞胴部平行タタキメ後ヨコナデ・頸部ヨコナデ 内面＞ヨコナデ	
94-12	土師器 鉢	29.2	—	—	5YR6/6 橙色	φ2～3㎜の赤色粒子を含む。長石・砂粒を含む。	外面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラケズリ 内面＞口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ	

D3号土坑

98-1	土師器 碗	13.0	—	—	5YR6/6 橙色	φ1～2㎜の赤色粒子・白色粒子を含む。	外面＞丁寧なヘラミガキ 内面＞口縁部ヨコナデ後丁寧なヘラミガキ	内面黒色処理

挿図番号	器種	法量			色調	胎土	調整	備考
		口径	底径	器高				
98-2	土師器 甕	17.0	—	—	5YR7/3 にぶい橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。白色粒子・長石を含む。	外面＞口縁部ハケメ後胴部ヘラケズリ後ナデとヘラミガキ 内面＞口縁部ハケメ後胴部ヘラナデ	
98-3	土師器 甕	—	7.0	—	5YR6/3 にぶい橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。白色粒子・長石を含む。	外面＞胴部・底部ヘラケズリ 内面＞胴部～底部ヘラナデ	底部～胴部煤付着

遺構外出土遺物

100-1	須恵器 蓋	—	11.2	3.2	2.5Y5/1 黄灰色	φ2～3mmの黒色粒子を多量含む。	外面＞ロクロヨコナデ・天井部回転ヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	
100-2	須恵器 坏	—	7.4	—	5Y5/1 灰色	白色粒子を多量含む。	外面＞ロクロヨコナデ・底部手持ちヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	底部内外面にタタキメ残る。 内面火だすき有り。
100-3	土師器 坏	13.6	—	—	7.5YR8/4 浅黄橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。	外面＞体部ナデ・口縁部ヨコナデ 内面＞ヘラミガキ	胎土よく精練されている。 口縁部に有段
100-4	土師器 甕	—	丸底	—	7.5YR8/4 浅黄橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。長石・砂粒を含む。	外面＞ヘラケズリ 内面＞ハケメ	
100-5	土師器 ロクロ甕	—	6.4	—	7.5YR8/4 浅黄橙色	φ1～2mmの赤色粒子を含む。長石・砂粒を含む。	外面＞ロクロヨコナデ後底部静止糸切り・胴部下半ヘラケズリ 内面＞ロクロヨコナデ	

玉類観察表(1)

挿図番号	種類	材質	最大径(cm)	穴径(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	欠損状態	出土遺構	出土位置	備考
24-18	管玉	碧玉	0.6	0.2	2.2	<1.12>	側面一部欠損	H 8 号住居址	覆土	
32-7	管玉	碧玉	0.7	0.4	2.3	2.31	完形	H11号住居址	覆土	
32-8	模造品 紡錘車	滑石	<1.1>	−	0.4	<1.73>	1/4 残存	〃	−	表面に直線状の刻みあり
32-9	臼玉	滑石	0.9	0.3	0.5	0.90	ほぼ完形	〃	−	側面粗いミガキ
32-10	〃	〃	0.9	0.2	0.5	0.86	ほぼ完形	〃	−	〃
32-11	〃	〃	0.9	0.2	0.3	0.58	完形	〃	−	〃
32-12	〃	〃	0.9	0.2	0.5	0.78	ほぼ完形	〃	床直	〃
32-13	〃	〃	0.9	0.3	0.5	0.79	ほぼ完形	〃	−	〃
32-14	〃	〃	0.9	0.3	0.3	0.49	ほぼ完形	〃	床直	〃
32-15	〃	〃	0.9	0.3	0.4	<0.70>	一部欠損	〃	床直	〃
32-16	〃	〃	0.9	0.3	0.4	0.68	ほぼ完形	〃	床直	〃
32-17	〃	〃	0.9	0.2	0.5	0.98	完形	〃	覆土	〃
32-18	〃	〃	0.9	0.3	<0.3>	<0.37>	一部欠損	〃	床直	〃
32-19	〃	〃	0.9	0.3	<0.2>	<0.39>	一部欠損	〃	−	表面に直線状の刻み 側面粗いミガキ
32-20	〃	〃	<0.8>	0.2	<0.2>	<0.28>	一部欠損	〃	床直	
32-21	〃	〃	0.9	0.2	0.4	<0.47>	一部欠損	〃	−	
32-22	〃	〃	0.7	0.2	0.5	0.65	ほぼ完形	〃	床直	側面粗いミガキ
32-23	〃	〃	0.7	0.3	<0.2>	<0.24>	一部欠損	〃	覆土	〃
32-24	〃	〃	<0.8>	<0.3>	<0.2>	<0.15>	1/2残存	〃	貼床内	〃
32-25	〃	〃	0.5	0.15	0.4	0.24	完形	〃	覆土	〃
32-26	〃	〃	0.5	0.15	0.4	<0.19>	一部欠損	〃	床直	〃
32-27	〃	〃	0.4	0.15	<0.1>	<0.07>	一部欠損	〃	床直	
52-2	臼玉	滑石	1.1	0.3	0.7	1.81	完形	H20号住居址	カマド内	側面研磨
52-3	〃	〃	1.1	0.2	0.6	1.48	ほぼ完形	〃	〃	〃
52-4	〃	〃	1.1	0.3	0.7	1.88	完形	〃	〃	〃
52-5	〃	〃	1.1	0.3	0.6	1.50	完形	〃	〃	〃
52-6	〃	〃	0.9	0.2	<0.5>	0.67	一部欠損	〃	〃	側面粗いミガキ
52-7	〃	〃	0.7	0.2	<0.5>	<0.49>	一部欠損	〃	−	〃
52-8	〃	〃	0.8	0.2	<0.4>	0.62	一部欠損	〃	−	〃
52-9	〃	〃	0.9	0.3	0.5	0.84	ほぼ完形	〃	覆土	側面研磨
52-10	〃	〃	0.7	0.2	0.3	0.29	ほぼ完形	〃	床直	〃
52-11	〃	〃	0.7	0.2	<0.3>	<0.24>	一部欠損	〃	〃	〃
52-12	〃	〃	0.6	0.2	0.4	0.29	ほぼ完形	〃	〃	〃
55-5	臼玉	滑石	0.6	0.3	0.5	0.30	ほぼ完形	H21号住居址	床直	側面粗いミガキ
55-6	〃	〃	0.7	0.2	0.2	<0.15>	一部欠損	〃	〃	側面研磨
57-5	管玉	碧玉	0.9	0.4	2.0	2.92	完形	H22号住居址	貼床内	
67-5	勾玉？	土製	1.0	0.3	<2.4>	3.18	一部欠損	H26号住居址	P 1 内	
67-6	臼玉	滑石	1.0	0.3	0.8	1.26	ほぼ完形	〃	カマド内	側面粗いミガキ

玉類観察表(2)

挿図番号	種　類	材　質	最大径(cm)	穴　径(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	欠損状態	出土遺構	出土位置	備　考
67-7	臼　玉	滑　石	0.9	0.3	0.5	0.64	ほぼ完形	H26号住居址	貼床内	側面粗いミガキ
70-10	臼　玉	滑　石	0.6	0.2	0.5	0.41	完形	H27号住居址	床　直	側面研磨
70-11	〃	〃	0.6	0.2	0.3	0.24	完形	〃	〃	〃
70-12	〃	〃	0.6	0.2	0.4	0.34	完形	〃	〃	〃
70-13	〃	〃	0.6	0.2	0.3	0.25	完形	〃	〃	〃
70-14	〃	〃	0.6	0.2	0.4	0.32	完形	〃	〃	〃
70-15	〃	〃	0.6	0.2	0.3	0.20	完形	〃	〃	〃
70-16	〃	〃	0.6	0.2	0.2	0.16	完形	〃	〃	〃
70-17	〃	〃	0.5	0.2	0.2	0.11	完形	〃	〃	〃
74-5	模造品円板	滑　石	<0.7>	<0.1>	0.2	<0.97>	1/3残存	H29号住居址	－	
100-6	臼　玉	滑　石	0.7	0.2	<0.7>	<0.60>	一部欠損	カ－8Gr	－	側面粗いミガキ
100-7	〃	〃	0.9	0.3	<0.4>	<0.53>	一部欠損	表採	－	〃

第Ⅴ章　考　察

第１節　調査の総括

ここでは、今回の調査に当たっての所感を述べ、検出された遺構・遺物について簡単にまとめて調査の総括としたい。

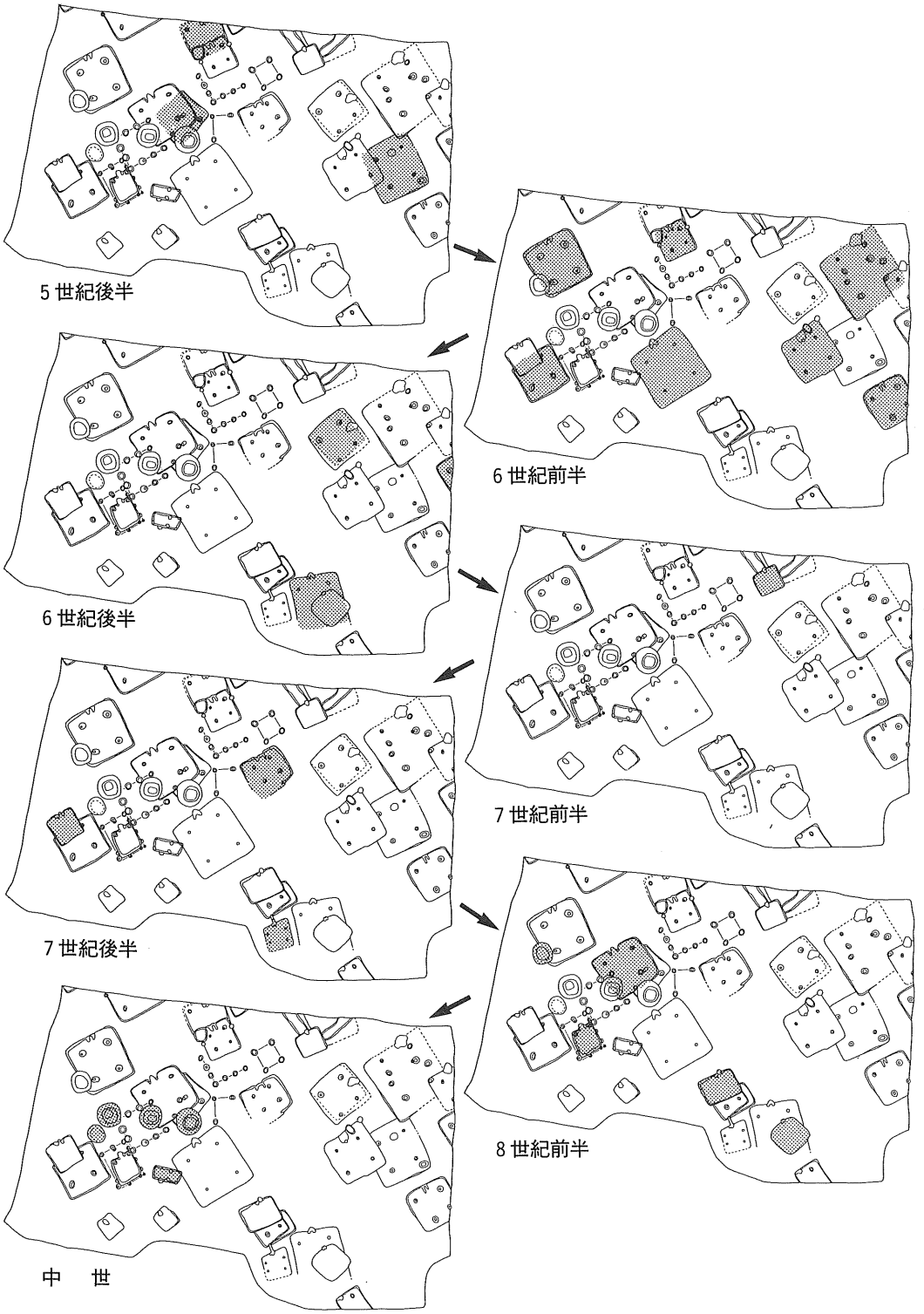
寺添遺跡の発掘調査は、野沢地籍における暫くぶりの発掘調査であった。野沢地籍周辺の沖積低地は、昭和40年代から50年代前半を中心に過去何度かの発掘調査が行われ、おもに古墳時代後期の竪穴住居址が検出されている。これら調査は水田の圃場整備に伴うものであったが、発掘調査は開発面積に対して十分な面積が確保されず消滅していった埋蔵文化財も多かった。

今回の調査においても圃場整備終了後の地籍である為、遺跡の存在は疑問視される向きもあった。しかし、試掘調査の結果は開発面積全体に遺構が広がり、2000㎡に対して竪穴住居址32軒という遺構密集地域であることが解った。この様に遺跡が良好な状態で残存したのは、おそらく今日の圃場整備の造成工事が削平の後客土を行う工法が主流であるのに対し、この野沢・桜井・跡部等の地籍は平地だった為、旧水田面にそのまま盛土を行うといった工法がとられた為と考えられる。このことから、今日でも千曲川西岸の水田下には遺跡の存在が確実であり、今後も開発にあたっては試掘調査を行う必要性を痛感した調査であった。

（１）遺構

今回の調査では竪穴住居址29軒、掘立柱建物址６棟、井戸址４基、溝状遺構１本、土坑３基が検出された。ここでは竪穴住居址を中心に、集落変遷・住居址規模・炉とカマドなどについて三塚遺跡の住居址３軒を含め合計32軒についてまとめてみたい。検出された遺構の所産時期は出土遺物より以下のように類推した。

５世紀後半	Ｈ９・H17・H28
６世紀前半	Ｈ６・H11・H14・H21・H27・H30・三塚Ｈ１
６世紀後半	H22・H26・三塚Ｈ３
７世紀前半	H12
７世紀後半	Ｈ２・H19・H23
８世紀代	Ｈ５・Ｈ８・H18・Ｄ１・三塚Ｈ２
中　世	１号～４号井戸址・三塚土坑状遺構
時期不明	Ｈ１・Ｈ３・Ｈ４・Ｈ７・H13・H16・H20・H24・H25 H29・H31・Ｆ１～６・Ｍ１・Ｄ２・Ｄ３



第101図　寺添遺跡集落変遷図

寺添遺跡集落変遷

各７期の竪穴住居址の変遷は第101図に示したようになる。今回の調査は、2000m²という発掘面積から集落址全体を把握するまでにいたっていないが、寺添遺跡は５世紀後半より集落が営まれ８世紀代まで村落を形成する。その後いったん生活の痕跡はなくなるが、中世になって水汲み場的な場所として再び利用される。このことから当地籍は古墳時代中期より奈良時代頃まで水害等もなく比較的安定した土地であり、集落形成に適していたことが推定される。

竪穴住居址規模と主軸方位

まず住居址の平面規模であるが、５世紀後半から６世紀代までは住居址規模にさほどの格差はない。７世紀代になると前代に比べ竪穴住居址の規模が縮小する。また、８世紀代は大型の住居址と小型の住居址の規模差が明瞭になる（多少の時期差あり）。以前より古代律令期に入ると竪穴住居址規模が縮小することが言われているが当遺跡も同様の変化がみられる。

住居址の主軸方位は３例を除くとＮ－20°～50°－Ｗの範囲に収まる。各時期によるかたよりはみられず時代を通じて同じ方向性をもって住居址が構築されている。カマドも１例を除いて北側壁に構築されており、住居址構築の条件が各期を通じてほとんど変化していないことが推定される。このことは集落形成時の何らかの規制によるものか、あるいは季節風等の自然条件によるものか現状では不明である。

炉とカマド

炉は本遺跡から６例が調査された。所産時期の推定できるものは２軒のみで、５世紀後半と６世紀前半の１例ずつである。検出位置はいずれも北壁側の主柱穴間にあり枕石を伴うものもある。

カマドは18例が調査された。形態は先章で少し前述したが、２種類に大別される。まずＡタイプとしては、煙道部が住居址壁よりも飛び出す形態のカマドで、焚口部及び火床面が住居址床面よりも一段低い位置で検出されている。このタイプは７例が調査されており、代表例としてＨ５号住居址があげられる。次にＢタイプとしては、煙道部が住居址壁よりも飛び出さない形態のカマドで、焚口部及び火床面が住居址床面よりも一段高い位置で検出されている。このタイプは11例が調査されており、代表例としてＨ11号住居址が上げられる。（しかしＢタイプも煙道部の形態は、Ｈ23号住居址カマド例のように本来は外側に伸びる形態を呈すると考えられるが、遺構確認面の高さにより浅い煙道部は削平されてしまったものと考えられる。）このＢタイプは周辺遺跡の市道遺跡、上桜井北遺跡などでも確認されている。この２種類のカマドは各期を通して存在するが、他の遺跡も視野にいれるとＡタイプは７世紀後半代より主体的な形態となり、Ｂタイプは５世紀後半より６世紀代が主体的に構築される形態のようである。

（2）遺物

寺添遺跡は竪穴住居址から古墳時代（5世紀後半から8世紀代）を中心にした遺物が出土している。ここでは、当遺跡出土の土器について分類・編年的位置付けを行い、その様相について述べたい。なお、先に述べた各遺構の所産時期はこの位置付けより行った。

現在、佐久地域の古墳時代の土器編年はまだ確立されたとは言えないが、各遺跡によっての考察が重ねられ資料の蓄積がはかられつつある。このような成果により在地の土器変化もおぼろげながら判明しつつあり、これらの研究を援用しつつ当遺跡の各期設定を行ってみたい。しかし、寺添遺跡においては対象とする出土遺物の量から在地土器変化のみの設定は難しく、よって今回は陶邑古窯址群の須恵器編年を中心に須恵器模倣土師器坏の形態変化を時期設定の根拠とした。各期は四半世紀や三時期区分などの詳細な設定が困難だったため半世紀、Ⅶ期区分とした。

Ⅰ期（5世紀後半）

当期は須恵器坏蓋模倣坏が出現する前段階で、古墳時代中期いわゆる「和泉期」と呼ばれる時期に相当すると考えられる。

坏は口縁部の形態差により3種類に分けられる。まず口縁部が素口の坏、同じく口縁端部が面取を施した坏、そして口縁端部が屈曲し立ち上がる坏である。いずれも法量差はあるが、調整は内外面とも丁寧なミガキが施されている。

壺は全体像を把握できる資料に恵まれないが、口縁部に稜を有するものと素口のものとがある。胴部は球形を呈している。

高坏は脚部のみであるが、脚部は柱状に発達しておらず「八」字状に広がる。

甕・甑などは不明である。

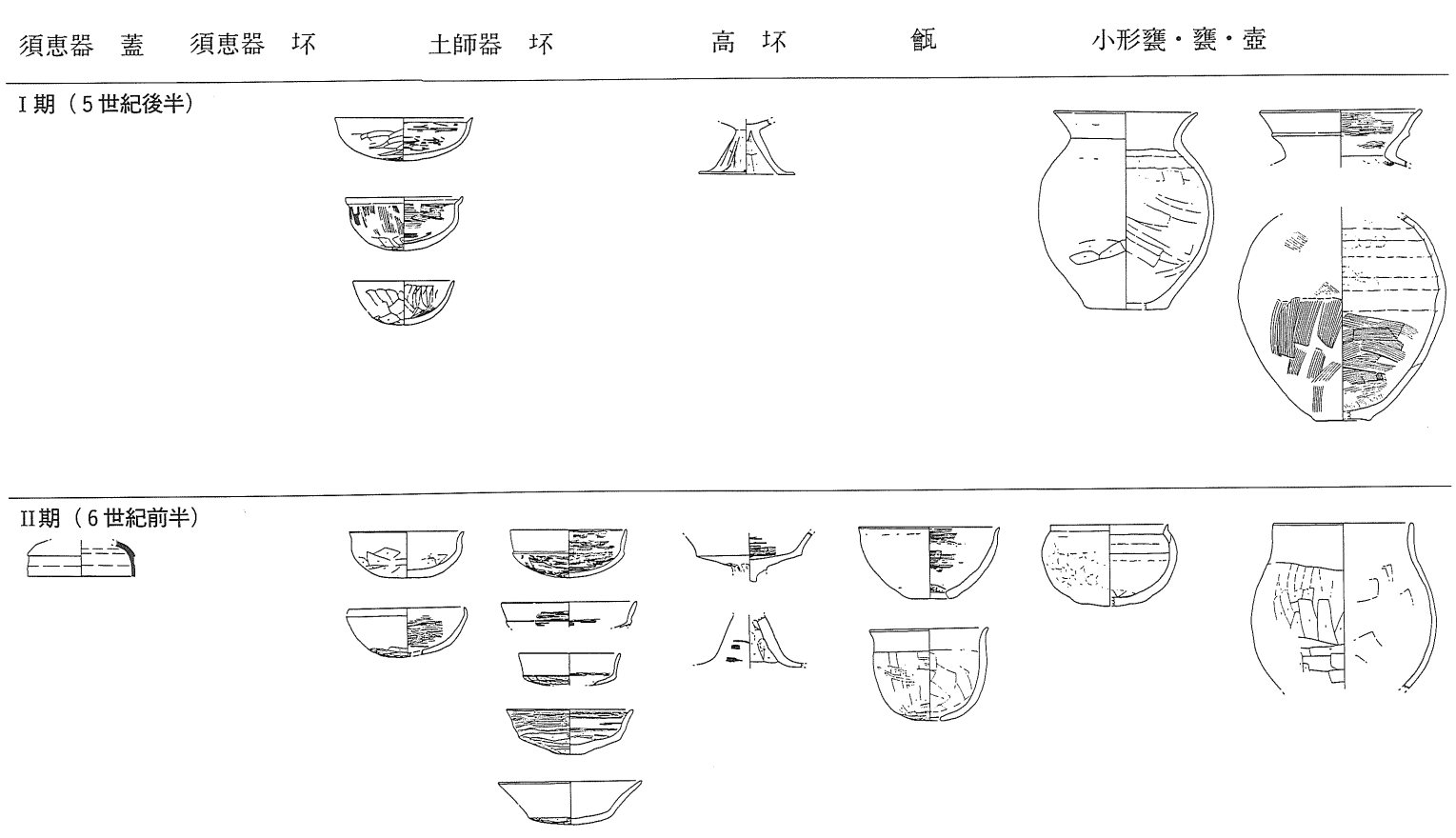
Ⅱ期（6世紀前半）

当期は須恵器坏蓋模倣坏が出現するが前段階の坏も混在する期で、古墳時代後期いわゆる「鬼高期」と呼ばれる時期に相当すると考えられる。

坏は前段階の碗型の坏が存在するが、器厚が増し調整もミガキが減少しナデ及びヘラケズリの多用が目立つ。須恵器坏蓋模倣坏はH30－1の様に須恵器坏蓋を細部に至るまで忠実に模倣したものから、形態のみ模倣している物など多様であるが、全体に成形・調整が丁寧でミガキなどを施す。

壺は資料がなく不明である。

甕も完形資料に恵まれないが、口縁部から頸部があまり屈曲せずに立ち上がり、胴部はやや胴張りである。調整は外面ヘラケズリ、内面ナデを施すものが多い。



第102図　寺添遺跡出土土器時期別分類図(1)

甑は形態により2種類ある。まず、小甕底部を穿孔した様な形態のものと、鉢底部を穿孔したような形態のものである。どちらが主体的な甑かは不明である。

高坏は前段階とほぼ同様である。

Ⅲ期（6世紀後半）

当期は須恵器坏蓋模倣坏が坏類の中で主体を占め、前段階の碗型の坏が消滅する期で古墳時代後期と考えられる。当遺跡では良好な資料に恵まれず不明瞭な部分が多い。

坏は須恵器模倣の土師器坏が主体であるが、Ⅱ期に比べ口縁部が外反傾向にある。また、体部に稜をもたず底部より口縁部が直線的に外反する坏もみられる。

甕は口縁部がやや外反するようになり、胴部も長胴化している。調整は縦方向のヘラケズリが多用される。

高坏・甑などは不明。

Ⅳ期（7世紀前半）

当期は須恵器坏蓋模倣の坏が坏類の中で主体性を示すが、法量的に縮小し調整もヘラケズリの多用が目立つ時期であり古墳時代後期に相当する。しかし、当遺跡では当該期資料が少量で詳細については不明であり、期設定にも疑問が残るが他遺跡の事例も参考にしⅣ期としておく。

Ⅴ期（7世紀後半）

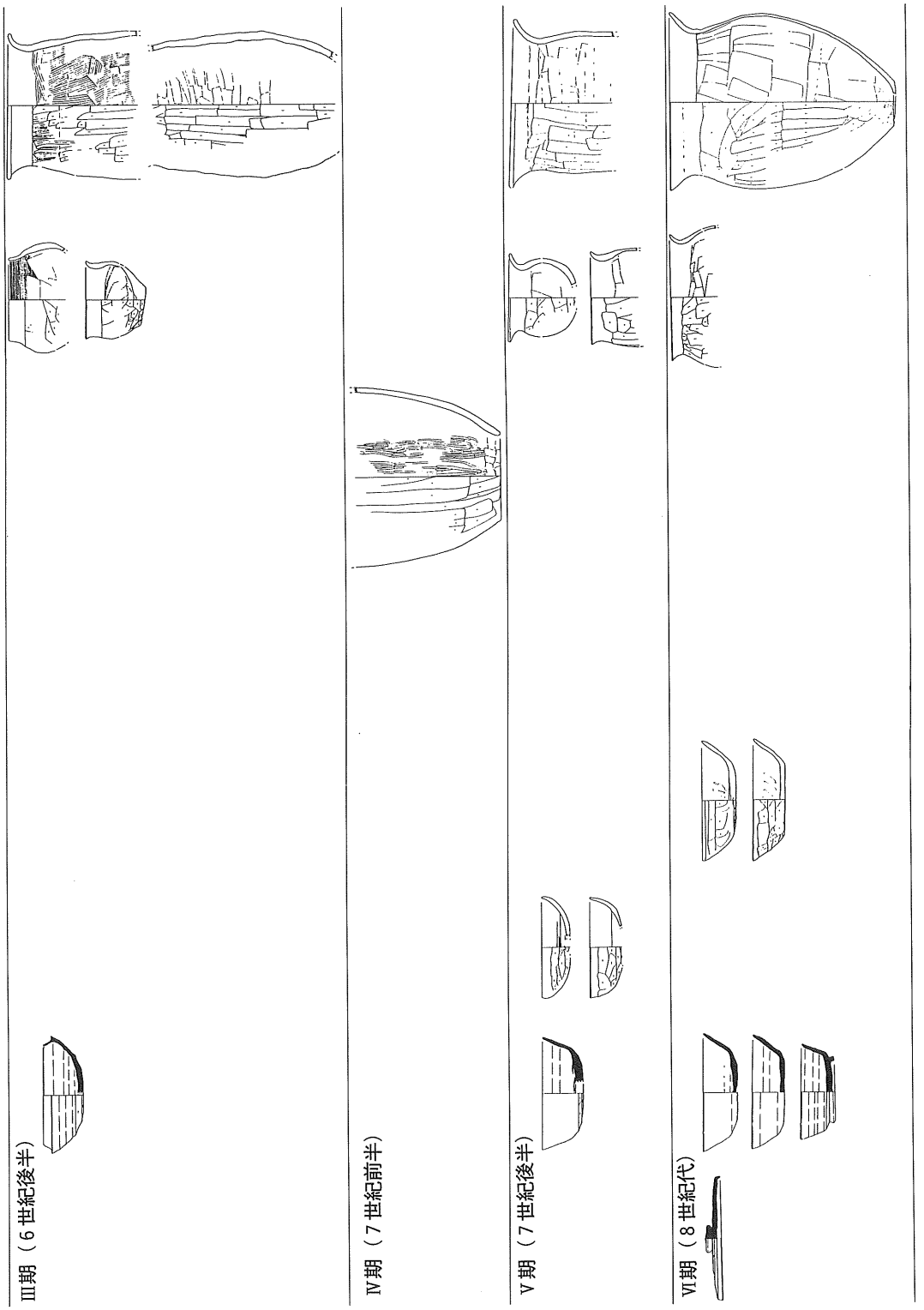
当期は半球形の土師器坏が出現し坏類の主体を占め、須恵器模倣坏の減少を特徴とする期で古墳時代後期から終末期に相当する。

坏は須恵器模倣坏が減少し、前代に比べますます法量が縮小している。体部の稜もほとんど不鮮明となり、調整も体部ヘラケズリ・口縁部ヨコナデが主流となる。半球形の土師器坏は、口縁部が素口のもので「和泉期」にみられた碗型の坏とよくにる。法量は大・中・小の3種類が認められ、他遺跡においては内面黒色処理されたものも目立つ。胎土はよく精錬されたものが多く、調整は体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデを施す。

甕は長胴甕が主体で、最大径を胴部上半に有する。調整は胴部外面が縦方向のヘラケズリを主流とするが、器厚が薄く斜め方向のヘラケズリを施す甕もごく少量見受けられる。

Ⅵ期（8世紀代）

当期は坏類の中でロクロ成形の須恵器坏が主体を占め、甕もいわゆる「武蔵甕」といわれる形態が主流となる時期である。今回Ⅵ期は8世紀代としたが当遺跡の資料は8世紀前半代と考えら



第103図　寺添遺跡出土土器時期別分類図(2)

れ、また各遺構で若干の時期差も考えられる。

坏は平底の土師器坏が主体であり、前段階の半球形の坏は姿を消す。また、多様な形態の須恵器坏も普遍的に存在する。

甕は口縁部外反がきつく、器厚が薄い土師器甕が主体で、調整も斜め方向のヘラケズリとなる。

以上、当遺跡竪穴住居址出土の土器についてまとめてみたが、資料数の制約から編年的位置付けもおのづと限界があったと考える。また、実年代においては現在の須恵器編年に従ったが、今日その実年代の根拠も揺れ動いている為、今後は陶邑古窯址群の須恵器編年をも十分加味するものの、周辺遺跡も含めた形で地域での在地土器の変化を詳細に観察し陶邑須恵器編年に頼らない在地地域の土器型式変化による編年作成が重要となろう。

〈参考文献〉

小諸市教育委員会　1994　『東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原』

御代田町教育委員会　1989　『前田遺跡』

佐久市教育委員会　1987　『北西の久保』

1992　『国道141号線関係遺跡』

1989　『前田遺跡（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ次）』

1986　『大井城』

1976　『市道』

1978　『上桜井北』

1975　『三塚』

田辺昭三　1981　『須恵器大成』

中村　浩　1980　『陶邑』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

花岡　弘・西山克巳　1994　『東国土器研究４』　東国土器研究会

花岡　弘　1991　『古墳時代の研究　土師器と須恵器　』

２土師器の編年，６中部高地

笹沢　浩　1991　『古墳時代の研究　土師器と須恵器』

３須恵器の編年，７中部高地

1988　『長野県史考古資料編　全１巻（４）　遺構と遺物』

第２節　寺添遺跡から出土した木材および種実の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

佐久盆地および周辺地域で１は、縄文時代から平安時代までの焼失家屋から出土する、住居構築材と考えられる炭化材を中心に分析調査が行われてきた（パリノ・サーヴェイ株式会社，1992，1993など）。これらの調査により、住居構築材に関しては用材選択の傾向などが明らかになりつつある。しかし、住居構築材以外の用途については、樹種を明らかにした例がこれまでに少ない。一方、植物食料に関しては、小諸市竹花遺跡や鋳物師屋遺跡等で出土した種実の種類が明らかにされている。(パリノ・サーヴェイ株式会社，1994ａ，1994ｂ；氏原，1988)。

寺添遺跡では、平安時代および中世の井戸などが検出され、その構築材等や井戸内から食糧と考えられる種実も出土している。本報告では、これらの木材の樹種や種実の種類を明らかにし、用材選択や植物食に関する資料を得る。

１，木材の樹種

（１）試料

試料は、中世の井戸（３号井戸址・４号井戸址）から出土した井戸構築材など19点である。各木製品の詳細については、樹種同定結果と共に表１に記した。

（２）方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（３）結果

試料は、全てヒノキ属であった（表１）。解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヒノキ属（Chamaecyparis　sp.）　ヒノキ科

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

表１　樹種同定結果

遺　構	遺物番号	時　代	用　途　な　ど	樹　種
3号井戸址	89-1	中　世	井戸材？	ヒノキ属
3号井戸址	89-2	中　世	井戸材？	ヒノキ属
3号井戸址	89-3	中　世	井戸の上屋材？	ヒノキ属
3号井戸址	89-4	中　世	井戸材？	ヒノキ属
3号井戸址	89-5	中　世	井戸材？	ヒノキ属
3号井戸址	89-6	中　世	木製品（用途不明）	ヒノキ属
3号井戸址	89-7	中　世	木製品（用途不明）	ヒノキ属
3号井戸址	試料4	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料5	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料6	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料7	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料9	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料10	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料11	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料14	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
3号井戸址	試料15	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
4号井戸址	試料1	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
4号井戸址	試料2	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属
4号井戸址	試料3	中　世	井戸の覆土中の木材	ヒノキ属

（4）考察

2基の井戸から出土した井戸材などの木材は全てヒノキ属であった。本地域では、これまでに井戸材について樹種を明らかにした例がほとんどないが、他地域の結果ではヒノキ属は井戸材に多数確認されている。(島地・伊東，1988；伊東，1990)。井戸に使用する木材は、常に水に浸かるか湿った環境に置かれることになるため、耐水性・耐湿性に優れていることが必要である。ヒノキ属は日本産木材の中でも特に耐水性・耐湿性が高い木材の一つであり、このことが多用された背景にあると考えられる。このことと、試料が全てヒノキ属であったことを考慮すれば、用途不明の試料についても井戸に関連する用途に使用された可能性は高い。

本地域では、中世の木材利用に関する資料はほとんど知られていない。平安時代までの資料をみると、住居構築材にはクヌギ節・コナラ節を中心とした落葉広葉樹が多用される傾向にある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1988,1989,1992,1993,1994ａなど)。このことから、使用目的によって用材選択に違いがあったことが推定される。しかし、時代によって用材選択が変化した可能性もあり、今後の課題として残される。中世の構築材に関する資料のさらなる蓄積が望まれる。

2，種実の種類

（1）試料

試料は8世紀代の土坑（D1）内と中世の井戸（2号井戸址・4号井戸址）の覆土中から検出された炭化種子である。D1は種実の破片が約10点、2号井戸址には5点、4号井戸址には25点前後の種実が認められた。

（2）方法

肉眼および双眼実態顕微鏡で形態的特徴を観察し、種類の同定を行う。

（3）結果

同定の結果、D1はモモ、2号井戸址はスモモ、4号井戸址はオオムギに同定された。なお、D1では当社にて破片を接合した結果、10点の破片が2点の種実になることがわかった。以下に形態的特徴について記す。

・オオムギ（Hordeum valgale L.）　イネ科オオムギ属

胚乳が検出された。炭化しており、大きさ6㎜程度。紡錘形で先端部は尖り基部は丸い。片面には1本の深い溝があり、その反対側の基部には胚の痕跡がありまるくくぼむ。

・スモモ（Pruns salicina Lindl.）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。黒褐色。大きさは1㎝程度。核の形は円形で扁平である。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は浅いくぼみが不規則にみられる。

・モモ（Prunus parsica Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。いずれも破損している。黒色で大きさ2㎝程度。核の形はほぼ円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状にみえる。

（4）考察

今回検出された種類はいずれも可食植物で、古い時代に渡来した栽培植物とされている。今回の結果から、これらの植物が遺跡周辺で栽培・利用されていたと考えられる。佐久盆地周辺では、小諸市の竹花遺跡・東下原遺跡・鋳物師屋遺跡より、出土した古墳時代から平安時代までの種実に、栽培植物のモモ・スモモ・イネと周囲に生育していた可能性があるオニグルミが確認されている（氏原，1988；パリノ・サーヴェイ株式会社，1994a，1994b）。これらの結果から、少なくともモモは古墳時代、スモモは奈良時代には栽培が始まっていたことが示唆される。オオムギについては、これまでのところ出土例が知られていないが他の種類の栽培が始まった時期を考慮すれば、中世以前に栽培が開始している可能性がある。さらに多くの遺跡で類例を蓄積したい。

<引用文献>

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II．木材研究・資料，26，p．91－189．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1988）鋳物師屋遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳物師屋遺跡群　鋳物師屋　－長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書－」，p．116－117，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1989）和田原遺跡出土炭化材同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集「和田原遺跡群　和田原・中原遺跡群　鎌田原　－長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書－」，p．83－88，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1992）　下芝宮・下聖端遺跡炭化材同定報告．佐久市埋蔵文化財調査報告書第９集「国道141号線関係遺跡　長野県佐久市長土呂国道141号線関係遺跡発掘調査報告書（本文編）」，p．355－391，佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）　郷土遺跡出土炭化材の同定．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集「郷土遺跡　－長野県小諸市郷土遺跡発掘調査報告書－」，p．52－57，小諸市教育委員会．．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994ａ）　過去の植物利用について．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原　－長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書－」，p．613－624，小諸市教育委員会．

パリノ・サーヴェイ株式会社（1994ｂ）　竹花遺跡第40号住居址出土炭化米の同定・計測結果報告小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原　－長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書－」，p．589－592，小諸市教育委員会．

島地　謙・伊東隆夫編（1988）　日本の遺跡出土木製品総覧．296ｐ，雄山閣．

氏原暉男（1988）　鋳物師屋遺跡出土の炭化米について．小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集「鋳物師屋遺跡群　鋳物師屋　－長野県小諸市鋳物師屋遺跡発掘調査報告書－」，p．113－115，小諸市教育委員会．

第３節　佐久市寺添遺跡出土の獣骨について

群馬県立大間々高校教諭　　宮崎　重雄

1, ウマ（Equus　cabalus）

本遺跡からは、２頭分の馬歯・馬骨が出土している。それぞれここでは１号馬、２号馬と呼ぶ。

１号馬（MMT－H6, 6世紀前半）は、上顎および下顎の左右の全臼歯各６本、計24本が検出されている。破損がひどく、かろうじて原形をとどめているのは数本にすぎない。したがって歯の詳細な形態を知ることはできない。

歯の出土状況をみると、下顎の歯は、いずれも右方向に横倒しになっていて、咬合面を右に、歯根側を左にむけている。すなわち、右歯列の歯は舌側を上に向け、左歯列の歯は頰側を上に向け、右歯列を左に、左歯列を右にして両者並走している。上顎の歯も同様に右方向に横倒しになっていて、右歯列を右に、左歯列が左して、両者並走している。このことから、この馬は、当初、左頰を下にして、右頰を上にして埋められたことがわかる。土中における腐食崩壊過程で、下顎では上にあった右歯列が左歯列の左側に並置する結果となり、上顎では、上にあった右歯列が左歯列の右側に並置することになったと理解される。上顎骨、下顎骨ともわずかながら残存していた。

この馬の体高は、上顎後臼歯が72.0㎜と計測され、西中川・松元(1991)のデータに照合すると、トカラウマに相当し、小型在来馬程度が推定される。歯冠高に基づいて、Levine(1982)の推定法でえられる年齢は８-９才である。いずれの歯も不正咬合もなく、健康的である。性別は犬歯の植立部位を欠いているため、不詳である。

２号馬（MMT－D1, 8世紀代）は、上顎の歯を全く欠き、下顎臼歯のみである。１号馬同様に、左右の臼歯列とも咬合面を右に向け、歯根を左に向けて並走している。左側の歯は破損がひどく、完存するものはないが、右側の歯列の歯は土中に包含された状態で取り上げられていたため、破損が少なく、多くの計測値が得られた。

全臼歯列長は166.0㎜と計測され、西中川・松元（1991）の示す木曽馬の平均オス161.3㎜－メス168.9㎜の範囲内に相当することにより、中型在来馬程度の体高が推定される。Levine（1982）によって推定される年齢は８－９才である。いずれの歯も不正咬合もなく、健康的である。犬歯の植立部位を欠き、性別は不詳である。

上顎骨、上顎歯の痕跡が全くないことから、ここには下顎骨だけが持ち込まれたものとみられる。下顎骨片と思われる小骨片存在する。

2, イノシシ（Sus　scrofa）

MMT－H23　貼床内（7世紀後半）からイノシシの第2指または第5指末節骨が出土している。亀裂の多数生じている焼骨でありながら、完存する。小さな塊状の骨なので、破損せずに残ったものであろう。前肢、後肢いずれの末節骨であるかは判断できない。全長は15.8㎜、近位最大幅は6.6㎜、近位最大高は8.3㎜であり、現生岐阜県産イノシシのオスの成獣とほぼ同じ大きさである。このほかこの発掘からは、イノシシのものと思われる肢骨片2片が出土している。

3, イヌ（Canis　familiaris）

MMT－H19　カマド内（7世紀後半）からの出土で、右踵骨の焼骨である。踵骨隆起の部分が病的に多孔質になり膨隆している。アキレス腱の終始部に故障があったことを示している。踵骨の大きさから推定される大きさは現生柴犬程の小型犬である。当時、カマドでイヌが焼かれていたことに興味がもたれる。

4, その他

MMT－H 6（6世紀前半）シカまたはイノシシの上腕骨または大腿骨片である。最大保存長さ29.2㎜の焼骨である。

MMT－H 8（8世紀代）イノシシの肢骨片で、焼骨である。最大保存長は33.9㎜である。

MMT－H 9（5世紀後半）鳥骨の可能性のある肢骨片で、最大保存長21.3㎜の焼骨である。

MMT－H9, 覆土（5世紀後半）シカまたはイノシシの肢骨片で、最大保存長12.9㎜の焼骨である。

MMT－H19, 掘り方（7世紀後半）種不明（イノシシ？）の椎骨の椎体部片で、若い個体のものである。最大保存長16.2㎜の焼骨である。

＜引用文献＞

Levine, M. A., 1982, The use of crown height measurements and eruption－wear sequences to age horse teeth. In Wilson B., Grigson C. & Payne S. eds., Ageing and sexing animal bones from archaeological sites. BAR British Series 109, 223－250.

西中川　駿・松元光春（1991）遺跡出土骨同定のための基礎的研究－特に在来種および現代種の骨，歯の計測値の比較－「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究」．平成2年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書，164－188p.

１号馬（ＭＭＴ－Ｈ６）臼歯計測値

上顎臼歯　　単位：mm

	第３前臼歯 左	第４前臼歯 左	第１後臼歯 右	第２後臼歯 右	第３後臼歯 右
歯冠長　咬合面	27.9	27.2	23.8	24.2 e	24.6
〃　中央	26.8	25.5	23.6		26.4
歯冠幅　咬合面		26.1	24.3	24.5	18.8
〃　中央		26.6	24.5	24.9	19.5
原錐幅　咬合面		10.5	10.3	12.3	
〃　中央		10.9	10.2	11.9	
歯冠高頬側	57.3	59.2	54.1	62.7	
〃　舌側	51.2	56.1	50.1	54.7	48.0
咬合面の傾斜	88°	85°	87°	77°	65°
中附錐幅　咬合面	5.7	5.0	3.7	4.5	3.7
〃　中央	6.1	5.3	4.0	5.0	4.4

下顎臼歯　　単位：mm

	第３前臼歯 右	第４前臼歯 右	第２後臼歯 右	第３後臼歯 右
歯冠高　舌側	47.0	59.0	53.8	
舌後錐谷長	9.0	9.6		
下内錘谷長	12.5	10.3	7.7	
double knot 長咬合面		14.3		9.6
〃　中央		15.0		9.8
咬合面の傾斜		85°		60°
下内錘幅	6.7	6.0	5.5	

2号馬（ＭＭＴ－Ｄ１）臼歯計測値

下顎臼歯　　単位：mm

	第2前臼歯 右	第3前臼歯 右	第4前臼歯 右	第1後臼歯 右	第2後臼歯 右	第3後臼歯 右
歯冠長　咬合面	33.2	28.1	28.2	27.6	26.2	29.2
歯冠幅　前葉	10.3	15.5	14.8	14.2	14.4	14.3
〃　後葉	12.2	15.3	15.8	14.2	13.0	11.9
歯冠高　頬側		52.0		52.0		47.0
歯冠高　舌側			57.0			
下後錐谷長	7.2	9.3	9.2		8.5	8.6
下内錐谷長	16.4	14.9	12.2	8.2	9.2	9.6
double knot 長咬合面	14.6	16.9	16.5	14.6	13.1	13.1
下内錐幅	5.8	6.6	6.3	5.1	5.2	5.0

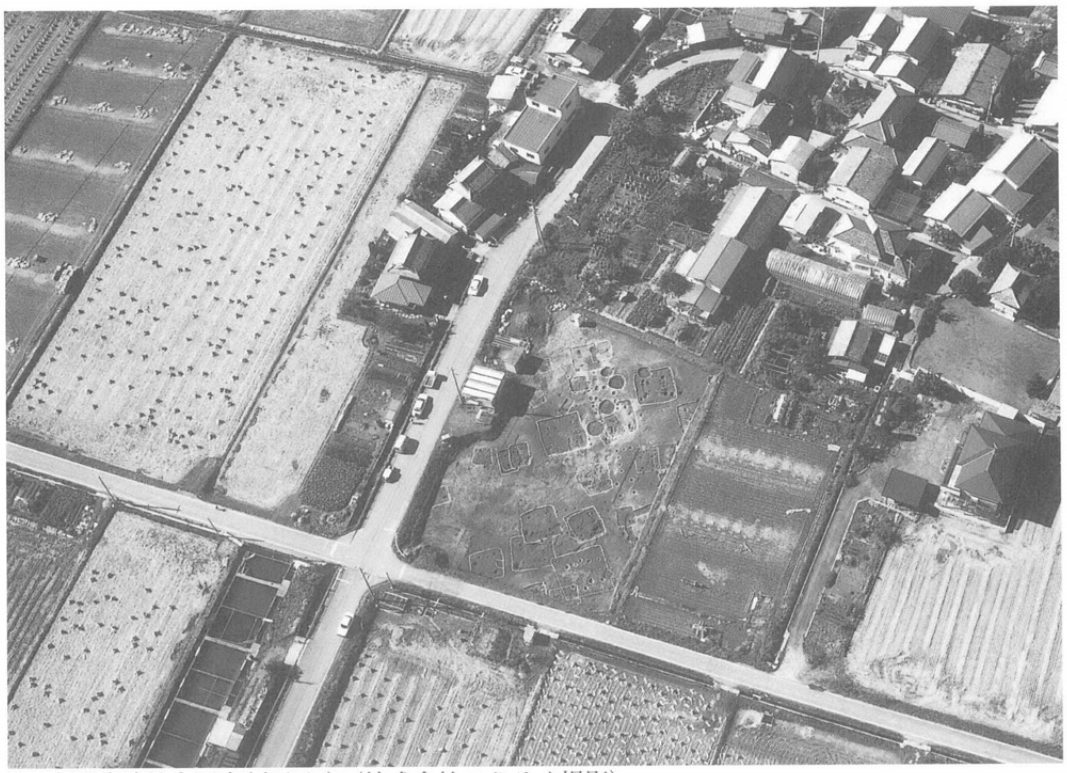
下顎全臼歯列長：166.0mm

イヌ踵骨計測値（ＭＭＴ－Ｈ19）

単位：mm

全長	1	29.4
前縁長	2	19.0
近位前後径	3	8.0
近位横径	4	14.3
中部最大前後径	5	14.7
中部最大横径	6	12.8

図　版



寺添遺跡航空写真(東より)（株式会社こうそく撮影）

① 遺跡周辺及び寺添遺跡全景(株式会社こうそく撮影)

①　Ｈ１号住居址全景

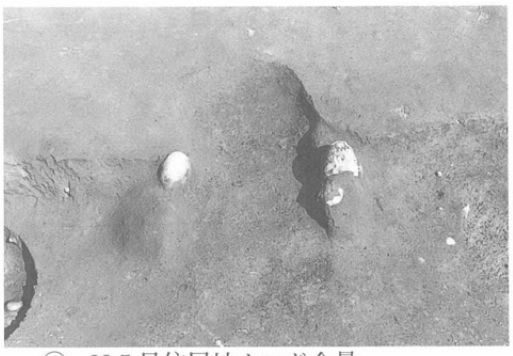
②　Ｈ２号住居址全景

① Ｈ３号住居址全景

② Ｈ４号住居址全景

① Ｈ５号住居址全景

② Ｈ５号住居址カマド全景



① Ｈ５号住居址カマド全景

② Ｈ５号住居址内土坑

③ Ｈ５号住居址カマド掘り方

④ Ｈ５号住居址出土遺物

⑤ Ｈ５号住居址掘り方全景

① Ｈ６号住居址全景

② Ｈ６号住居址出土獣骨

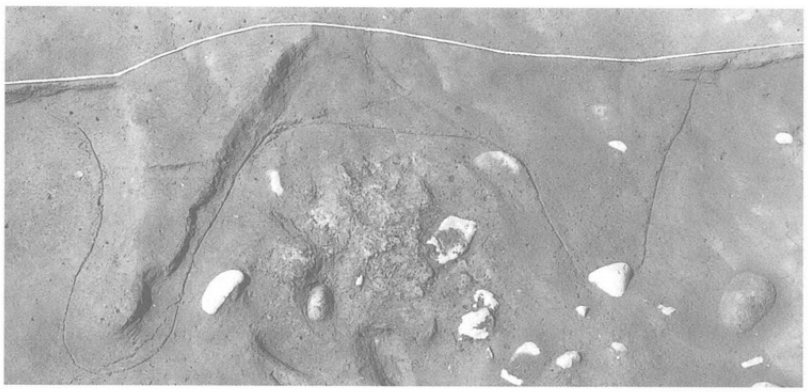
① Ｈ７号住居址
全景

② Ｈ７号住居址
炉全景

③ Ｈ５・Ｈ６号
住居址
調査風景

図版　八

①　Ｈ８号住居址全景

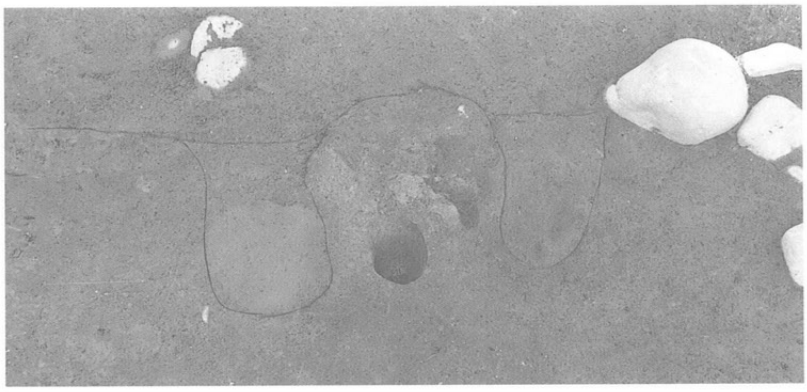


②　Ｈ８号住居址
カマド全景

③　Ｈ８号住居址
出土遺物

① Ｈ９号住居址全景

② Ｈ９号住居址
カマド全景



③ Ｈ９号住居址
カマド掘り方

① H11号住居址全景

② H11号住居址掘り方全景

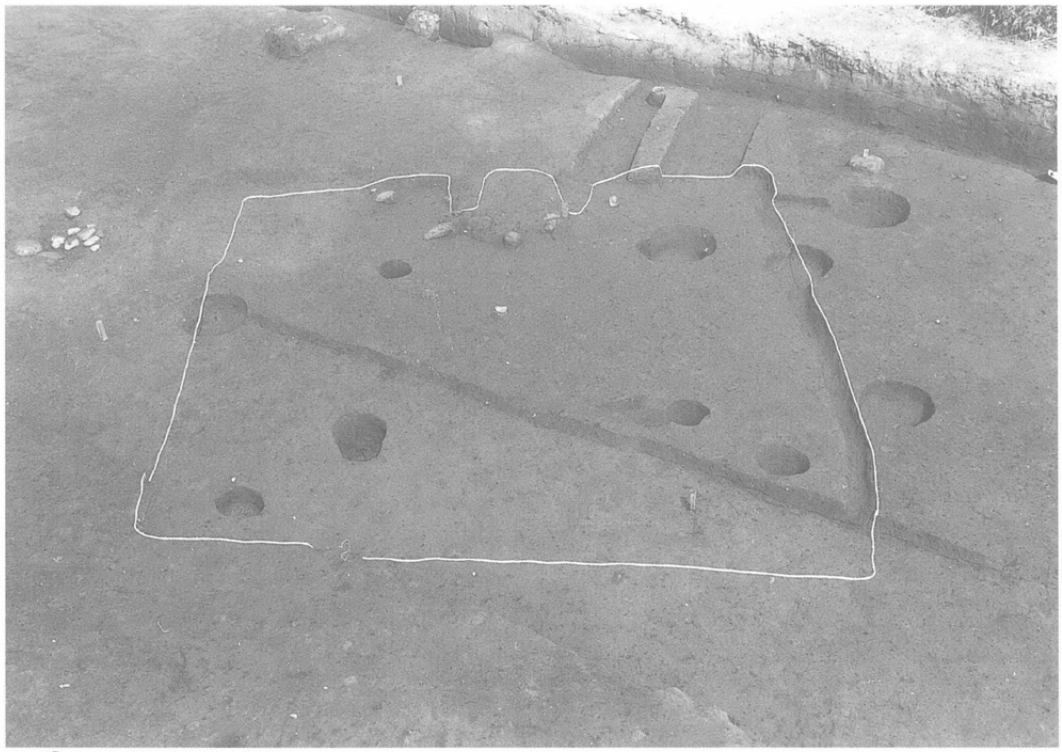
① H11号住居址
カマド全景

② H11号住居址
カマド掘り方

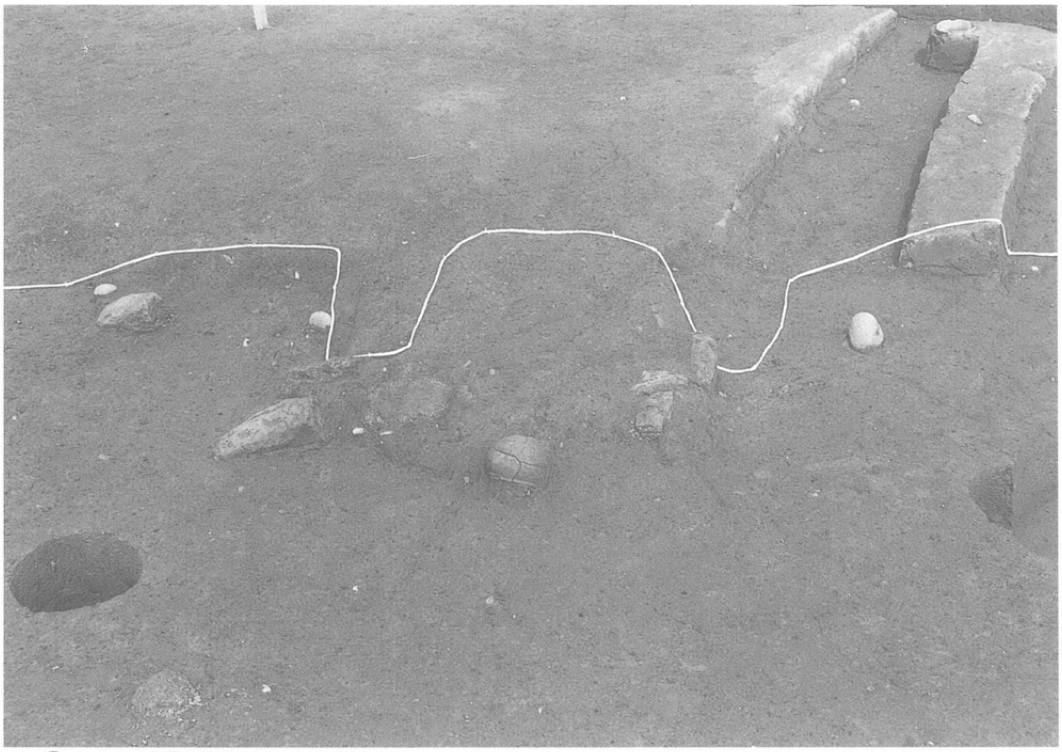
③ H11号住居址遺物出土状況

① H12号住居址全景

② H13号住居址全景



① H14号住居址全景



② H14号住居址カマド全景

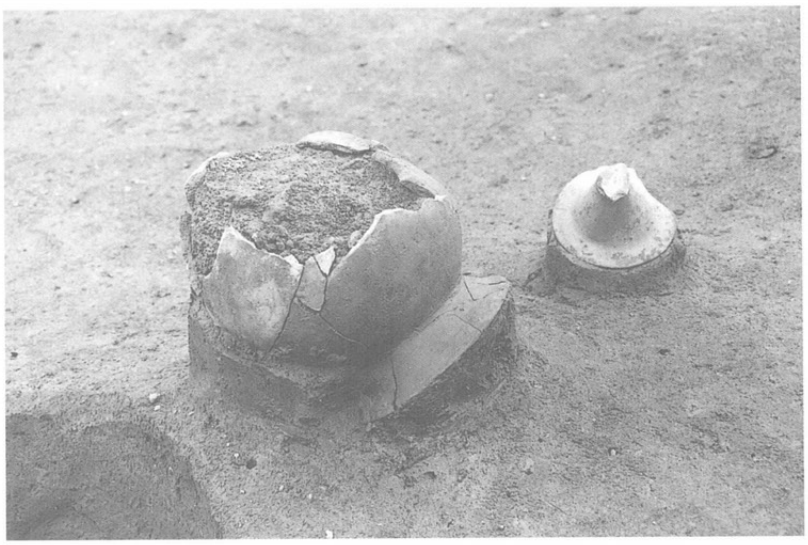
① H16号住居址全景

② H17号住居址全景及びH14号住居址掘り方

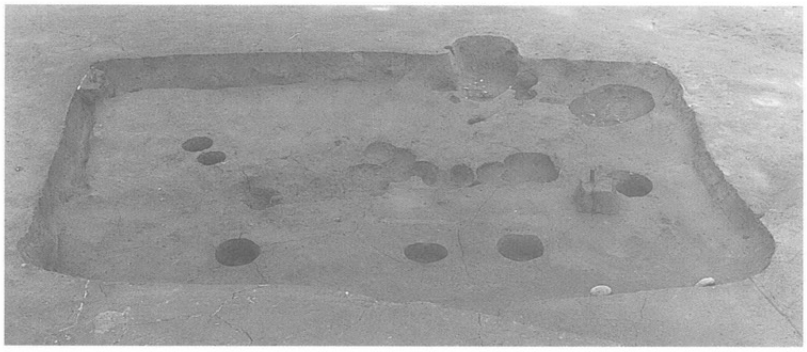
① H16号住居址
出土遺物

② H11・H17号
住居址
調査風景

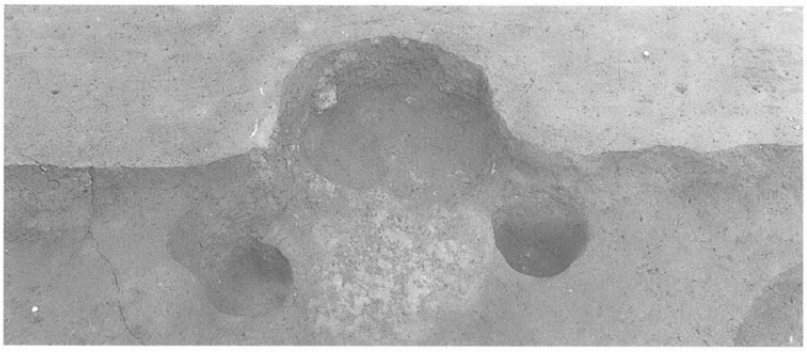
③ H17号住居址
出土遺物



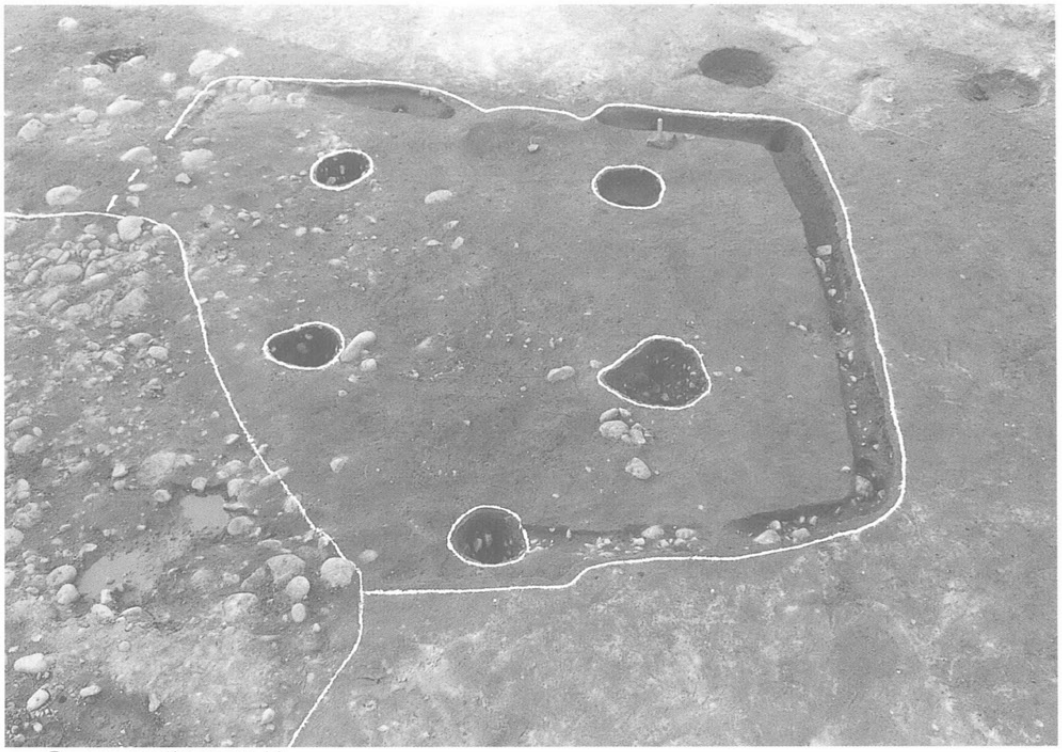
① H18号住居址全景



② H18号住居址
掘り方全景



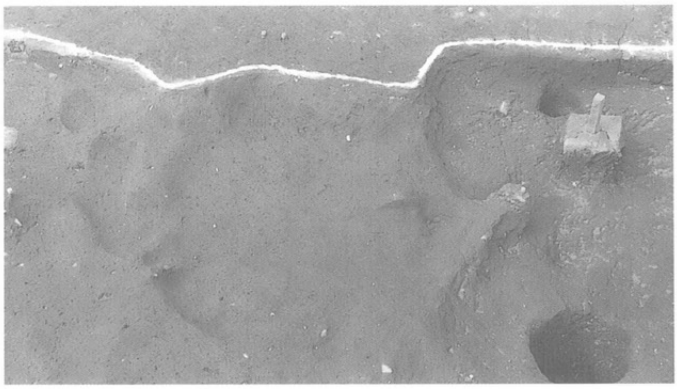
③ H18号住居址
カマド全景

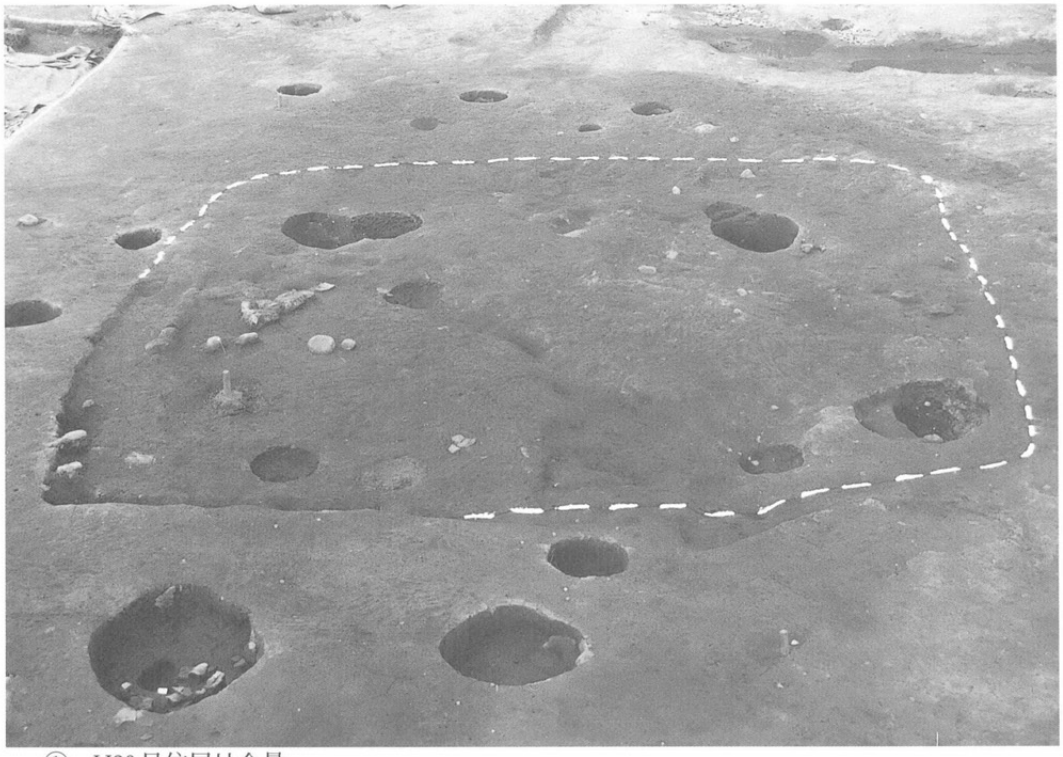


① H19号住居址全景

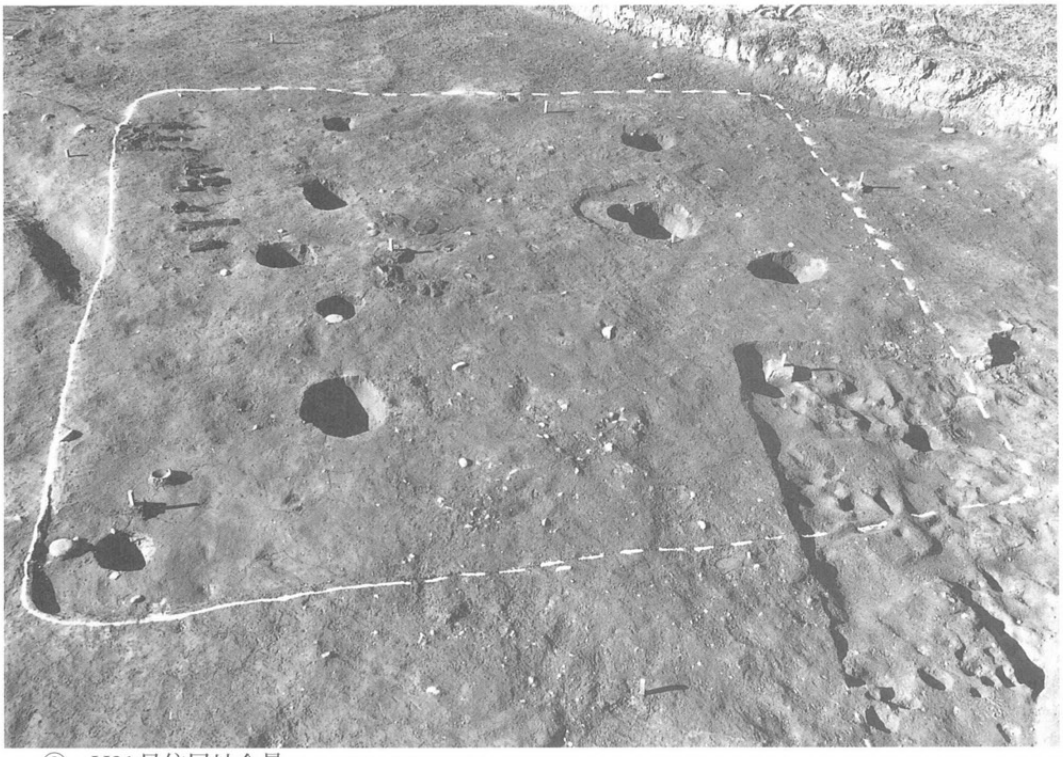
② H19号住居址
掘り方全景

③ H19号住居址
カマド全景





① H20号住居址全景



② H21号住居址全景

① H21号住居址
カマド全景

② H21号住居址
カマド掘り方

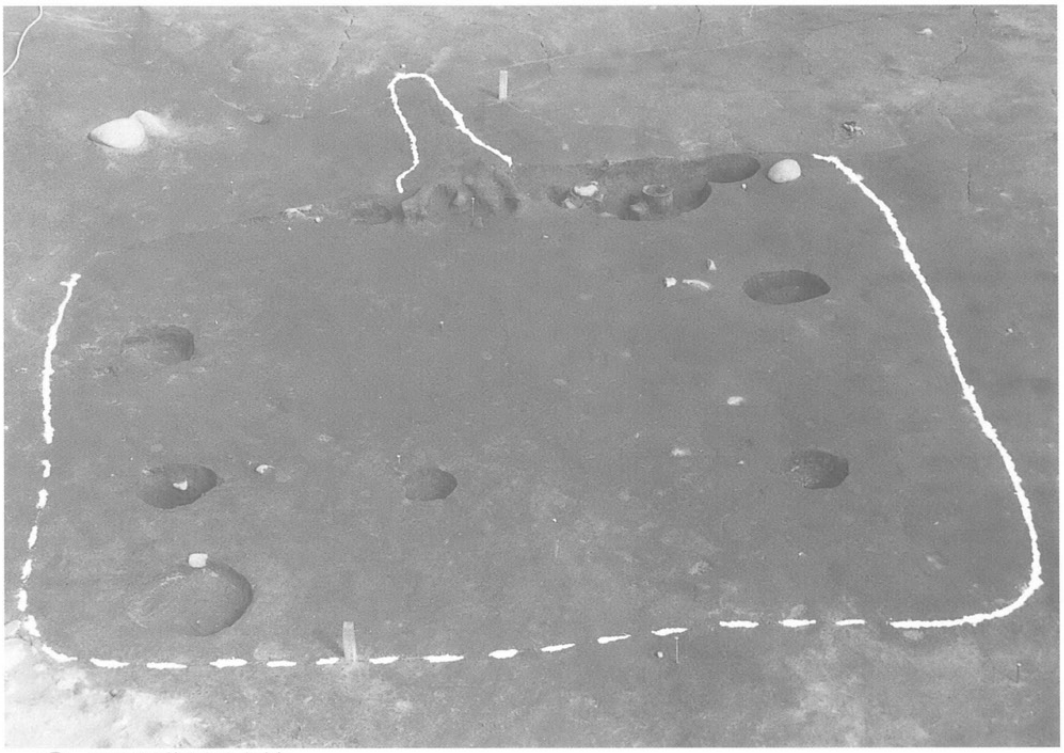
③ H21号住居址
炭化材
出土状況

① H22号住居址全景

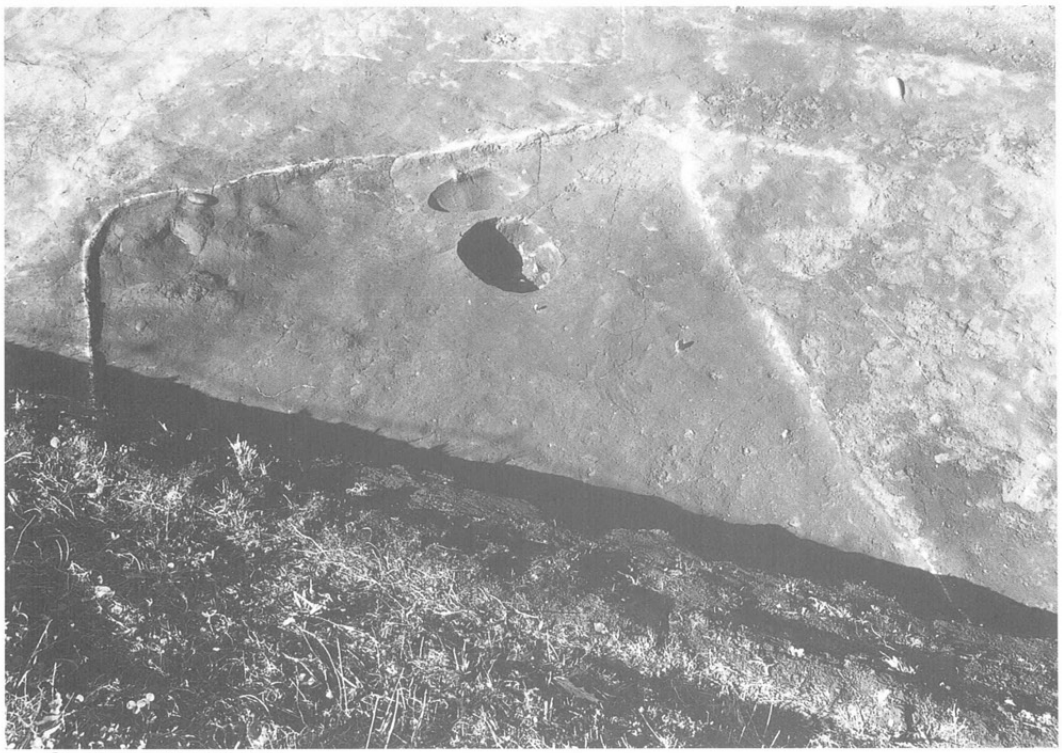
② H22号住居址掘り方全景

① H22号住居址出土遺物

② H23号住居址カマド全景



③ H23号住居址全景

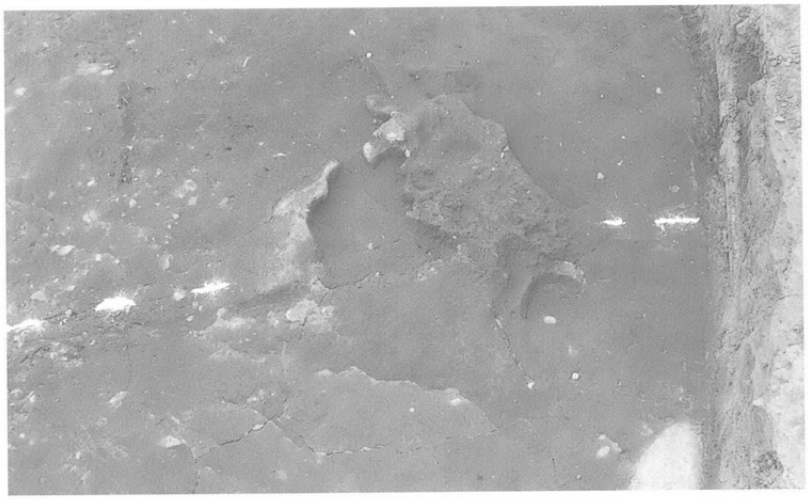


① H24号住居址全景

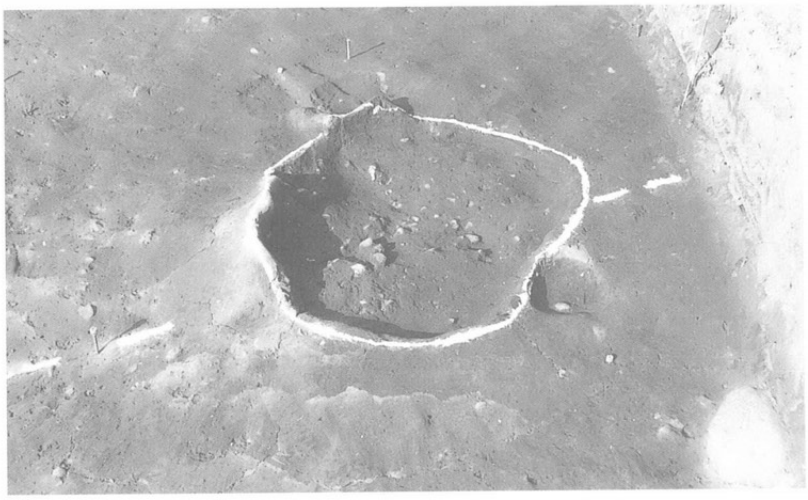
② H25号住居址全景

① H24号住居址
焼土範囲

② H25号住居址
カマド全景



③ H25号住居址
カマド掘り方



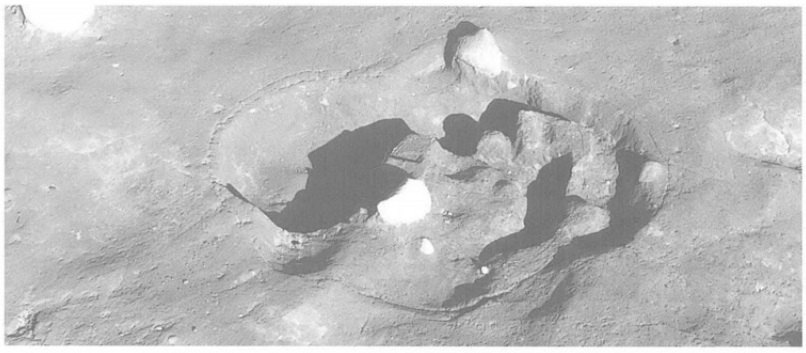
① H26号住居址全景

② H27号住居址掘り方全景

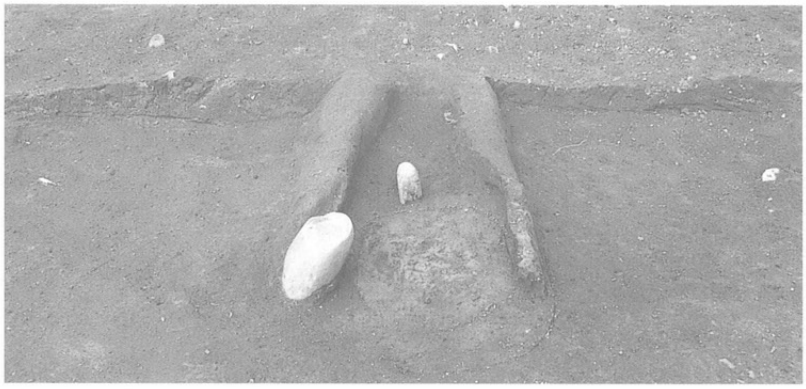
① H28号住居址全景

② H29号住居址全景

① H28号住居址
炉全景

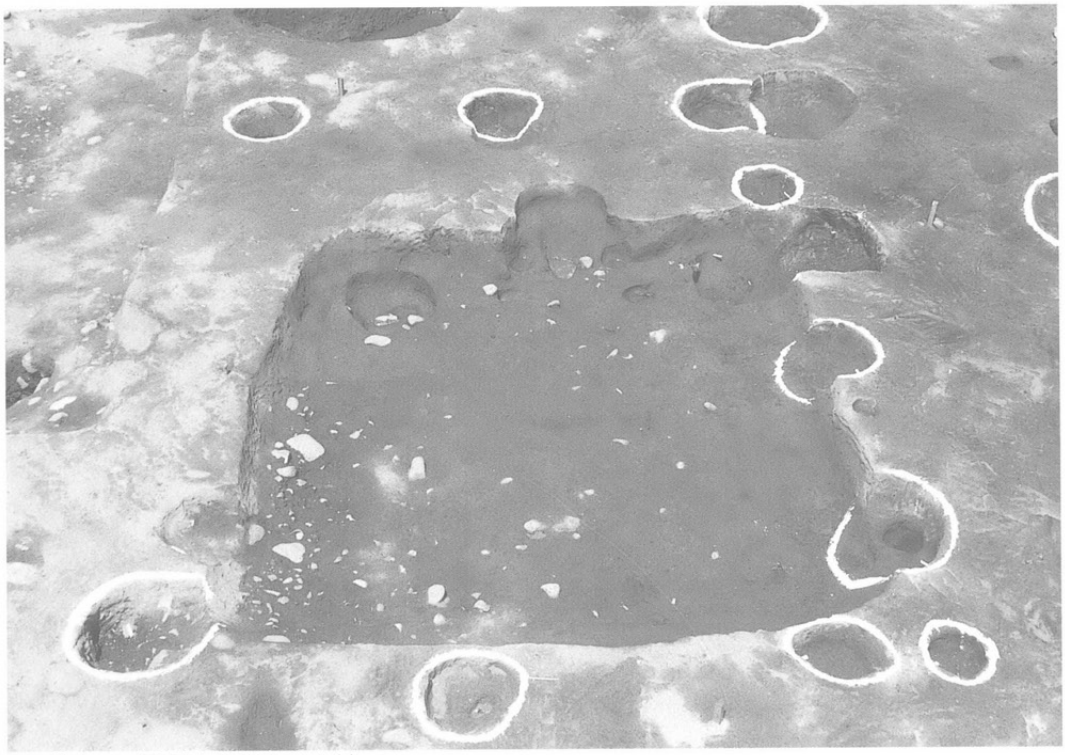


② H30号住居址
カマド全景



③ H30号住居址全景

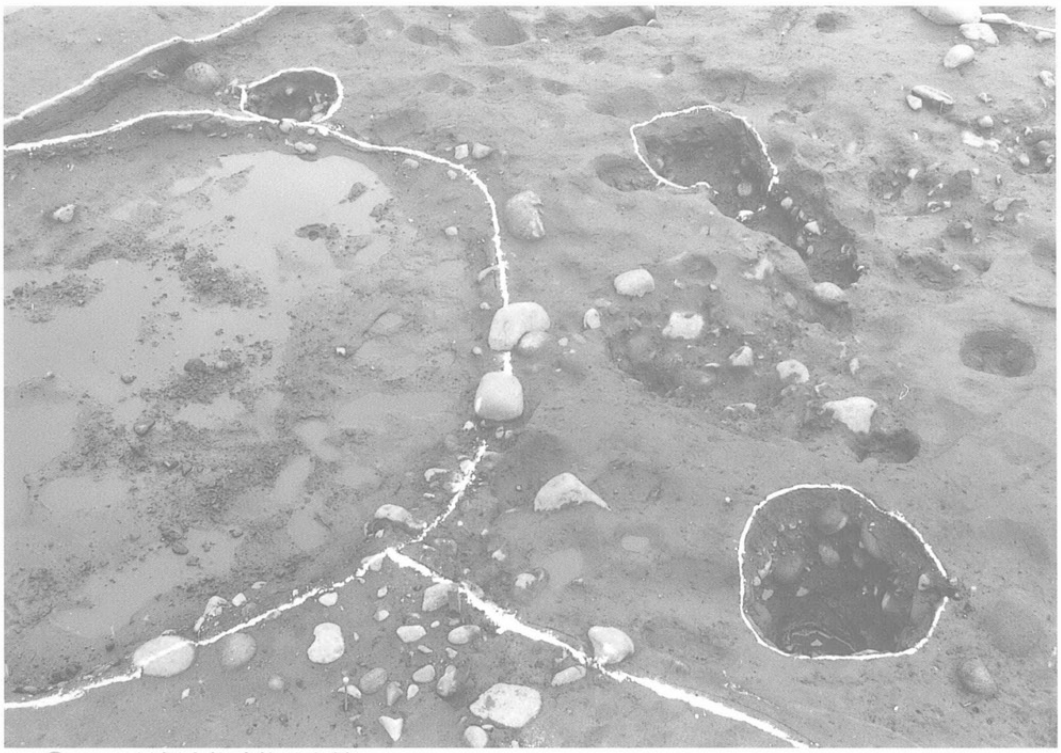
① Ｆ１号掘立柱建物址全景



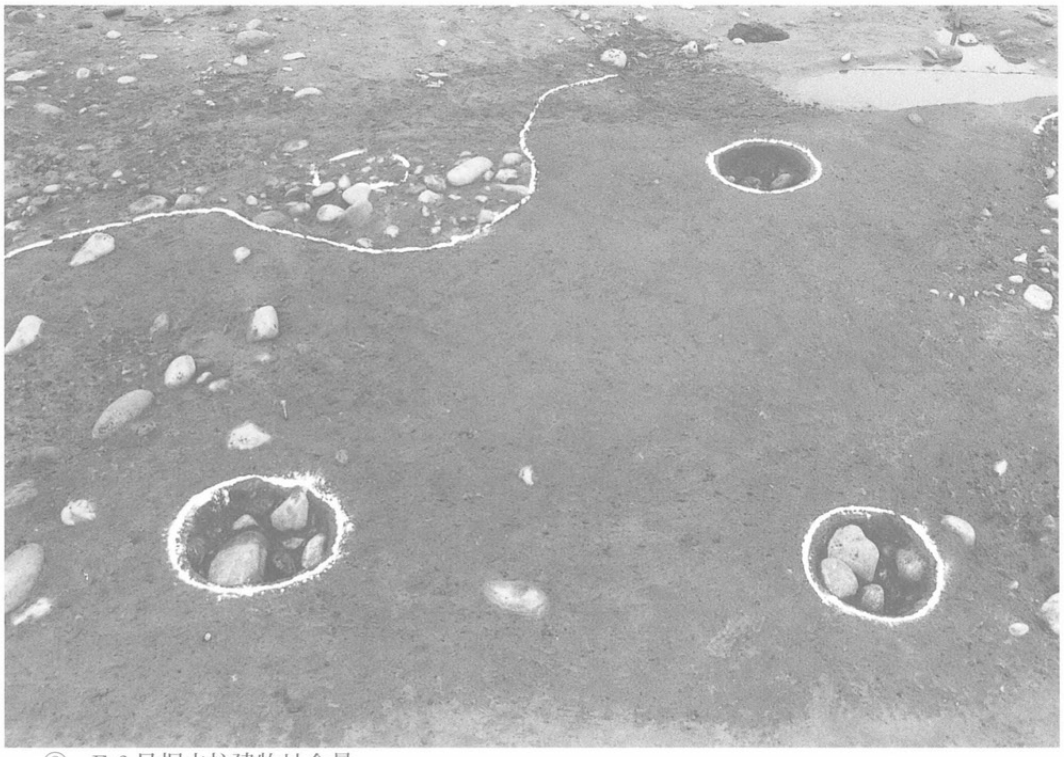
② Ｆ２号掘立柱建物址全景

① Ｆ３号掘立柱建物址全景

② Ｆ４号掘立柱建物址全景

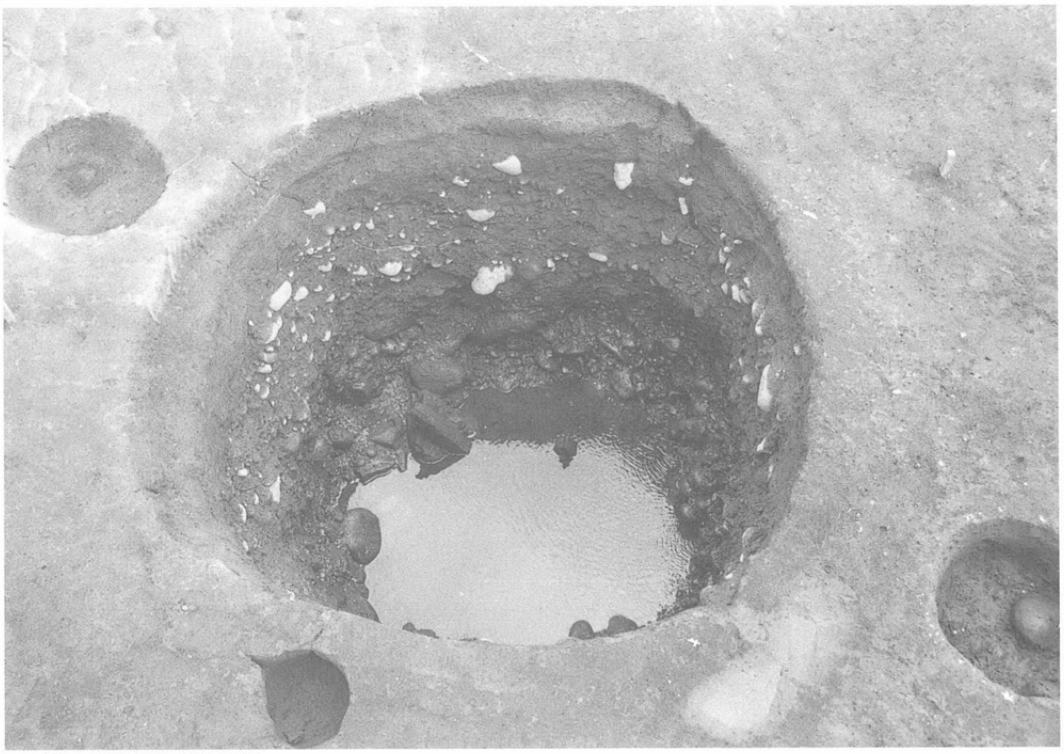


① F５号掘立柱建物址全景



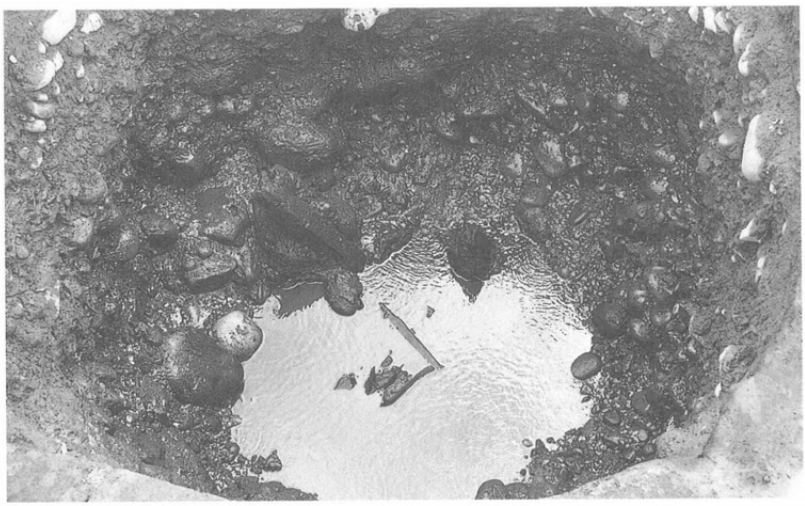
② F６号掘立柱建物址全景

① 1号井戸址全景



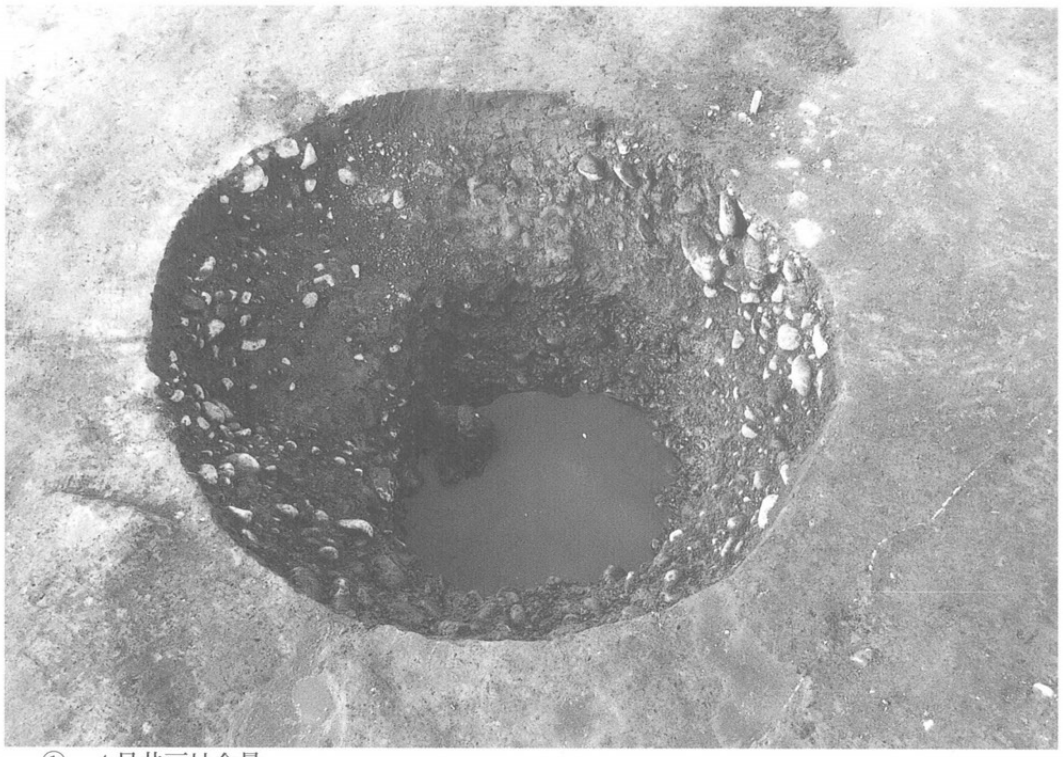
② 3号井戸址全景

① 3号住居址
木製品
出土状況

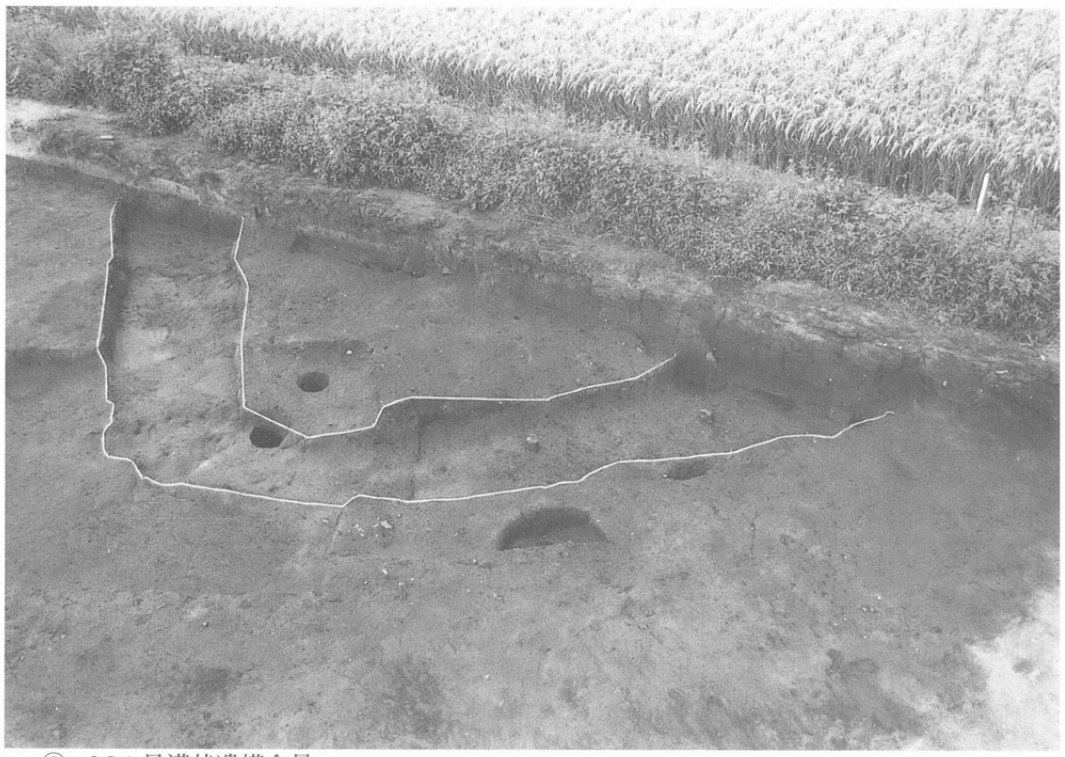


② 3号井戸址
調査風景

③ 4号住居址
木製品
出土状況

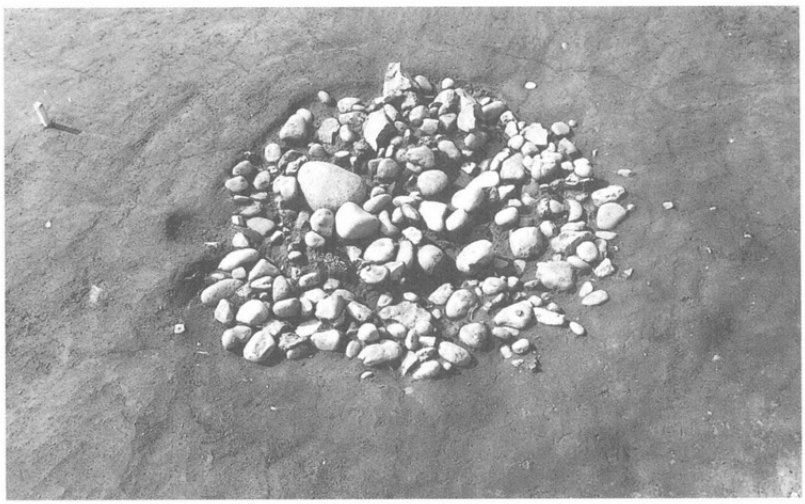


① 4号井戸址全景



② M1号溝状遺構全景

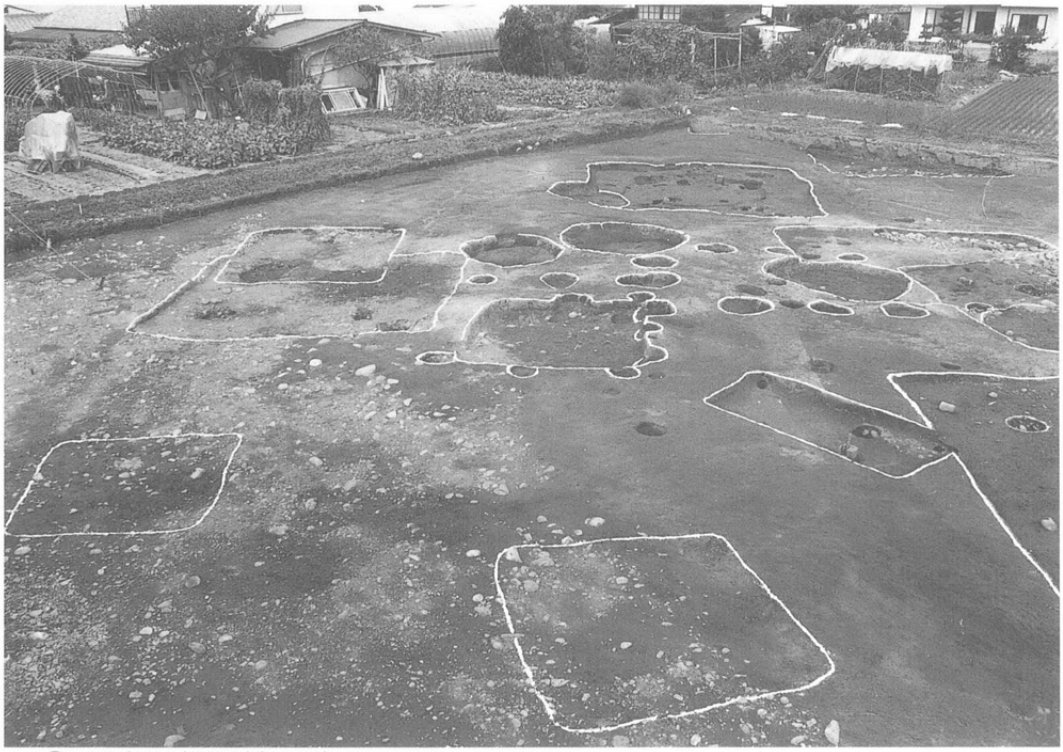
① Ｄ１号土坑
検出状況



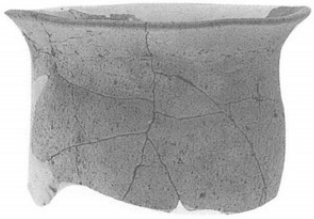
② Ｄ１号土坑
掘り方

③ Ｄ３号土坑
全景

① 調査地区近影(東より)



② 調査地区近影(南より)


H2 11-2

H2 11-3

H5 17-1

H3 13-1

H5 17-2

H5 17-4

H5 17-5

H5 17-6

H6 19-1

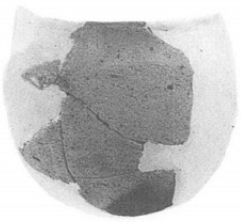
H6 19-4

H6 19-5

H6 19-2

H6 19-6

H6 19-7



H6　19-8

H6　19-9

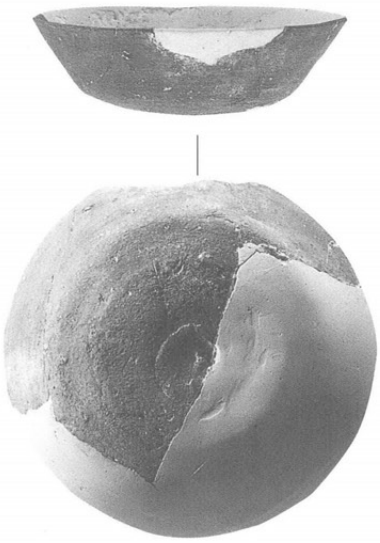
H6　19-10

H6　19-11

H6　19-12

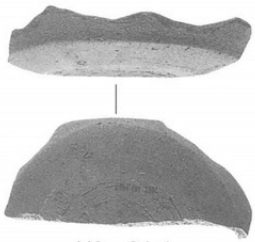
H6　19-13

H8　24-1

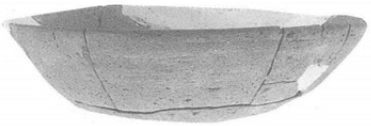


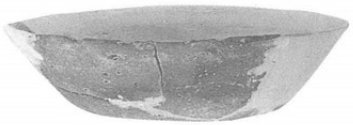
H8　24-2

H8　24-3



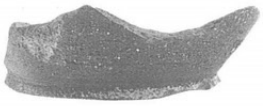
H8　24-4

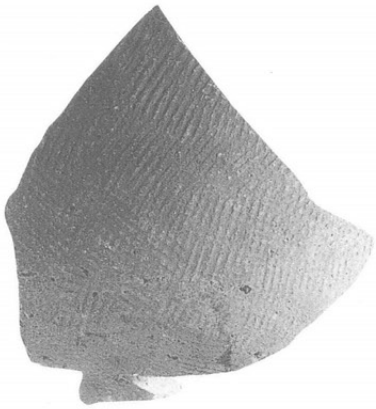

H8 24-5

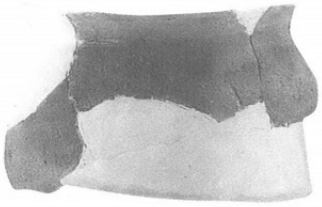

H8 24-6

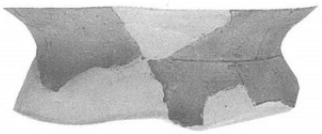
H8 24-7

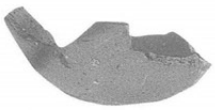
H8 24-8


H8 24-11


H8 24-10

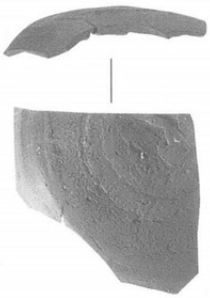

H8 24-12

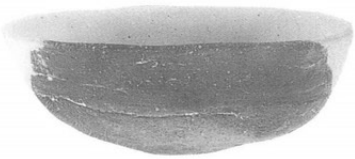

H8 24-13


H9 27-1

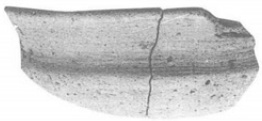
H9 27-2

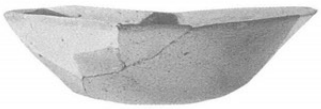
H9 27-3

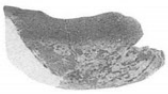

H11 31-1


H11 31-2

H11 31-3


H11 31-4


H11 31-5

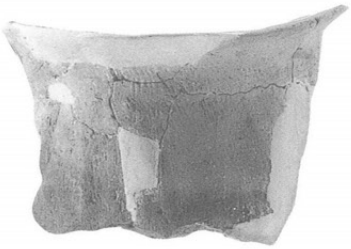

H11　31-6

H11　31-7

H11　31-8

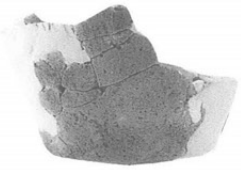
H11　31-9

H11　31-10

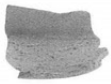

H11　31-11

H11　31-12

H11　31-13


H12　35-1

H11　31-14


H13　37-1

H12　35-2

H14　40-1

H14　40-2

H14　40-3

H16　40-4

H17　43-1

H17　43-2

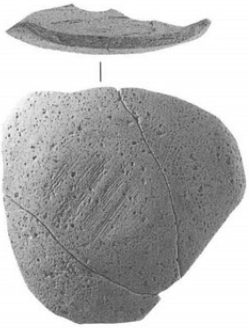
H17　43-3

H17　43-4

H17　43-5

H18　45-2

H18　45-1


H19　49-2

H19　49-3

H19　49-1

H20　52-1

H19　49-4

H21　55-1

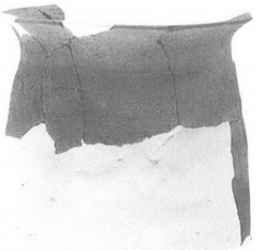
H19　49-5

H21　55-2

H21　55-3

H22　57-1

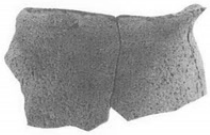
H22　57-2

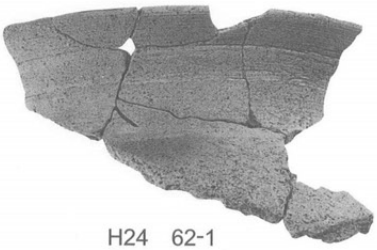

H22　57-3

H23　59-1

H23　59-2

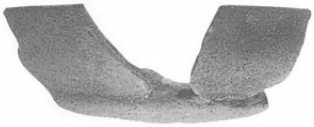
H22　59-4

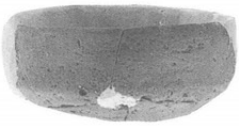

H23　59-3

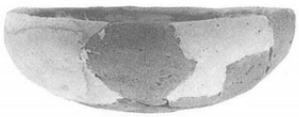

H24　62-1

H26　67-1

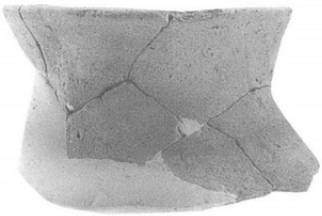
H26　67-4


H25　62-2

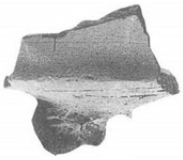

H27　70-2


H27　70-3

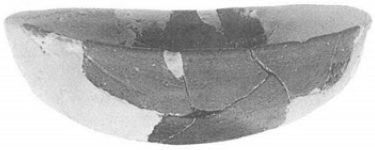
H27　70-4

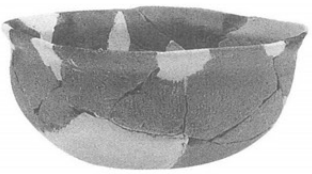

H27　70-6

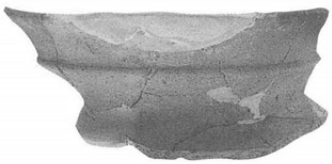
H27　70-5

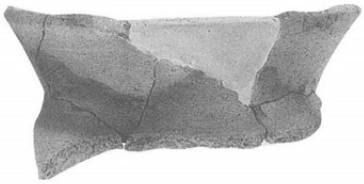

H27　70-8

H27　70-9


H28　72-1

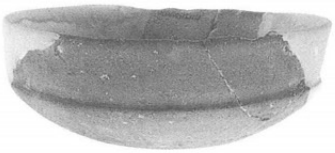

H28　72-2


H28　72-3


H28　72-4

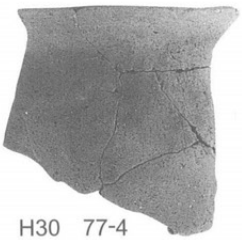
H28　72-5

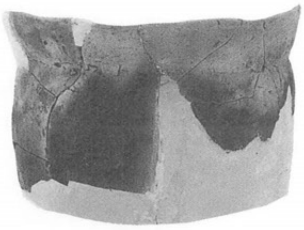
H28　72-6


H30　77-1

H30　77-2

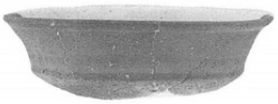
H30　77-3


H30　77-4



H30　77-5

H30　77-6



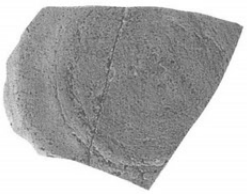
H31　79-1

H31　79-2

4号井戸　91-1

M1　91-2

D1　94-1



D1　94-2

D1　94-3

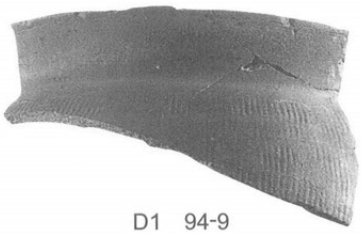
D1　94-4

D1　94-5

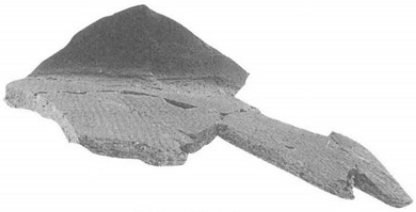
D1　94-6

D1　94-7

D1　94-8

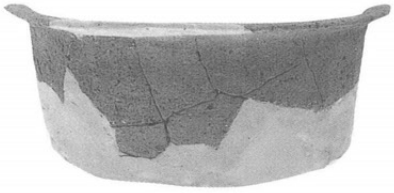


D1　94-9



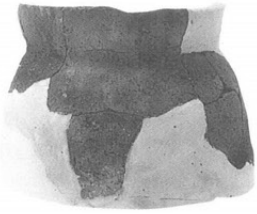
D1　94-10

D1　94-11



D1　94-12

D3　98-1



D3　98-2

遺構外　100-1

遺構外　100-2

遺構外　100-3

遺構外　100-4

遺構外　100-5

H8 24-14

H8 24-15

H8 24-16

H8 24-17

H11 32-1

H11 32-2

H11 32-3

H11 32-4

H30 32-5

H11 32-6

H19 49-6

H19 49-7

H29 74-3

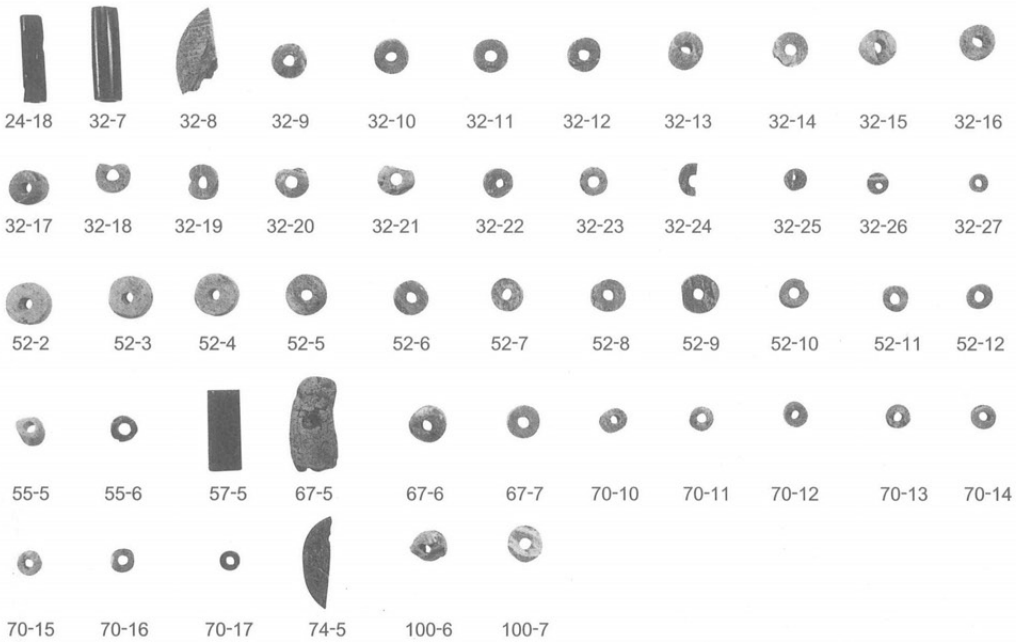
H29 74-4

H29 74-6（鉄製品）

D1 95-15

D1 95-13

D1 95-14



① 寺添遺跡出土玉類

89-1

89-2

89-3

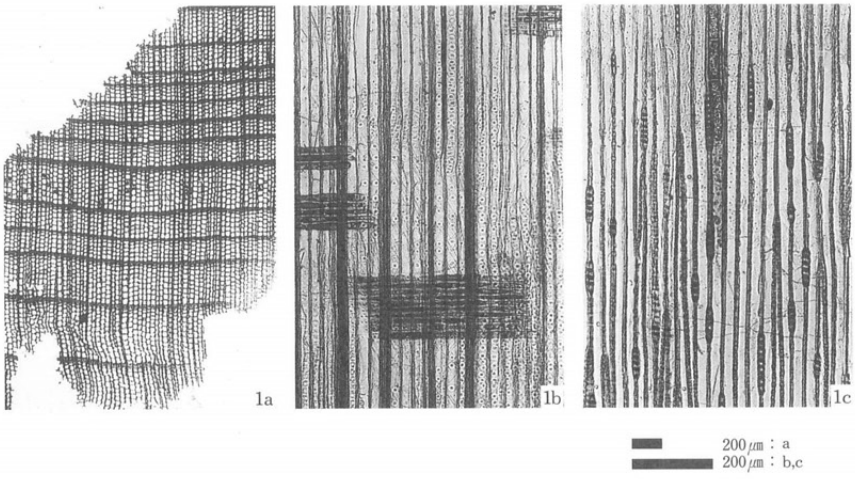
89-4

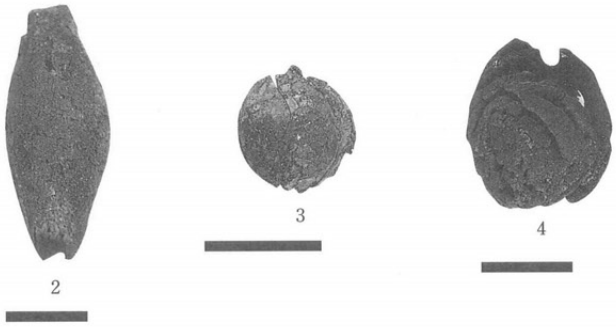
89-6

89-5

89-7

② 3号井戸址出土木製品





1. 3号井戸址　ヒノキ属　a：木口, b：柾目, c：板目
2. 4号井戸址　オオムギ種子
3. 2号井戸址　スモモ核
4. D1　モモ核

佐久市埋蔵文化財調査報告書

第１集　『金井城』
第２集　『市内遺跡発掘調査報告書1990』
第３集　『石附窯址群Ⅲ』
第４集　『大ふけ遺跡』
第５集　『立科Ｆ遺跡』
第６集　『上曽根遺跡』
第７集　『三貫畑遺跡』
第８集　『瀧の下遺跡』
第９集　『国道141号線関係遺跡』
第10集　『聖原遺跡Ⅱ』
第11集　『赤座垣外遺跡』
第12集　『若宮遺跡Ⅱ』
第13集　『上高山遺跡』
第14集　『栗毛坂遺跡』
第15集　『野馬久保遺跡』
第16集　『石並城跡』
第17集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
（１月～３月）
第18集　『西曽根遺跡』　第19集　『上芝宮遺跡』
第20集　『下聖端遺跡Ⅲ』
第21集　『金井城Ⅱ』
第22集　『市内遺跡発掘調査報告書1991』
第23集　『南上中原・南下中原遺跡』
第24集　『上聖端遺跡』
第25集　『上久保田向Ⅳ』
第26集　『藤塚古墳群・藤塚Ⅱ』
第27集　『上久保田向Ⅲ』
第28集　『曽根新城遺跡Ⅴ』
第29集　『山法師Ｂ，筒村Ａ・Ｂ遺跡』
第30集　『市内遺跡発掘調査報告書1992』
第31集　『山法師遺跡Ａ』
第32集　『東ノ割遺跡』
第33集　『聖原遺跡Ⅶ』
『下曽根遺跡Ⅰ』
『前藤部遺跡２』
第34集　『西一本柳遺跡Ⅰ』
第35集　『市内遺跡発掘調査報告書1993』
第36集　『蛇塚ＢⅢ』
第37集　『西一本柳Ⅱ』
第38集　『南下中原遺跡Ⅱ』
第39集　『平賀中屋敷遺跡』
第40集　『寺畑遺跡』
第41集　『曽根新城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ
上久保田向Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
西曽根遺跡Ⅱ・Ⅲ』
第42集　『中条峯遺跡・寄山遺跡群』
第43集　『権現平遺跡・池端遺跡』

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第44集
三千束遺跡群　寺添遺跡
長野県佐久市寺添遺跡発掘調査報告書
１９９６年３月
編集・発行　佐久市教育委員会
〒384-01　長野県佐久市大字中込3056
埋蔵文化財課
〒385　長野県佐久市大字志賀5953
0267－68－7321
印刷所　㈱佐久印刷所